

# 中内村前遺跡 (1)

— 1 ~ 4 区 —

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集

2002

日 本 道 路 公 団  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 中内村前遺跡(1)

— 1 ~ 4 区 —

北関東自動車道(高崎~伊勢崎)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集

2002

日 本 道 路 公 団  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





3区1面 屋敷遺構3-1-26号溝出土墨書礎石



## 序

昭和40年代に北関東横断自動車道として企画、立案された北関東自動車道も具体的な建設の時代に入り、既に高崎・伊勢崎間が供用開始となって一年が過ぎました。その交通量も事前の予想を上回るものであることが報道され、大東京圏の基幹道路としてその役割を荷いつつあることを実感しております。

当事業団では北関東自動車道建設の事前調査として、前橋市南部地域においていくつかの埋蔵文化財の発掘調査を行い、多大の成果をあげて参りました。平成9・10年度に実施された中内村前遺跡もそうしたものの一つであります。中内村前遺跡はかつて前橋藩の東領或いは善養寺領とされた一角にあり、主に古墳時代から江戸時代にかけての水田、住居など多数の埋蔵文化財を調査しましたが、このうち本報告書では県道藤岡・大胡線以西の区域について報告いたします。

本遺跡の調査成果は多岐にわたりますが、本書に掲載したの中で注目されるものに鎌倉時代頃の屋敷遺構があります。この屋敷遺構からは多量の柱穴が見つかり、墨書礎石や罫などの特異な出土遺物もありました。未だ分らないことの多い鎌倉時代の本県の様子を知る上に欠くことのできない貴重な資料となることでしょう。

本報告書が考古学研究者に限らず、郷土史を研究される県民の皆様にも資することを期待し、また活用されることを確信しております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会文化財保護課、そして地元の皆様には発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大のご協力を賜りました。厚く御礼申し上げる次第です。そして発掘調査、整理業務に携わった職員、作業員各位の労をねぎらい序と致します。

平成14年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎





## 例 言

1. 本書は北関東自動車道建設に伴い事前調査された中内村前遺跡（遺跡略号 KT-120）の発掘調査報告書である。本書に於ける報告は、主に中内村前遺跡1～4区に見え、出土された遺構・遺物を対象とする。
2. 中内村前遺跡は、群馬県前橋市中内町295-1・259-2・296-1・269-2・269-3・286・287・288-1,3・289・297・298・302・303-1・303-2・304・305・306-1・306-2・308-1・309・310-1・310-2・311・317-2・324-2・326-2・326-3・327-2・327-3・327-4・327-5・327-6・327-7・327-10・328-1・329-1・329-2・330・335-1・335-3・336・337・338-1・338-2・339-1番地、及び前橋市西善町1193-1・1194-1・1195-1番地に所在する。
3. 中内村前遺跡の遺跡名は大字「中内」と字のうち「村前」を合わせたものを付している。
4. 発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施したものであり、整理事業は日本道路公団の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施したものである。
5. 発掘調査期間、整理期間は次の通りである。

発掘調査 平成9年度調査 平成9年4月1日～平成10年3月31日  
平成10年度調査 平成10年4月1日～平成10年12月31日  
整理事業 平成12年度事業 平成12年4月1日～継続中

6. 発掘調査及び整理事業の体制は次の通りである。

事務担当 菅野 清、小野宇三郎、吉田 豊、赤山容造、原田恒弘、渡辺 健、住谷 進、神保術史、  
水田 稔、能登 健、小淵 淳、坂本敏夫、大島信夫、西田健彦、国定 均、笠原英樹、  
小山建夫、須田朗子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、森下弘美、井上 剛、岡嶋信昌、  
森下弘美、片岡雄雄、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、星野美智子、  
羽鳥京子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、安藤友美、本地友美、  
狩野真子、松下次男、浅見宣記、吉田 茂、蘇原正義

調査担当 平成9年度 <sup>(1)</sup>下城 正、金井仁史、<sup>(2)</sup>石守 晃、松島久二治、  
<sup>(3)</sup>井野修二、見島良昌、<sup>(4)</sup>金井 武、石田 真  
平成10年度 井川達夫、田村公夫、金井仁史、杉田茂俊

整理担当 平成12・13年度 石守 晃

7. 本書作成の担当は次の通りである。

編 集 石守 晃

本文執筆 第5章第3節は宮本長二郎先生、第4節は西岡芳文先生に玉稿を賜り、上記以外は石守晃が執筆した

遺構写真撮影 航空写真は技研測量株式会社・株式会社測研が行い、これ以外は各発掘調査担当が行った。

遺物写真撮影 佐藤元彦

金属器処理 関 邦一、土橋まり子、小村浩一、萩原妙子、高橋初美

木器管理等 高橋真樹子、田中富子、田中のぶ子、藤井文江、伊東博子、横倉知子

整理作業 今井サチ子、狩野君江、金子加代、高田栄子、新井千恵子、阿久津久子

機械実測 田中精子、千代谷和子、

8. ① 石材鑑定についてはごく一部の石叢等の識別を除き、飯島静男先生の御協力によって同定された。
  - ② 3区柱穴群からの掘立柱建物の抽出については宮本長二郎先生（東北工芸大学）の御協力を賜った。
  - ③ 軽文の鑑定については西岡芳文先生（神奈川県立金沢文庫）の御協力を賜った。
  - ④ 一部土師器・須恵器の年代判定については当事業団職員綿貫邦男、陶磁器の年代判定及び産地同定については当事業団職員大西雅広が行った。
  - ⑤ 本書に於ける出土木製品及び炭化材等の同定、年代測定業務はパレオ・ラボ社に委託した。
  - ⑥ 本書掲載分の遺構平面図測量は、調査担当の指示の元に1区は株式会社土研、2～4区は技研測量設計株式会社に行わしめた。
  - ⑦ 本書掲載分の2・3区の井戸調査については調査担当の支持の元に原沢ボーリング株式会社に行わしめた。
9. 出土遺物、遺構図面写真の保管については、出土文化財については群馬県の管理に於いて、遺構実測図・遺構写真等については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の管理に於いて、共に群馬県埋蔵文化財調査センター内に収納されている。
  10. 発掘調査及び報告書作成では以下の方々にご協力・ご指導戴いた。記して感謝の意を表します。
  11. 発掘調査及び本報告書作成では以下の組織、個人等にご指導・ご協力戴いた。記して感謝の意を表します。  
 (敬称略) 日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所、前橋市教育委員会、地元関係者各位、  
 飯島静男、井上唯雄、井野誠一、近藤義男、高島英之、中島直樹、西岡芳文、前原 豊、  
 松田直樹、峰岸純夫、宮本長二郎、吉成承三

## 凡 例

1. 挿入中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は日本測地系平面直角座標系（所謂国家座標）の第IX系を使用している。
2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は“m”を用いた。
3. 遺構名称、遺構番号は区の番号、調査面の番号、遺構種別毎の遺構番号、遺構種別の名称の順に、前3者は間に「-」記号を入れて標記している。尚、遺構番号は調査段階のものをそのまま踏襲したが、調査段階で二重に付してしまった番号については番号の後ろにアルファベットを付して区別した。  
 尚、遺構名称については、「状」等の記載は省いた。
3. 本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り  
 As-A：浅間山噴出A軽石（天明3年/1783）  
 As-B：浅間山噴出B軽石・火山灰（天仁元年/1108）  
 As-C：浅間山噴出C軽石（4世紀初頭）  
 AS-YP：浅間山噴出板鼻黄色軽石（1.3～1.4万年前）  
 Hr-FA：榛名山二つ岳噴出火山灰（6世紀初頭）  
 Hr-FP：榛名山二つ岳噴出軽石（6世紀前半）
4. 遺構実測図の縮尺は下記を基準としているが、例外としたものは各図に記載している。  
 竪穴住居・掘立柱建物 1/60 竈 1/30  
 土坑・ピット・井戸土坑 1/60

溝 1/80

尚、耕作遺構の縮尺は適宜。水田面エレベーション図は縦横比を変更しているものもある。

5. 遺物実測図の縮尺は下記を基準としている。

土器・陶磁器等 : 甕・壺・内耳鍋・播鉢・鉢・火鉢・瓦等 1/4

碗・坏・高坏・皿等 1/3 土錘等 1/2

石器・石製品等 : 台石・礎石・板碑・多孔石・こもあみ石等 1/4

敲石・磨石・打製石斧・砥石(小型)・スクレーパー等 1/3

石鏝 4/5 紡錘車・石製品模造品等 1/2

木器・木製品 : 碗・曲物等 1/3 杭・建築材等 1/4

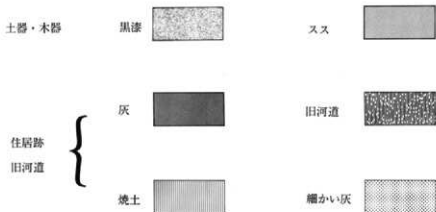
古銭・金属製品 : 耳環・鉄砲玉・銅銭等 4/5 きせる・釘等 1/2

刀子・鎌・包丁等 1/3

ガラス製品等 : ビン(大型) 1/3 ビン(小型) 1/2 小型ガラス製品 4/5

6. 土層注記中の土色については農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を参考に記載している。

7. 図中のスクリーントーン(網掛け)は下記のことを示す。





# 目 次

口絵 (経文墨書礎石)

序

例言 凡例

目次

第1章 発掘調査のはじまりとその経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 発掘調査成果	3
第3節 発掘調査の方法	6
第4節 調査区の異動	7
第5節 基本層序	8
第2章 地理的・歴史的環境	9
第1節 地理的・地質的環境	9
第2節 歴史的環境	11
第3章 発見された遺構と遺物	14
第1節 1区の遺構と遺物	14
1-1 1区の調査概要	14
1-2 1区に於けるグリッドの設定	15
1-3 1区1面の遺構と遺物	16
溝 16 / 土坑 30 / 井戸 40	
1-4 1区2面の遺構と遺物	42
溝 42 / 土坑 43	
1-5 1区3面の遺構と遺物	46
竪穴住居 46 / 掘立柱建物 50 / ビット(柱穴) 69 /	
溝 71 / 土坑 82 / 焼土遺構 95 / 遺物包含層 96 /	
旧河道 99	
第2節 2区の遺構と遺物	101
2-1 2区の調査概要	101
2-2 2区1面の遺構と遺物	102
溝 102 / 土坑・ビット 116 / 井戸 117 / 耕作痕 121 /	
As-B下水田 124 / 遺構外の出土遺物 128	
2-3 2区2面の遺構と遺物	129
溝 129 / 土坑 141 / Hr-FA下水田 143 /	
遺構外の出土遺物他 146	
2-4 2区3面の遺構と遺物	147
竪穴住居 147 / 旧河道試掘調査 151 / 旧河道 152 /	
遺構外の出土遺物 172	

第3節	3区の遺構と遺物	173
3-1	3区の調査概要	173
3-2	3区1面の遺構と遺物Ⅰ(近世以降)	174
	溝 174 / 耕作痕 197 / 土坑 197 / 井戸 198	
3-3	3区1面の遺構と遺物Ⅱ(中世を中心とする時期)	199
	屋敷遺構概要 199 / 屋敷を画す溝 200 /	
	屋敷遺構内の遺構 溝 221 / 竪穴建物 226 / 土坑 231 /	
	井戸 236 / 柱穴・ピット群 246 / 縄跡群 284	
3-4	3区1面の遺構と遺物Ⅲ(古代)	286
	溝 286	
3-5	3区1面の遺構外の出土遺物	289
3-6	3区2面の遺構と遺物	291
	試掘調査 291 / 溝 291 / 小ピット 293	
3-7	3区3面の試掘調査と遺物	294
第4節	4区の遺構と遺物	295
4-1	4区の調査概要	295
4-2	4区1面の遺構と遺物Ⅰ(近世以降)	296
	溝 296 / 土坑 297	
4-3	4区1面の遺構と遺物Ⅱ(中世を中心とする時期)	299
	溝 299 / ピット 304 / 縄痕(中世水田址) 307	
4-4	4区1面の遺構と遺物Ⅲ(古代)	308
	As-B下水田 308	
4-5	4区2・3面の試掘調査	310
第4章	科学分析	311
第1節	樹種同定	311
第2節	屋敷遺構柱穴出土炭化材の樹種同定	315
第3節	放射線炭素年代測定	317
第5章	まとめ	319
第1節	屋敷遺構の堀と溝	319
第2節	屋敷遺構内の建物	324
第3節	中内村前遺跡の建築	350
第4節	前橋市中内村前遺跡出土礎石墨書銘について(考察)	354
第5節	おわりに	356







# 挿 図 目 次

第 1 図	首都圏連絡幹線道路網図と北関東横断道路路線図	1	第 58 図	1 区 3 面の土壌群 (その 3) - 中部北側 -	85
第 2 図	北関東自動車道と中内村前道路	2	第 59 図	1 区 3 面の土壌群 (その 4) - 中部中側 -	86
第 3 図	試験トレンチ設定位置と 39-C トレンチ平面図	3	第 60 図	1 区 3 面の土壌群 (その 5) - 出土遺物 -	87
第 4 図	国家標準式系とグリッドの設定	6	第 61 図	1 区 3 面の土壌群 (その 6) - 中部中側 -	88
第 5 図	調査区設定位置図	7	第 62 図	1 区 3 面の土壌群と出土遺物 (その 7) - 中部中側 -	89
第 6 図	中内村前道路標準土層	8	第 63 図	1 区 3 面の土壌群と出土遺物 (その 8) - 中部中側 -	90
第 7 図	地理・地質概要図	9	第 64 図	1 区 3 面の土壌群 (その 9) - 中部南側 -	91
第 8 図	周辺地誌分布図	12・13	第 65 図	1 区 3 面の土壌群と出土遺物 (その 10) - 中部南側 -	92
---	1 区 1 - 3 面概念図	14	第 66 図	1 区 3 面の土壌群と出土遺物 (その 11) - 中部南側 -	93
第 9 図	1 区グリッド設定図	15	第 67 図	1 区 3 面の土壌群と出土遺物 (その 12) - 中部南側 -	94
第 10 図	1-1-1号溝	16	第 68 図	1-3-雄土遺構	95
第 11 図	土地改良前周辺地形図及び 1-1-6号溝	17	第 69 図	1-3-遺物包含層と風割木	96
第 12 図	1-1-2・3・4・5・18号溝	18・19	第 70 図	1-3-旧河道及び出土遺物	97・98
第 13 図	1-1-2・3・4・5・18号溝	20・21・22	第 71 図	1 区南壁土層断面 (南壁)	99
第 14 図	1-1-15・22号溝	23	第 72 図	1 区遺構外の出土遺物	100
第 15 図	1-1-13号溝	24・25	---	2 区 1 - 3 面概念図	101
第 16 図	1-1-16号溝及び出土遺物	26・27	第 73 図	2-1-1号溝	102
第 17 図	1-1-17号溝及び出土遺物	28・29	第 74 図	2-1-2・3号溝	103
第 18 図	1-1-20号溝	30	第 75 図の(1)	2-1-4・6・7・14・15・28号溝及び出土遺物	104・105
第 19 図	1 区 1 面東部の土壌群	31	第 76 図	2-1-8・9号溝	106
第 20 図	1 区 1 面西部の土壌群 (その 1) - 南西部 -	32	第 77 図	2-1-10号溝	107・108
第 21 図	1 区 1 面西部の土壌群 (その 2) - 南西部 -	33	第 78 図	2-1-11・18・25-1・31号溝	109
第 22 図	1 区 1 面西部の土壌群 (その 3) - 南西部 -	36	第 79 図	2-1-15・16・20号溝	110・111
第 23 図	1 区 1 面西部の土壌群 (その 4) - 中西部 -	37	第 80 図	2-1-21・22号溝	112
第 24 図	1 区 1 面西部の土壌群 (その 5)	38	第 81 図	2-1-17・25・2・26号溝	113
第 25 図	1 区 1 面西部の土壌群 (その 6)	39	第 82 図	2-1-23・24号溝及び出土遺物	114
第 26 図	1-1-1号井戸及び出土遺物	40	第 83 図	2-1-27・29・30号溝	115
第 27 図	1-1-2・3号井戸	41	第 84 図	2 区 1 面の土壌及びピット	116
第 28 図	1-2-14号溝	42・43	第 85 図	2-1-1号井戸及び出土遺物	117
第 29 図	1 区 2 面の土壌群 (その 1)	44	第 86 図	2-1-2号井戸及び出土遺物	118
第 30 図	1 区 2 面の土壌群 (その 2)	45	第 87 図	2-1-3号井戸及び出土遺物	119
第 31 図	1-3-1号住居	46	第 88 図	2-1-4号井戸	120
第 32 図	1-3-1号住居出土遺物	47	第 89 図	2 区 1 面耕作痕跡 (その 1)	121
第 33 図	1-3-1号住居隅方及び出土遺物	48	第 90 図	2 区 1 面耕作痕跡 (その 2)	122・123
第 34 図	1-3-3号竪立柱建物	49	第 91 図	2 区 1 面 A <sub>上</sub> -B 下田	124・125
第 35 図	1-3-4号竪立柱建物	51	第 92 図	2 区 1 面 A <sub>上</sub> -B 下田水口 (その 1)	126
第 36 図	1-3-5号竪立柱建物	53	第 93 図	2 区 1 面 A <sub>上</sub> -B 下田水口 (その 2)	127
第 37 図	1-3-6号竪立柱建物	55・56	第 94 図	2 区 1 面遺構外の出土遺物	128
第 38 図	1-3-7号竪立柱建物	57	第 95 図	2-2-1号溝	129
第 39 図	1-3-8号竪立柱建物	58	第 96 図	2-2-2・3号溝	130
第 40 図	1-3-9号竪立柱建物	60	第 97 図	2-2-4号溝	131
第 41 図	1-3-10号竪立柱建物	61	第 98 図	2-2-5号溝	132・133
第 42 図	1-3-11号竪立柱建物	62	第 99 図	2-2-6・7・10号溝及び出土遺物	134・135・136
第 43 図	1-3-12号竪立柱建物	63	第 100 図	2-2-9・19号溝	137
第 44 図	1-3-13号竪立柱建物	65	第 101 図	2-2-12・13号溝及び出土遺物	138・139
第 45 図	1-3-14号竪立柱建物	66	第 102 図	2-2-14・15・20・21号溝	140
第 46 図	1-3-15号竪立柱建物	67	第 103 図	2 区 2 面土坑及び落ち込み	142
第 47 図	1-3-3・4・5・6号柱穴列	69	第 104 図	2 区 2 面 Hr-FA 下田全体図	143
第 48 図	1 区 3 面ピット群及び出土遺物	70	第 105 図	2 区 2 面 Hr-FA 下田拡大図	144・145
第 49 図	1-3-23号溝出土遺物	71	第 106 図	2 区面遺構外の出土遺物及び低地部所在溝線調査	146
第 50 図	1-3-24号溝出土遺物	72・73	第 107 図	2 区 3 面遺構配置図	147
第 51 図	1-3-25号溝出土遺物	74・75	第 108 図	2-3-1号住居 (覆土) 及び出土遺物	148
第 52 図	1-3-23・24・25号溝	76・77・78	第 109 図	2-3-1号住居 (床面) 及び出土遺物	149
第 53 図	1-3-34号溝及び出土遺物	79	第 110 図	2-3-1号住居 (掘り方)	150
第 54 図	1-3-35号溝	80・81	第 111 図	2-3-旧河道試験調査	151
第 55 図	1-3-36号溝	82	第 112 図	2-3-旧河道全体図	152・153
第 56 図	1 区 3 面の土壌群 (その 1) - 西部 -	83	第 113 図	2-3-旧河道北西部及び出土遺物	154・155
第 57 図	1 区 3 面の土壌群 (その 2) - 中部北側 -	84			

第114図	2-3-旧河道東部及び出土遺物	156・157	第171図	3-1-2・3号井戸及び出土遺物	257
第115図	2-3-旧河道中東部北寄り付近及び出土遺物	158・159	第172図	3-1-4・5号井戸及び出土遺物	258
第116図	2-3-旧河道中東部中央付近及び出土遺物	160・161	第173図	3-1-7・8号井戸	259
第117図	2-3-旧河道南東部及び出土遺物	162・163	第174図	3-1-9号井戸及び出土遺物	240
第118図	2-3-旧河道出土遺物(その1)	164	第175図	3-1-10号井戸	241
第119図	2-3-旧河道出土遺物(その2)	165	第176図	3-1-10号井戸出土遺物(その1)	242
第120図	2-3-旧河道出土遺物(その3)	166	第177図	3-1-10号井戸出土遺物(その2)	243
第121図	2-3-旧河道出土遺物(その4)	167・168	第178図	3-1-11・12号井戸及び出土遺物	244
第122図	2-3-旧河道出土遺物(その5)	169	第179図	3-1-13号井戸	245
第123図	2-3-旧河道出土遺物(その6)	170	第180図	3区1面屋敷遺構北北部の柱穴群及び出土遺物	246・247・248・249・250
第124図	2-3-旧河道出土遺物(その7)	171	第181図	3区1面屋敷遺構北南部の柱穴群及び出土遺物	251・252・253・254・255
第125図	2区3面遺構外の出土遺物	172	第182図	3区1面屋敷遺構中北部の柱穴群及び出土遺物	256・257・258・259
――	3区1・2・3面概念図	173	第183図	3区1面屋敷遺構中南部の柱穴群及び出土遺物	260・261・262・263
第126図	3-1-1・3号溝、池	174・175・176・177・178	第184図	3区1面屋敷遺構南東部北側の柱穴群及び出土遺物	264・265・266・267
第127図	3-1-1号溝出土遺物(その1)	179	第185図	3区1面屋敷遺構南東部南側の柱穴群及び出土遺物	268・269
第128図	3-1-1号溝出土遺物(その2)	180	第186図	屋敷遺構柱穴群東中城市北列	270・271
第129図	3-1-1号溝出土遺物(その3)	181	第187図	3区1面屋敷遺構柱穴群第3集中城東西列	272・273
第130図	3-1-1号溝出土遺物(その4)	182	第188図	3区1面屋敷遺構柱穴群第2集中城東西列	274・275
第131図	3-1-1号溝出土遺物(その5)	183	第189図	3区1面屋敷遺構柱穴群第1集中城東西列	276・277
第132図	3-1-池出土遺物(その1)	184	第190図	3区1面屋敷遺構南西部北側の柱穴群	278・279
第133図	3-1-池出土遺物(その2)	185	第191図	3区1面屋敷遺構南西部南側の柱穴群	280・281
第134図	3-1-池出土遺物(その3)・3-1-2号溝出土遺物	186	第192図	3区1面屋敷遺構東部柱穴群出土遺物	282
第135図	3-1-3号溝及び出土遺物	188・189・190・191・192	第193図	3区1面南西部ピット群	283
第136図	3-1-10号溝	193	第194図	3区1面東部塀群	284・285
第137図	3-1-39号溝及び出土遺物	194・195	第195図	3区1-21号溝	286・287
第138図	3-1-鉢作痕	196	第196図	3区1面遺構外出土遺物(その1)	288
第139図	3-1-30号土坑及び出土遺物	197	第197図	3区1面遺構外出土遺物(その2)	289
第140図	3-1-6号井戸及び出土遺物	198	第198図	3区1面遺構外出土遺物(その3)	290
第141図	3区屋敷遺構全体図	199	第199図	3区1面遺構外出土遺物(その4)	291
第142図	3-1-4・5・6号溝及び出土遺物	200・201・202	第200図	3区2面の試掘調査と出土遺物	292・293
第143図	3-1-11号溝及び出土遺物	203	第201図	3区3面の試掘調査と出土遺物	294
第144図	3-1-7・19号溝及び出土遺物	204・205	――	4区1・2・3面概念図	296
第145図	3-1-26・27・28・29・32・36・37号溝	206・207・208・209・210	第202図	4-1-3号溝及び出土遺物	296・297
第146図	3-1-28号溝出土遺物(その1)	211	第203図	4-1-1号土坑	298
第147図	3-1-26号溝出土遺物(その2)	212	第204図	4-1-1号溝	299
――	及び27号溝出土遺物(その1)	212	第205図	4-1-2・5号溝及び出土遺物	300・301
第148図	3-1-27号溝出土遺物(その2)	213	第206図	4-1-4号溝及び出土遺物	302
第149図	3-1-27号溝出土遺物(その3)	214	第207図	4-1-6号溝及び出土遺物	303
第150図	3-1-27号溝出土遺物(その2)	215	第208図	4-1-7・8号溝及び出土遺物	304
――	及び29・32・37号溝出土遺物	215	第209図	4区1面の小ピット	305
第151図	3-1-12・13・14・15・33・34・35号溝	216・217	第210図	4区1面農圃(中水田址)	306・307
第152図	3-1-14号出土遺物及び33号溝出土遺物(その1)	218	第211図	4区1面A・B下水田	308・309
第153図	3-1-33号溝出土遺物(その2)	219	第212図	4区2・3面試掘調査トレンチ配置図	310
第154図	3-1-30・31号溝	220	第213図	屋敷遺構と溝の配置	320
第155図	3-1-8号溝及び出土遺物	221	第214図	屋敷遺構内の掘立柱建物(北城西)	322・323
第156図	3-1-9号溝	222	第215図	屋敷遺構内の掘立柱建物(北城中)	326・327
第157図	3-1-17・18号溝	223	第216図	屋敷遺構内の掘立柱建物(北城東)	328・329
第158図	3-1-16・22・23号溝及び出土遺物	224	第217図	屋敷遺構内の掘立柱建物(中城中・西部)	332・333
第159図	3-1-24・25号溝及び出土遺物	225	第218図	屋敷遺構内の掘立柱建物(中城中・東部)	334・335
第160図	3-1-1号型穴建物	226	第219図	屋敷遺構内の掘立柱建物(南東城北)	336・339
第161図	3-1-2・3号型穴建物	227	第220図	屋敷遺構内の掘立柱建物(南東城南)	340・341
第162図	3-1-2号型穴建物出土遺物	228	第221図	屋敷遺構内の掘立柱建物(南西城)	344・345
第163図	3-1-4号型穴建物	229	第222図	方別掘立柱建物配置図	347・348・349
第164図	3-1-5号型穴建物	230	第223図	墨書文字及び釈文(高島英之釈文を西岡芳文氏修正)	355
第165図	3区1面屋敷遺構南西部の土坑群	231			
第166図	3区1面屋敷遺構北西部の土坑群	232			
第167図	3区1面屋敷遺構東部の土坑群	233			
第168図	3区1面屋敷遺構中北部の土坑群	234			
第169図	3区1面屋敷遺構中南部の土坑群	235			
第170図	3-1-1号井戸及び出土遺物	236			

# 表 目 次

第 1 表	発掘調査作業経過一覧	4・5	第 35 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 1)	385
――	中内村前遺跡跡周辺遺跡一覧	12・13	第 36 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 2)	386
第 2 表	出土木材の樹種同定資料との結果	312	第 37 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 3)	387
第 3 表	時期別樹種同定結果	313	第 38 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 4)	388
第 4 表	4～5世紀の製品別樹種同定結果	313	第 39 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 5)	389
第 5 表	中世の製品別樹種同定結果	314	第 40 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 6)	390
第 6 表	近世・近代の製品別樹種同定結果	314	第 41 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 7)	391
第 7 表	3区出土炭化材の樹種結果	316	第 42 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 8)	392
第 8 表	放射線炭素年代測定および暦年代校正の結果	318	第 43 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 9)	393
第 9 表	屋敷跡住居規模・形式別種数表	353	第 44 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 10)	394
第 10 表	1区 1面の出土遺物一覧 (その 1)	390	第 45 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 11)	395
第 11 表	1区 1面の出土遺物一覧 (その 2)	391	第 46 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 12)	396
第 12 表	1区 1面の出土遺物一覧 (その 3)	392	第 47 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 13)	397
第 13 表	1区 1面の出土遺物一覧 (その 4)	393	第 48 表	3区 1面の出土遺物一覧 (その 14)	398
第 14 表	1区 1面の出土遺物一覧 (その 5)	394		3区 2面の出土遺物一覧	398
第 15 表	1区 1面の出土遺物一覧 (その 6)	395		3区 3面の出土遺物一覧	398
	1区 2面の出土遺物一覧	395	第 49 表	3区の調査面に拘らない出土遺物	399
	1区 3面の出土遺物一覧 (その 1)	395	第 50 表	4区 1面の出土遺物一覧 (その 1)	400
第 16 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 2)	396	第 51 表	4区 2・3面の出土遺物	401
第 17 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 3)	397	第 52 表	1～4区全域の出土遺物	402
第 18 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 4)	398	第 53 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 1)	403
第 19 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 5)	399	第 54 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 2)	404
第 20 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 6)	370	第 55 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 3)	405
第 21 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 7)	371	第 56 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 4)	406
第 22 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 8)	372	第 57 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 5)	407
第 23 表	1区 3面の出土遺物一覧 (その 9)	373	第 58 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 6)	408
	1区の調査面に拘らない出土遺物 (その 1)	373	第 59 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 7)	409
第 24 表	1区の調査面に拘らない出土遺物 (その 2)	374	第 60 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 8)	410
第 25 表	1区の調査面に拘らない出土遺物 (その 3)	375	第 61 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 9)	411
第 26 表	2区 1面の出土遺物一覧 (その 1)	378	第 62 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 10)	412
第 27 表	2区 1面の出土遺物一覧 (その 2)	377	第 63 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 11)	413
第 28 表	2区 2面の出土遺物一覧 (その 1)	378	第 64 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 12)	414
第 29 表	2区 2面の出土遺物一覧 (その 2)	379	第 65 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 13)	415
第 30 表	2区 2面の出土遺物一覧 (その 3)	379	第 66 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 14)	416
	2区 3面の出土遺物一覧 (その 1)	380	第 67 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 15)	417
第 31 表	2区 3面の出土遺物一覧 (その 2)	381	第 68 表	3区 1面屋敷遺構内ビット一覧 (その 16)	418
第 32 表	2区 3面の出土遺物一覧 (その 3)	382	第 69 表	3区 1面屋敷遺構外所在ビット一覧	418
第 33 表	2区 3面の出土遺物一覧 (その 4)	383			
第 34 表	2区 3面の出土遺物一覧 (その 5)	384			
	2区の調査面に拘らない出土遺物	384			

# 写真図版目次

- 口 絵 3-1-26号溝出土唐青礎石
- I 区
- P L 1 1区1面全景  
1区2面全景  
(1区1面)
- P L 2 1-1-3号溝全景、1-1-13号溝全景、1-1-18号溝全景  
1-1-15号土坑全景、1-1-16号土坑全景、1-1-17号土坑全景  
1-1-18号土坑全景
- P L 3 1-1-19号土坑全景、1-1-20号土坑全景、1-1-21号土坑全景  
1-1-22号土坑全景、1-1-24号土坑全景、1-1-25号土坑全景  
1-1-26号土坑全景、1-1-27号土坑全景
- P L 4 1-1-28号土坑全景、1-1-29号土坑全景、1-1-30号土坑全景  
1-1-31～33号土坑全景、1-1-34号土坑全景、  
1-1-35号土坑全景、1-1-36号土坑全景、1-1-37号土坑全景
- P L 5 1-1-38号土坑全景、1-1-39号土坑全景、1-1-40号土坑全景  
1-1-42号土坑全景、1-1-43号土坑全景  
1-1-60～62号土坑全景、1-1-63号土坑全景  
1-1-107号土坑全景
- P L 6 1-1-108号土坑全景、1-1-113号土坑全景、1-1-114号土坑全景  
1-1号井戸全景、1-1-2号井戸全景、1-1-3号井戸全景  
(1区2面)  
1-2-21号ビットセクション、1-2-22号ビットセクション  
(1区3面)
- P L 7 1-3-1号住居遺物出土状況、1-3-1号住居床層確認状況、  
1-3-1号住居全景、1-3-1号住居掘り方全景  
1-3-1号住居貯蔵穴遺物出土状況、1-3-1号住居貯蔵穴全景  
1-3-3号掘立柱建物全景、1-3-4号掘立柱建物全景
- P L 8 1-3-5号掘立柱建物全景、1-3-6号掘立柱建物全景  
1-3-7号掘立柱建物全景、1-3-8号掘立柱建物全景  
1-3-9号掘立柱建物全景、1-3-10～12号掘立柱建物全景  
1-3-13号掘立柱建物全景、1-3-3号柱穴列柱穴1セクション
- P L 9 1-3-3号柱穴列柱穴2セクション  
1-3-5号柱穴列柱穴1セクション  
1-3-5号柱穴列柱穴2セクション、1-3-1号ビット全景  
1-3-2号ビット全景、1-3-13号ビット全景  
1-3-14号ビット全景、1-3-15号ビット全景
- P L 10 1-3-16号ビット全景、1-3-17、18号ビット全景  
1-3-18号ビットセクション、1-3-19号ビット全景  
1-3-23号溝遺物出土状況、全景、1-3-24号溝遺物出土状況
- P L 11 1-3-24号溝遺物出土状況、1-3-25号溝遺物出土状況  
1-3-35号溝遺物出土状況
- P L 12 1-3-35号溝遺物出土状況、全景、1-3-36号溝全景  
1-3-51号土坑全景、1-3-52号土坑全景、1-3-66号土坑全景  
1-3-73号土坑全景、1-3-90号土坑遺物出土状況
- P L 13 1-3-121号土坑遺物出土状況、全景  
1-3-122号土坑遺物出土状況、全景  
1-3-123号土坑全景、1-3-124号土坑灰土状況、全景  
1-3-126号土坑全景
- P L 14 1-3-126、127号土坑セクション  
1-3-127号土坑遺物出土状況  
1-3-128号土坑遺物出土状況、セクション  
1-3-130号土坑遺物出土状況、1-3-131号土坑全景
- P L 15 1-3-遺物包含層遺物出土状況、1-3-遺物包含層下面表出状況  
1-3-旧河道全景、1-3-風羽土痕確認面、1区土層断面  
1区深掘トレンチ土層断面
- P L 16 1区1面溝、土坑、井戸出土遺物
- P L 17 1区1面井戸、1区3面住居出土遺物、溝出土遺物①
- P L 18 1区3面溝出土遺物②
- P L 19 1区3面溝出土遺物③
- P L 20 1区3面溝出土遺物④
- P L 21 1区3面溝出土遺物⑤、土坑出土遺物①
- P L 22 1区3面土坑出土遺物②③
- P L 23 1区3面土坑出土遺物④、1区グリッドと表田採集遺物①
- P L 24 1区表面採集遺物  
2区  
(2区1面)
- P L 25 2区1面 西部、中、東部
- P L 26 2-1-1号溝全景、2-1-2号溝全景、2-1-3号溝全景、跡先痕  
2-1-4号溝全景、2-1-5～7号溝全景  
2-1-6、7号溝全景、2-1-8、9号溝全景
- P L 27 2-1-9、10号溝全景、2-1-10号溝全景  
2-1-10、17号溝全景、2-1-11号溝全景、2-1-12号溝全景  
2-1-15号溝全景、2-1-15号溝跡先痕
- P L 28 2-1-15、16号溝全景、2-1-17号溝全景  
2-1-18、19号溝全景、2-1-10・15・21号溝セクション  
2-1-22号溝全景、2-1-25、31号溝全景
- P L 29 2-1-27～30号溝全景、2-1-1号土坑全景  
2-1-14号ビット全景、2-1-2号ビット全景  
2-1-1、2号井戸全景、2-1-3号井戸全景、2-1-4号井戸全景
- P L 30 2-1-As-B下水田水田南東部、東部、中東部、中東部  
2-1-As-B下水田水田中部、中西部、西部、西端部
- P L 31 2-1-As-B下水田水田北端部、北部、中北部、中北部  
2-1-As-B下水田水田中部南、中南部、南部、北東部
- P L 32 2-1-As-B中東部東、中央畦
- P L 33 2-1-As-B中東部西端、中東部南東、南、北西畦  
2-1-As-B中東部北口、北西水口
- P L 34 2区1面中東部中北、中南農夫塚、2区土層断面  
(2区2面)
- P L 35 2区2面西部、中、東部
- P L 36 2区2面南部、中部、北部、北西、西部、中西部全景  
2-2-Hr-FA水田全景
- P L 37 2-2-1号溝全景、2-2-2号溝全景、2-2-3号溝全景  
2-2-4号溝全景、2-2-5溝全景、2-2-6号溝遺物出土状況
- P L 38 2-2-6、7号溝全景、セクション、2-2-7号溝全景  
2-2-7、8号溝全景、2-2-8号溝全景、2-2-9号溝全景  
2-2-10号溝全景
- P L 39 2-2-11号溝全景、2-2-12号溝全景  
2-2-12～14号溝セクション、2-2-15号溝全景  
2-2-16～18号溝全景、2-2-19、20号溝全景
- P L 40 2-2-Hr-FA下水田全景、中、中西、北東、南西、中西部畦  
2-2-Hr-FA下水田中東部畦
- P L 41 2-2-6号土坑セクション、2-2-落ち込み遺物出土状況  
2-2-調査風景  
(2区3面)
- P L 42 2区3面
- P L 43 2-3-1号住居全景、灰土状況、遺物出土状況  
2-3-1号住居境土出土状況、周溝西部、北東柱穴全景  
2-3-1号住居掘り方全景、2-3-1号住居床下土坑全景
- P L 44 2-3-旧河道全景、東部セクション、北西部試掘グリッド  
2-3-旧河道南部試掘グリッド、2-3-旧河道東部  
2-3-旧河道東部遺物出土状況
- P L 45 2-3-C-03、D-02、H-03、H-12グリッド遺物出土状況  
2-3-旧河道東部
- P L 46 2区1面溝、井戸、その他出土遺物
- P L 47 2区2面溝、落ち込み出土遺物
- P L 48 2区2面、2-3-1号住居出土遺物
- P L 49 2-3-出土遺物①) 土器
- P L 50 2-3-出土遺物②) 土器

- P.L.51 2-3-出土遺物3) 土器  
 P.L.52 2-3-出土遺物4) 土器  
 P.L.53 2-3-面、田河道出土遺物5) 土器・木製品  
 P.L.54 2-3-面田河道出土遺物1) 木製品  
 P.L.55 2-3-面田河道出土遺物2) 木製品  
 P.L.56 2-3-面田河道出土遺物3) 木製品  
 P.L.57 2-3-面田河道出土遺物4) 木製品  
 P.L.58 2-3-面田河道出土遺物5) 木製品  
 P.L.59 2-3-面田河道出土遺物6) 木製品・石器・石製品  
 P.L.60 2-3-面出土遺物 石製品
- 3区  
 (3区1面)  
 P.L.61 3区1面西平部  
 P.L.62 3区1面東平部  
 P.L.63 3区1-1・2号溝全景、3区1-1号溝全景、3区1-2号溝・池溝水状況  
 3区1-1・3号溝セクション、3区1-3号溝全景、3区1-4号溝全景  
 P.L.64 3区1-4号溝全景、3区1-7号溝全景・池先痕  
 3区1-7・11号溝セクション、3区1-11号溝全景  
 3区1-12号溝全景、3区1-13号溝埋没出土状況  
 P.L.65 3区1-13号溝全景、3区1-14号溝全景、3区1-15号溝全景  
 3区1-17・18号溝全景・セクション、3区1-21号溝全景  
 P.L.66 3区1-21号溝全景、3区1-23号溝全景、3区1-26号溝池先痕  
 3区1-26・29・38号溝全景、3区1-26・27・33号溝セクション  
 3区1-14・26・27号溝、3区1-26・27・27号溝セクション  
 P.L.67 3区1-26・27号溝合流点、3区1-26・29号溝全景  
 3区1-12・28・29・36号溝セクション  
 3区1-12・13・30・31号溝、3区1-12・14・33・35号溝全景  
 3区1-33・34号溝全景、3区1-39号溝全景、3区1-1号土坑全景  
 P.L.68 3区1-10号土坑全景、3区1-11号土坑全景、3区1-12号土坑全景  
 3区1-13号土坑全景、3区1-14号土坑全景、3区1-15号土坑全景  
 3区1-16号土坑全景、3区1-17・18号土坑・8号井戸全景  
 P.L.69 3区1-2号土坑全景、3区1-3号土坑全景、3区1-4号土坑全景  
 3区1-5号土坑全景、3区1-6号土坑全景、3区1-7号土坑全景  
 3区1-8号土坑全景、3区1-9号土坑全景  
 P.L.70 3区1-19号土坑全景、3区1-20号土坑全景、3区1-21号土坑全景  
 3区1-22号土坑全景、3区1-23号土坑全景、3区1-24号土坑全景  
 3区1-25号土坑全景、3区1-26号土坑全景  
 P.L.71 3区1-27号土坑全景、3区1-28号土坑全景、3区1-30号土坑全景  
 3区1-1号井戸全景、3区1-2号井戸全景、3区1-3号井戸全景  
 3区1-4号井戸全景、3区1-5号井戸全景  
 P.L.72 3区1-6号井戸全景、3区1-7号井戸全景、3区1-8号井戸全景  
 3区1-9号井戸遺物出土状況、3区1-9号井戸遺物出土状況  
 3区1-9号井戸遺物出土状況、3区1-9号井戸全景  
 3区1-10号井戸全景  
 P.L.73 3区1-11号井戸全景、3区1-12号井戸全景、3区1-13号井戸全景  
 3区1-1号壑穴状遺構全景、3区1-2号壑穴状遺構全景  
 3区1-2・3号壑穴状遺構セクション  
 3区1-2・4号壑穴状遺構全景、3区1-3号壑穴状遺構全景  
 P.L.74 3区1-4号壑穴状遺構全景、3区1-北城中・西部ピット群  
 3区1-屋敷遺構内中城ピット群第2・第3集中城  
 3区1-屋敷遺構内中城ピット群第1・第2集中城  
 3区1-屋敷遺構内南東城、3区1-屋敷遺構内南西城ピット群  
 3区1-ピット群(南西部)、3区1-北東城ピット群  
 P.L.75 3区1-屋敷遺構内中城ピット群、3区1-屋敷遺構内ピット群  
 3区1-559号ピット他、3区1-675号ピット他切り合い状況  
 3区1-582号ピット他、3区1-601号ピット他切り合い状況  
 3区1-934号ピット他、3区1-2152号ピット他切り合い状況  
 P.L.76 3区1-2190号ピット他、3区1-948号ピット他切り合い状況  
 3区1-947号ピット・3区1-2002号ピット礎石遺構状況  
 3区1-ピットセクション、3区1-ピット礎石設置状況  
 3区1-北壁耕作痕上層面、3区1-東平部北景全景  
 P.L.77 3区1-東平部北東部耕作痕、3区1-東平部全景
- 3区1-東平部北東部池先痕、3区1-東平部南東部耕作痕  
 3区1-東平部耕作痕、3区1-東平部南東部池先痕  
 3区1-東平部調査風景、3区1-東平部調査風景  
 (3区2面)  
 P.L.78 3区2-試験グリッド1 (As-C混黒色土上面)  
 3区2-試験グリッド2 (As-C混黒色土上面)  
 3区2-試験グリッド2 (As-C混黒色土上面) 小ピット  
 3区2-試験グリッド2 (As-C混黒色土上面) 耕作痕  
 (3区3面)  
 3区3-試験グリッド1 (洪積層上面)  
 3区3-試験グリッド2 (洪積層上面)  
 P.L.79 3区1-1号溝出土遺物1) 陶磁器  
 P.L.80 3区1-1号溝出土遺物2) ガラス製品・石製品  
 P.L.81 3区1-1号溝出土遺物3) 石製品・木製品  
 P.L.82 3区1-1号溝出土遺物4) 木製品  
 P.L.83 3区1-1号溝出土遺物5) 石製品・木製品・鉄製品  
 P.L.84 3区1-1号溝出土遺物6) 木製品・古銭  
 3区1-池出土遺物1) 陶磁器  
 P.L.85 3区1-池出土遺物2) 陶磁器  
 P.L.86 3区1-池出土遺物3) 陶磁器・ガラス製品・鉄製品  
 P.L.87 3区1-池出土遺物3) 鉄製品、3区1-2号溝出土遺物  
 3区1-3号溝出土遺物  
 P.L.88 3区1-39号溝・6号井戸出土遺物、  
 3区1面屋敷遺構溝出土遺物1)  
 P.L.89 3区1面屋敷遺構溝出土遺物2)  
 P.L.90 3区1面屋敷遺構溝出土遺物3)  
 P.L.91 3区1面屋敷遺構溝出土遺物4)  
 P.L.92 3区1面屋敷遺構溝出土遺物5)  
 P.L.93 3区1面屋敷遺構溝出土遺物6)、壁穴建物・土坑出土遺物  
 P.L.94 3区1面屋敷遺構溝井戸出土遺物1)  
 P.L.95 3区1面屋敷遺構溝井戸出土遺物2)、ピット出土遺物1)  
 P.L.96 3区1面屋敷遺構溝井戸出土遺物3)、ピット出土遺物2)  
 P.L.97 3区1面屋敷遺構溝ピット出土遺物3)  
 P.L.98 3区1面屋敷遺構溝ピット出土遺物4)  
 P.L.99 3区1面屋敷遺構溝ピット出土遺物5)、調査面出土遺物1)  
 P.L.100 3区1面調査面出土遺物2)、2-3面出土遺物
- 4区  
 (4区1面)  
 P.L.101 4区1面南西部(池先痕)  
 4区1面  
 P.L.102 4区1-1号溝全景、4区1-2号溝全景、4区1-3号溝全景  
 4区1-4号溝全景、4区1-2・5号溝全景、4区1-6号溝全景  
 4区1-7号溝全景、4区1-8号溝全景  
 P.L.103 4区1-1号・4区1-2号・4区1-4号・4区1-5号ピット全景  
 4区1-6号・4区1-7号・4区1-9号・4区1-10号ピット全景  
 4区1-12号・4区1-13号ピット全景  
 4区1-1号土坑遺物出土状況、4区1-1号土坑全景  
 P.L.104 4区1-池先痕、4区1-南西部池先痕、4区1-As-B水田面南西部  
 4区1-As-B水田面中西部・中東部・東部  
 P.L.105 4区1-As-B水田面中部・東部・南部・北西部・南東隅部  
 4区1-As-B水田面  
 P.L.106 4区1面各遺構出土遺物
- 科学分析  
 P.L.107 出土木材組織顕微鏡写真1)  
 P.L.108 出土木材組織顕微鏡写真2)  
 P.L.109 出土木材組織顕微鏡写真3)  
 P.L.110 出土木材組織顕微鏡写真4)  
 P.L.111 出土木材組織顕微鏡写真5)  
 P.L.112 出土炭化材術種1)  
 P.L.113 出土炭化材術種2)  
 P.L.114 出土炭化材術種3)

## 遺構写真使用フィルム資料番号一覧

P L 1	04-000401-03	04-000403-04			P L 40	04-00069-10	04-00066-06	04-00067-04	04-00067-07
P L 2	04-980182-02	04-980212-09	04-980212-06	04-980193-09		04-00067-01	04-00066-08	04-00066-09	04-00066-01
	04-980171-07	04-970171-10	04-980172-04	04-980193-4	P L 41	01-00118-17	01-00070-06	01-00068-05	01-00068-06
P L 3	04-980187-09	04-980184-03	04-980182-05	04-980184-06	P L 42	04-000254-09	04-000258-03		
	04-980191-09	04-980190-03	04-980186-02	04-980184-09	P L 43	01-00072-04	01-00080-10	01-00072-23	01-00074-06
P L 4	04-980182-08	04-980185-02	04-980190-09	04-980187-03		04-00073-04	01-00065-04	01-00090-06	01-00093-02
	04-980187-06	04-980181-06	04-980189-10	04-980190-06	P L 44	04-00092-07	04-00092-01	04-00086-09	04-00084-08
P L 5	04-980181-03	04-980186-05	04-980191-03	04-980185-06		04-00094-01	04-00093-01	04-00095-04	04-00095-10
	04-980186-09	04-980218-01	04-980194-07	04-980211-03	P L 45	04-00080-02	04-00080-05	04-00081-01	04-00078-09
P L 6	04-980211-06	04-980217-03	04-980216-09	04-980172-09		01-00084-12	04-00075-10	04-00099-04	04-00099-01
	04-980173-04	04-980228-03	01-980238-33	01-980238-36	P L 61	04-000264-07	04-000267-04		
P L 7	04-980215-03	04-980214-06	04-980221-06	04-980231-10	P L 62	04-000265-10	04-000267-11		
	04-980220-09	04-980224-09	04-980211-09	04-980210-9	P L 63	04-00014-10	01-00022-32	04-00018-02	04-00001-02
P L 8	04-980224-03	04-980222-10	04-980223-10	04-980223-06		04-00014-04	04-00012-06	01-00019-14	
	04-980213-06	04-980214-03	04-980221-10	01-980223-2	P L 64	01-00048-24	04-00008-01	01-00020-01	01-00047-28
P L 9	01-980223-05	01-980224-22	01-980224-25	01-980231-03		01-00001-18	04-00013-06	04-00011-01	04-00104-04
	01-980231-7	01-980231-35	01-980230-11	01-980230-15	P L 65	04-00011-07	01-00014-12	01-00014-25	04-00013-09
P L 10	01-980230-19	01-980230-23	01-980226-15	04-980230-27		01-00007-13	04-00007-05	04-00007-02	01-00104-29
	04-980199-09	04-980199-06	04-980195-06	04-980197-6	P L 66	01-00102-35	04-00007-08	04-00109-04	04-00105-08
P L 11	04-980197-10	04-980197-04	04-980200-06	04-980196-06		04-00105-01	01-00091-25	01-00091-34	01-00093-32
	04-980198-06	04-980198-09	04-980228-04	04-980227-10	P L 67	04-00109-06	01-00101-34	01-00092-21	04-00103-03
P L 12	04-980210-06	04-980208-03	04-980226-10	04-980219-02		04-00103-06	04-00109-09	04-00116-01	04-00019-10
	04-980219-06	04-980219-08	04-980226-07	04-980220-06	P L 68	04-00020-04	04-00020-05	04-00020-07	04-00020-08
P L 13	01-980222-17	01-980222-14	04-980225-7	01-980228-11		01-00026-26	04-00020-01	04-00021-01	04-00021-04
	01-980222-2	01-980222-23	01-980230-34	01-980235-22	P L 69	04-00019-05	04-00019-06	01-00025-32	04-00019-08
P L 14	01-980227-15	04-980239-03	04-980239-06	04-980232-03		01-00026-02	01-00026-04	04-00020-02	04-00020-03
	01-980233-22	01-980238-16	01-980238-12	01-980243-34	P L 70	04-00021-05	04-00021-06	04-00021-07	04-00021-09
P L 15	01-980243-25	04-980241-02	01-980257-02	04-980229-02		04-00021-08	04-00021-10	04-00022-01	04-00022-02
	04-980229-04	04-980217-06	01-980257-07	01-980233-16	P L 71	04-00022-03	01-00099-35	01-00109-33	01-00047-07
P L 25	04-000260-04	04-000251-05				01-00048-13	04-00047-04	01-00049-09	04-00047-05
P L 26	04-00036-08	04-00031-01	01-00029-15	01-00029-28	P L 72	01-00031-29	01-00031-31	01-00046-26	01-00093-18
	04-00040-08	01-00044-03	01-00030-23	04-00040-05		01-00083-07	01-00091-10	04-00108-07	04-00109-01
P L 27	01-00044-08	04-00029-04	04-00119-04	04-00034-09	P L 73	04-00102-10	04-00102-07	04-00102-06	04-00017-01
	04-00024-01	04-00043-02	04-00042-08	04-00119-07		04-00022-04	01-00010-03	04-00015-07	01-00027-30
P L 28	04-00029-01	04-00034-03	04-00034-10	04-00034-06	P L 74	04-00023-04	04-00008-04	04-00004-08	04-00006-01
	01-00112-14	04-00121-07	04-00121-01			04-00009-01	04-00010-04	04-00010-01	04-00108-01
P L 29	04-00123-01	04-00122-04	01-00051-26	01-00051-23	P L 75	04-00108-04	01-00104-02	04-00023-09	04-00037-01
	04-00040-01	04-00040-02	01-00059-02	04-00122-07		04-00023-08	04-00023-10	04-00037-03	01-00039-08
P L 30	04-00048-06	04-00048-07	04-00048-08	04-00048-09	P L 76	01-00038-26	04-00037-02	01-00045-10	01-00045-36
	04-00048-10	04-00049-01	04-00049-02	04-00049-03		01-00009-18	01-00045-32	04-00124-07	04-00117-04
P L 31	04-00047-07	04-00047-09	04-00047-08	04-00047-10	P L 77	04-00113-09	04-00117-07	04-00114-01	04-00110-04
	04-00048-01	04-00048-02	04-00048-03	04-00033-10		04-00113-02	04-00112-05	01-00106-23	01-00106-27
P L 32	04-00026-03	04-00030-01	04-00033-04	04-00026-01	P L 78	04-00124-10	04-00126-01	01-00116-36	04-00125-06
	04-00027-08	04-00026-09	04-00027-05	04-00032-04		04-00126-06	04-00126-03		
P L 33	04-00033-01	04-00050-04	04-00039-09	04-00035-01	P L 101	04-000271-05	04-000270-12		
	04-00036-06	04-00008-01	04-00031-04	04-00036-02	P L 102	04-00056-03	04-00057-05	04-00056-06	04-00057-09
P L 34	04-00042-04	04-00043-05	04-00044-07	04-00044-01		04-00058-02	04-00058-05	04-00055-01	04-00055-04
	04-00101-01	04-00100-08			P L 103	01-00058-19	01-00058-24	01-00058-27	01-00058-29
P L 35	04-000263-05	04-000252-05				01-00058-32	01-00056-02	01-00056-08	01-00056-10
P L 36	01-00076-08	04-00069-08	04-00069-01	04-00070-01		01-00056-14	01-00056-16	01-00067-17	04-00061-08
	04-00067-03	04-00128-09	04-00127-07	04-00127-10		01-00062-14			
P L 37	04-00070-05	04-00070-04	04-00070-07	01-00078-17	P L 104	01-00061-29	01-00061-19	04-00049-08	04-00051-04
	04-00070-09	01-00078-22	04-00073-02	01-00073-01		04-00062-01	04-00062-02	04-00062-05	
P L 38	01-00078-12	04-00071-01	01-00068-34	04-00068-04	P L 105	04-00052-06	04-00053-02	04-00059-01	04-00054-01
	04-00068-07	01-00076-27	04-00068-01	04-00071-04		04-00052-09	04-00063-06		
P L 39	01-00077-32	04-00129-02	04-00128-01	01-00118-13					
	04-00129-08	04-00129-05	04-00128-06	04-00128-03					

## 第1章 発掘調査のはじまりとその経過

### 第1節 発掘調査に至る経過

#### (1) 北関東自動車道誕生に至る経緯

凡そ関東の幹線道路網は東京を中心に放射状に延びるものと環状に配置されるものがあり、本道路の調査要因となった北関東自動車道は後者に属する。こうした放射・環状線建設の対象範囲が関東全域に広げられるのは昭和31年の首都圏整備委員会の発足後のことであるが、昭和26年からの首都建設委員会での検討がその端緒となっている。

さて首都圏整備委員会では発足初年度より放射・環状幹線を4車線の高度舗装道路とし、既存道路を元に一部バイパス化を計画していた。後の北関東自動車道建設地域では二級国道122号線（現一般国道50号線）が対象路線となり、これを基軸に第2外郭環状線を設置する構想であった。北関東自動車道建設へと繋がる萌芽である。しかし、夢のまた夢の弾丸道路＝高速道路建設が昭和28年には計画段階に入っていたとは言え、第2外郭環状線は高速道路として計画されたものではなかった。

昭和43年10月、新たな首都圏整備基本計画が策定されると、北関東3県は東京圏（南関東）の外郭たる大東京圏とされ、内陸工業圏整備などの目標が掲げられる。道路に対しては運輸機能の東京集中回避のための日立・鹿島港の整備とリンクしたアクセス

道路の整備も企画され、これに該当する一般国道50・51号線に対しては「整備を行うが、できるだけ早期に高規格の環状道路としての整備を進め」ることが検討され、昭和50年代の完成を目指すこととなっていた。この環状道路は首都の100～150km圏を廻り北関東3県から甲府市、更に静岡市までを繋ぐ東京大環状の一部として計画されていた。

〔参考文献〕

- 首都建設委員会『首都建設 1952-1993』1993
- 首都圏整備委員会『首都圏整備 首都圏整備委員会報告1』1957
- 首都圏整備委員会『首都圏整備基本計画』1968
- 群馬県企画部企画課『首都圏整備の概要』1968
- 国土庁大都市圏整備局監修『三大都市圏政策形成史』2001

首都圏連絡幹線道路網図



別図-1 北関東横断道路平面図



第1図 首都圏連絡幹線道路網図（『首都圏整備委員会報告2』1958より縮小転載）と北関東横断道路路線図（『昭和49年度北関東横断道路調査報告書』1975より一部縮小転載）

## 第1章 発掘調査のはじまりとその経過

### (2) 北関東自動車道の誕生

東京大環状建設構想の具体化のため昭和46～49年度に「北関東横断道路計画線調査」が実施された。このときの本県分の計画路線は概ね現路線に反映されている（第1図）。構想時の道路は6車線で、「高速自動車道」とするという認識が生まれていた。

法的に北関東自動車道が高速道路として扱われるのは国土開発幹線自動車国道法第5条第1項に基づき平成元(1989)年2月に策定された基本計画に群馬県高崎市を起点に、前橋・宇都宮・水戸各市付近を通過して茨城県那珂湊市を終点とする道路として組み入れられた時からである。そして平成3年12月策定の高速自動車国道法第5条の第1・2項による整備計画で、高崎を起点とし、ひたちなか市を終点とする道路として日本道路公団（以下「公団」とする）に施工命令が下された。

尚、この道路は関東大環状の一部であると共に、上信越道、中央道経由で太平洋と日本海を結び、北関東と中京・関西圏を結ぶ役割も担われている。

〔主要参考文献〕

建設省道路局「昭和49年度北関東横断道路調査報告書」1975  
日本道路公団「あたらしい風、あたらしい道、Takasaki」1996

### (3) 中内村前遺跡の発掘調査に至る経過

公団への施行命令を受け、群馬県教育委員会スポーツ文化部文化財保護課（以下「保護課」とする）は平成6年度から公団、及び群馬県土木部道路建設課高速道路対策室と路線内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、本線部分の発掘調査については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）への委託を決し、平成7年6月より事業団への委託が開始された。

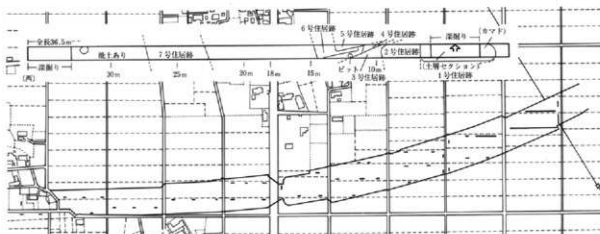
この時点で本遺跡は北関東自動車道関連13番目の遺跡として略号「KT120」、「中内村前遺跡」の名称で登録されている。

その後、保護課は前橋南部地域のうち端気川と蒔川に挟まれた地域で範囲確認調査を実施する。平成8年6月に行われたこの調査はトレンチによる試掘調査として実施され、本遺跡（前橋市中内町地内）



第2図 北関東自動車道と中内村前遺跡（国土地理院発行「前橋・高崎」使用 S=1/50000）





第3図 試掘トレンチ設定位置と39-Cトレンチ平面図 (全体図 S=1/7000 39-Cトレンチ S=1/230)

では、39本のトレンチが掘削され、26-Cトレンチ(2区)で古墳時代前期の土器の包蔵が確認された、39-Cトレンチ(8区)では7軒の竪穴住居を確認するなどしたため、遺跡地として認定された。しかしトレンチ設定位置の関係から、この段階では1区と3区東半部は調査対象から外されている。この他9区は前田遺跡に含まれ、6本のトレンチの掘削で

遺跡地として認定されている。

この試掘調査の結果を受け、平成9年度の北関東自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の事業計画に中内村前遺跡の調査が加えられ、事業団による本調査が実施される運びとなったのである。

## 〔参考文献〕

群馬県教育委員会文化財保護課『平成8年度北関東自動車道地域範囲確認調査結果に基づく各遺跡の概要』1997

## 第2節 発掘調査の経過

以下に中内村前遺跡のおおまかな調査経過を記す。尚、作業経過概要は第1表-1・2に示した。

〔平成9(1997)年〕

4月 1日 担当4名2個班配置。準備作業開始。  
11日 当時2区と呼んだ3区西半の表土除去作業に着手。21日 現地事務所設置。23日 発掘作業員召集。  
5月 16日 3区(旧2区)東半部調査対象となる。  
19日 2区(旧1区)の調査着手。21日 事務所に水道敷設。25日 夜豪雨で2区(旧1区)南半と3区(旧2区)冠水。作業2日間中断。26日 保護課との協議で2区(旧1区)調査範囲西に35m拡張。  
6月 16日 調査区西に拡張。これを1区として旧1区を2区、2区を3区に区呼称変更。18日に新1区の試掘調査実施。25日に新4区の調査着手。  
7月 1～31日に西田遺跡に担当1名を派遣。10日 集中豪雨により調査区が冠水。作業2日間中断。27・30日 屋内で36℃を記録。

8月 20日 4区の調査完了。25日 3区東半部調査のため調査事務所移転。

9月 1日 2区冠水。3区東半部の調査開始。17日 台風19号の影響で再び冠水。18日 中国四川省の鄧博士、馬教授、盧副教授、江主任、早稲田大学の荒川・昆両氏HrFA水田などを見学。22日 板倉町教育委員会宮田学芸員も見学で来跡。

10月 順調に推移。

11月 18日 5区調査開始。25日 新規属担当2名と発掘作業員1個班5区調査引継。

12月 1日 5区担当チーム8区調査に着手。新たに担当1名著任。16日 前橋市教育委員会(以下「市教委」とする)の井野係長来跡。

〔平成10(1998)年〕

1月 4日 担当2名転出、1名著任。県道藤岡大胡線以西に1個班、以東に2個班配置打合。9日 降雪。積雪30cm。13日朝まで作業中断。16日 積雪で

第1章 発掘調査のはじまりとその経過

区	面	作業	97年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	98年1月	2月	区
1区	調査準備及び搬入													1区
	1面													
	2面													
	3面													
2区	表土剥ぎ・試掘	東部中世面												2区
	遺構掘削・記録・取上			5/19										
	表土剥ぎ・試掘調査													
	遺構掘削・記録・取上													
3区	遺構掘削・記録・取上													3区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
4区	遺構掘削・記録・取上													4区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
5区	遺構掘削・記録・取上													5区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
6区	遺構掘削・記録・取上													6区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
7区	遺構掘削・記録・取上													7区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
8区	遺構掘削・記録・取上													8区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
9区	遺構掘削・記録・取上													9区
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													
	遺構掘削・記録・取上													

第1表-1 発掘調査作業経過一覧表 その1 (平成9年4月～平成10年2月前)

作業中断。28日 3区終了。6区の調査開始。  
 2月 2日 作業員増員。10日 駒形地区地権者会小牧会長来跡。12日 2区の調査完了。13日 調査班合流。19日 文化庁岡村主任文化財調査官来跡。  
 3月 4日 2・3・4区公団に引き渡し。11日 5区の調査完了。18日 前田遺跡A区(西半は中内村前9区)の表土掘削開始。25日 発掘作業員解散。30日 5区を公団に引き渡し、平成9年度の調査終了。  
 4月 1日 平成10年度事業開始。担当3名、発掘作業員1個班配属。13日 発掘作業員召集。8区2面から着手。28日 市教委済木・飯田両氏来跡。

5月 13日 公団・保護課と工程調整会議を開催。  
 29日 6区西端20m部分を公団に引き渡し。  
 6月 11日 県議会事務局、県警、県教育委員会関係者6名来跡。12日 京都化学千葉氏来跡。17日 県議会文教治安委員会の塚城・萩原・山下・時吉・中山・高橋の各県議初め関係者21名視察。21日 前田遺跡と合同現地説明会開催。見学者244名。25日 市教委井野係長、井上主任ら5名測道調査打ち合わせで来跡。東善町の住民4名が見学のため来跡。  
 7月 27日 西善尺司遺跡班が1区の調査に着手  
 8月 16日 体験発掘調査(事業団創立20周年記念

## 第2節 発掘調査の経過

区	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	作業	区
1						7/27 中・近畿面	8区西半		10/10				調査準備 表土削ぎ・遺構確認 遺構掘削・記録・取上 埋戻し・引渡	1
2		3/4											埋戻し・引渡	2区
3		3/4											埋戻し・引渡	3区
4		3/4											埋戻し・引渡	4区
5			C水田 (東半部) 3/11										表土削ぎ・試掘調査 遺構掘削・記録・取上 埋戻し・引渡	5区
6			B水田(船止) 3/20	4/22	(東半部) 5/12		8/10			(東半部)			表土削ぎ・遺構確認 遺構掘削・記録・取上 表土削ぎ・試掘調査 遺構掘削・記録・取上	6区
7													表土削ぎ・試掘調査 遺構掘削・記録・取上 埋戻し・引渡	7区
8													表土削ぎ・遺構確認 遺構掘削・記録・取上 表土削ぎ・遺構確認 遺構掘削・記録・取上 埋戻し・引渡	8区
9													表土削ぎ・遺構確認 遺構掘削・記録・取上 埋戻し・引渡	9区

第1表-2 発掘調査作業経過一覧表 その2 (平成10年2月発掘～平成10年12月)

行事の一環)開催。一般県民21名参加。17日作業員増員。18日8区東40m部分を公団に引き渡し。26日工程会議開催。公団・保護課・事業団に加え建設工事担当の共同企業体(以下「JV」とする)も出席。28日降雨で8区南側が水没。

9月16日台風5号被害で6・8区水没。25日8区の調査完了。28日7区調査開始。この日公団・保護課・市教委・JV・事業団で工程会議開催。

10月15日前橋市歴史文化財学習団体連絡協議会26名来踏。16日県立歴史博物館飯高芸芸来踏。30日6区の調査完了。

11月1日東日本水田研究会50名来踏。4日6区全ての区域の引き渡し完了。12日公団・JV・保護課・前橋市土木課と事業団出席で最後の調査工程会議開催。20日西普尺司遺跡発掘実施の1区の調査完了。24日1区公団に引き渡し。

12月21日埼玉県埋蔵文化財調査事業団福田氏、東京都埋蔵文化財センター及川氏、県立博物館飯高・井上両氏ら古墳時代前期の周溝伴う住居等見学。23日7区調査終了で発掘作業を完了。作業員解散。24日現地事務所への撤収開始。25日7区と8区中・西部公団に引き渡しフィールド作業完了。

### 第3節 発掘調査の方法

#### 1 区域の区分と設定

- ①本道跡の区域は、「区」と「グリッド」で成る。
- ②「区」は相対の設定区域で、調査区を凡そ100mおきに横切る道水路によって区画される。
- ③区の呼称は西側より順に1区～9区と付した。
- ④グリッドは平面直角座標系、所謂国家座標第Ⅱ系に基づく1m方眼により設定した。
- ⑤グリッド番号はグリッド南東隅のm単位の座標値の下3桁を用い、X値・Y値の順で表記した。
- ⑥尚、調査の効率上複数のグリッドを合わせて、

任意のグリッドを設定することもあった。

#### 2 遺跡略号と遺構番号

- ①中内村前道跡の遺跡略号は「KT120」である。
- ②遺構番号は原則として区・面・遺構の種類毎に通し番号で付し、区・面・遺構種別・番号の順で表記した。

#### 3 掘削と断面観察の例外

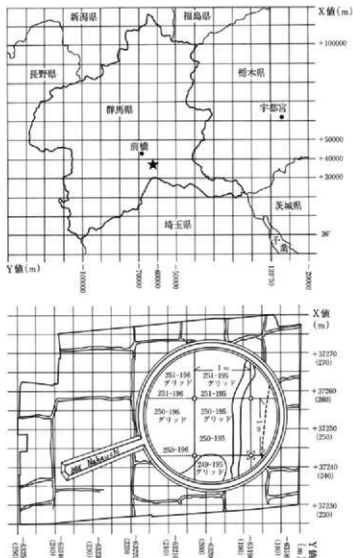
- ①表土及び調査面間の層の掘削は、調査の効率化を図るため掘削機械を使用した。
- ②遺構や遺物包含層の掘削は人力で行ったが、一部大型遺構は掘削機械を併用した。
- ③遺構断面の観察は適宜行ったが、遺構量と調査期間との兼ね合いから選択的に行うこともあった。

#### 4 記録

- ①遺構などの記録は、測量と写真撮影により行った。
- ②このうち測量は航空写真測量と地上測量を併用して、1/10、1/20、1/40、1/100、1/200縮尺の実測図を作成した。
- ③実測図には遺跡名・略号、実測図名称・縮率・実測者・レベル高等を併記した。
- ④写真撮影はプロローニ及び35mmのモノクロ及びカラーフィルムを用いて適宜行い、空中写真撮影も委託により実施した。
- ⑤上記実測図及び遺構写真台帳は表計算ソフトを用いてXLS形式に作成し、MOIに保存した。

#### 5 出土遺物

- ①出土遺物は出土位置を記録し、適宜写真撮影を行って取り上げ、遺構毎、種別毎に分別して収納ケースに保管した。



第4図 国家座標Ⅱ系とグリッドの設定

- ②保管に当たって金属器はシリカゲルを挿入した袋に入れ、木器は水浸けにした。
- ③遺物は機会を見て洗浄し、土器・石器等には注記を施した。また木器については台帳を作成し、加工痕のない木材はサンプルを採取した。



第5図 調査区設定位置図

## 第4節 調査区の異動

本遺跡の調査区のうち1区と9区の帰属については、以下のような経緯があった。今後原因或いは出土遺物に当たられる際に混乱の生ずることが懸念されるため、敢えてその経緯を記しておきたいと思う。

### 1 1区分割と引き渡し

- ①1区の調査に当たっては、区を東西に区切る道路を境として過半を占める1A区と、南西隅部の1B区とに区分して調査が実施された。
- ②その結果、1B区はその立地等から、寧ろ西接する西善尺司遺跡（にしぜんしゃくじいせき）のⅨ区に伴うという所見が得られた。
- ③これについて整理業務当初の平成12年度初め、西善尺司遺跡整理担当の須田貞宗調査研究員と協議を行い、1A区は1区として本遺跡に、1B区は西善尺司遺跡に帰属させることとした。
- ④以後1B区関連資料は西善尺司遺跡に含むものとし、図面・写真等の記録類、出土遺物は西善尺司遺跡整理班によって分割、収納し、原則として本遺跡資料としては取り扱わないこととした。但し土器注記等にその記載は残されている。

### 2 9区の編入

- ①9区は東隣する前田遺跡A区として調査した。
- ②前田遺跡A区は地形と遺構から東側低地部と西側高地上部に分けられ、後者は中内村前遺跡8区と一括の遺跡であるという所見が得られた。
- ③そのため、調査担当課では当遺跡8区と前田遺跡A区西部を一括して中内村前遺跡側で整理する方針を建てた旨、平成12年度当初に前田遺跡旧調査担当の井野修二氏から引継を受けた。
- ④前田遺跡A区の資料は中内村前遺跡の整理業務の中で順次東西のそれに分離し、該当資料を本遺跡9区として編入していった。
- ⑤尚、編入資料の注記は修正せず、図面等に中内村前遺跡9区の文言を加筆するに止めている。

## 第5節 基本層序

本遺跡の堆積土層は第6図に示したようには凡そ14層程の標準層序としてまとめられる。以下その概要を述べたいと思うが、テフラの噴出地・年代、層の厚み等は第6図を参照願いたい。

本遺跡の基盤層は2～2.5万年前の浅間山起源の前橋泥流層で、この上にそれ以降の洪積層、更に黒ボク土が乗る。洪積層はAs-YP軽石層を挟んで下位は粘質、上位は砂質である。黒ボク土は上下2層に分かれ、粘質の下層下位から出土した炭化物から

はBP5740±60年という年代を得ている。一方、黒ボク土上層はAs-C軽石を含みやや砂質である。

黒ボク土の上には間層を挟んで2枚の水田耕作土が認められ、下位の耕作土はHr-FA火山灰、上位の耕作土はAs-B軽石に被覆される。間層は粘質でHr-FA火山灰・Hr-FP軽石を含むものもある。

As-B層上にはAs-B混土層が乗る。その上はAs-A軽石降下時点以降の旧耕作土、現代の耕作土が被覆している。

谷地形	土層	土層名称	色調	土質	時期	備考	土層	標高地
	I	現耕作土層	黒色～ 灰黄色	砂質土	昭和40年代以降	圃場整備後の耕作土	I	0m
	II	旧耕作土層	黒褐色～ 灰黄褐色	砂質土	天明3年(1783)以降	As-A混入の層も認められる	II	
	III	As-B混土層	黒褐色～ 灰黄褐色	砂質土	天仁元年～天明3年	下位層にAs-B多い	III	
	IV	As-B層		荒砂質	天仁元(1108)年	浅間山噴出の降下軽石層	IV	
	V	水田耕作土層	黒褐色	粘質土	天仁元年以前	所謂水田の耕作土	V	
	VI	Hr-FA・FP混土層	暗褐色～ 灰褐色	粘質土	6世紀後半～11世紀	洪水層と思われるものもある	VI	
	VII	Hr-FA層			6世紀初頭	榛名山二つ岳噴出の降下火山灰	VII	
	VIII	水田耕作土層	黒色～ 褐灰色	粘質土	6世紀初頭以前	所謂Fa水田の耕作土	VIII	
	IX	As-C混土層	黒褐色	粘～砂質	4世紀～5世紀	所謂C混土	IX	50m
	X	As-C下層積層	黒色～ 黒褐色	粘質土	6千年前頃～3世紀	所謂C下黒	X	
	XI	洪積層	オリーブ 褐色～ 灰褐色	砂質土	1万3・4千年～ 6千年前	やや砂質のものが多い	XI	
	XII	As-YP層	白色	粗粒	1万3千～1万4千年前	浅間山噴出の降下軽石層	XII	150m
	XIII	洪積層	灰白色～ 灰褐色	粘質土	2万5千～1万7千年前	粘質を示すものが多い	XIII	
	XIV	前橋泥流層	灰白色～ 灰褐色	粘土質	2万5千年前	浅間山起源の泥流層	XIV	100m

第6図 中内村前遺跡標準土層

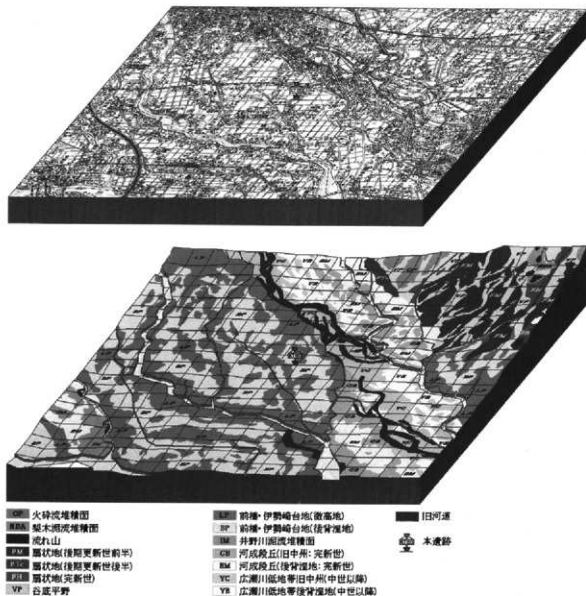
## 第2章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的・地質的環境

#### (1) 地理的環境

本遺跡は群馬県庁と前橋市役所の南東8.4km、高崎市役所の西11km、伊勢崎市役所の東南東7km付近に所在する。その位置は群馬県中央南寄りに所在する前橋市の南部で、伊勢崎市と佐波郡玉村町との市町境に近い所である。

本遺跡は前橋台地と呼ばれる洪積台地上に立地し、本遺跡の南西2.6km付近を利根川が南東方向に流下している。利根川は15世紀以降、現在地に移ったもので、それ以前この位置には“くるま川”という川があったとも言われ、利根川は現在の広瀬川付近を流下していた。その広瀬川は本遺跡の北東2km



第7図

付近を東南に流下し、この位置で北側に並走するように流れてきた桃木川が合流してきている。この広瀬川・桃木川周辺は広瀬川低地帯と呼ばれる沖積地となっている。前橋台地と広瀬川低地帯との比高差は、本遺跡付近で4m程である。

一方、前橋台地上には近世以来農業用水路としても使われる幾筋かの小河川が流れているが、本遺跡付近では何れも東南方向に流下する。端気川が南西2km付近を、藤川が同じく600m付近を、葎川が東800mの前橋台地縁辺付近を通過している。またこれら3つの河川は利根川の堰から水を分けた広瀬川から分水し、更に枝となる前橋台地上を縦横に流れる農業用水路に給水し、当該地区の水田を潤していた。また、これらの河川や枝となる農業用水は、かつては重要な蛋白源となる川魚の供給場所としての機能も生み出していた。

本遺跡の東北東1.2kmには江戸時代の宿であった駒形の街があるが、ここにはかつて江戸に抜ける街道が通っており、現在それは前橋から伊勢崎を抜けて館林に至る県道2号線（前橋・館林線）となっている。その北側にはバイパスも走り、旧道とバイパスの間には、明治34年(1901)開通のJR両毛線の軌道が敷設されていて、群馬県内の主要交通網の一部を形成している。一方、本遺跡付近には昭和11年に至って県中部の大胡町と南西部の藤岡市とを結ぶ県道藤岡・大胡線が建設され、域外への交通が容易になり、交通量も多くなっている。また本遺跡の北側1300mで高崎と駒形を結ぶ高駒バイパスが東西に走行し交通量も多い。

また、本遺跡付近は昭和30年代までは水田耕作を主体とする農村地帯で、北に中内、北東に東善、北西に西善、南に横堀などの村落が点在していた。しかし昭和40年代以降こうした農村の中に、例えば本遺跡の北1.8kmの広瀬団地、400mの東善団地、南500mの玉村町の飯塚団地などが次々に誕生し、これに伴って道路等も整備され、また高前バイパス沿いには流通基地等もできるように景観を一変させてきている。

## (2) 地質的環境

上述のように本遺跡は前橋台地上に立地している。前橋台地は赤城・榛名両火山の間から関東平野に向かって広がる緩傾斜を呈する台地である。前橋台地は200m以上の厚みを有する前橋砂礫層上に形成され、24,000年±650年前に堆積した浅間山を起源とする前橋泥流を基盤として形造られている。現在の前橋台地は前橋泥流の上に更に浅間山噴出のAs-YP(1.3-1.4万年前)、As-C(4世紀初頭)、As-B(1108年)、As-A(1783年)や、榛名山噴出のHr-FA(6世紀初頭)などのテフラが覆い、或いは後述する小河川の洪水層土、黒ぼく土などが堆積して形造られている。前橋泥流上の堆積物の厚みは本遺跡2区で2.5m程を測る。

さて、前橋台地上には前述のように端気川、藤川等の小河川が流下しているが、第3章第2項に後述する2区3面の旧河道の存在が示すように、過去に於いても（現在知られていないものを含む）幾筋もの小河川が流下していたものと考えられる。こうした小河川が微高地と谷地形を形成しているのが、前橋泥流層が硬いため、その走行は網の目のようになって複雑である。尚、第7図の前橋・伊勢崎台地の微高地(LP)が前者、前橋・伊勢崎台地の後背湿地(BP)が後者の現在の状況を示している。前者は昭和30年代まで集落や畑地として使用されることが多く、後者は水田に使用されていることが多かった。

尚、前橋台地の北東側には広瀬川低地帯が位置し、その北東、赤城山沿いには完新生の河成段丘が形成されているが、広瀬川低地帯はAs-B降下後、この900年程の間に形成されたもので、旧中洲(第7図-CB)と後背湿地(第7図-BM)とに分類され、更に旧河道が絡まって複雑な状況を見せている。また完新生の河成段丘も旧中洲(第7図-CB)の部分と後背湿地の部分(第7図-BM)とを有している。

[参考文献]

群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編1』1990



## 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡の分布は前橋台地上に濃く、広瀬川低地帯及びその北東に在る完新生の河成段丘上では薄かった。また前橋台地上の遺跡分布は、微高地上に集落、畠、古墳、屋敷等、低地部分には水田址が広っており、比較的明瞭に区分されている。

本遺跡周辺部では基盤層が完新世後期に入って形成されていることもあり、旧石器時代の遺跡は確認されていない。また縄文時代の遺跡分布も疎で、集落遺跡は殆ど認められていない。しかし前橋台地上では本遺跡に西接する西善尺司遺跡(6)で前～中期の石器製作址、一万田遺跡(21)では後期の再葬墓が調査され、また徳丸仲田遺跡(11)で草創期の土器が出土するなど各所の遺跡で縄文時代の遺物が出土してきている。一方、弥生時代の遺跡分布も希薄であるが、完新世の河成段丘上の下増田常木遺跡(2)では後期の竪穴住居が確認されている。

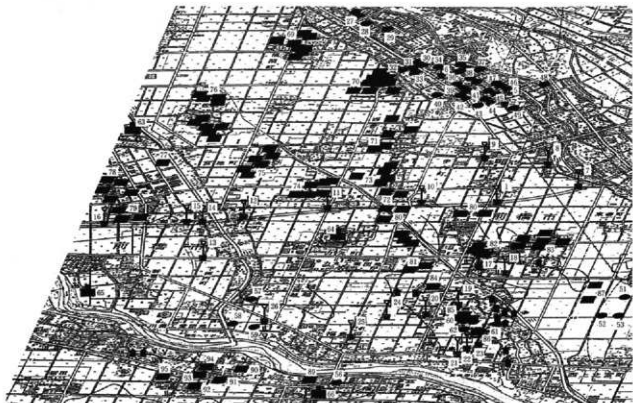
しかし古墳時代に入ると遺跡数量は劇的に増加する。本遺跡北方の前橋台地縁辺の自然堤防上には朝倉・山王の古墳群(27-49)があり、前橋台地上の微高地上にも本遺跡南東の伊勢崎市稲荷町古墳群(50-55)など古墳の分布が見られる。この中には天神山古墳(27)のように前期の古墳から竹葉師古墳(51)のように終末期の古墳までが含まれている。集落遺跡では下増田常木遺跡(2)や西善鍛冶屋敷遺跡(6)等で前期、本遺跡(1)等で中期の遺構が調査されている他、前橋台地の微高地部を中心に広く後期の集落遺跡が調査されている。また低地部分では水田址が多く見付かっており、徳丸仲田遺跡(11)、西田遺跡(15)等で前～中期頃の水田址、下阿内畑・前田遺跡(13)遺跡、横手湯田遺跡(16)等でHr-FA下水田(6世紀初頭)が確認され、横手湯田遺跡ではHr-FP洪水下(6世紀中葉以降)の水田址が調査されている。

第8図は玉村町が広範囲で実施した試掘調査成果を集落遺跡となるものを「●」記号、水田遺跡(As-B下水田)となるものを「■」記号で示していたもの

である。集落遺跡の多くに奈良・平安時代の遺跡が含まれ、また水田址の殆どが天仁元年(1108)のAs-B下水田址なのであるが、奈良・平安時代に於いても現在の微高地上に集落、低地部分に水田が営まれるという傾向に変わりないことが分かる。尚、この時期の遺跡のうち特筆されるのは官衙跡の可能性を持つ一万田遺跡(21)、東山駅跡が確認された砂町遺跡(24)である。松原Ⅲ遺跡(20)では平安時代の紡錘車の製作工房も調査されている。

かつて那波郡に属していた本遺跡周辺は、鎌倉時代にあつては那波郡に拠点を置いていた安達氏、霜月乱後は北条得宗家の支配下に、室町時代には那波氏の支配化にあつたと推定されるが、中世の遺構としては城館址や水田址等が見付かっている。このうち城館址では本遺跡の東側で室町時代の在地領主那波氏に関連する今村城(67)や上福島の砦(66)があり、西側では三輪氏の居城沼阿内城(63)、和田氏の新堀城(65)がある。また本遺跡周辺には多数の環濠屋敷(64-90)が知られているが、最近の伊勢崎地区の北関東自動車道関連遺跡で15世紀以前の未周知の屋敷遺構が発掘調査によって新たに発見され、周知の環濠遺構が江戸時代に入ることが確認されていることから、本遺跡周辺の環濠遺構も江戸時代のものである可能性が出てきている。一方で鎌倉～江戸時代の未周知の屋敷遺構が西善尺司遺跡(10)、徳丸仲田遺跡(11)、鶴光路榎橋遺跡(14)等で調査されている。尚、環濠遺構の配置には今村環濠遺構群(87)のように個々の環濠遺構が分散するものや、西善環濠遺構群(71)のようにやや集合するもの、鶴光路亀里環濠遺構群のように部分的に結合するものなどがあり、力丸城(64)は環濠遺構が有機的に結合して城郭となったものである。

近世、本遺跡周辺地は天領、藩領が交差してその支配は複雑であった。本遺跡の在る中内村は前橋藩領のうち東領(善養寺領)と呼ばれた地域に属し、慶安年間(東善養村)から分村したという。この頃か



No.	遺跡名称・番号	概要
古墳・城跡以外の調査遺跡(地点違いの遺跡は一部示した)		
1	中内村前遺跡	古墳～江戸時代の集落、屋敷、水田
2	下増田常木遺跡	弥生～江戸時代の集落、水田
3	上増田島遺跡	江戸時代の屋敷、集落
4	牛原遺跡群	古墳～平安時代の集落、水田
5	山王若宮遺跡	古墳時代前・中期の古墳、集落
6	西善観寺屋敷遺跡	古墳～江戸時代の集落、畠
7	前田遺跡	古墳～江戸時代の集落と水田
8	前田遺跡群	平安時代の集落、水田
9	西三並遺跡	平安時代の遺構
10	西善尺町遺跡	縄文～江戸時代の集落、屋敷、水田
11	徳丸仲田遺跡	縄文～江戸時代の集落、水田、畠
12	徳丸高塚遺跡	縄文～江戸時代の集落、水田
13	下阿内塚・前田遺跡	古墳～江戸時代の水田
14	観光路榎橋遺跡	平安～江戸時代の集落、屋敷、水田
15	西田遺跡	古墳～江戸時代の集落、屋敷、水田
16	横手湯田遺跡	古墳～江戸時代の集落、屋敷、水田、畠
17	藤川前遺跡	平安時代の集落
18	前通遺跡	平安時代の水田、中敷溝

No.	遺跡名称・番号	概要
19	原瀬遺跡	古墳・奈良・平安時代の集落
20	松原遺跡	古墳時代～近世、平安期の杉餅車工堀
21	一万田遺跡	弥生～平安時代の集落、律令期の官衙
22	尾柄町遺跡	平安時代の水田
23	神人村遺跡	奈良・平安時代の集落
24	砂町遺跡	古墳～平安時代の遺構、水田、東山駅跡
25	金免遺跡	平安時代の水田
26	新田部遺跡	奈良・平安時代の集落、江戸時代の水田、畠
古墳		
27	天神山古墳	粘土塚、三角縁神獣鏡等出土、前方後円墳、4世紀
28	上川御所古墳	円墳
29	大籠敷古墳	円墳
30	二子山古墳	前方後円墳、6世紀後半
31	オトク方塚古墳	円墳
32	ポンゼン山古墳	円墳
33	七倉塚古墳	古墳
34	オトク方山古墳	円墳

第8図 周辺遺跡分布(地形図は国土地理院発行五万分の一「前橋・高崎」加工)

ら広瀬用水の整備が始まったようで、その影響は本遺跡の遺構にも残されている。さて近世の遺構は広瀬川低地帯を含む広範囲に見られるが、このうち利根川・烏川の自然堤防上の左右両岸にAs-AB降下

(1783年)前後の泥流層に被覆された近世の畠遺構(「V」記号で表示)、左岸には屋敷遺構が集中的に分布していることが玉村町教育委員会の試掘調査等で明らかとなっている。



No.	遺跡名称・番号	概要
35	鳥塚山古墳	前方後円墳
36	上編24号墳	直刀、玉、馬具、円墳、6世紀
37	山王大塚古墳	埴輪等出土、円墳
38	大塚北古墳	鉄剣、刀子、円墳
39	二子山(金冠塚)古墳	礫石、墓石、金銅製杖、衝角付兜、馬具、形象埴輪等出土、前方後円墳、6世紀
40	養師塚古墳	円墳
41	上編16号墳	円墳
42	上編13号墳	前方後円墳
43	アミダ山古墳	円墳
44	才沼山古墳	前方後円墳
45	上編12号墳	前方後円墳
46	上編17号墳	前方後円墳
47	上編18号墳	円墳
48	上編33号墳	円墳
49	上編19号墳	後期の円墳
50	稲荷山古墳	鏡、太刀、馬具出土、前方後円墳、6世紀
51	竹葉塚古墳	埴輪、耳環等出土、円墳、7世紀
52	宮郷4号墳	金銅製盾、鉄線等出土、円墳、7世紀

その後、本遺跡の周囲は明治時代に入って第7大区第6小区、更に同22年(1889)から上陽村の一部となり、昭和32年に玉村町、昭和35年からは分かれて前橋市に合併し、現在に至っている。

No.	遺跡名称・番号	概要
53	杉原部古墳	埴輪等出土、円墳、7世紀
54	宮郷8号墳	刀子出土、円墳、7世紀
55	富士塚古墳	玉環出土、円墳、7世紀
56	天神塚古墳	
57	玉村町29(橋越)	航空写真で確認
58	玉村町30(上編島)	航空写真で確認
59	玉村町31(上編島)	航空写真で確認
60	玉村町50(橋越)	
61	玉村町56(橋越)	
62	玉村町487(橋越)	航空写真で確認
城郭		
63	堀阿内城(亀里阿内城)	三輪石丹居城、櫓台・堀小堀あり、10世紀
64	力丸城跡	力丸氏居城、列郭式郭配置、15-16世紀
65	新編城跡(郡士城)	和田正盛居城、16世紀、河川氾濫で消滅
66	上編島の砦	福島元運居城、那波氏開墾、雲町期か
67	今村城	那波氏の領官、長浜越前の居城、16世紀
68	上ノ宮要害	康正2年に足利成氏攻め、15-16世紀
遺跡集落		
69	後岡遺跡集落	南濃屋敷群、中世(又は近世)
70	山王遺跡集落	南濃屋敷群、中世(又は近世)
71	西野遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
72	田西野遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
73	須田屋敷	須田氏、16世紀
74	那久東遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
75	寛宮地帯遺跡群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
76	下佐島遺跡集落	南濃屋敷群、中世(又は近世)
77	亀里遺跡遺構群	中世(又は近世)
78	前田屋敷	回字型、中世(又は近世)
79	鶴小路亀里遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
80	横根遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
81	徳久東遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
82	藤川南濃集落	南濃屋敷群、中世(又は近世)
83	飯塚南濃遺構群	天正年間、南濃集落
84	中越屋敷	中世(又は近世)
85	阿佐美遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
86	阿佐美館	藤原仲基邸宅、回字型、13-16世紀
87	今村遺跡遺構群	南濃屋敷群、中世(又は近世)
88	埴子屋敷	南濃屋敷群、中世(又は近世)
89	玉村町59(福島)	中世(又は近世)
90	田口下屋敷	田口俊成、16世紀、登壇調査
91	田村屋敷	田村兼兵衛・菅右衛門、中世(又は近世)
92	石原屋敷	石原氏、中世(又は近世)
93	町田屋敷	町田氏、中世(又は近世)
94	福井東屋敷	福井氏、中世(又は近世)
95	玉村町50(板井)	南濃屋敷、中世(又は近世)

(参考文献) (主に使用したもの)

- 前橋市史編さん委員会『前橋市史 第1巻』1971
- 群馬県教育委員会『群馬県遺跡地図』1973
- 群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
- 前橋市教育委員会『前橋市埋蔵文化財調査地』1992
- 玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『橋手湯田Ⅲ遺跡・徳久仲田Ⅱ遺跡・西首尺Ⅱ遺跡・下増田橋渡Ⅱ遺跡』1998
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬道遺跡大辞典』1999
- 伊勢崎市教育委員会『伊勢崎市遺跡分布地図』2000
- 玉村町教育委員会『前遺跡』2000
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報9-15』1991-2000

## 第3章 発見された遺構と遺物

### 第1節 1区の遺構と遺物

#### 1-1 1区の調査概要

1区は本遺跡の西端部に位置する。西に西善尺司遺跡に接し、西善尺司遺跡の台地部分から次節に後

述する2区東部の低地部に向かって徐々に下がっていく平坦に近い緩傾斜面に位置している。

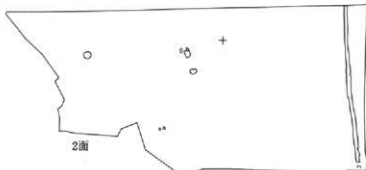
1面はAs-B (1108) 降下後の遺構である。その上限は2面との関係から中世初頭までは遡るものではない。

確認した遺構は溝20条、土坑60基、井戸3基であった。このうち溝遺構には土地改良前の土地区画ラインに一致するものや自然地形の制約を受けたラインを持つものもあった。また、土坑は西半部に偏在して分布していた。



2面はAs-B降下 (1108) 前後の時期の遺構である。覆土から平安期以降、中世の比較的早い時期の所産として把握している。

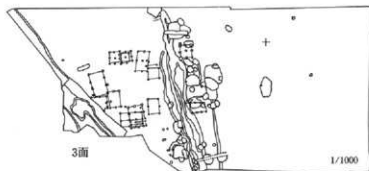
遺構量は少なく、僅かに溝1条、土坑5基、ピット2基を確認したに過ぎない。このうち溝は区東部で調査区を横切るもので、土坑・ピットは区西半で散漫な分布を見せている。



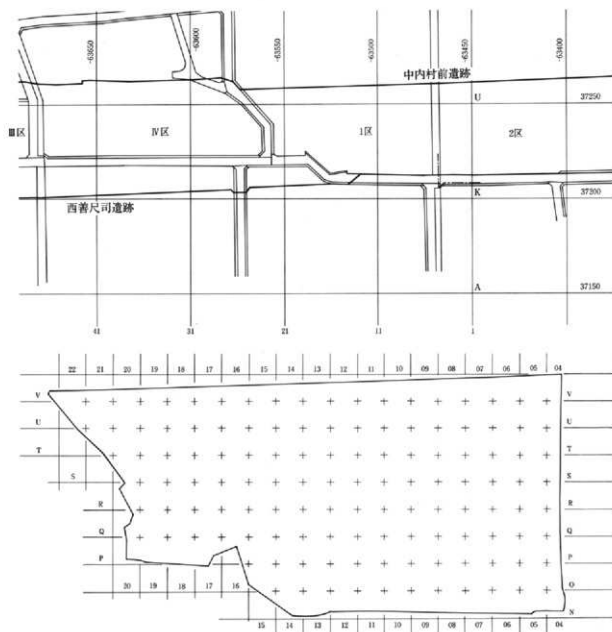
3面では平安期と判断される洪水層に被覆された遺構群を確認、調査している。これらは概ね律令期の所産と認識される遺構群であった。

確認された遺構は1区の各種確認面中最も豊富で、堅穴住居1軒、掘立柱建物13棟、柱穴列4、ピット12基、溝6条、土坑51基があり、焼土遺構、遺物包含層各1箇所、風倒木痕跡1基、旧河道3条も確認している。

このうち堅穴住居、掘立柱建物、柱穴列、土坑など殆どの遺構は区西半部に在り、溝群は北北西-南



南東の走行で、調査区中部西寄りにまとまって遺存している。旧河道は区西端部に在って掘立柱建物群を切っている。



第9図 1区グリッド設定図 (上図：S=1/2000 下図：S=1/650)

## 1-2 1区に於けるグリッドの設定

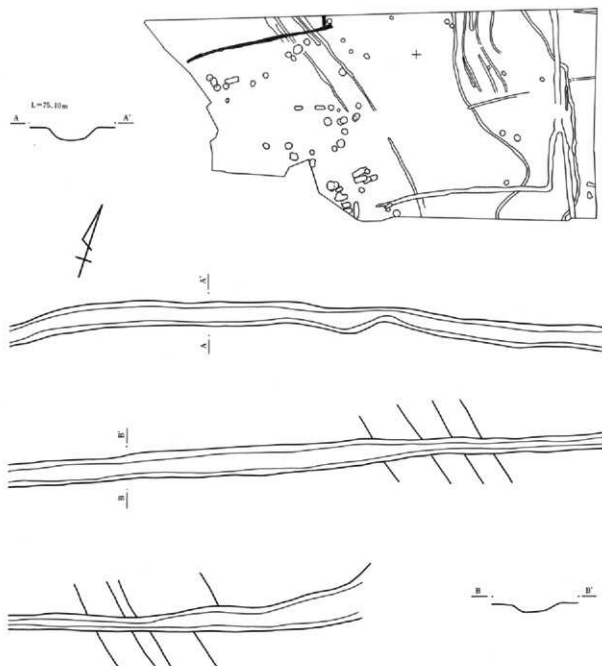
前述のように、1区は西善尺司遺跡班によって調査された。同班では西善尺司遺跡の状況や遺物注記の煩雑さに鑑み、同遺跡と調査を担当した中内村前遺跡1区に対し任意のグリッド設定を決めた。

グリッドは国家座標第IX系のX軸=+37150m、Y軸=-63450mを基点とした5mメッシュとし、

X軸は基点を「A」として北5m毎にアルファベット、Y軸では基点を「1」として西に向かって5m毎に算用数字でラインの番号を付した。

そして、その交点の名称はX軸ライン記号、「-」記号、Y軸ライン番号の順に記し、グリッド番号は各グリッド南東隅の交点の記号を用いた。

1-3 1区1面の遺構と遺物



第10図 1-1-1号溝

(1) 1-1-1・6号溝 (第10・11図)

概要 1-1-1・6号溝は調査区北西寄りに在る。

覆土から共に近・現代の所産で、1号溝は掘削位置が圓場整備前の土地区画に合致(第11図)し、6号溝は地境に平行な位置関係にある。

尚、1号溝は1-1-2-5号溝と切り合う。新旧関係は確認できなかったが、1号溝が圓場整備前の土地区画に合致するため最も新しいと判断される。

規模 [1号溝] 長さ31.3m 幅74cm 深さ11cm  
[6号溝] 長さ2.0m 幅48cm 深さ16cm



第11図 土地改良前周辺地形図(左)及び1-1-6号溝(右)

**構造** [1号溝] 走向は若干南西側に傾くものの凡そ東西を示す。プランは直線的であるが僅かにS字状を呈する。底面形は平底状である。

[6号溝] 北側路線外に出るが、調査範囲では南北走行で直線的である。底面形は平底状を呈する。

(2) 1-1-2・3・4・5・18号溝 (第12図、図版2)

**概要** 1-1-2・3・4・5号溝は1区北西部に位置する。1-1-18号溝はその走行から5号溝の延長にあるものと判断される。

2～5号溝は1-1-1号溝と切り合い関係にあるが、前項に述べたように何れも1号溝より古い。時期については覆土から2・4号溝は近・現代の所産と判断されるが、土地改良前の土地区画に現れないことから、その下限は近代末までは下らないものと判断される。一方3・5号溝からは土師器坏・椀片が出土したが時期特定には至らず、18号溝を含め、覆土にAs-Aを含まず、一部にAs-Bを含むことから江戸時代中期以前の所産として把握される。

3号溝と5・18号溝は平行な位置関係にあり、規格も近似して長く延びていることから、道路の側溝であると判断される。2・4号溝は3・5号溝と走行の方向が一致し、溝と溝の間隔もほぼ同等であるこ

とから、やはり道路の側溝であると判断され、3・5・18号溝からAs-A(1783年)降下を経て2・4号溝へ続く変遷が想定される。また、道路とした場合の路幅は2間幅が基準と判断されるので、かなりしっかりした道路であったものと思慮される。

尚、4号溝からはくびき片と思われる木製品が出土している。

**規模** [2号溝] 長さ6.2m 幅124cm 深さ5cm

[4号溝] 長さ7.5m 幅90cm 深さ18cm

[3号溝] 長さ22.8m 幅80cm 深さ12cm

[5号溝] 長さ25.8m 幅66cm 深さ24cm

[18号溝] 長さ16.0m 幅114cm 深さ8cm

[5・18号溝総延長] 48.5m

[溝離間距離] (2・4号溝) 388cm

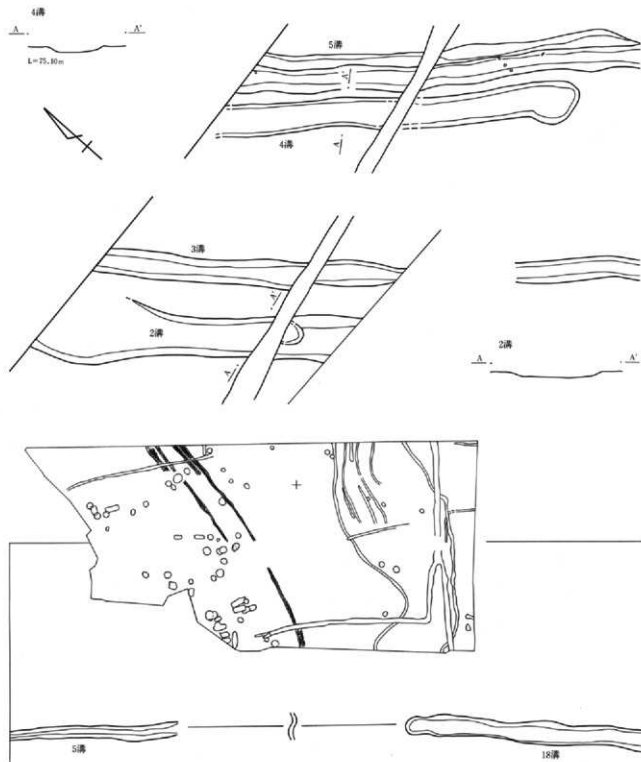
(3・5号溝) 376cm

**構造** 2～5号溝は何れも北西方向から調査区に入り、18号溝南端部で南南東を向くように非常に緩やかな弧を描く走向を示している。

2～5号溝は何れも平底状を呈し、3・5号溝では掘り直しの痕跡も認められる。

2号溝と4号溝、3号溝と5号溝はそれぞれの2間強の間隔を以って掘削されている。

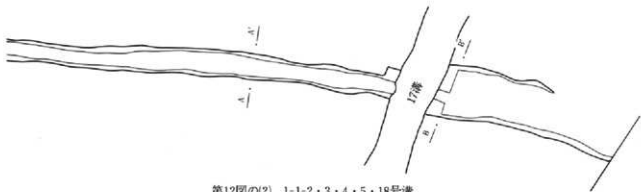
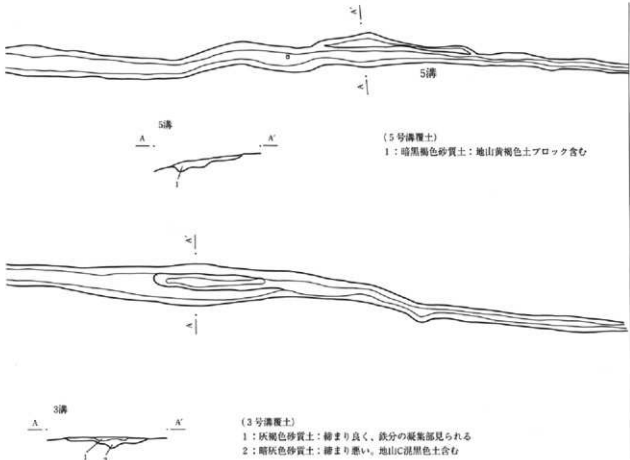
第3章 発見された遺構と遺物



第12図の(1) 1-1-2・3・4・5・18号溝

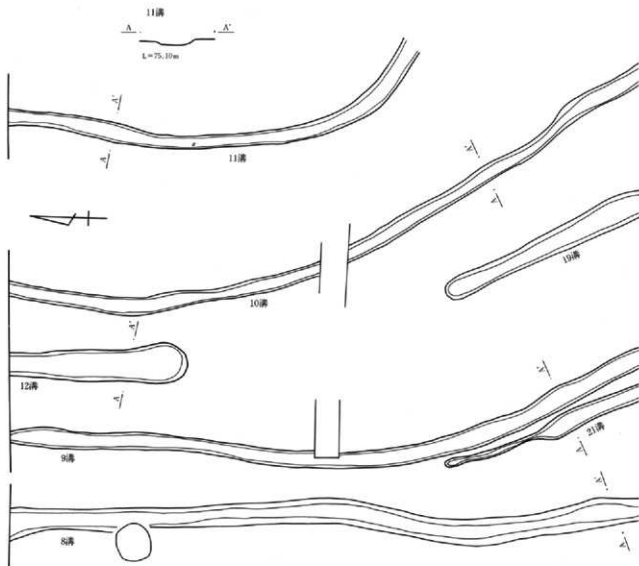


第1節 1区の遺構と遺物



第12図の(2) 1-1-2・3・4・5・18号溝

第3章 発見された遺構と遺物



第13図の(1) 1-1-8・9・10・11・12・19・21号溝

(3) 1-1-8・9・10・11・12・19・21号溝(第13図)

**概要** 1-1-8・9・10・11・12・19・21号溝は1区中東部、土地改良前の微高地上に位置する。個々の走行に若干違いはあるものの、近似した性格を持つものと判断したため一括して述べることにする。

これらは覆土の観察所見から9・11・12・21号溝は近現代の所産、8・10・19号溝は江戸時代中期以前の所産と判断されている。また8・10・11号溝からは古墳時代後期～平安期の土師器・須恵器片が出土したが、何れも時期特定には与していない。

8・9・10・11・12・19・21号溝には流水の痕跡はなく、その走行は土地改良前の耕地図にも現れない。

平行に走る溝もなく道路としての使用は認められない。また8号溝の掘削距離からは畝の可能性も少ないが、その走行は人工的とは言い難いため地形変換点に掘削された溝(群)であると判断される。

**規模** [8号溝] 長さ51.0m 幅60cm 深さ25cm

[9号溝] 長さ17.4m 幅47cm 深さ9cm

[10号溝] 長さ18.3m 幅40cm 深さ12cm

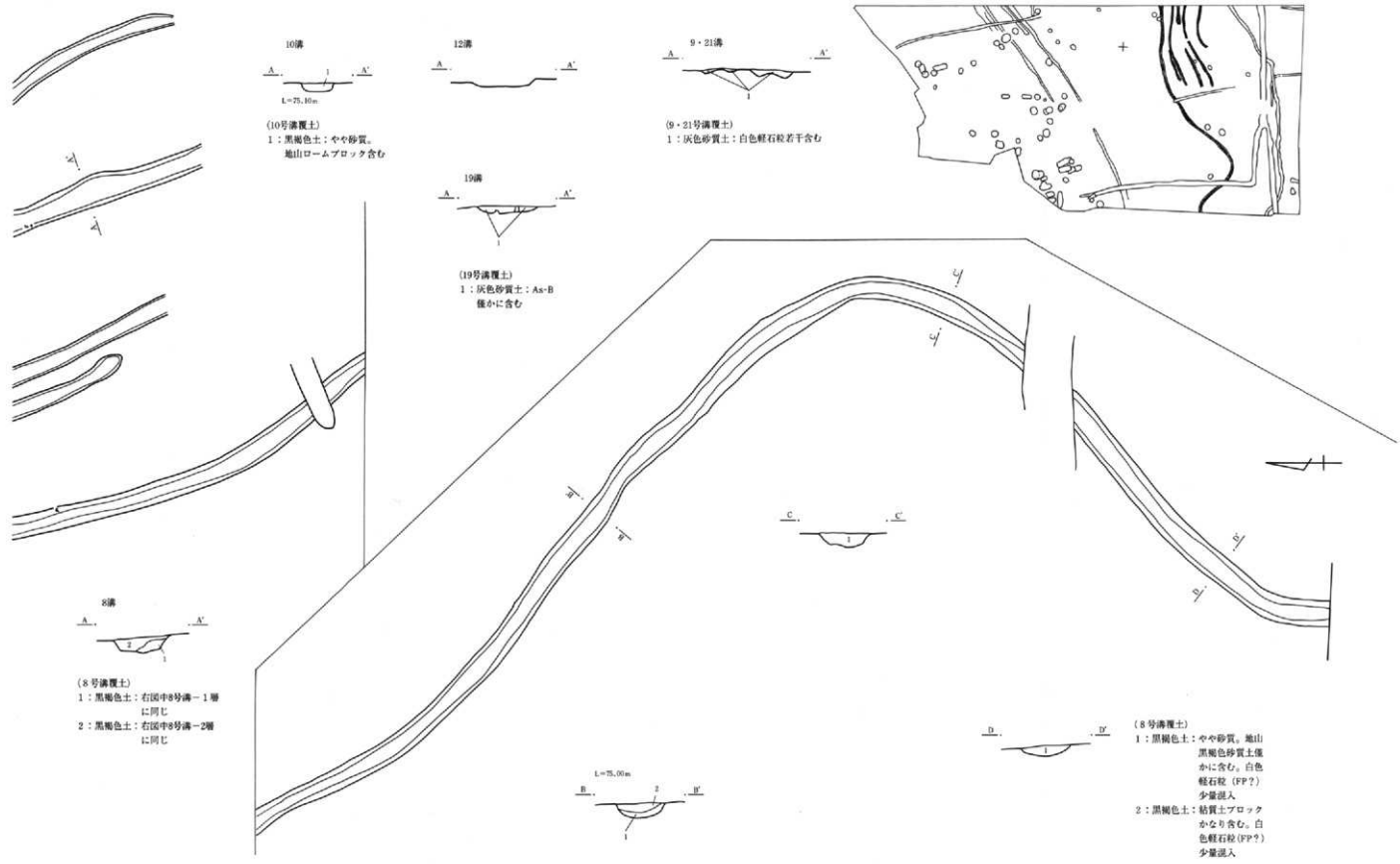
[11号溝] 長さ9.4m 幅40cm 深さ6cm

[12号溝] 長さ3.7m 幅86cm 深さ9cm

[19号溝] 長さ8.8m 幅68cm 深さ7cm

[21号溝] 長さ6.9m 幅40cm 深さ20cm

**構造** 8-12・19・21号溝は調査区の概ね北側方向



10溝  
A. . . . . A'  
L=75.00m

(10号溝覆土)  
1: 黒褐色土: やや砂質。  
地山ロームブロック含む

12溝  
A. . . . . A'

9・21溝  
A. . . . . A'

(9・21号溝覆土)  
1: 灰色砂質土: 白色軽石砂若干含む

19溝  
A. . . . . A'

(19号溝覆土)  
1: 灰色砂質土: As-B  
種かに含む

8溝  
A. . . . . A'

(8号溝覆土)  
1: 黒褐色土: 右図中8号溝-1層  
に同じ  
2: 黒褐色土: 右図中8号溝-2層  
に同じ

L=75.00m  
B. . . . . B'

B. . . . . B'

(8号溝覆土)  
1: 黒褐色土: やや砂質。地山  
黒褐色砂質土僅  
かに含む。白色  
軽石粒 (FP?)  
少量混入  
2: 黒褐色土: 粘質土ブロック  
のみを含む。白  
色軽石粒 (FP?)  
少量混入

第13図の(2) 1-1-8・9・10・19・21号溝





から調査区に入り走行を南南東方向に転ずる。9-12・19・21号溝は後述する20号溝北側で確認できなくなるが、8号溝は更に延びて走行を南東方向に変じ、調査区南部中程で逆くの字状に屈曲して南西方向、更に南端近くで南方向に転じて調査区外に抜けている。

これらの溝の掘削形態は何れも底面が平底気味で、壁面はやや開き気味に立ち上がっている。

#### (4) 1-1-15号溝 (第14図)

**概要** 本溝は1区北東隅部に位置する。本溝の東側は調査区外に抜け、西側は失われている。

出土遺物もなく、時期の特定には至らなかったが、調査段階で中世～江戸時代中期の所産の遺構として把握されている。

掘削意図についても特定できなかった。

**規模** 長さ4.9m 幅39cm 深さ14cm

**構造** 本溝は東西走行で緩やかに蛇行するが、概ね東西走行のプランを呈する。

箱型状を呈するが、壁面は開き気味である。

#### (5) 1-1-22号溝 (第14図)

**概要** 本溝は1区東部中央付近に位置するが、東側は調査区外に出ていて確認できなかった。

須恵器葉の破片を出土しているが、時期特定には至っていない。調査段階で中世～江戸時代中期の所産の遺構として把握されているが、後述する1-1-13

号溝に切られている。

本溝に流水の痕跡は認められなかったが、プランがL字状を呈することから、何らかの区画溝であったものと想定される。

**規模** 長さ12.2m 幅38cm 深さ9cm

**構造** 東側が調査区外にあり、遺存状況も良好とは言えないため全体状況はつまびらかでないが、プランは東から入り南に抜けるL字状を呈する。

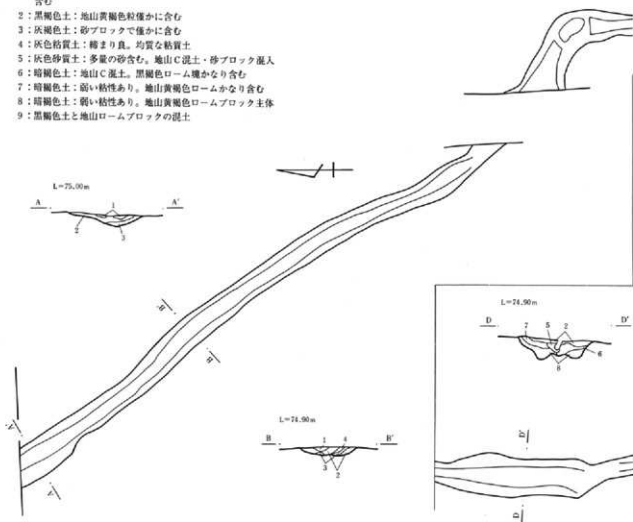
掘削形態は箱型状を呈するが、横断面形はやや丸みを帯びている。

第14図 1-1-15・22号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物

(13号溝覆土)

- 1: 層状色砂質土: 地山黄褐色粒・白色軽石粒 (As-Cか) 少量含む
- 2: 黒褐色土: 地山黄褐色粒僅かに含む
- 3: 灰褐色土: 砂ブロックで僅かに含む
- 4: 灰色粘質土: 締まり良。均質な粘質土
- 5: 灰色砂質土: 多量の砂含む。地山C混土・砂ブロック混入
- 6: 暗褐色土: 地山C混土。黒褐色ローム塊かなり含む
- 7: 暗褐色土: 弱い粘性あり。地山黄褐色ロームかなり含む
- 8: 暗褐色土: 弱い粘性あり。地山黄褐色ロームブロック主体
- 9: 黒褐色土と地山ロームブロックの混土



第15図の(1) 1-1-13号溝

#### (6) 1-1-13号溝 (第15図 図版2)

**概要** 本溝は1区東部に位置する。後述する1-1-16号溝に絡まるような位置関係にはあり、二箇所で切られている。しかし本溝の走行は16号溝と異なり圃場整備前の地籍図には現れない。

本溝からは古墳時代後期以降の土師器壺片が出土した。時期特定には至らなかったが、覆土の観察から中世～江戸時代中期の所産と把握されている。

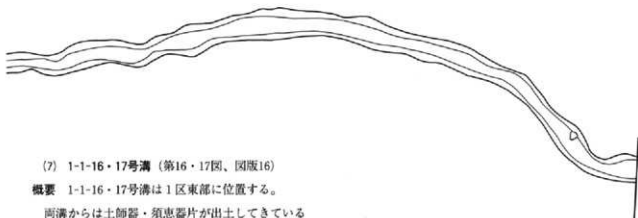
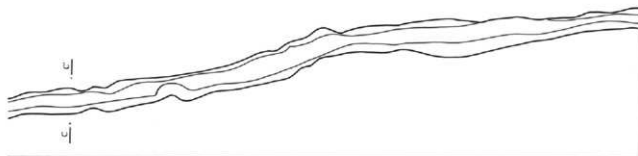
本溝の掘削意図は特定できなかったが、覆土の観察で流水の痕跡が一部認められたことから、水路或いは排水路としての使用の可能性が考慮される。ま

た、その走行が1-1-8号溝程ではないものやや人為的とは言い難いものであることから、自然地形の変換点に掘削された可能性も考えられる。

**規模** 長さ42.9m 幅117cm 深さ31cm

**構造** 本溝は北西から調査区に入り調査区北寄りで東に振れた後走行を南に転じ、更に調査区南部で南西方向に再び変じて路線外に抜ける走行を呈する。

全体的に見ると箱型で、掘削ラインも極く緩やかに蛇行する程度である。しかし、細部では壁面のラインや底面には凹凸が見られ、壁面も開き気味に立ち上がっている。



(7) 1-1-16・17号溝 (第16・17図、図版16)

**概要** 1-1-16・17号溝は1区東部に位置する。

両溝からは土師器・須恵器片が出土しているが、調査時点で16号溝は近・現代、17号溝は中世～江戸時代中期の所産として把握されていた。

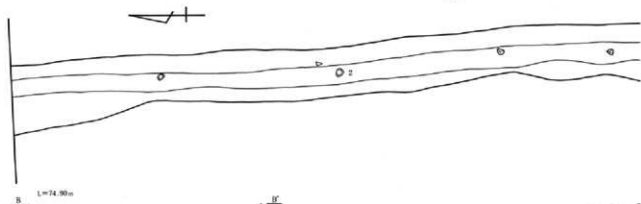
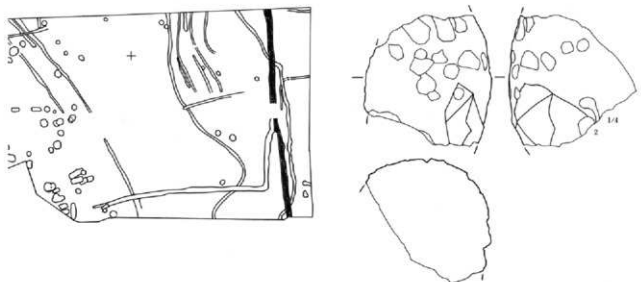
16・17号溝を圃場整備前の地形図(第16図右頁右上)に照らしてみると16号溝は北から南に通水されていた水路に合致し、水路としての利用が確認された。一方、17号溝は地割ライン上には載って来ないが、掘削規模や位置関係から16号溝から分岐する、或いは16号溝を分岐した水路ではなかったかと想定

第15図の(2) 1-1-13号溝

される。

16・17号溝については並存していた可能性も想定されるが、16号溝の分岐点の直ぐ南側は狭くなっている、この部分には堰が設けられたことが想定される。また、分岐点の2～2.7m北側の16号溝の上場

第3章 発見された遺構と遺物

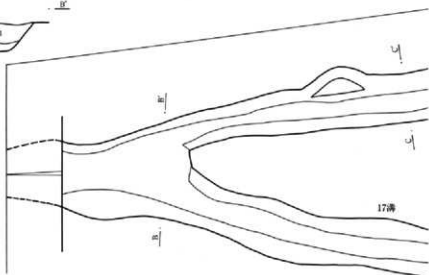


(16号溝覆土)

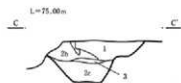
- 1: 褐灰色砂質土: As-B 覆土。16号溝2b層に同じ(右頁)
- 2: 黄褐色土: ロームブロック主体。16号溝3層土に同じ(右頁)

(17号溝覆土)

- 3: 褐灰色砂質土: As-B 様の細粒軽石とロームブロック含む。細砂混じる
- 4: 青灰色細砂: As-B 含む



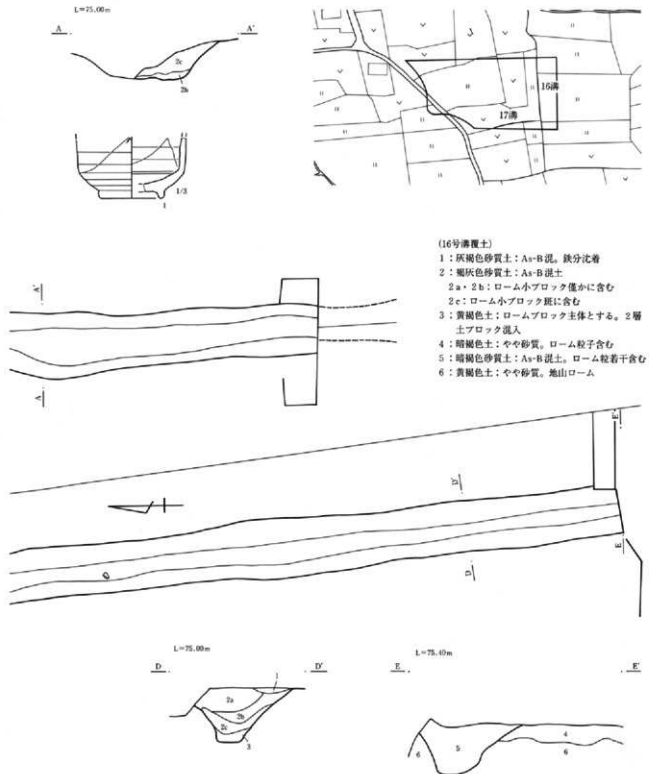
のラインが17号溝の延長線上に合致することから、As-A 降下以前は主として17号溝へ通水され、その後17号溝が埋められて、少なくとも As-A 降下後は分岐点以南の16号溝へ通水されていた可能性も考えられる。



第16図の(1) 1-1-16号溝及び出土遺物



第1節 1区の遺構と遺物



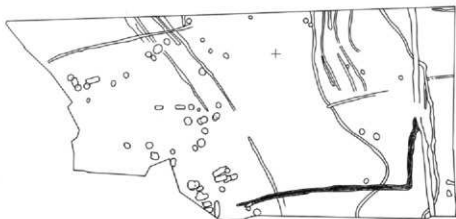
第16図の(2) 1-1-16号溝及び出土遺物、土地改良前周辺地形図

規模 [16号溝] 長さ40.4m (分岐点以北24.2m)  
幅136cm (分岐点直ぐ南66cm) 深さ58cm (分岐点  
付近29cm)

[17号溝] 長さ50.6m 幅117cm 深さ43cm

構造 16号溝は北西方向に若干傾くものの、ほぼ南北の走行を呈する。調査区の中程で17号溝を分岐するが、走行はここから南でやや南南東方向に変ずる。一方17号溝は16号溝の分岐点から南南西、更に南に

第3章 発見された遺構と遺物

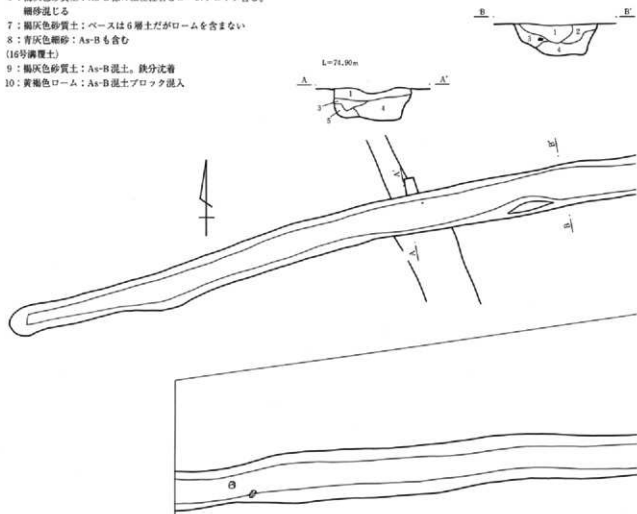


(17号溝覆土)

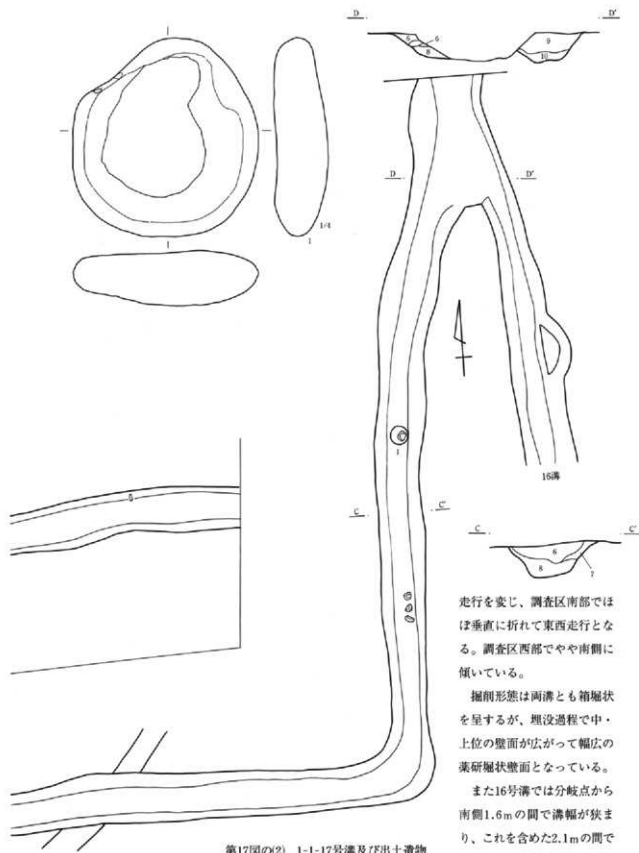
- 1: 暗灰色砂質土: 多量の砂含み跡まり悪い, As-B含む
- 2: 暗灰色砂質土: 1層土にローム塊(径1cm程)含む
- 3: 褐色土: やや砂質でAs-B若干含む
- 4: 暗灰色砂質土: 2層土に似るがローム塊の混入少ない
- 5: 暗灰色砂質土: ローム粒子全体に混入
- 6: 褐色土: As-B種の細粒軽石とロームブロック含む。細砂混じる
- 7: 褐色土: ベースは6層土だがロームを含まない
- 8: 褐色土: As-Bも含む

(16号溝覆土)

- 9: 褐色土: As-B混土。鉄分沈着
- 10: 褐色土: As-B混土ブロック混入



第17図の(1) 1-1-17号溝及び出土遺物



第17図の(2) 1-1-17号溝及び出土遺物

走行を変じ、調査区南部ではほぼ垂直に折れて東西走行となる。調査区西部でやや南側に傾いている。

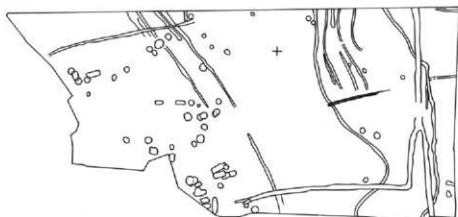
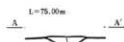
掘削形態は両溝とも箱堀状を呈するが、埋没過程で中・上位の壁面が広がって幅広の葉研堀状壁面となっている。

また16号溝では分岐点から南側1.6mの間で溝幅が狭まり、これを含めた2.1mの間で17cmスロープ状に落ちている。

### 第3章 発見された遺構と遺物

(20号溝覆土)

1: 灰色砂質土: ローム粒子・  
白色軽石粒 (A→A') 若干含む



第18図 1-1-20号溝

#### (8) 1-1-20号溝 (第18図)

**概要** 本溝は1区東部中央付近に位置する。

出土遺物は無かったが、覆土から近現代の所産として把握されている。

掘削意図も不明だが、土地改良前の畑地一区画を二分するように掘削され、また本溝を境として9号溝等が途切れるため、畑の区割り或いは段差に伴って掘削された溝である可能性が考えられる。

**規模** 長さ13.5m 幅49cm 深さ8cm

**構造** 本溝は東西走行の直線的なプランを呈する。

遺存状況が悪く、全体の状況はつまびらかでないが、船底状の掘削形態を示す。

て記すこととする。

これらの土坑のうち北西部で確認されたのは1号土坑だけであり、これも後述する西側水田部北側の土坑群に続くものである可能性を有する。一方、東部の畑地には6・7・10・11・107・108号土坑が在るが、その配置に規則性はなかったが、北寄りの107・108号土坑、中部の10・11号土坑はそれぞれ近接し、規模も近似することから一括掘削された可能性が考えられる。

これらの土坑からの出土遺物はなかったが、覆土の状況から何れも中世～近世中期の所産として把握されている。

**規模** [1号土坑] 径106×98cm 深さ8cm

[6号土坑] 径105×103cm 深さ29cm

[7号土坑] 径79×73cm 深さ7cm

[10号土坑] 径132×129cm 深さ28cm

[11号土坑] 径126×116cm 深さ20cm

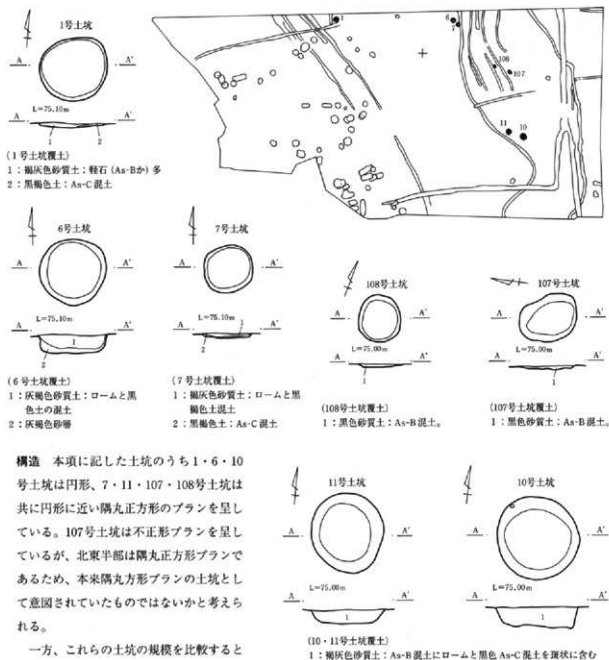
[107号土坑] 径98×70cm 深さ8cm

[108号土坑] 径76×64cm 深さ6cm

#### (9) 土坑群(1) 1-1-1・6・7・10・11・107・

108号土坑 (第19図、図版5・6)

**概要** 土地改良前、昭和23年の時点で1区西半の北端寄りと南部、そしてこの西南部に続く東部西半の中・北部は畑地であった。本項ではこの畑地の範囲に掘削されたうち、北西部と東部所在の土坑につい



第19図 1区1面東部の土坑群

構造 本項に記した土坑のうち1・6・10号土坑は円形、7・11・107・108号土坑は共に円形に近い隅丸正方形のプランを呈している。107号土坑は不正形プランを呈しているが、北東半部は隅丸正方形プランであるため、本来隅丸正方形プランの土坑として意図されていたものではないかと考えられる。

一方、これらの土坑の規模を比較すると径120cmと100cmを境として大型・中型・小型に分けられる。このうち大型に分類されるものは10・11号土坑であり、1・6号土坑は中型、7・107・108号土坑は小型の土坑に分類される。

しかし、その規模の大小に関わらず、掘削形態は似ており、底面は何れも平底を呈している。また6・10号土坑は円筒状の掘削形態を示し、11号土坑はやや壁面が傾く掘削形態を呈している。

00 土坑群(2)-1-1-15・16・17・57・58・59・  
60・61・62・63・64・65・70・71・72・  
132号土坑 (第20・21図、図版2・5・16)

概要 本項では前項に述べた土地改良前(昭和23年段階)の畑地のうち、1区南西部に所在する土坑群について述べる。

これらの土坑群は群全体的に見ても比較的集中し

第3章 発見された遺構と遺物

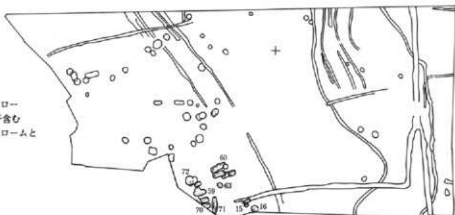
(72号土坑覆土)

1: 暗褐色砂質土: As-B 混入。ローム塊・黒色 As-C 混土・焼土若干含む

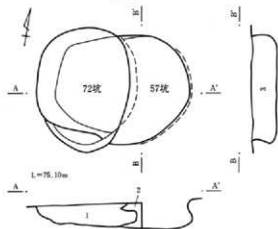
(57号土坑覆土)

2: 暗褐色砂質土: As-B 混入。ローム・黒色 As-C 混土・焼土若干含む

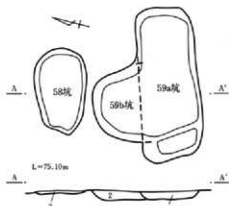
3: As-B 混土と細砂土主体の土にロームと黒褐色土入る混土



57・72号土坑



58・59a・59b号土坑



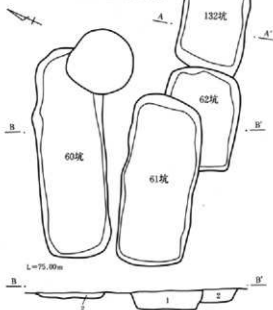
(59a号土坑覆土)

1: 黒色砂質土: As-B と僅かなローム・焼土混入

(58・59b号土坑覆土)

2: 黒色土: 1層土よりやや締まる

60・61・62・132号土坑



(61号土坑覆土)

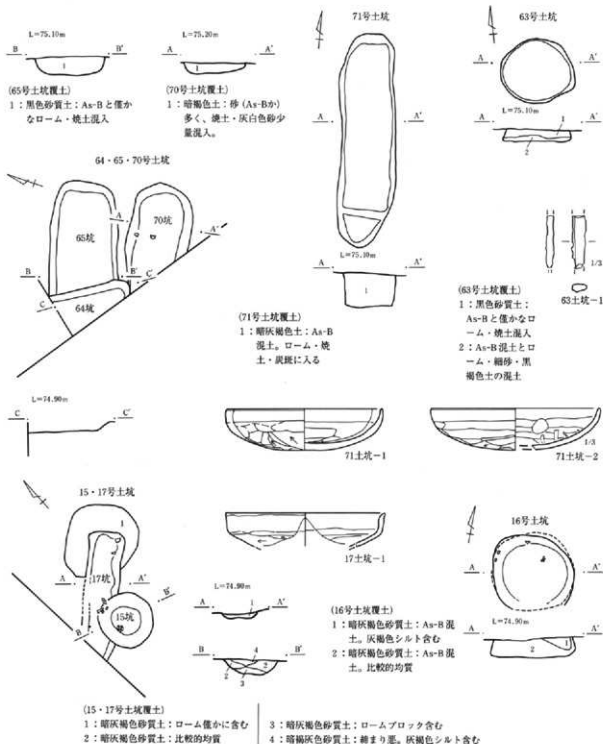
1: As-B 混土・ローム・細砂・黒褐色土の混土

(60・62号土坑覆土)

2: 1層土に似るが、1層に比しロームと黒褐色土少ない

第20図 1区1面西部の土坑群(その1) - 南西部 -

第1節 1区の遺構と遺物



第21図 1区1面西部の土坑群(その2) -南西部-

た分布状況を示しているが、更にその分布域の中で60-63・132号土坑が北東に、15-17号土坑が南東に小さなまとまりを持ち、西部の57-59・64・65・70-72号土坑は北北西-南南東方向に帯状に並ぶよ

うな位置関係で確認されている。

本土坑群には前後の項に述べている土坑群とは異なり、長方形プランを呈する土坑が多いことや袋状土坑が含まれるといった特徴が見られる。高、71号

### 第3章 発見された遺構と遺物

土坑を除く長方形プランの土坑は主軸が東北東—西  
南西を向いていて規格性が認められ、71号土坑も長  
軸がこれらの土坑群の長軸に直交するものであるた  
め、規制に基づいて掘削されたものであることが窺  
がわれる。

上述の北東部と西部の集中域はその後の土地改良  
以降宅地となっていた範囲に相当している。この宅  
地は旧来からの屋敷地ではないが、屋敷遺構に多く  
調査される長方プランの土坑が集中して分布する状  
況に照らせば、本土坑群の分布区域が屋敷地として  
使用されていた可能性も考慮されるのである。

一方、西善尺司遺跡に隣接するため64・72・  
132号土坑を除く土坑からは遺物の出土があり、15  
～17・57～63・65・70・71の各土坑からは7世紀後  
半期の土師器坏片(17土坑-1)、8世紀前半期の土  
師器坏(71土坑-1・2)や須恵器坏(60号土坑-1)、  
を始め土師器坏・甕、或いは須恵器碗・甕などの破  
片や刀子片(63土坑-1)が出土している。しかし  
これらの土坑は覆土の状況から中世～近世中期の所  
産として把握されている。

尚、掘削意図は特定することはできなかった。

**規模** [15号土坑] 径86×86cm 深さ27cm

[16号土坑] 径128×120cm 深さ33cm

[17号土坑] 径204以上×58cm 深さ16cm

[57号土坑] 径168×96以上cm 深さ40cm

[58号土坑] 径137×83cm 深さ10cm

[59a号土坑] 径243×98cm 深さ10cm

[59b号土坑] 径120×88cm以上 深さ16cm

[60号土坑] 径332×112cm 深さ19cm

[61号土坑] 径272×118cm 深さ37cm

[62号土坑] 径160×120以上cm 深さ25cm

[63号土坑] 径120×100cm 深さ25cm

[64号土坑] 径124×68cm以上 深さ14cm

[65号土坑] 径172以上×108cm 深さ31cm

[70号土坑] 径160以上×98cm 深さ22cm

[71号土坑] 径340×90cm 深さ50cm

[72号土坑] 径196×160cm 深さ36cm

[132号土坑] 径144以上×106cm 深さ9cm

**構造** 15・16・57・59b・63・72号土坑は円形また  
は円形に近い隅丸正方形のプランを呈し、17・59a  
・60～62・64・65・70・71・132号土坑は凡そ隅丸  
長方形のプランを呈している。後者のうち62・132  
号土坑は長径が短く、60・61号土坑は中間形態、71  
号土坑は南側は丸まるが概ね短冊形を呈している。  
一方、58号土坑はやや崩れた楕円形を呈している。

掘削形態は16・57・63号土坑は平底の袋状を呈し、  
長方形プランのものは箱形で壁面が若干開くもの  
が多い。また15・72号土坑はやや丸底気味、58号  
土坑は平底で壁面はやや開く掘削形態を示す。

- (1) 土坑群③—1-1-2・4・12・13・18・19・20・  
21・22・24・25・26・27・28・29・30・  
31・32・33・34・35・36・37・38・39・  
40・42・43・44・94・95・96・100・101・  
111・113・114号土坑

(第22～25図、図版2～6・16)

**概要** 1-1-2・4・12・13、18～22、24～40、42～44、  
94～96、100・101・111・113・114号土坑は、土地  
改良前(昭和23年段階)に水田だった区画に所在  
する。当時の水田は前項及び前々項に記した畑地の  
東西に在り、東側は2区に続くもので、西側は東・  
南・北を畑地に囲まれている。12・13号土坑は2区  
に続く東側の水田地に在り、他の土坑は西側の水田  
地に立地している。

これらの土坑群に明瞭な規則性は見出せなかった  
が、西側水田の中部と北寄りの調査区西寄りに集中  
して分布する傾向が見られ、これらの分布は東北東  
—西南西方向を軸とする帯状の分布に認められた。  
また、2区を含めても東側の水田域の土坑分布は薄  
く、一方西側水田にあっては東部は分布の空白域と  
なっている。

本土坑群の土坑には円形或いは隅丸正方形プラン  
のものが多く、隅丸長方形の系統のものも若干見ら  
れた。また前者は径100×100cm及び130×130cmを境  
に小型、中型、大型に分けられるが、前者は北側の  
集中域に、後者は北東寄りと南東寄りに集まる分布



傾向が見られた。

約半数の土坑から遺物の出土が見られ、8世紀前半期の土師器甕(36号土坑-1)、8世紀後半期の須恵器環(37号土坑-1)を始め、18・22・24・25・34・39・94・96・114号土坑から土師器杯・高杯・壺・埴、須恵器壺・碗などの出土があり、特に35・95号土坑からは多くの出土が見られた。また敲打痕或いは削痕と敲打痕を持つ台石状の鏝(12土坑-1、114土坑-1)の出土も見られた。しかしこうした出土遺物はあるものの、本土坑群の時期は、その覆土の観察所見から何れも中世～近世中期の所産として把握されるものである。

何れの土坑についても掘削意図は特定できなかったが、35号土坑、38号土坑、そして113・114号とは長軸の方向が異なるので、掘削時期が異なることが想定される。また113号土坑と114号土坑は主軸が同一の直線上にはば乗り、規模も近似するので一括して掘削された可能性が想定される。その他、小型の土坑群は掘削位置が特定され、規模も近似するため一括して掘削された可能性が考えられる。大型の土坑群のうち南西のものも同様一括して掘削された可能性が考慮される。

規模 [2号土坑] 径88×76cm 深さ9cm

[4号土坑]	径78×76cm	深さ21cm
[12号土坑]	径162以上×95cm	深さ14cm
[13号土坑]	径124以上×104cm	深さ44cm
[18号土坑]	径160×152cm	深さ35cm
[19号土坑]	径102×100cm	深さ17cm
[20号土坑]	径124×120cm	深さ14cm
[21号土坑]	径156×154cm	深さ31cm
[22号土坑]	径134×72以上cm	深さ15cm
[24号土坑]	径138×124cm	深さ16cm
[25号土坑]	径136×128cm	深さ20cm
[26号土坑]	径112×112cm	深さ15cm
[27号土坑]	径68×54cm	深さ13cm
[28号土坑]	径134×124cm	深さ13cm
[29号土坑]	径148×128cm	深さ20cm
[30号土坑]	径114×92cm	深さ8cm

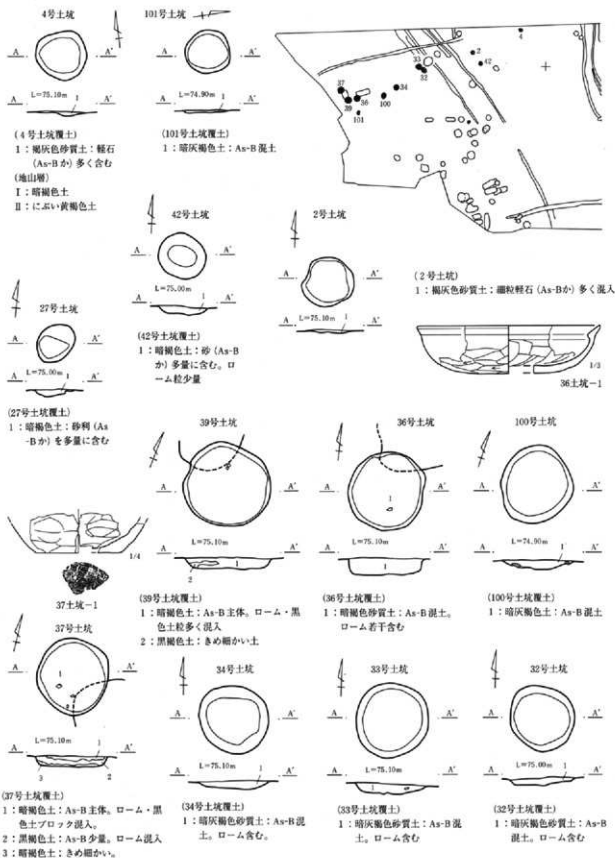
[31号土坑]	径196×152cm	深さ29cm
[32号土坑]	径104×100cm	深さ14cm
[33号土坑]	径118×114cm	深さ19cm
[34号土坑]	径110×108cm	深さ18cm
[35号土坑]	径288×114cm	深さ23cm
[36号土坑]	径126×118cm	深さ35cm
[37号土坑]	径116×116cm	深さ16cm
[38号土坑]	径210×120cm	深さ10cm
[39号土坑]	径138×132cm	深さ24cm
[40号土坑]	径100×100cm	深さ10cm
[42号土坑]	径76×68cm	深さ20cm
[43号土坑]	径136×134cm	深さ24cm
[44号土坑]	径118以上×32cm	深さ11cm
[94号土坑]	径152×144cm	深さ19cm
[95号土坑]	径144×112cm	深さ14cm
[96号土坑]	径146×140cm	深さ16cm
[100号土坑]	径124×114cm	深さ13cm
[101号土坑]	径70×68cm	深さ16cm
[111号土坑]	径136×116cm	深さ8cm
[113号土坑]	径170×74cm	深さ6cm
[114号土坑]	径210×80cm	深さ19cm

構造 上述のように本土坑群のプランは円形若しくは隅丸正方形に近いものと、隅丸長方形に近いものとがあり、その大きさから前者は更に大中小の3型に分けた。

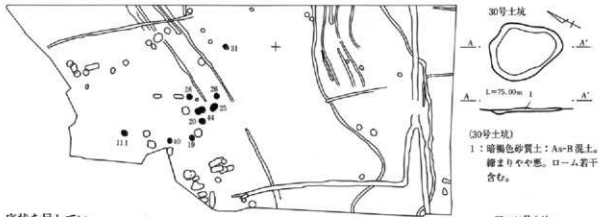
このうち小型に分類される2・4・27・42・101号土坑のプランは、やや崩れた円形或いは楕円形を呈している。これらの土坑群の遺存状況は不良であるため全体的な掘削形態は明瞭ではないが、底面は平底状を示している。

中型に分類される土坑は更に小型に近い19・20・25・30・32・33・34・37・40・44・100・111号土坑と大型に近い22・24・25・28・36・39号土坑とに分けられる。しかしそのプランは30号土坑が不整形プランを呈する以外は、何れも円形若しくは円形に近い隅丸正方形を呈している。掘削形態は遺存状況があまり良好ではないのでつまびらかではないが、25・26・40・44号土坑の底部は若干丸みを帯び、他は平

第3章 発見された遺構と遺物



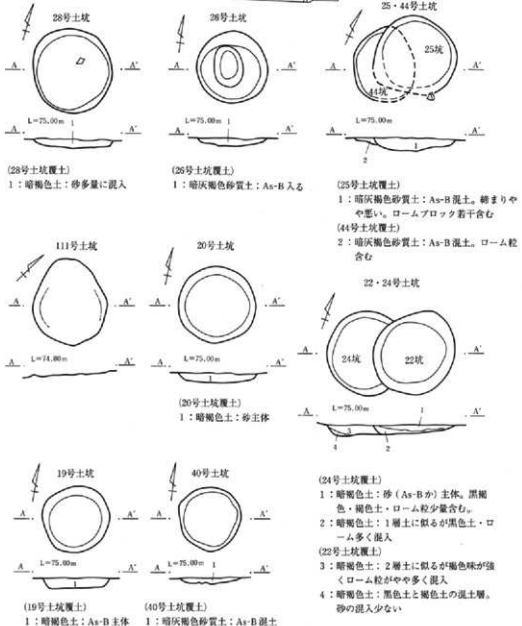
第22図 1区1面西部の土坑群 (その3) -北西部-



底状を呈している。

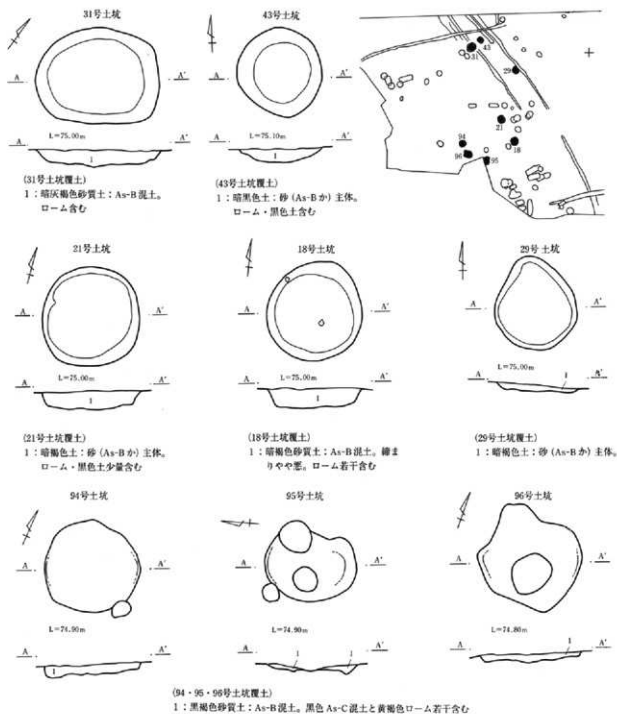
大型に分類される土坑についてみると、18・21・43・94号土坑は円形に近いプランを呈し、29・31・95・96号土坑は隅丸方形に近い形態のプランを呈している。遺存状況が良くないものもあるためつまびらかでないが、21・31・43・96号土坑は丸底気味の掘削形態を示し、他は平底気味の掘削形態を示している。尚、底面形態に関わらず、壁面は僅かに開く傾向にある。

方形プランの土坑に分類されるものには35・



第23図 1区1面西部の土坑群 (その4) - 中西部 -

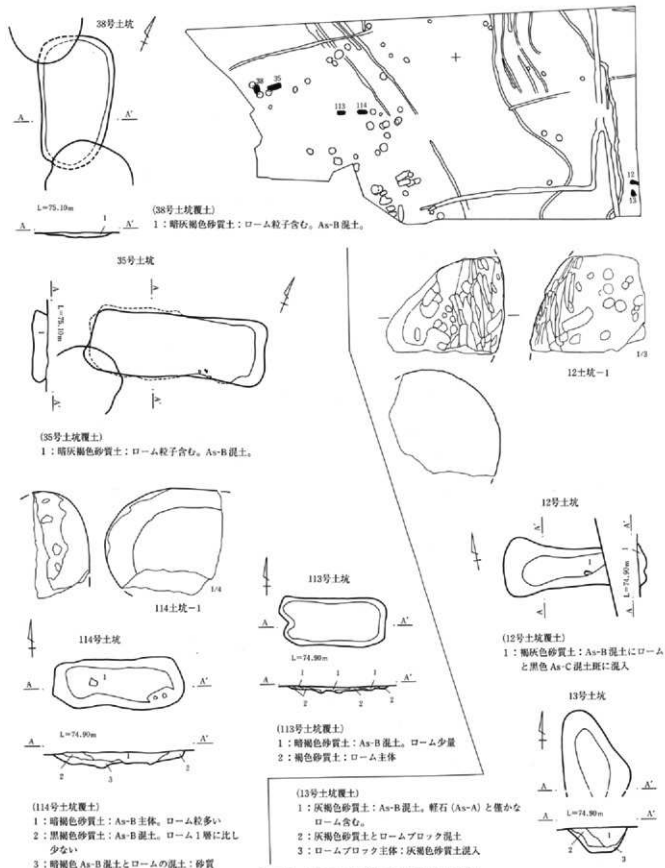
第3章 発見された遺構と遺物



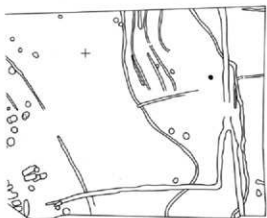
第24図 1区1面西部の土坑群 (その5)

38号土坑と、東側の水田に在る12・13号土坑とがある。何れも隅丸長方形のプランを基とすると判断したが、12・114号土坑のプランは中細りの形態を示し、13号土坑は底面のプランから隅丸長方形に分類

したが、やや楕円形に近いプランを呈している。また、13号土坑の西側のプランには若干みだれが認められる。



第25図 1区1面西部の土坑群(その6)



(12) 1-1-1号井戸 (第26図, 図版6・16・17)

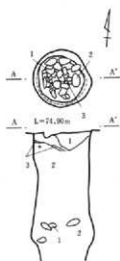
概要 本井戸は1区東部の中程に位置する。

本井戸からは須恵器莞の破片の他、アグリ付近を中心に大きめの礫が多く出土しているが、中には敲打・削痕或いは研磨痕を残す礎石若しくは台石(1, 2)や全面に煤の付着した片岩も出土している。

遺物からの時期特定には至らなかったが、覆土から本井戸は中世～近世中期所産として把握され、アグリ形成から一定期間の使用が確認される。

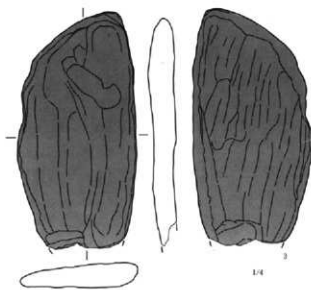
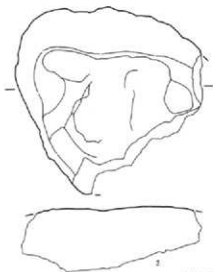
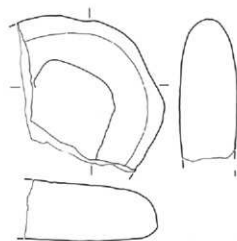
尚、本井戸は底面まで掘削できていない。また、透水層等の記録も残されなかった。

規模 径93×90cm 深さ200cm以上

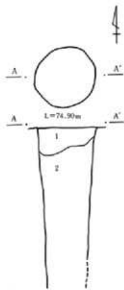
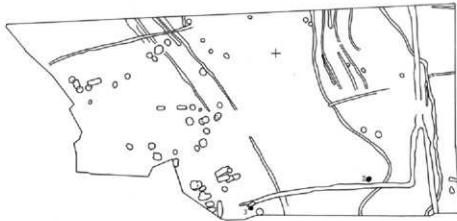


(1号井戸覆土)

- 1: 黒褐色砂質土: ローム粒少量含む
- 2: 黒褐色砂質土: 均質な土層。ロームは殆ど含まない
- 3: 暗灰色砂: 均質な砂層



第26図 1-1-1号井戸及び出土遺物



## (2号井戸覆土)

- 1: 暗褐色砂質土: 少量のローム小ブロックを層状に含む
- 2: 暗褐色砂質土: ロームブロック僅かに含む

## (13) 1-1-2号井戸 (第27図, 図版6)

**概要** 本井戸は1区東南部に位置する。

本井戸からの出土遺物は認められなかったが、覆土の状況から本井戸は中世～近世中期所産の遺構として把握されている。

尚、本井戸は底面まで掘削することができず、アグリも確認されなかった。また透水層等の記録も残せなかった。

**規模** 径93×93cm 深さ250cm以上

**構造** 本井戸のプランはほぼ円形を呈する。

掘削形態は円筒状だが先細りとなる。



## (3号井戸覆土)

- 1: 黄褐色砂質土: 締まり悪く崩れやすい
- 2: 暗褐色砂質土: 地山黄褐色砂礫含む
- 3: 黄褐色砂礫: 小礫多量に含む。地山再堆積土主体

## (14) 1-1-3号井戸 (第27図, 図版6)

**概要** 本井戸は1区中南部に位置する。

本井戸からは土師器杯・甕片が出土し、井戸底面には拳大の礫も見られたが、時期特定には至らなかった。但し、本井戸は中世～近世中期所産として把握されている。

尚、本井戸にはアグリは確認されず、透水層等の記録も残されていない。

**規模** 径71×62cm 深さ111cm

**構造** 本井戸の上場の多少楕円形に近が、底面プランは隅丸の正方形を呈する。

掘削形態はバケツ状を呈している。

第27図 1-1-2・3号井戸

**構造** 本井戸のプランはほぼ円形を呈する。

掘削形態は円筒形を示しているが、やや上位に開く。確認面下162cm付近に幅50cm、奥行き12cm程のアグリが形成されている。

1-4 1区2面の遺構と遺物

(1) 1-2-14号溝 (第28図)

概要 1-2-14号溝は1区東部に位置する。

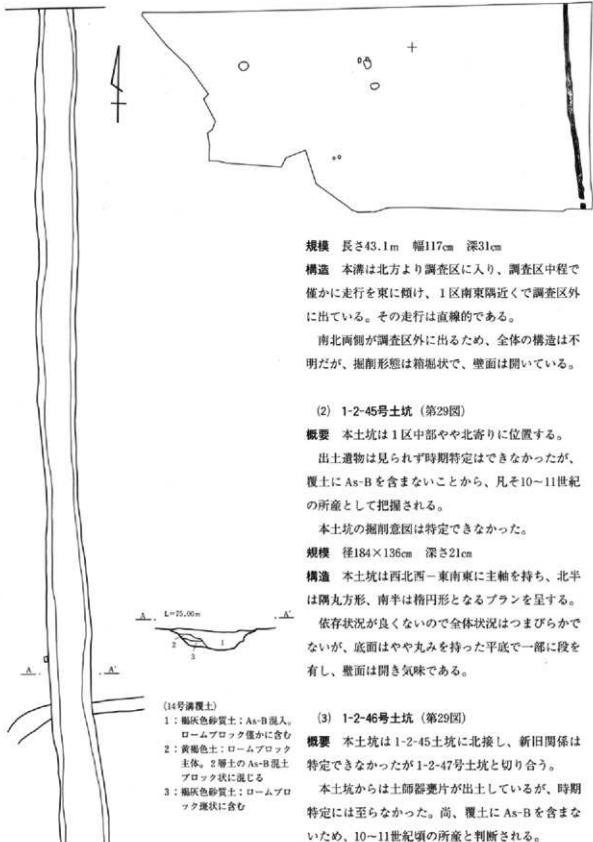
本溝からは古墳時代後期のものを含む土師器、或いは須恵器や碗の破片が出土したが、時期特定には至らなかった。しかし覆土にAs-B軽石を含むため、古代末遺構の所産と確認されるが、1面で確認できていないため14世紀初めの応永年間或いは15世紀中ごろの天文年間と云われる利根川の変流以前の可能性も考えられる。

本溝の掘削意図は明らかではないが、流水の痕跡はないものの、しっかりした掘り方と掘削規模を有し、1面の1-1-16号溝と近似した掘削位置にあるため、水路の可能性が考慮される。



第28図の(1) 1-2-14号溝





第28図の(2) 1-2-14号溝

規模 長さ43.1m 幅117cm 深31cm

構造 本溝は北方より調査区に入り、調査区中程で僅かに走行を東に傾け、1区南東隅近くで調査区外に出ている。その走行は直線的である。

南北両側が調査区外に出るため、全体の構造は不明だが、掘削形態は箱型状で、壁面は開いている。

(2) 1-2-45号土坑 (第29図)

概要 本土坑は1区中部やや北寄りに位置する。

出土遺物は見られず時期特定はできなかったが、覆土にAs-Bを含まないことから、凡そ10～11世紀の所産として把握される。

本土坑の掘削意図は特定できなかった。

規模 径184×136cm 深さ21cm

構造 本土坑は西北西—東南東に主軸を持ち、北半は隅丸方形、南半は楕円形となるプランを呈する。

依存状況が良くないので全体状況はつまびらかでないが、底面はやや丸みを持った平底で一部に段を有し、壁面は開き気味である。

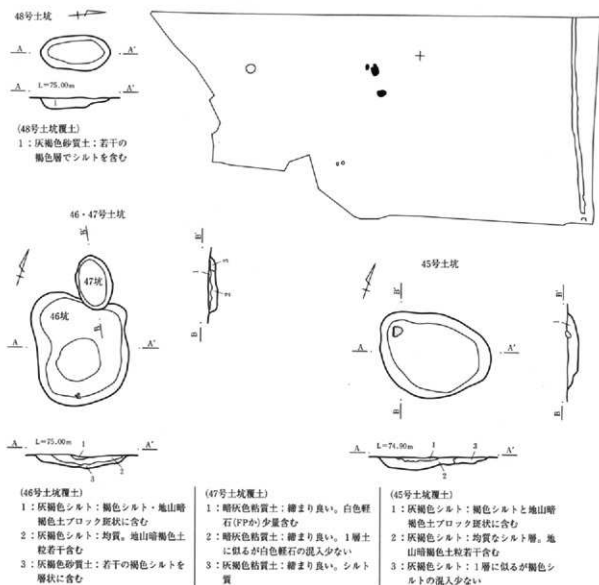
(3) 1-2-46号土坑 (第29図)

概要 本土坑は1-2-45土坑に北接し、新旧関係は特定できなかったが1-2-47号土坑と切り合う。

本土坑からは土師器断片が出土しているが、時期特定には至らなかった。尚、覆土にAs-Bを含まないため、10～11世紀頃の所産と判断される。

本土坑の掘削意図も特定できなかった。

### 第3章 発見された遺構と遺物



第29図 1区2面の土坑群(その1)

規模 径180×152cm 深さ23cm

構造 本土坑は隅丸台形のプランを呈する。

掘削底面は九底気味で、中央南寄り最も深くなっている。壁面は若干開き気味で立ち上がる。

#### (4) 1-2-47・48号土坑(第29図)

概要 1-2-47・48号土坑は1区中部北寄りに隣接する小型で、形態的にも近似した土坑であるため一括して報告する。

47号土坑は1-2-46号土坑の北端で切りあうが、新旧関係は特定できなかった。

両土坑とも出土遺物は見られなかったが、覆土にAs-Bを含まないので、凡そ10～11世紀頃の所産と判断される。

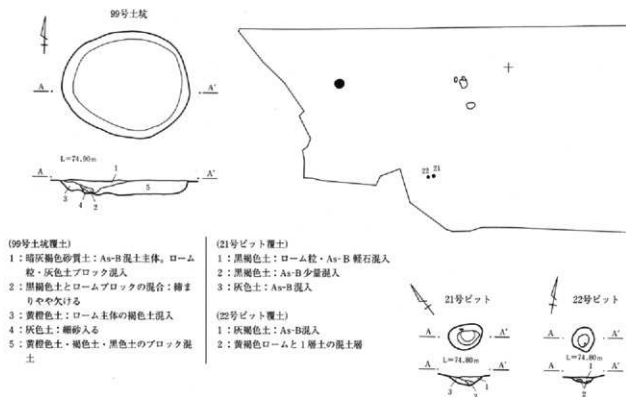
両土坑の掘削意図は、共に特定することはできなかった。

規模 [46号土坑] 径86×54cm 深さ5cm

[47号土坑] 径110×54cm 深さ18cm

構造 46・47土坑は共に楕円形のプランを呈し、46号土坑は北北西、47号土坑は北に主軸を向ける。

掘削形態についてみると、底面は平底気味で、壁面はあまり開かない。



第30図 1区2面の土坑群(その2)

## (5) 1-2・99号土坑(第30図)

**概要** 本土坑は1区北西部に位置する。1区3面に調査した遺構であるが、覆土にAs-Bを含むことから2面の遺構として報告する。

本土坑からの出土遺物は見られなかったが、覆土と確認面の関係から中世の所産として把握される。

尚、掘削意図も特定できなかった。

**規模** 径200×168cm 深さ26cm

**構造** 本土坑は円形に近い楕円形のプランを呈し、掘削底面は平底で、壁面は若干開いている。

## (6) 1-2-21・22号ピット(第30図, 図版6)

**概要** 1-2-21・22号ピットは1区南西部に位置する。1区3面に調査したが、覆土にAs-Bを含むことから2面の遺構として報告する。

何れのピットからも土師器変片が出土したが、覆土と確認面の関係から概ね中世の所産として把握されるものである。

尚、規模・形状・離間距離を勘案して、特に21号

ピットと22号ピットのスパンは105cm隔たっているため関連した遺構ではないと判断される。

尚、掘削意図は特定できなかった。

**規模** (21号ピット) 径52×40cm 深さ25cm

(22号ピット) 径39×39cm 深さ11cm

**構造** 21号ピットは楕円形、22号ピットは隅丸方形形のプランを呈する。

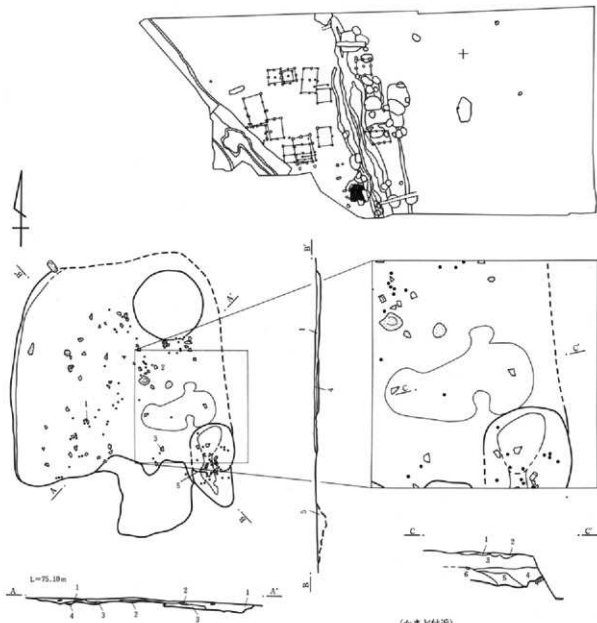
21・22号ピットの底面形態は何れも丸底気味だが、21号ピットには荷重による変形が見られ、柱は径20cm以下と想定される。

1-5 1区3面の遺構と遺物

(1) 1-3-1号住居 (第31~33回, 図版7・17)

本住居は1-3-63・71・122号土坑に切れ、一部一括して掘削してしまったが、1-3-126号土坑に切っている。

概要 本住居は1区3面西部、溝列の西側の区域の最も南東に位置している。



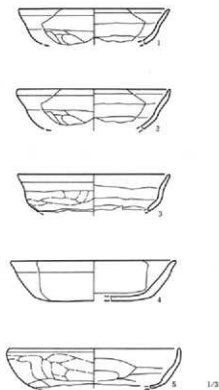
(1号住居覆土)

- 1: 褐色土: 焼土粒・炭粒・土器片入り混じる
- 2: 灰褐色土: 焼土粒混入。土器片入る
- 3: 褐色土: 焼土小ブロック・ロームを僅かに含む
- 4: 黒色土: As-C含む。土器片・焼土粒含む  
(土坑覆土若しくは産掘り方か)
- 5: 焼土化したローム: 焼土ブロック混入

(おまど付泥)

- 1: 灰
- 2: 灰と焼土互層に堆積  
(掘り方覆土)
- 3: 褐色砂質土: 焼土多量に混入。軽石・炭混入
- 4: 灰褐色粘質土: 白色砂質土少量混入
- 5: 灰褐色土: 白色砂質土2より多く粘性増す
- 6: 灰褐色粘質土: 焼土少量混入

第31図 1-3-1号住居



第32図 1-3-1号住居出土遺物

本住居は確認面からの掘り込みが浅かったため、全体的に遺存状況は不良であった。加えて土坑群との切り合い関係もあり、特に貯蔵穴が1-3-126号土坑に重なるような位置にあったため掘り過ぎを起して掘削に失敗してしまうなど、調査に苦慮したのである。

本住居からの出土遺物としては床面近く(1-3)と覆土中(4)及び貯蔵穴覆土(5)から出土した土師器坏を始め、土師器の坏、高坏、埴、甕や、須恵器の碗、蓋、長頸壺、甕の破片など多くの土器片の出

土を見ている。また、掘り方からは土師器の坏や甕の破片と共に砥石(6)、或いは縄文時代のスクレーパー(7)、フレーク(8)なども出土している。尚、これらの遺物、特に上述の土師器坏(1-5)の出土によって本住居は9世紀後半の所産として把握されるのである。

本住居に於いては柱穴は確認されず、竈も確認できなかった。

また、南東部の床面上に灰や焼土が面的に確認された。当該位置は竈の設置が想定される位置の前面に当たることから、竈の破却に伴ったものとも考えられるが、土層断面の観察からは住居内側寄りに灰だけの箇所、壁寄りに灰と焼土の混ざる層が明瞭に分離されて確認され、その堆積に規則性が見られることから焼失家屋である可能性も有する。

規模〔住居全体〕径348×348cm 深さ5cm

〔貯蔵穴〕長径74cm以上 短径69cm 深さ17cm

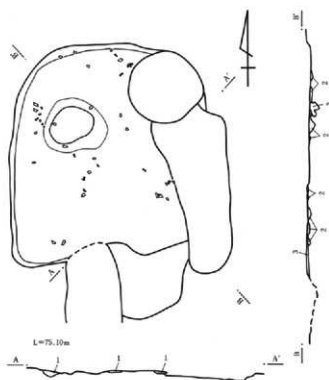
構造 本住居のプランは4基の土坑との切り合いなどがあって遺構の遺存状況が不良なため明瞭ではなかったが、凡そ南側を底辺とする隅丸台形を呈するものと判断される。

本住居は掘り方を有する。掘り方に特段の施設等は認められなかったが、住居中央北西寄りに径98×85cm、高さ10cm程の楕円形様のプランを呈した掘り残しが見られる。床面はこうした掘り方を褐色土、褐色土や焼土粒を含む灰褐色土などで埋め戻して造り出しているが、張り床等の施工は施されていない。

床面に於いては住居南東隅部に貯蔵穴が掘削されている。この貯蔵穴は本住居の東壁中・南部に切り合う1-1-126号土坑の一部と併せて掘削してしまったため不明な部分もあるが、概ね隅丸方形のプランを呈するものである。貯蔵穴の掘削形態についてみると、底面は平底気味で、壁面は丸みを持っていてやや開いている。

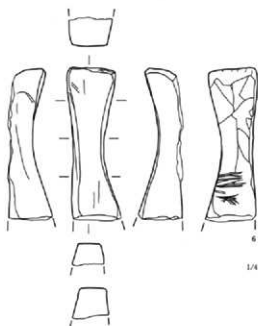
柱穴は確認されなかったが、住居規模が4m四方以下という小規模なものであるため、柱を持たないタイプの住居であったものと判断される。

第3章 発見された遺構と遺物

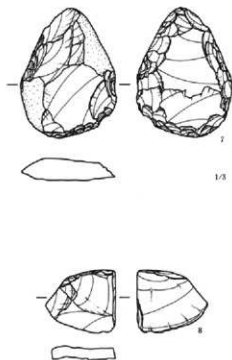


(1号住居掘り方覆土)

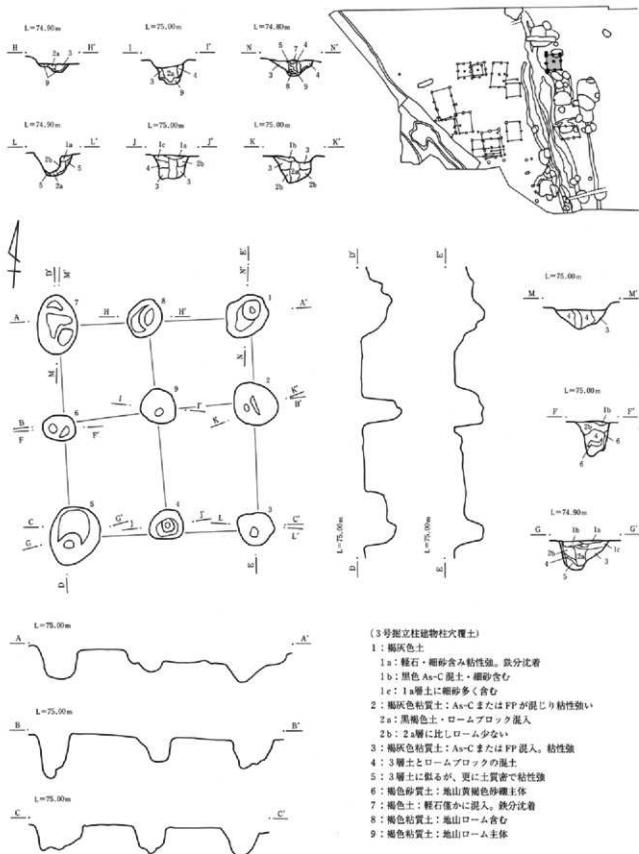
- 1: 褐色土: 褐色土が多く混入。
- 2: 灰褐色土: 焼土粒混入。土器片入る
- 3: 灰褐色土: 3層に比し褐色土が多い



竈も特定できなかったが、時期的に竈の設置が想定される。その設置個所としては貯蔵穴と一括で掘削した126号土坑上層に焼土化が見られる南東隅部、住居東南部の灰の分布から東壁中央南寄りか想定された。しかし、前者は貯蔵穴の掘削個所との関係から位置的に無理があり、且つ126号土坑そのものの覆土も焼土を含むものであったためその可能性は低い。また後者の灰の分布は前述したように焼失家屋に伴うものである可能性を有し、やはり貯蔵穴の掘削個所との関係から分布域の前面では位置的にやや無理があるように思われる。従って焼土や灰の分布からは竈の設置個所は特定できなかったが、貯蔵穴の掘削位置からして東壁中央付近に設置されたものと想定される。



第33図 1-3-1号住居掘り方及び出土遺物



第34図 1-3-3号掘立柱建物

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### (2) 1-3-3号掘立柱建物 (第34図、図版7)

**概要** 1-3-3号掘立柱建物は、1区中部の北西寄りに位置する掘立柱建物である。本建物は1-3-4号掘立柱建物と共に、1区中部と西部を画する南北走行の一連の溝群の東側に建てられていた掘立柱建物で、環状に配置する溝群西部の1-3-5-15号掘立柱建物から離れて建てられている。

本建物の柱穴からの出土遺物は無く、細かな時期の特定には至らなかった。しかし本建物は1区3面に属する遺構であり、覆土にAs-Bを含まず、平安期の土師器・須恵器片を出土した落ち込み(旧60号土坑)を切っていることと併せて本建物は平安期の所産として把握される。

本建物は2×2間の建物であり、総柱の建物であることから一般的には高床式建物の倉庫として認識される建物であるが、後述のように9基の中6基の柱穴底面が塑性変形していると判断されることから、当該土層の支持力を若干上回る重量のあったことが想定される。柱材の径が不明で、貫入試験も行っていないため断定はできないが、仮に柱材が塑性変形から推定される径20cm程であった場合、石守(1986)のデータで1.5t、宮田(2001)のデータで1.3t程の数字が計算されるので倉庫として使用されたと考えるのが適当であると判断される。

**規模** 規格2×2間 規模426×366cm

梁行310cm 桁行354cm

梁間139-163cm (平均150.17±9.79cm)

桁間150-198cm (平均171.83±19.10cm)

〔柱穴1〕 径75×65cm 深さ33cm

〔柱穴2〕 径70×68cm 深さ48cm

〔柱穴3〕 径60×55cm 深さ37cm

〔柱穴4〕 径52×47cm 深さ42cm

〔柱穴5〕 径93×77cm 深さ51cm

〔柱穴6〕 径53×40cm 深さ68cm

推定柱径21×19cm

〔柱穴7〕 径93×62cm 深さ57cm

〔柱穴8〕 径58×50cm 深さ33cm

〔柱穴9〕 径58×53cm 深さ40cm

**構造** 上述したように本建物は2×2間の総柱建物である。長軸は若干西に傾くが、概ね北を向いている。柱間は東西に比べ南北が長く、主軸である南北方向を以て桁方向として扱っている。

本建物の柱穴の配置には多少バラツキがあり、柱位置も直線上には正確には乗ってこないものの、全体としては方形を意識したと判断される比較的真まんな形状を示している。柱間もバラツキはあるものの、梁方向では凡そ5尺、桁方向では凡そ6尺を基準として柱穴の掘削が行われている。

個々の柱穴についてみるとそのプランは楕円形乃至円形を基本とした形状を呈している。柱穴の径は40-93cmで62.72±14.58cmを標準とし、掘削深度は確認面から33-68cmで45.44cm±11.74cmを標準とするものであり、全体として本建物の柱穴はしっかりした規模を持っていて古代的である。

掘削底面は丸底気味である。

また、本建物の9本の柱穴のうち、柱穴1・2・4・5・6・7・8の7本の柱穴底面には塑性変形によると思われる窪みが認められた。

柱の径を明確に確認することはできなかった。柱底の幅は土層断面の観察からは5-10cmの幅で見出すことができたが、柱穴6に見られた底面の塑性変形からは径20cm程の柱材であった可能性が想定されるのである。

#### (3) 1-3-4号掘立柱建物 (第35図、図版7)

**概要** 本建物1区中西部に在り、1-3-3号掘立柱建物と共に1-3-24・25号溝などの溝群の東側に位置して、環状に配列する1-3-5-15号掘立柱建物からはずれて建てられている。

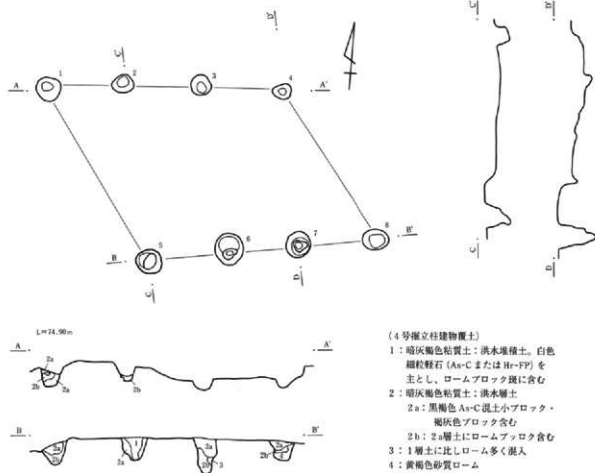
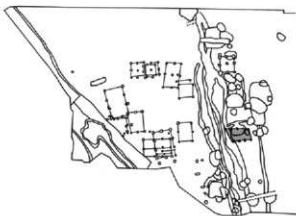
本建物は北側と南側に並走する二列の柱穴列からなっている。この二列の柱穴列は一括の建物として調査し、また報告するのであるが、南北の柱列の柱間は近似するものの、後述するようにその走行が南側のものが若干西に寄っており、また柱の径にも若干相違見られることから或いは別遺構である可能性も有している。



本建物は出土遺物もなく、時期特定には至らなかった。しかし1-3-25号溝、及び1-3-90・123号土坑と切り合い関係にあり、25号溝及び123号土坑との新旧関係は特定できなかったが、90号土坑を切っている。本建物は3面の遺構として把握され、且つこの切り合い関係によって概ね奈良・平安時代の所産として把握することができる。

さて、本建物は上述のように二つの遺構に分割できる可能性があるが、一つの建物としては2×4間以上の規模を有する建物となり、北東部と南東部の柱穴が確認されていない。また、南北方向の柱間は東西のそれに比して二倍の長さがあるため、中間に柱が崩壊されるものと想定されるが確認されないため、建物の両側が失われているか、柱穴を検出できなかった可能性を有している。

規模 規格4×2間以上 規模510×342cm  
 梁行293cm 桁行363cm  
 梁間247～297cm (平均268.33±23.80cm)  
 桁間113～128cm (平均122.67±5.13cm)



第35図 1-3-4号獨立柱建物

### 第3章 発見された遺構と遺物

〔柱穴1〕	径37×36cm	深さ36cm
〔柱穴2〕	径30×29cm	深さ27cm
〔柱穴3〕	径32×29cm	深さ20cm
〔柱穴4〕	径27×25cm	深さ12cm
〔柱穴5〕	径38×37cm	深さ43cm
〔柱穴6〕	径56×46cm	深さ36cm
〔柱穴7〕	径44×41cm	深さ58cm
〔柱穴8〕	径39×37cm	深さ32cm

**構造** 本建物は東西走行の南北2列の柱穴列からなり、一部柱穴を検出できなかったことから全体構造は明らかではないが、その規模から梁2間、桁4間以上の建物が想定される。

柱穴列は東西走行を呈するが、北側列がほぼ西を向くのにに対し、南側列はやや南南西方向を向いている。従って上述のように南北列は別遺構である可能性を有するが、1棟の建物であった場合は西を底面とする台形状のプランを呈するものである。

梁間を確認できた3カ所でバラツキがあるが、桁間は北側列が平均124.33cm、南側列が121.00cmで、標準偏差も北側列0.58、南側列7.55と近似した数字を示している。この点は南北列が一つの建物である論拠となる。尚、梁間は桁間の二倍の距離を示すため、東西両側の中に柱穴が1基ずつ掘削された可能性がある。

柱穴のプランは南北列共に楕円形から楕円形に近い隅丸の三角形を呈している。底面は丸底気味であるが、南列の柱穴5・6・7に加重による塑性変形と思われる落ち込みが見られる。

掘削規模は南北列で違いがあり、北列は径30.63±4.17cm、深さ23.75±10.21cm、北列は径42.25±6.45cm、深さ42.25±11.24cmを標準としている。従ってこの点でも南北列は別遺構の可能性を持つが、一つの建物であった場合、構造的に南側が主、北側が従の関係を持っていた特異な構造を持つ建物であった可能性も考えられる。

尚、柱の径は底面の窪みから南列は径20cm程になるものと推定される。北側列は理論的に同等か少し小振りの径の柱を据えることは可能である。

#### (4) 1-3-5号掘立柱建物 (第36図、図版8)

**概要** 本建物は1区南西部に位置する。新旧関係は特定できなかったが1-3-6号掘立柱建物と重複し、1-3-96号土坑には切られている。

出土遺物は無く、時期特定には至らなかったが、覆土中に平安期の遺物を含む96号土坑に切られることから平安期以前の所産として把握される。

また後述する柱穴底面の窪みの状況から加重2t程という数値が算出されることから、しっかりした構造の建物であったか、床が張られ荷物等が多く積載された建物であった可能性が思慮される。

**規模** 規格3×2間 規模597×452cm

梁行374cm 桁行537cm

梁間180～188cm (平均180.00±3.46cm)

桁間164～189cm (平均176.17±10.34cm)

〔柱穴1〕 径75×50cm 深さ55cm

〔柱穴2〕 径54×53cm 深さ30cm

〔柱穴3〕 径52×50cm 深さ33cm

〔柱穴4〕 径46×46cm 深さ34cm

〔柱穴5〕 径54×50cm 深さ34cm

〔柱穴6〕 径66×55cm 深さ42cm

〔柱穴7〕 径48×42cm 深さ23cm

〔柱穴8〕 径64×58cm 深さ25cm

〔柱穴9〕 径66×60cm 深さ37cm

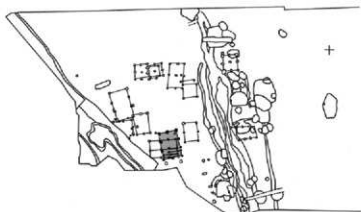
〔柱穴10〕 径70×59cm 深さ27cm

**構造** 本建物は北北西-南南東に主軸を持つ2×3間の掘立柱建物である。若干の振れは見られるが、概ね直線的な配置を示し、梁と桁の方向も直角で整った配列を呈している。

柱穴個々のプランは隅丸方形か円形を基調としており、掘削規模は径55.90±8.74cmを標準とし、掘り込みは33.00±10.28cmを標準としてさして深くないが、底面は丸底気味で、柱穴1・3・4・5・6・8・9・10に塑性変形に基づくものと判断される窪みが確認されている。

また、柱の径は明確に出来なかったが、上述の窪みの大きさの平均から径23cm程のものであったことが想定される。

第1節 1区の遺構と遺物



(5号掘立柱建物柱穴覆土)

1: 黒褐色土

1a: 土質均質。僅かに白色軽石粒含む

1b: 1a層土に僅かにローム混入。やや礫まりあり

1c: ローム小ブロック僅かに含む

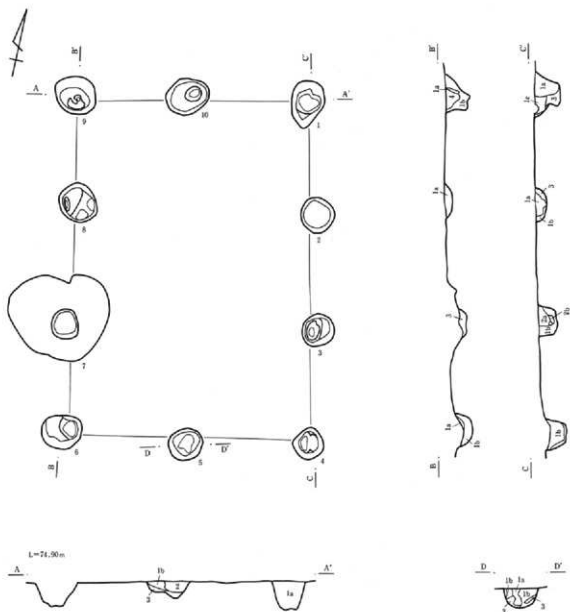
2: 棕色土: 焼土化したローム

2a: 焼土小ブロック含む

2b: 2a層土と黒色土のブロック混土

3: ロームブロックと黒色土の混土

4: ローム小ブロックと黒小ブロック及び褐灰色土ブロックの混土



第36図 1-3-5号掘立柱建物

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### (5) 1-3-6号掘立柱建物 (第37図, 図版8)

**概要** 本建物は1-3-5号掘立柱建物、1-3-4号柱穴列、1-1-95・96号土坑と重って、1区南西部に位置する。5号掘立柱建物や4号柱穴列との新旧関係は特定できなかったが、95・96号には切られている。

本建物も出土遺物は無く、時期特定には至らなかったが、96号土坑に切られることから平安期以前の所産として把握される。

本建物は3×2間の総柱の建物として認識されるが、南西隅の柱穴は発見できなかった。また柱穴規模は比較的小振りで、中世的である。

**規模** 規格3×2間 規模605×405cm

梁行367cm 桁行575cm

梁間170~198cm (平均183.33±12.46cm)

桁間165~234cm (平均182.50±24.03cm)

〔柱穴1〕 径48×33cm 深さ18cm

〔柱穴2〕 径33×24cm 深さ15cm

〔柱穴3〕 径33×32cm 深さ15cm

〔柱穴4〕 径35×28cm 深さ21cm

〔柱穴5〕 径35×33cm 深さ10cm

〔柱穴6〕 径24×21cm 深さ14cm

〔柱穴7〕 径42×32cm 深さ17cm

〔柱穴8〕 径38×33cm 深さ15cm

〔柱穴9〕 径45×33cm 深さ12cm

〔柱穴10〕 径45×37cm 深さ22cm

〔柱穴11〕 径40×37cm 深さ8cm

**構造** 本建物は東西方向に主軸を持つが、ややに西西南西方向に振れている。柱穴は若干の揺れは見られるものの、概ね直線的な配置を示し、梁と桁も概ね直交している。

柱穴個々のプランは隅丸方形、円形、楕円形を呈し一定ではない。掘削規模は径21~48cm、標準で34.91±6.93cmで、掘り込みも平均15.18cm、で浅いものであった。底面は九底気味で、他の建物のように塑性変形は目立つものはなかった。

また、柱の径は明確に出来なかったが、底面形態からは径16cm程度以上あったものと想定される。

#### (6) 1-3-7号掘立柱建物 (第38図, 図版8)

**概要** 本建物は1区南西部に位置する。重複はしてないが西側の1-3-8号掘立柱建物とはは接するため、同居と新旧関係があるものと判断される。

本建物の柱穴からの出土遺物は見られず、時期特定には至らず、調査面との関係から平安期以前の所産として把握できたに過ぎなかった。

本建物南北辺の3基づつの柱穴の真中のものの底面には塑性変形によると思われる窪みがあり、棟持ち柱であると判断されたため、本建物は南北が棟方向となり、直交方向に梁を設定した。

また桁間は梁間の3倍弱と長いが、柱穴1から南の柱穴4に向かう桁間1/6の位置に小型の柱穴7が掘削されているため、柱穴1・4と柱穴3・6の間には4本づつの柱が建てられていた可能性が考えられる。更に南側の柱穴列(柱穴4~6)の延長線上に東側には柱穴8があり、その存在から建物の東側に庇が設けられていた可能性も考慮される。

**規模** 規格1×2間 規模345×466cm

梁行310cm 桁行422cm

梁間134~160cm (平均149.75±11.27cm)

桁間410~427cm (平均421.25±9.07cm)

〔柱穴1〕 径33×31cm 深さ20cm

〔柱穴2〕 径39×38cm 深さ38cm

〔柱穴3〕 径36×36cm 深さ25cm

〔柱穴4〕 (径32×24cm 深さ9cm)

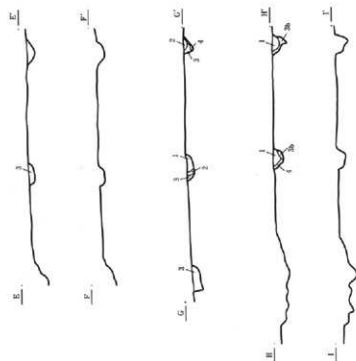
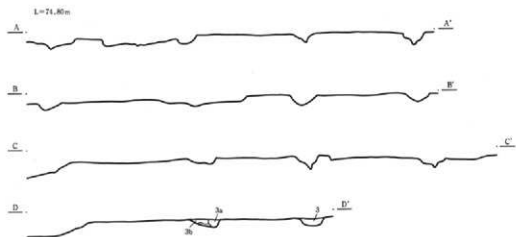
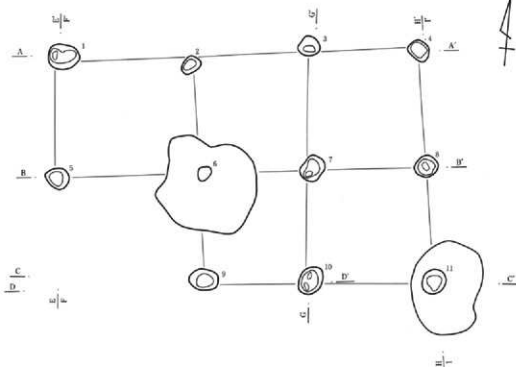
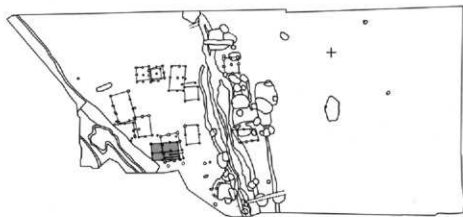
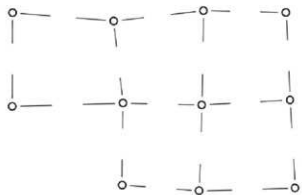
〔柱穴5〕 径42×40cm 深さ27cm

〔柱穴6〕 径39×35cm 深さ21cm

〔柱穴7〕 径27×24cm 深さ20cm

〔柱穴8〕 径40×34cm 深さ13cm

**構造** 本建物は南北に長い掘立柱建物で南北辺に3基づつの柱穴が確認されたが、その中央のものが棟持ち柱と判断された。この南北2列の柱列は共に東北東を向くが、僅かだが東で開いている。また東西両辺には南北の柱の間に桁間の1/6の距離(約70cm)の間隔で4本づつの柱が立てられ、東辺の東側115cm(4尺)程の位置には庇の柱が掘削されていた可能性も考慮される。



(6号掘立柱建物覆土)

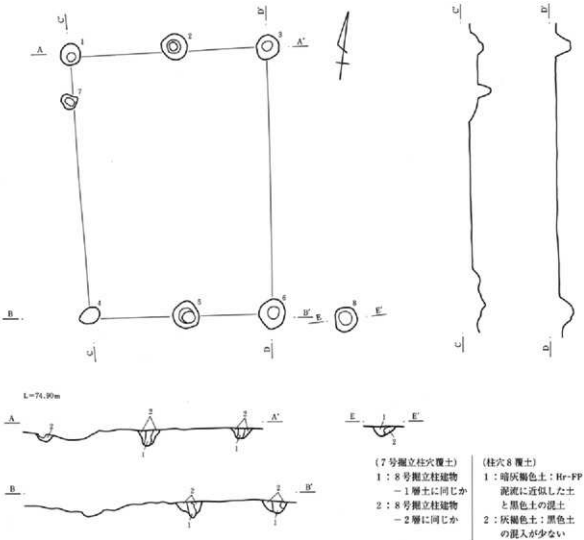
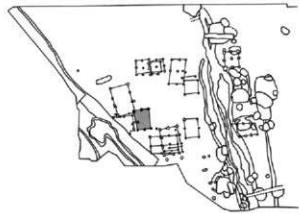
- 1: 褐色土: 焼土粒・灰混入。締まり弱い
- 2: 褐色土: 焼土粒・灰僅かに含み、ローム粒含む。締まり強い
- 3: 黒褐色土
- 3a: ロームブロックとAs-C軽石粒混入
- 3b: 黒褐色土+ロームブロックの混土
- 4: 暗褐色土: ロームブロック多量に含む

第37図 1-3-6号掘立柱建物



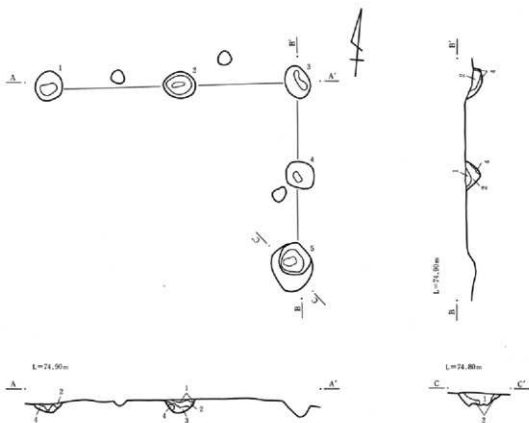
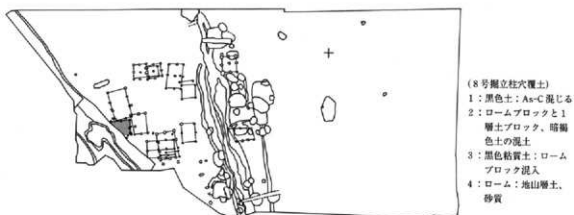
南西隅の柱穴4は削られていて明瞭ではなかったが、個々の柱は隅丸方形乃至円形のプランを呈するものであった。また、掘削底面は丸底気味で柱穴1～3・5・6では径 $36.90 \pm 3.35\text{cm}$ 、深さ $26.20 \pm 7.19\text{cm}$ を標準として掘削されている。尚、桁方向の間に掘削された柱穴7の掘削深度は他の柱穴と変りはないが、径は25cm程と小振りであった。一方、南東の柱穴8は、径は他の柱穴と同程度の規模であったが、掘削深度は20cm程と浅いものであった。

尚、柱の太さは特定できなかったが、底面の塑性変化からは16cm程になると想定される



第38図 1-3-7号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と遺物



第39図 1-3-8号掘立柱建物

(7) 1-3-8号掘立柱建物 (第39図、図版8)

**概要** 本建物は1区西端部に位置する。南西側が旧河道の調査段階で削平されていたため、北西側半を調査できたに過ぎなかった。またその広がりについては東側は東辺の柱穴列で留まるものの、西側はどこまで延長するかは不明である。南北方向の広がりについては1-3-111号土坑に柱穴が確認されなかった

ため、東辺の柱穴列の両端を以って南北の範囲を確定できるものと判断される。

本建物は1-3-110号土坑、1-3-13・23号ピットと重複し、また前述のように1-3-7号掘立柱建物とも新旧関係が存在すると判断されるが、110号土坑は切るものの、他の遺構に対して新旧を特定することはできなかった。



本建物からは平安期と思われる土師器片や土師器片などが出土していること、及び本建物が1区3面に確認された遺構であることから、本建物は平安時代の所産として把握することができる。

規模 規格2×2間以上 範囲436以上×356cm

梁行285cm 桁行396cm

梁間136～154cm (平均145cm)

桁間191～207cm (平均199cm)

〔柱穴1〕径44×43cm 深さ18cm

〔柱穴2〕径47×42cm 深さ22cm

〔柱穴3〕径53×38cm 深さ27cm

〔柱穴4〕径46×42cm 深さ23cm

〔柱穴5〕径51×49cm 深さ24cm

構造 本建物東西方向に主軸を有する建物で、この方向が桁になる。本建物は上述のように旧河道の調査との関係から南西半は確認されなかったのであるが、そのプランは少なくとも2×2間で、2×3間以上の規模になる可能性も考慮される。

柱の配置に多少の揺れは見られるものの、ほぼ直線なライン上にあり、梁・桁のラインも直交するものである。

個々のピットのプランは楕円形・円形・隅丸方形・隅丸五角形とバラエティーに富み一定ではない。掘削規模は確認できた柱についてみると、径で43～53cm、標準で45.5±5.03cm、掘削深度は確認面から18～27cm、標準で22.8±11.11cmを測る。また掘削底面は丸底気味で、底面の塑性変形から柱の径は約20cmと推定される。

#### (8) 1-3-9号掘立柱建物 (第40図、図版8)

概要 本建物は1区西部に位置する。南東部で1-3-14号掘立柱建物及び1-3-5号柱穴列と重複関係にあるが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物は無く、時期の特定には至らなかった。従って本建物の時期は確認面との関係から、平安時代以前の所産と判断されるに過ぎない。

本建物は総柱の建物であるが、プランが長方形で柱穴規模が全体として小振りであること、底面の塑

性変形も中央の柱穴5一箇所だけであることから別用途が考慮される。

規模 規格2×2間 536×361cm

梁行325cm 桁行508cm

梁間144～172cm (平均160.17±10.40cm)

桁間235～275cm (平均253.00±17.58cm)

〔柱穴1〕径33×30cm 深さ16cm

〔柱穴2〕径37×32cm 深さ18cm

〔柱穴3〕径37×33cm 深さ30cm

〔柱穴4〕径40×32cm 深さ15cm

〔柱穴5〕径48×37cm 深さ26cm

〔柱穴6〕径40×35cm 深さ22cm

〔柱穴7〕径35×30cm 深さ13cm

〔柱穴8〕径35×32cm 深さ30cm

〔柱穴9〕径33×30cm 深さ24cm

構造 本建物は2×2間の総柱建物である。南北に細長いプランを持つことから、南北方向を桁とした。

柱穴は東西方向(梁方向)の北側列と南北方向(桁方向)の西側列が直線的に配置する以外、他の柱列のラインは若干の屈曲が見られる。また桁方向西側列に対して梁方向北側列及び中央列西側の柱穴7と中央の柱穴8は87度、同じく中央列の柱穴7は85度で、全体としては菱形に近い柱配置を示している。

掘削規模は径30～48cmで34.94±4.50cmを標準とし、確認面からの深さも同じく16～30cm、21.56±6.61cmを標準としている。底面は丸底気味で、中央の柱穴5にのみ塑性変形が見られ、これにより柱材の径が15cm程であることが想定される。

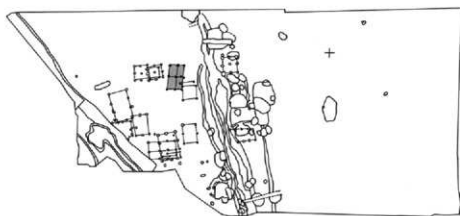
#### (9) 1-3-10号掘立柱建物 (第41図、図版8)

概要 本建物1区西北部に位置し、1-3-11号掘立柱建物を包み込むような位置関係にあったが、新旧関係は特定できなかった。また西辺で重複する1-3-12号掘立柱建物との新旧も特定できなかった。

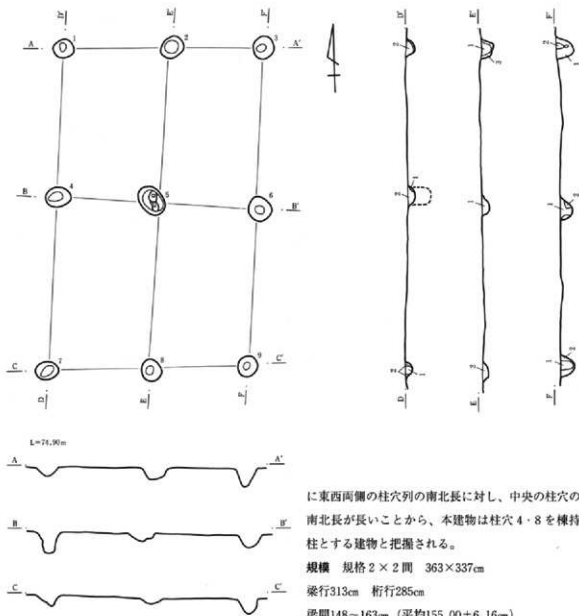
本建物からの出土遺物は無く、時期特定には至らなかったが、1区3面に調査されたことから平安時代以前の所産として把握される。

本建物は2×2間の建物であるが、後述するよう

第3章 発見された遺構と遺物



- (9号掘立柱穴覆土)
- 1: 黒色土: Aa-C 混入。  
ロームブロック僅かに含む
  - 2: ロームと黒色土、暗褐色土のブロック混土層
  - 3: 黒色土: 土質均質で硬まりあり



第40図 1-3-9号掘立柱建物

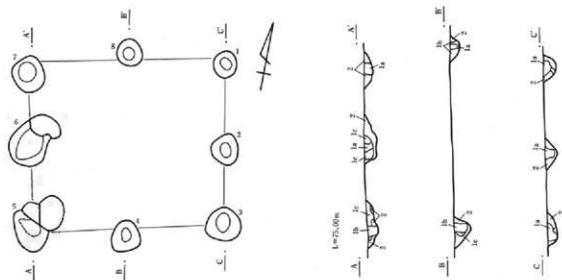
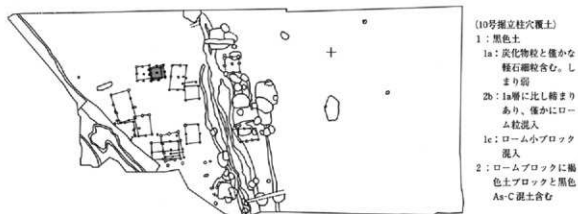
に東西両側の柱穴列の南北長に対し、中央の柱穴の南北長が長いことから、本建物は柱穴4・8を棟持柱とする建物と把握される。

規模 規格2×2間 363×337cm

梁行313cm 桁行285cm

梁間148~163cm (平均155.00±6.16cm)

桁間115~130cm (平均120.00±6.88cm)



第41図 1-3-10号掘立柱建物

- 〔柱穴1〕 径42×38cm 深さ21cm
- 〔柱穴2〕 径48×43cm 深さ16cm
- 〔柱穴3〕 径54×49cm 深さ16cm
- 〔柱穴4〕 径47×45cm 深さ26cm
- 〔柱穴5〕 径68×52cm 深さ17cm
- 〔柱穴6〕 径89×62cm 深さ24cm
- 〔柱穴7〕 径55×50cm 深さ18cm
- 〔柱穴8〕 径43×40cm 深さ19cm

**構造** 本建物は概ね方形のプランを呈するが、東西列は南側に対し北側が10cm程開いている。また前述のように東側列の南北両端の柱穴1・3が255cm、西側列の同じく柱穴5・7が244cmの柱間を持つものに対

し、中央列の柱穴4・8が287cmの距離を有している。

この柱穴のプランは隅丸三角形・隅丸方形・円形・楕円形とバラエティーがある。また規模は11号掘立柱建物との切り合いのためか、西側列のものが大きい傾向はあるが、径は38～89cmで51.56±12.75cmを標準とし、また確認面からの掘削深度16～26cmで19.63±3.74cmを標準とする。

掘削底面は丸底気味であるが、底面の塑性変形等は特にはっきりとは見られなかった。

柱の径は特定できなかったが、覆土断面の観察所見から径18cm程度はあったものと想定される。

第3章 発見された遺構と遺物

(00) 1-3-11号掘立柱建物 (第42図, 図版8)

**概要** 本建物は1区北西部に在って、1-1-10号掘立柱建物の間にはまり込むように位置する。同掘立柱建物との新旧は特定できなかったが、西接する1-3-12号掘立柱建物には切られている。

出土遺物もなく、本建物は平安期以前の所産として把握されたに過ぎなかった。

本建物は1×1間の建物であるが、建物中央に柱穴が掘削される特異な形態を呈する。但し中央の柱穴はその規模・形状に特異性は無く、椽持ち柱のような性格は認められなかった。

**規模** 規格1×1間 267×259cm

梁行211cm 桁行223cm

梁間204~211cm (平均207.50±4.95cm)

桁間219~223cm (平均221.00±2.83cm)

〔柱穴1〕 径41×39cm 深さ32cm

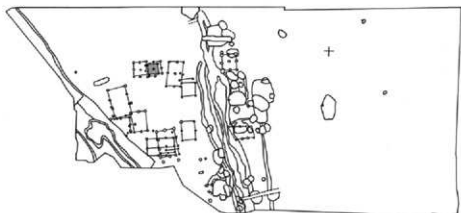
〔柱穴2〕 径45×39cm 深さ31cm

〔柱穴3〕 径58×41cm 深さ27cm

〔柱穴4〕 径40×38cm 深さ25cm

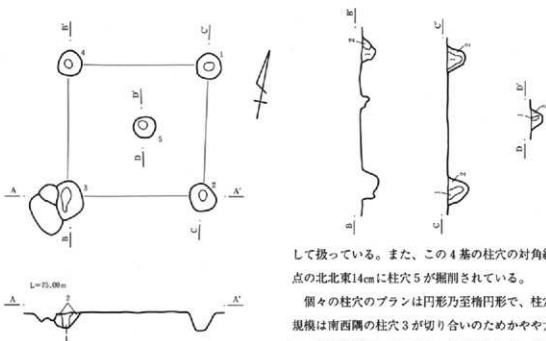
〔柱穴5〕 径34×34cm 深さ21cm

**構造** 本建物1×1間の建物で、ほぼ正方形に近いプランを呈する。便宜上柱間の長い東西方向を桁と



(11号掘立柱穴覆土)

- 1: 黒色土: ローム粒と黒色As-C混土僅かに含む。しまり弱くフカフカ
- 2: にぶい黄褐色土と黒褐色土小ブロックの混土: ローム小ブロックを塊状に含む



第42図 1-3-11号掘立柱建物

して扱っている。また、この4基の柱穴の対角線交点の北北東14cmに柱穴5が掘削されている。

個々の柱穴のプランは円形乃至楕円形で、柱穴の規模は南西隅の柱穴3が切り合いのためかやや大きい。柱穴は径40.90±6.78cm、深さ27.20±4.49cmを標準とする。掘削底面は丸底気味であるが、底面の塑性変形等は認められなかった。

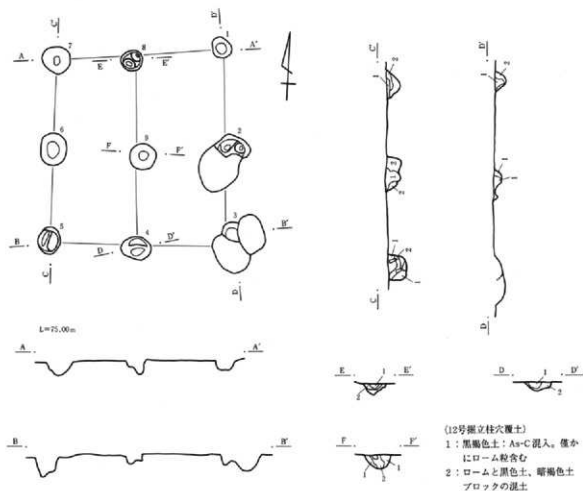
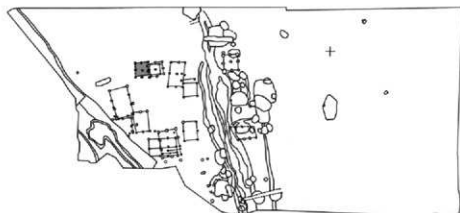
高、中央部の柱穴5は底面に変形が見られず、他の柱穴に比して一回り小さい。また、柱穴5を考慮に入れると柱間が半間余りとなってしまふ。従って棟柱等としての使用は考えにくく、床を支えるような機能を有していたものと判断される。

(1) 1-3-12号掘立柱建物 (第43図、図版8)

概要 本建物は1区北西部に位置する。建物東端部が1-3-10・11号掘立柱建物と重複関係にあるが、本建物の柱穴3が10号掘立柱建物の柱穴5を切っているため本建物の方が新しいことが確認される。

一方11号掘立柱建物との新旧関係を特定することはできなかった。

本建物からの出土遺物は無く、時期の特定には至らなかった。但し本建物も1区3面に確認される遺構であるため、平



第43図 1-3-12号掘立柱建物

### 第3章 発見された遺構と遺物

安期以前の所産として把握することはできる。

一方、本建物は総柱の建物であるため倉庫としての使用が考えられるが、柱穴底面に於ける荷重の痕跡（塑性変形）は全体として顕著ではなく、その可能性は否定できないものの倉庫としての使用はやや疑わしく、住居等の使用の可能性が考慮される。

尚、柱穴2の東半部はその規模と形状から、同程度の規模を有する本建物とは別の遺構の柱穴である可能性が考慮される。

規模 規格2×2間 357×306以上cm

梁行298cm 桁行293cm

梁間124～153cm（平均138.50±11.50cm）

桁間136～158cm（平均147.00±8.99cm）

〔柱穴1〕 径41×39cm 深さ32cm

〔柱穴2〕 径（40×38以上）cm 深さ21cm

〔柱穴3〕 径（29×27以上）cm 深さ13cm

〔柱穴4〕 径46×37cm 深さ23cm

〔柱穴5〕 径42×34cm 深さ34cm

〔柱穴6〕 径49×41cm 深さ25cm

〔柱穴7〕 径45×40cm 深さ23cm

〔柱穴8〕 径35×30cm 深さ23cm

〔柱穴9〕 径42×40cm 深さ23cm

構造 本建物は僅かに西に傾くものの概ね南北方向を主軸としている。一方、南北方向の柱穴列のうち、西側列と中央列は比較的整った長方形のプランを呈しているのであるが、これに対し東側列は20～30cmほど北にずれており、東西方向の軸線は北東方向に向かってカーブし、全体としてはややひしゃげたようなプランを呈している。

柱穴2・3は1-3-10・11号掘立柱建物の柱穴との切り合い関係にあってその形状は明瞭ではないが、個々の柱穴のプランは概ね円形若しくは楕円形を呈している。

掘削の径は標準で39.00±5.76cmを測り、深さは27.20±4.49cmを標準とする。また底面の形状は概ね丸底気味であるが、柱穴2・4・5・8の底面に見られる塑性閉経から柱材の径は概ね20cm前後になるものと思慮される。

### (17) 1-3-13号掘立柱建物（第44図、図版8）

概要 本建物は1区南西部に在ってやや区の中央寄りに位置している。本建物は単独で立地する建物跡であるが、西接する1-3-5・6号掘立柱建物とは柱位置で前者とは80cm、後者とは50cm程の隔りがあるため、特に6号掘立柱建物とは重複する可能性も考慮される。

本建物の柱穴からは、コ字状口縁の土師器甕のものと思われる破片や土師器坏片などの出土が見られたのであるが、残念ながら細かい時期の特定には至らなかった。但し、本建物は確認面とこれらの出土遺物から、概ね安期の所産として把握され得るものである。

尚、本建物の建築目的も特定できなかったのであるが、柱穴底面の形状等から、倉庫としての使用は無かったものと判断される。また、該期の掘立柱建物には珍しい1×2間の規格を有すること、柱穴の規模が小型であることから中世的印象を受ける。

規模 規格1×2間 414×324cm

梁行297cm 桁行382cm

梁間276～297cm（平均285.00±10.82cm）

桁間184～196cm（平均188.25±5.32cm）

〔柱穴1〕 径34×33cm 深さ35cm

〔柱穴2〕 径28×27cm 深さ41cm

〔柱穴3〕 径42×39cm 深さ44cm

〔柱穴4〕 径29×28cm 深さ17cm

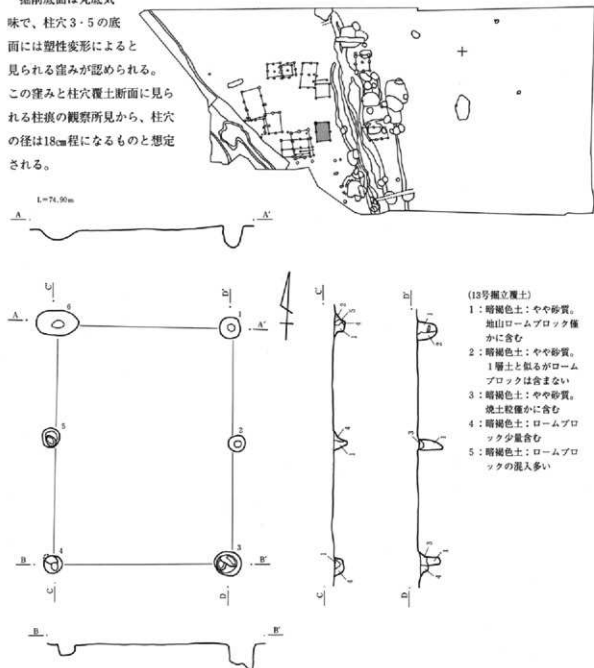
〔柱穴5〕 径31×27cm 深さ27cm

〔柱穴6〕 径66×38cm 深さ27cm

構造 本建物はほぼ南北方向を主軸としている。建物のプランは長方形を呈し、著しいラインからの逸脱は認められない。

個々の柱穴のプランは楕円形若しくは円形を呈している。規模についてみると、北西隅部柱穴6を含めると径35.17±10.94cm、深さ30.50±11.31cmを標準とする。柱穴6を除いた柱穴の規模は小型で径31.80±5.22cm、深さ18.00±10.96cmを標準とする。この中で東西の南北列中央の柱穴2・5と南西隅部の柱穴4が更に小型である。

掘削底面は丸底気味で、柱穴3・5の底面には塑性変形によると思われる窪みが認められる。この窪みと柱穴覆土断面に見られる柱痕の観察所見から、柱穴の径は18cm程になるものと想定される。



第44図 1-3-13号掘立柱建物

## ⑫ 1-3-14号掘立柱建物 (第45図)

**概要** 本建物は1区北西部南東寄りに位置する。北西部部で1-3-9号と重複関係にあり、また北縁部が後述する1-3-5号柱穴列と40cm程しか隔たっていないため新旧関係が考慮されるが、何れに対しても新旧を特定することはできなかった。

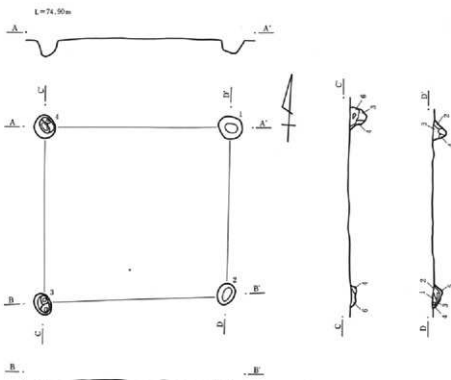
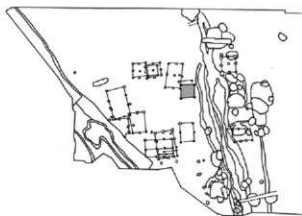
また、出土遺物も無く時期の特定には至らず、僅か

に平安期以前の所産として把握されるに過ぎないものであった。

本建物は1×1間の建物として調査されたが、柱間が梁間・桁間共に3m近くあることから、実際の建築物としては2×2間規格の建物を想定していたものと想定される。尚、建物の使用目的等特定することはできなかった。

### 第3章 発見された遺構と遺物

規模 規格1×1間 335×315cm  
 梁行288cm 桁行298cm  
 梁間264~288cm (平均274.75±12.66cm)  
 桁間288~291cm (平均292.25±4.15cm)  
 (柱穴1) 径36×35cm 深さ21cm  
 (柱穴2) 径34×27cm 深さ15cm  
 (柱穴3) 径35×25cm 深さ15cm  
 (柱穴4) 径35×32cm 深さ25cm



#### (14号掘立覆土)

- 1: 黒色土: As-C 含む
- 2: 暗褐色土: 地山ロームブロック多量に含む
- 3: 黒褐色土: 地山ローム粒僅かに含む
- 4: 暗褐色土: 地山ローム粒かなり含み、灰を僅かに混入
- 5: 黒色土: 焼土粒僅かに含む
- 6: 黒褐色土: 灰色シルトブロック含む

第45図 1-3-14号掘立柱建物

**構造** 本建物は正方形に近い方形プランを呈する建物である。便宜上長軸となる東西方向を主軸とし、桁方向とした。主軸は僅かに東南東に傾いている。上述のように柱間は1区3面に調査した他の掘立柱建物に比して梁・桁共に広く、設計上は2×2間の建物であったと想定される。

各柱穴のプランは北側列のものは隅丸方形、南側列のものは楕円形のプランを呈している。柱穴の大きさについてみると、径は $32.38 \pm 4.14$ cm、深さは $19.00 \pm 4.90$ cmを標準として掘削されている。

掘削底面は九底気味であるが、西側の柱穴3と4では、底面に塑性変形によるものと思われる窪みが2箇所づつ確認されている。柱穴3で南東と北西、柱穴4で南西と北東に配置する二つの窪みは、位置的には何れかだけが使用されたようには認められない。双方が新旧関係を持って使用された痕跡と判断されるが、断面観察の所見からは、最終段階では柱穴3・4共に柱は南側の窪みの位置に設置されていたものと判断され、北と北、南と南の窪みが対になっていたものと想定される。



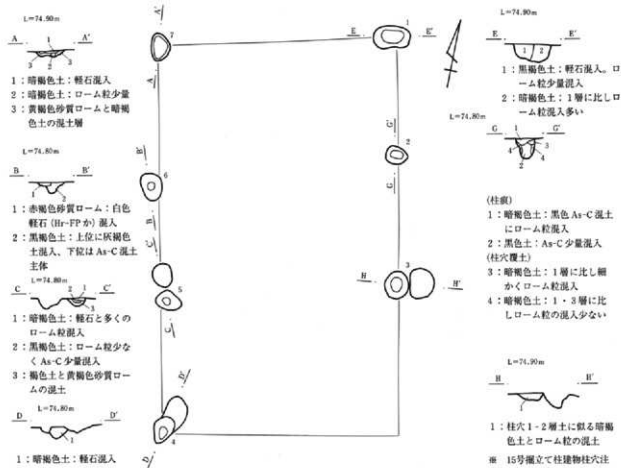
## 10 1-3-15号掘立柱建物(第46図)

**概要** 本建物は1区西端部の中程に位置している。本建物は南壁付近で1-3-8号掘立柱建物と重複関係にあり、東壁が1-3-7号掘立柱建物とほぼ接していることから重複関係があったものと判断されるが、何れの建物に対してもその新旧を特定することはできなかった。

本建物の柱穴は別々のピットとして調査されたものであるが、調査時点での遺構名称は以下の通りである。柱穴1=9号ピット、柱穴2=10号ピット、柱穴3=4号ピット、柱穴4=11号ピット、柱穴5=5号ピット、柱穴6=7号ピット、柱穴7=8号ピット。

本建物からの出土遺物は無く、時期の特定にも至らなかったが、1区3面に調査されていることから平安期以前の所産として把握することはできる。

本建物の使用目的を特定することはできなかった



第46図 1-3-15号掘立柱建物

が、柱穴底面に塑性変形等の大きな荷重の掛かった痕跡が見られなかったことから、本建物は地表面を床とした、納屋のような簡単な構造の建物であったものと想定される。

尚、本建物の南東隅の柱穴は見付けることができなかった。

### 第3章 発見された遺構と遺物

規模 規格1×3間 653×432cm

梁行397cm 桁行613cm

梁間369-397cm (平均382.00±14.11cm)

桁間185-220cm (平均201.00±14.91cm)

〔柱穴1〕 径58×35cm 深さ23cm

〔柱穴2〕 径34×28cm 深さ30cm

〔柱穴3〕 径44×38cm 深さ12cm

〔柱穴4〕 径45×29cm 深さ20cm

〔柱穴5〕 径41×30cm 深さ11cm

〔柱穴6〕 径42×34cm 深さ19cm

〔柱穴7〕 径46×30cm 深さ7cm

構造 本建物は南東隅の柱穴を確認することができなかったが、北北西を主軸とする1×3間の概ね長方形プランの建物と判断される。しかし個々の柱穴の配列にはやや振れが見られる。

個々の柱穴についてみると、そのプランは隅丸台形から楕円形を呈し、掘削規模は径38.14±8.43cm、深さ17.43±7.93cmを標準としている。

掘削底面は九底気味であるが、底面に荷重による塑性変形等は認められず、横部分の柱穴も認められないため、地床で、建物の構造も比較的単純なものであったと想定される。尚、梁間は桁間のほぼ倍の長さがあるため、建物としては2×3間の規格で設計されていたものと想定している。

#### ④ 1-3-3・4・5・6号柱穴列

(第47図、図版8・9)

概要 上述してきた掘立柱建物群と共に、1区3面では幾つかの柱穴を調査している。本項ではこの中で、直線的配列を示した柱穴について述べることにする。尚、1-3-6号柱穴列の柱穴は、調査段階で柱穴1は3号ピット、柱穴2は6号ピット、柱穴3は12号ピットとして処理している。

さて、1-3-3・4号柱穴列は1区南西部に、1-3-5号柱穴列は1区中部に、1-3-6号柱穴列は1区西部に位置する柱穴列である。また3・4号柱穴列は1-3-5・6号掘立柱建物と、5号柱穴列は1-3-9・14号掘立柱建物と、6号柱穴列は1-3-15号掘立柱建

物と重複関係にあるが、その何れもについて新旧関係を特定することはできなかった。

これらの柱穴列からは出土遺物は得られず、平安期以前の所産として把握されるだけで時期の特定に至らなかった。

3-6号柱穴列は、それぞれ切りあい関係にある6・14・15号掘立柱建物の柱列に近い位置に平行して掘削されており、これらの建替等に伴うものである可能性も考えられる。どのような構造物に伴う柱穴列であったか特定できなかったが、少なくとも掘立柱建物或いは横列の一部と判断される。

規模 [3号柱穴列] 柱間265cm

柱穴規模 (柱穴1) 径28×26cm 深さ20cm

(柱穴2) 径29×27cm 深さ23cm

[4号柱穴列] 柱間(柱穴1-2) 158cm

(柱穴2-3) 144cm

柱穴規模 (柱穴1) 径27×25cm 深さ16cm

(柱穴2) 径30×27cm 深さ17cm

(柱穴3) 径37×29cm 深さ11cm

[5号柱穴列] 柱間276cm

柱穴規模 (柱穴1) 径33×30cm 深さ10cm

(柱穴2) 径27×24cm 深さ12cm

[6号柱穴列] 柱間(柱穴1-2) 415cm

(柱穴2-3) 195cm

柱穴規模 (柱穴1) 径48×39cm 深さ22cm

(柱穴2) 径38×30cm 深さ16cm

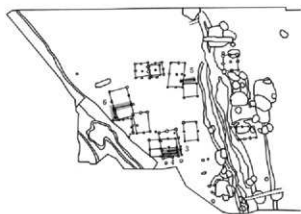
(柱穴3) 径38×37cm 深さ10cm

構造 3-6号柱穴列は2-3基の柱穴からなり、6号柱穴列はL字形、他は直線的に配列し、軸は概ね東西方向を向いている。柱間のうち5号柱穴列は近接する14号掘立柱建物、6号柱穴列は同じく15号掘立柱建物の柱間に近い数値を示している。

個々の柱穴のプランは円形から隅丸方形を基調とするものである。径は柱穴列3-5の柱穴は小振りでも中世的である。

掘削底面は何れも九底気味で、荷重による変形等は見られない。また、柱材の径は断面観察から何れも10数cm程度と判断される。

第1節 1区の遺構と遺物



- (5号柱穴列覆土)  
 1: 暗褐色土: Hr-FA・FP, As-C混入  
 2: ロームと暗褐色土の混土層

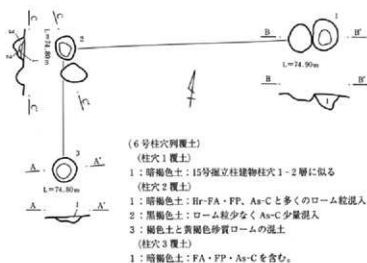
(16) 1区3面のビット (柱穴)

(第48図, 図版9・10)

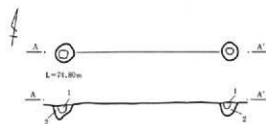
**概要** 上述の掘立柱建物や柱穴列以外にも1区3面に於いては柱穴様のビットが調査されている。これらの中には後述する土坑等に含まれるものもあるが、本項では12基のビットを報告することとする。尚、ビット番号は管理上の混乱を避けるため、1-3-1~20号ビットは調査時点でのビット番号をそのまま使用し、無番号の1-3-23・24号ビットは新たに番号を付した。

これらのビットのうち17号ビットからは土師器坏片、19号ビットからは9世紀前半期の土師器坏片の出土が見られた。これらの遺物から19号ビットは9世紀前半期頃の所産として把握されたが、他のビットは平安期以前の所産として把握されるに過ぎなかった。

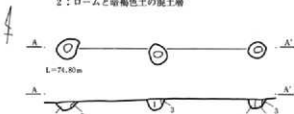
12ビットのうち1・2・14・15・19・20号ビットは柱穴であり、元々は掘立柱建物や横列の一部であったものと想定される。一方、13・16・17・18・23・24号ビットはその規模や断面形態から杭の打設痕であると判断され、13・16・23・24号ビットには旧河道際の横列に使用された可能性が、18号ビットは1-3-9号掘立柱建物、23号ビットは1-3-8号掘立柱建物の補強のために打設された可能性が思慮される。



- (6号柱穴列覆土)  
 (柱穴1覆土)  
 1: 暗褐色土: 15号掘立柱建物柱穴1-2層に似る (柱穴2覆土)  
 1: 暗褐色土: Hr-FA・FP, As-Cと多くのローム混入  
 2: 黒褐色土: ローム較少なくAs-C少量混入  
 3: 褐色土と黄褐色砂質ロームの混土 (柱穴3覆土)  
 1: 暗褐色土: FA・FP・As-Cを含む。



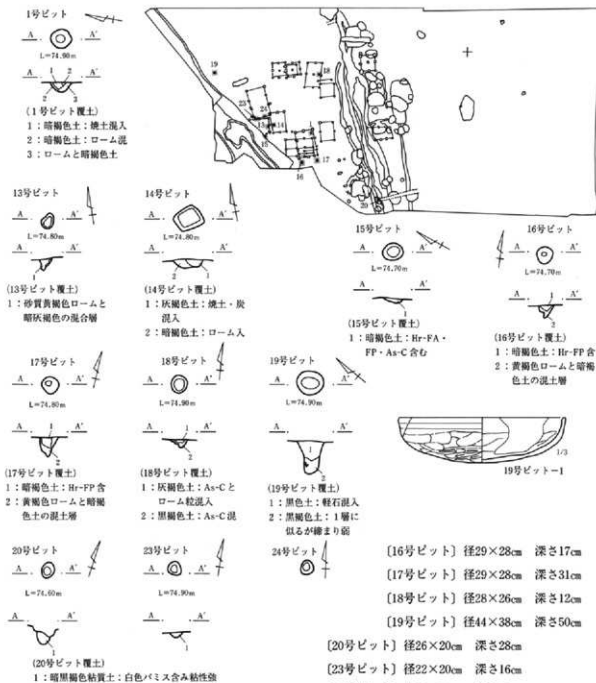
- (3号柱穴列覆土)  
 1: 暗褐色土: 焼土混入。(Hr-PP・FA, As-C混入か)  
 2: ロームと暗褐色土の混土層



- (4号柱穴列覆土)  
 1: 黒褐色土: As-Cとロームブロック含む  
 2: 黒褐色土: As-C含む  
 3: 暗褐色土: ロームブロック多量に含む  
 4: 黒褐色土: 1層に比しよりローム少ない

第47図 1-3-3・4・5・6号柱穴列

第3章 発見された遺構と遺物



第48図 1区3面ピット群及び出土遺物

規模 [1号ピット] 径34×30cm 深さ15cm

[2号ピット] 径40×33cm 深さ15cm

[13号ピット] 径24×20cm 深さ34cm

[14号ピット] 径42×35cm 深さ15cm

[15号ピット] 径31×28cm 深さ9cm

構造 ピットは14号ピットが方形である以外は、楕円形から円形に近いプランを呈する。

掘削底面は13・16・17・18は逆円錐形を呈し、他のピットは丸底気味である。

高、杭となる13・16・17・18・23・24号ピットは径20cm程と想定され、柱穴となるもののうちピット14は断面観察とピットの形状から19cm(約6寸)角の角材を建てていたものと想定される。

(1) 1-3-23・24・25号溝

(第49～52図、図版10・11・17～20)

概要 1-3-23・24・25号溝は1区の中中部と西部を画するかのよう

調査区を北北西-南

南東方向に横切って掘削

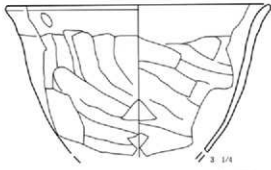
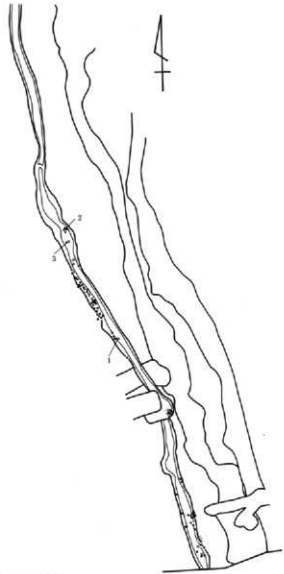
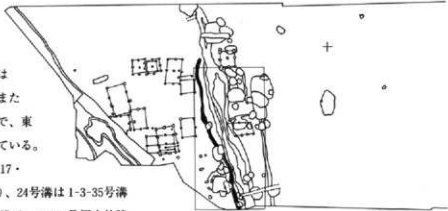
されている。本溝群周辺には土坑群が集的に分布し、また西側は掘立柱建物の分布域で、東方は遺構が極めて疎となっている。

さて23号溝は1-3-116・117・

118・120・127号土坑を切り、24号溝は1-3-35号溝を切っている。一方、25号溝は1-3-4号掘立柱建物及び1-3-73・91・92・109・112・115号土坑と切り合い関係にある。このうち4号掘立柱建物と73号土坑との切り合い関係は特定できなかったが、他の土坑は25号溝が切っている。

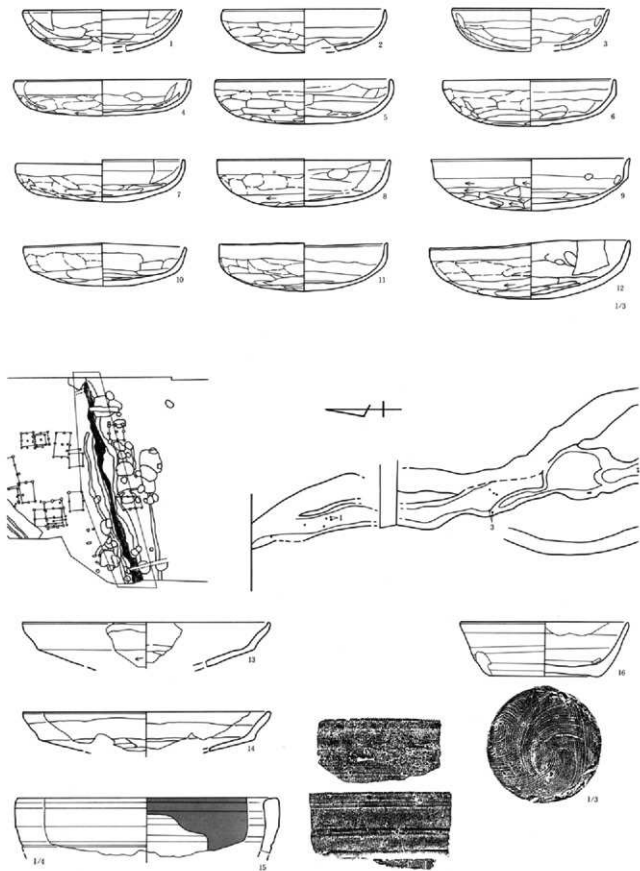
23・24・25溝からは古墳時代後期から平安時代に至る時期の土師器・須恵器片など多くの遺物の出土が見られたが、これらの遺物の中には土師器の坏(23溝-1,2、24溝-1-12、25溝-1-3)や高坏

(24-13,14)、甕(25溝-8)、甑(23溝-3)、須恵器の坏(24溝-16、25溝-5-7)や長頸瓶(25溝-4)、鉢(24溝-15)、甕(25溝-9)が見られ、また



第49図 1-3-23号溝出土遺物

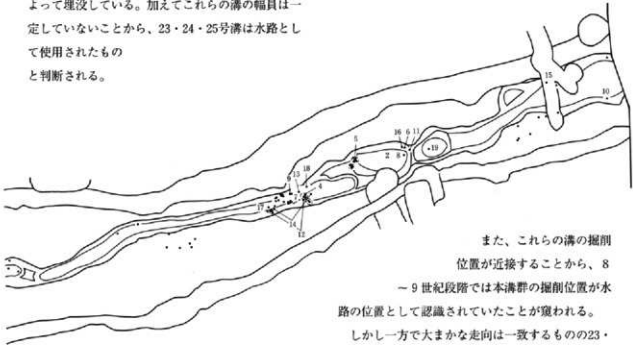
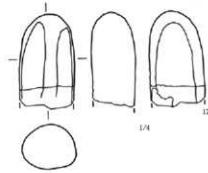
第3章 発見された遺構と遺物



第50図の(1) 1-3-24号溝出土遺物

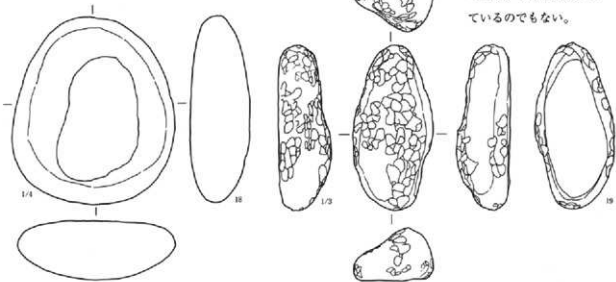
紡錘車（25溝-10）、敲打痕を持つものを含むこも  
あみ石（24溝-17、25溝-11-15）、磨石（24溝-18、  
25溝-16-20）、敲石（24溝-19）なども出土した。  
これらの遺物から概ね23・24号溝は8世紀後半（～  
9世紀前半）、25号溝は9世紀後半の所産として把  
握できるものと思われる。尚、23・24号溝については  
は前者の方が新しい。

23・24・25号溝は何れも流水に伴う土砂の流入に  
よって埋没している。加えてこれらの溝の幅員は一  
定していないことから、23・24・25号溝は水路とし  
て使用されたもの  
と判断される。



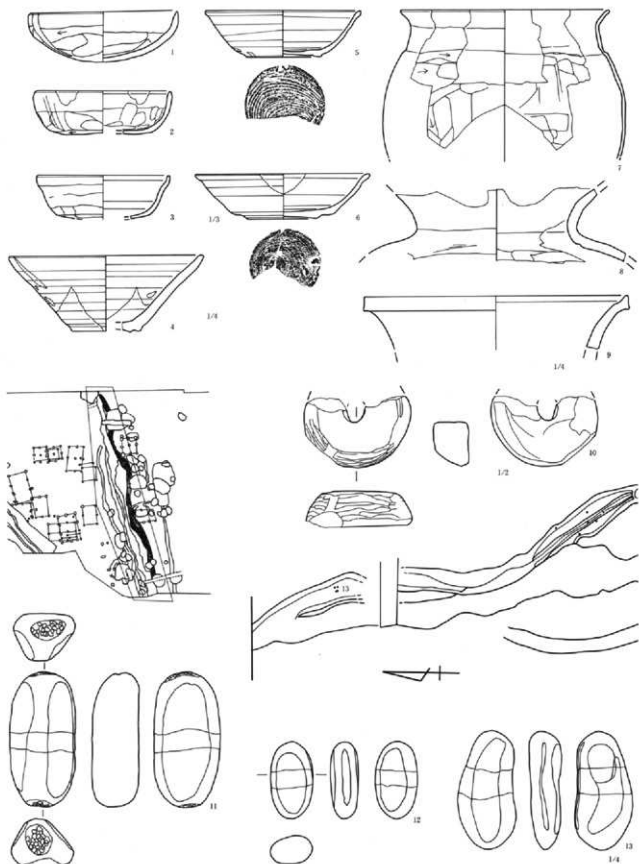
また、これらの溝の掘削  
位置が近接することから、8  
～9世紀段階では本溝群の掘削位置が水  
路の位置として認識されていたことが窺われる。

しかし一方で大まかな走向は一致するものの23・  
24・25溝の掘削は直線的  
でなく、平行に掘削され  
ているのではない。



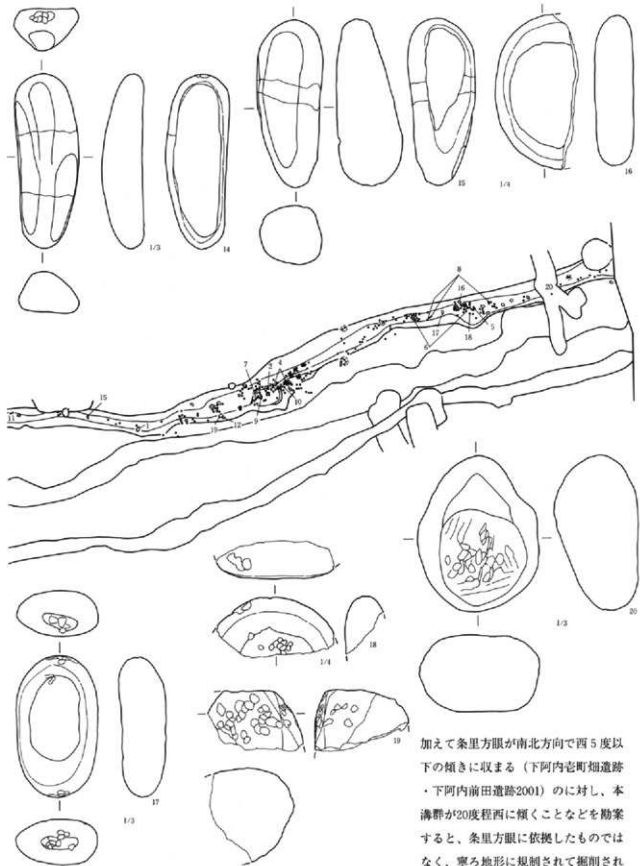
第50図の(2) 1-3-24号溝出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



第51図の(1) 1-3-25号溝出土遺物





第51図の(2) 1-3-25号溝出土遺物

加えて条里方眼が南北方向で西5度以下の傾きに収まる（下阿内壱町畑遺跡・下阿内前田遺跡2001）のに対し、本溝群が20度程西に傾くことなどを勘案すると、条里方眼に依拠したものではなく、窄ろ地形に規制されて掘削されていたものと考えられる。

第3章 発見された遺構と遺物

規模 [23号溝] 長さ34.2m 幅114cm 深さ20cm

[24号溝] 長さ41.8m 幅234cm 深さ41cm

[25号溝] 長さ44.7m 幅198cm 深さ20cm

構造 23・24・25号溝の走行を見てみると、全体としては北北西-南南東方向を向くものであった。しかし部分的に見ると北西-北に走行を変じており、23・24・25号溝の走行は程度の差はあるものの蛇行するものであった。尚、調査区北端部で24・25号溝が切り合うが、その走行から恐らく25号溝の形状が残されていると判断される。

またこれらの溝群の幅員も一定していない。幅員の増減は流水による挟れに起因するものと思慮されるが、特に24号溝では(或いは土坑を包含する可能性を有するものの)その変化は大きい。しかし両側上場ラインが平行な箇所もあるため、何れの溝も基本的な設計があったものと思慮される。その幅員は23号溝で45-60cm程度、24号溝で50-80cm程度、25号溝で70-90cm程度と想定される。

これらの溝の掘削底面は平底を基本としているが、流水によると思われる土坑様の陥没も見られ、特に24号溝で(↓)

(10) 1-3-34号溝 (第53図、図版20)

概要 本溝は1区中南部に位置する。本溝は1-3-52・54・55・56・69・79・80号土坑と切り合い関係にあるが、何れの土坑にも切られている。

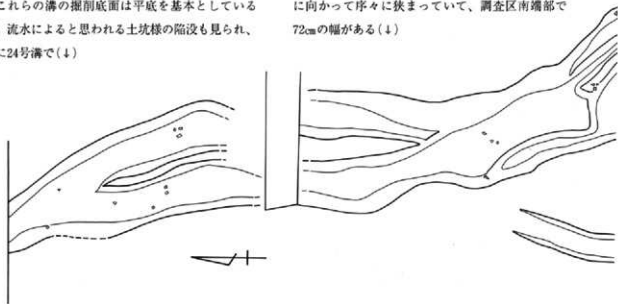
本溝からは土師器甕(1)片や台付羹脚部(2)片などが出土している。この土師器甕と、本溝を切る79号土坑出土遺物から本溝は7世紀後半以降8世紀後半以前の所産として把握される。

本溝に於いては覆土等の観察を通して流水の痕跡は認められず、掘削意図も特定できなかった。また時期的なものもあって条里方眼との関連も検討したが、その方向はN-10°-Wと西にやや傾いているため、条里方眼に依拠してして掘削されたものか否かを特定することもできなかった。

規模 長さ27.4m 幅72cm 深さ18cm

構造 本溝は上述のように北北西-南南東方向を向き、弱い蛇行が若干見られるものの概ね直線的な走行を示す溝遺構である。

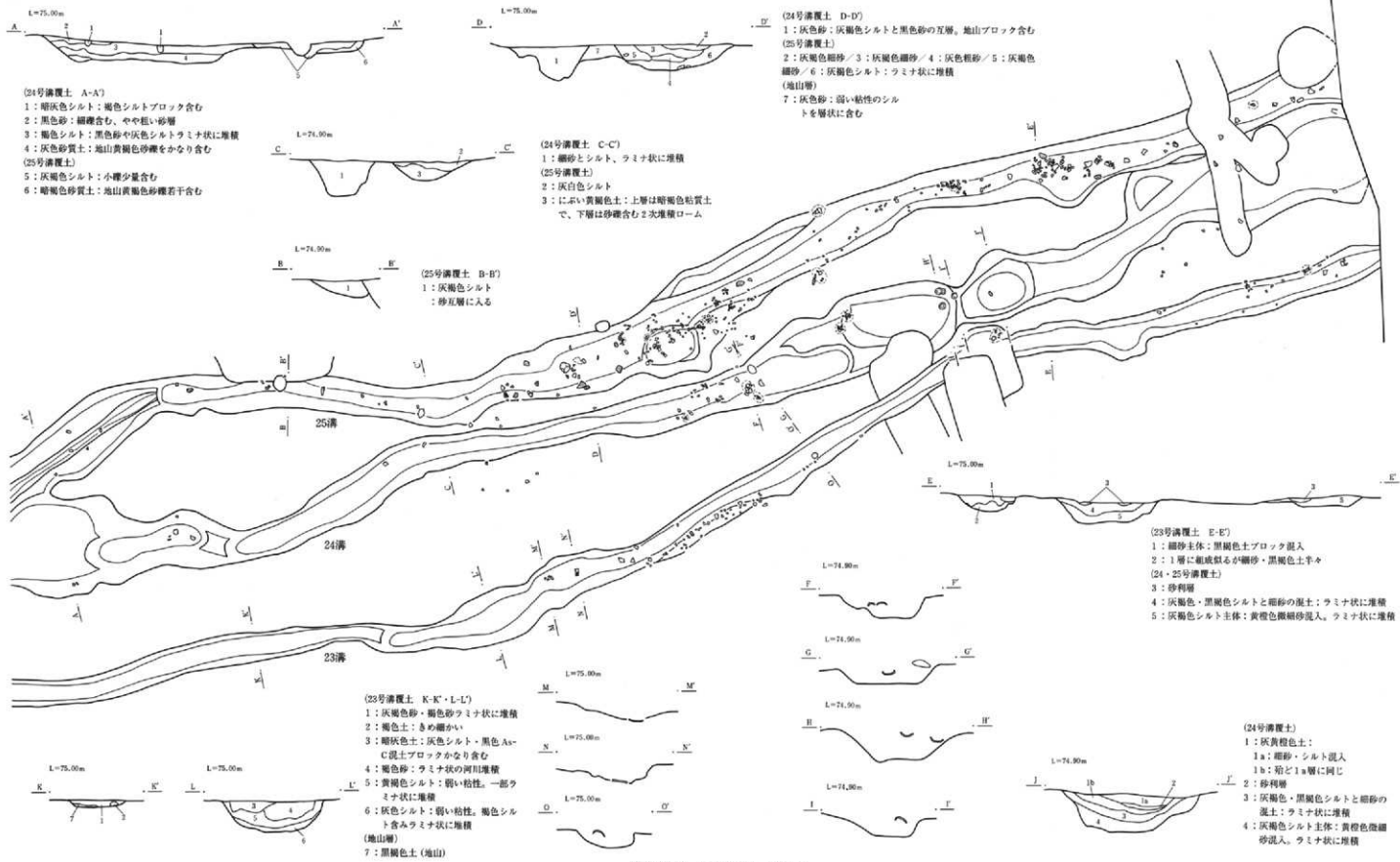
その掘削形態は比較的一定しているが、溝幅は北に向かって徐々に狭まっていて、調査区南端部で72cmの幅がある(↓)



第52図の(1) 1-3-23・24・25号溝

(↑)その痕跡は著しい。尚、壁面は逆八字状に開くが、流水のためか片葉研瓶状の掘削形態を呈するものも見られた。

(↑)に対し、確認された北端の調査区中部に於いては幅30cmを測るに過ぎない。尚、掘削平底気味で、壁面はやや開いている。



(24号溝覆土 A-A')

- 1: 暗灰色シルト・褐色シルトブロック含む
- 2: 黒色砂・細礫含む、やや粗い砂層
- 3: 褐色シルト・黒色砂や灰色シルトラミナ状に堆積
- 4: 灰色砂質土・地山黄褐色砂礫をかなり含む

(25号溝覆土)

- 5: 暗褐色シルト・小礫少量含む
- 6: 暗褐色砂質土・地山黄褐色砂礫若干含む

(24号溝覆土 C-C')

- 1: 細砂とシルト、ラミナ状に堆積
- 2: 灰白色シルト
- 3: 白っぽい黄褐色土・上部は暗褐色粘質土で、下部は砂礫含むさ状堆積ローム

(25号溝覆土 B-B')

- 1: 灰褐色シルト
- 2: 砂互層に入る

(24号溝覆土 D-D')

- 1: 灰色砂・灰褐色シルトと黒色砂の互層、地山ブロック含む

(25号溝覆土)

- 2: 灰褐色細砂
- 3: 灰褐色細砂
- 4: 灰色粗砂
- 5: 灰褐色細砂
- 6: 灰褐色シルト・ラミナ状に堆積
- 7: 灰色砂・弱い粘性のシルトを層状に含む

(23号溝覆土 E-E')

- 1: 細砂主体・黒褐色土ブロック混入
- 2: 1層に形成されるが細砂・黒褐色土平層

(24・25号溝覆土)

- 3: 砂利層
- 4: 灰褐色・黒褐色シルトと細砂の混土・ラミナ状に堆積
- 5: 灰褐色シルト主体・黄褐色細礫混入。ラミナ状に堆積

(23号溝覆土 K-K'・L-L')

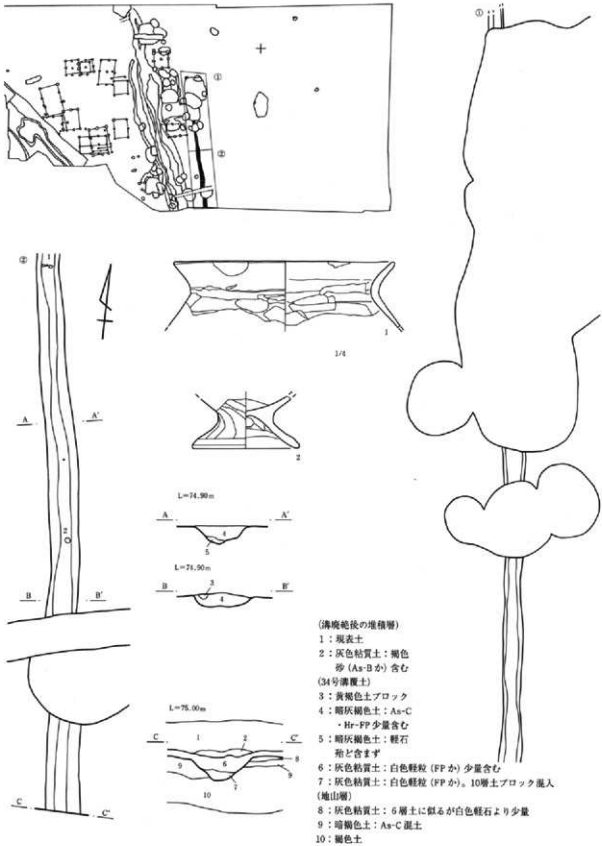
- 1: 灰褐色砂・褐色砂ラミナ状に堆積
- 2: 褐色土・きめ細かい
- 3: 暗灰色土・灰色シルト・黒色As-C混土ブロックかなり含む
- 4: 褐色砂・ラミナ状の河川堆積
- 5: 黄褐色シルト・弱い粘性、一部ラミナ状に堆積
- 6: 灰色シルト・弱い粘性、褐色シルト含むラミナ状に堆積
- 7: 黒褐色土(地山)

(24号溝覆土)

- 1: 灰黄褐色土
- 1a: 細砂・シルト混入
- 1b: 殆ど1a層に同じ
- 2: 砂利層
- 3: 灰褐色・黒褐色シルトと細砂の混土・ラミナ状に堆積
- 4: 灰褐色シルト主体・黄褐色細礫混入。ラミナ状に堆積

第52図の(2) 1-3-23・24・25号溝





第53図 1-3-34号溝及び出土遺物

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### (19) 1-3-35号溝 (第54図, 図版11・12・20・21)

**概要** 1-3-35号溝は前述した1-3-23・24・25号溝と同様、1区中部と西部を画するような位置に掘削されている。本溝は23・24号溝に絡まれるような位置にあるが、プランにはっきりした相違が見られたため23-25号溝とは分けて報告することとした。尚、本溝は23・24号溝に切られ、一方124号土坑を切っている。

本溝からの出土遺物は多かったが、この中には土師器の坏(1-3)、甕(4)、甌(5)、須恵器の甕(6)、碗、蓋片等が見られた。その他、こもあみ石(7,8)なども見られた。本溝はこれらの出土遺物、及び切り合い関係にある遺構との関係から凡そ8世紀後半期の所産として把握される。

本溝の掘削意図は明瞭にできなかったが、一部覆土に流水に伴う埋没の様子が窺えることから水路の可能性が考慮される。但し流水による崩れ等ははっきりしないので、水路として使用された期間は長くなかったものと考えられる。

**規模** 長さ33.7m 幅86cm 深さ20cm

**構造** 本溝は南北両端が切られていたため、全体の状況はつまびらかでないが、概ね北北西-南南東方向に掘削されている。しかしそのラインは23-25号溝のように蛇行せず、緩やかなカーブを描いて西側に張り出す円弧状を呈するものである。溝幅は比較的一定しており、そのプランは整った印象を持つ。

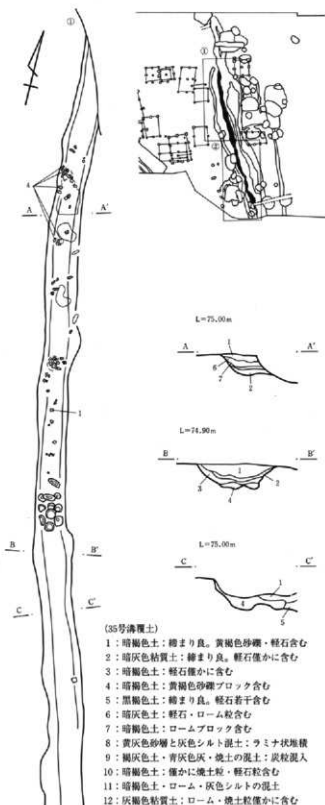
本溝の掘削形態は比較的しっかりしており、底面は平底、壁面は20-45°程の角度で開いていた。

#### (20) 1-3-36号溝 (第55図, 図版12)

**概要** 1-3-36号溝は1区中央部西寄りに在り、1-3-50・73・78号土坑に切られている。

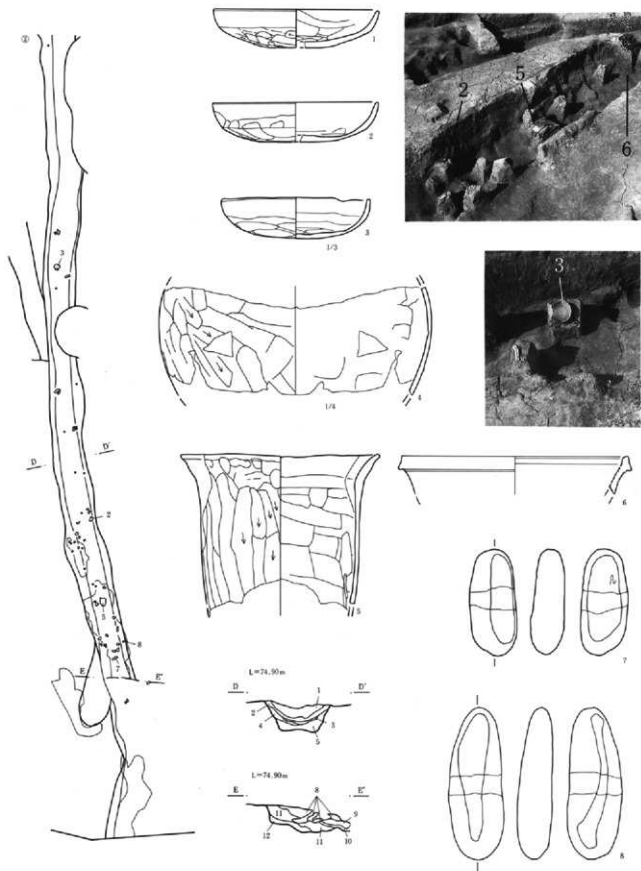
出土遺物は無かったが、73号土坑との関連から9世紀以前の所産として把握される。

掘削意図も特定できなかったが、その形状



第54図の(1) 1-3-35号溝

第1節 1区の遺構と遺物



第54図の(2) 1-3-35号溝及び出土遺物

### 第3章 発見された遺構と遺物

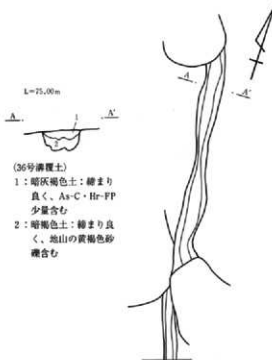
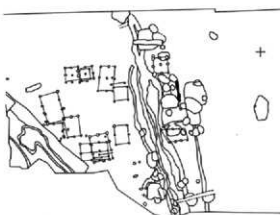
から流水の可能性が考慮される。

尚、後述する形状等の相違から、78号土坑を境に南部と中・北部で別遺構である可能性も有する。

規模 長さ6.7m 幅48cm 深さ18cm

構造 本溝は北北西-南南東方向に主軸を取るが、北端部と南部では北西-南東方向に走る。走行は直線的で、南部では整ったプランを呈するが、中・北部では幅員が増減が見られ、上場ラインは東西両側共に波打っていて不正形である。

掘削底面は平底状だが凹凸も見られる。一方壁面は垂直気味に立ち上がっている。



(36号溝覆土)

1: 暗灰褐色土: 締まり良く、As-C・Hr-PP少量含む

2: 暗褐色土: 締まり良く、地山の黄褐色砂礫含む

第55図 1-3-36号溝

#### (2) 土坑群(1)-東部の土坑群-(第56図、図版21)

概要 1区3面東部は遺構の殆ど分布しない区域であるが、規模の異なる1-3-5・8・106号土坑が確認、調査されている。これらの土坑は単独に掘削されるものである。

このうち8号土坑からは、土師器明張甕が正位に据えられた状態で出土してきている。この甕は胴-底部を遺存するに過ぎないが、8号土坑は概ね6-7世紀の所産として把握することができる。しかし5・106号土坑からの出土遺物は無く、平安期以前の所産として把握できるに過ぎなかった。

8号土坑は何らかの目的で甕を据えるために掘削された土坑であるが、5・106号土坑の掘削意図は特定することができなかった。

規模 [5号土坑] 径186×120cm 深さ6cm

[8号土坑] 径78×46cm 深さ19cm

[106号土坑] 径76×56cm 深さ11cm

構造 3基は何れも隅丸方形乃至楕円形のプランを呈するものである。

何れの土坑も底面形態は平底で、8・106号土坑は全体として箱形の掘削形態を呈する。

#### (2) 土坑群(2)-西部の土坑群-(第56図)

概要 1区西部に確認・調査された土坑は、1-3-49・110号土坑の2基の土坑に過ぎない。49号土坑は単独に掘削され、110号土坑は1-3-8号掘立柱建物と重複しているが、8号掘立柱建物に切られている。

49号土坑からは土師器・須恵器・灰軸陶器片が出土してきているが、これにより49号土坑は平安期の所産として把握される。しかし110号土坑からの出土遺物は無く、平安期以前の所産とできるだけ時期の特定には至らなかった。

また、これらの土坑の掘削意図は不明だが、その形態から49号土坑は貯蔵穴の可能性を有し、覆土の状況から110号土坑は柱穴の可能性を有するものである。

規模 [49号土坑] 径262×116cm 深さ29cm

[110号土坑] 径76×64cm 深さ25cm



第1節 1区の遺構と遺物

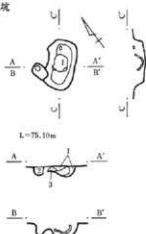
構造 これら2基の土坑のうち49号土坑は長方形に近い隅丸長方形、110号土坑は楕円形のプランを呈している。

49号土坑は抉れの度合いは特段明瞭ではないが、平底で袋状の掘削形態を呈している。一方、110号土坑の壁面は聞き気味であるが、底面は何れも平底である。

8号土坑

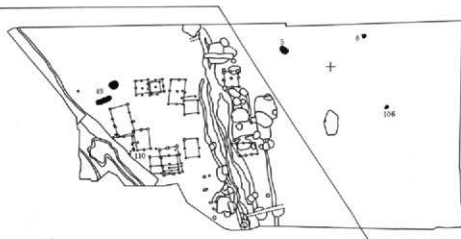
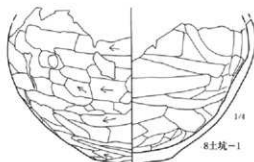
(8号土坑覆土)

- 1: 黒色土: 土質均質。僅かにローム粒含む
- 2: 黄褐色土: にぶい黄褐色土にロームブロックと黒色土塊かに含む
- 3: 褐灰色土: 黒色土とロームの混土



(5号土坑覆土)

- 1: にぶい黄褐色粘質土: Hr-FP 泥流の土塊。Hr-FP 含む



106号土坑



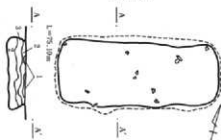
(106号土坑覆土)

- 1: 黒色土: As-C・ローム僅かに含む
- 2: 黒色褐色土: 1層土とロームの混土

49号土坑

(49号土坑覆土)

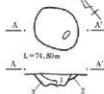
- 1: 黒色砂質土: 地山黒色As-C 混土ブロック主体
- 2: 黒灰色砂: 黒色As-C 混土ブロック僅かに含む
- 3: 黒色砂質土: 黒色As-C 混土ブロック多量に含み間を2層土が埋める



(110号土坑覆土)

- 1: 黒色土: As-C・ローム僅かに含む
- 2: 黒色褐色土: 1層土とロームの混土

110号土坑



第56図 1区3面の土坑群(その1) - 東部・西部 -

第3章 発見された遺構と遺物

② 土坑群3) - 中部北側の土坑群 -

(第57・58図, 図版12・13・21)

**概要** 前述した1-3-24号溝等の溝群周辺には1区3面の土坑の殆どが在る。本項ではこのうち北側にまとまる1-3-3・66・67・97・109・112・121号土坑について述べる。これらは規模、形態、主軸方向に於いて統一性はない。尚、3・109・112・121号土坑は中部の土坑群に特徴的な大型土坑である。

109号土坑からは土師器坏片が出土したが、これを含め、何れの土坑の時期特定にも至らず、平安時代以前の所産とてきたに過ぎなかった。また、掘削

意図も特定できなかった。

109・121号土坑は共に1-3-25号溝に切られている。また3・109・112号土坑は切り合い関係にあり、3号土坑が109号土坑を切っているが、3・109号土坑と112号の新田関係はトレンチが間に掘削されたためはっきりしなかった。

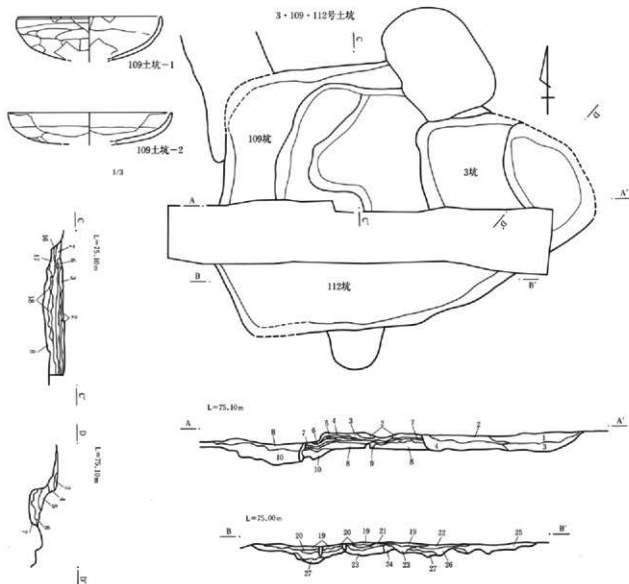
**規模** [3号土坑] 径240以上×240cm 深さ44cm

[66号土坑] 径254×172cm 深さ19cm

[67号土坑] 径112×58cm 深さ8cm

[97号土坑] 径106×86cm 深さ22cm

[109号土坑] 径(332×120)以上cm 深さ33cm



第57図 1区3面の土坑群(その2) - 中部北側 -

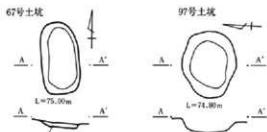
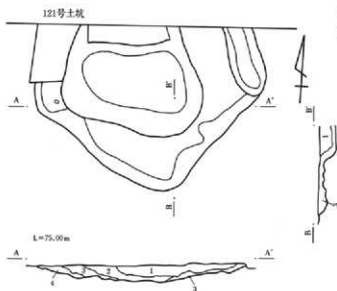
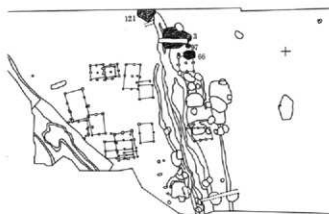
第1節 1区の遺構と遺物

[112号土坑] 径(400×120)以上cm 深さ27cm

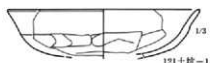
[121号土坑] 径(304×280)cm 深さ46cm

構造 これらの土坑のうち3・109号土坑は隅丸の台形、67号土坑は隅丸長方形、66・97号土坑は楕円形、121号土坑は五角形以上の多角形のプランを呈する。112号土坑は大きく切られているのでそのプランははっきりしないが、横長の隅丸台形を呈すると思慮される。

掘削底面は3・66・67号土坑は平底気味、97・109号土坑は丸底気味で、112号は凹凸が著しく、121号土坑は中央部が陥没している。壁面は間き気味のものが多い。



(67号土坑覆土)  
1: 暗褐色土: 綿まり良く軽石・ローム僅かに含む



(121号土坑覆土)  
1・2: 黒褐色土主体  
3: 黒褐色土: 黄褐色砂礫含む  
4: 黒褐色土: 灰色シルト含む

(3・109号土坑覆土)

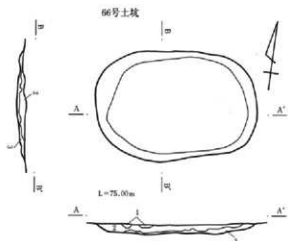
1: 灰褐色土 2: 灰褐色土: 3・4層混入 3: 暗灰褐色土  
2・4層混入 4: 暗褐色土: 3層混入 5: 暗灰色土: 黄色土等混入 6: 灰褐色粘土 7: 6層土・黒色As-C混土混土

(109号土坑覆土)

8: 灰褐色土主体 9: 暗褐色土主体 10: 暗褐色シルト 11: 褐色砂: As-C多量 12: 暗褐色砂質土主体 13: 灰色粘質土: 鉄分凝縮 14: 暗灰色粘質土 15: 灰色粘質土主体 16: 灰色粘質シルト 17: 黒褐色砂質土主体 18: 暗灰色土主体

(112号土坑覆土)

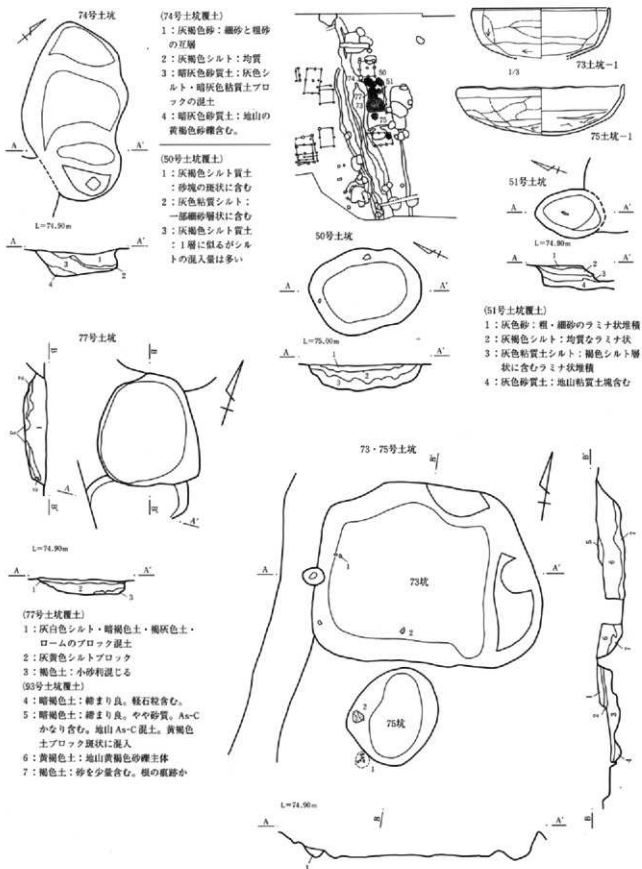
19: 灰色粘質土 20: 灰色粘質土と砂互層 21: 暗褐色土主体  
22: 暗灰色土主体 23: 暗灰色粘質土主体 24: 褐色土主体  
25: 暗灰色土主体 26: 暗灰色土主体 27: 褐色ローム



(66号土坑覆土)  
1: 灰褐色砂質土: 砂とシルトの混土。黒色As-C混土含む  
2: 灰褐色粘質シルト: 層状。黒色As-C混土ブロック含む  
3: 灰褐色砂質土: 黒色As-C混土ブロック僅かに含む

第58図 1区3面の土坑群(その3) -中部北側-

第3章 発見された遺構と遺物



第59図 1区3面の土坑群(その4) -中部中程-

④ 土坑群(4)―中部中程の土坑群―

(第59～63図、図版12・13・21・22)

概要 溝群周辺の土坑集中域中程の土坑は大型のものとしてこれより小型のものが、東に1-3-68・69・78・79・80・81・82号土坑、中央で1-3-50・51・73・74・75・77号土坑が南北方向に、南東隅に1-3-54・55・56号土坑、中南部に1-3-90・123号土坑が東西方向に大小の土坑が混在して連なり、1-3-120号土坑が南西部に単独で在る。

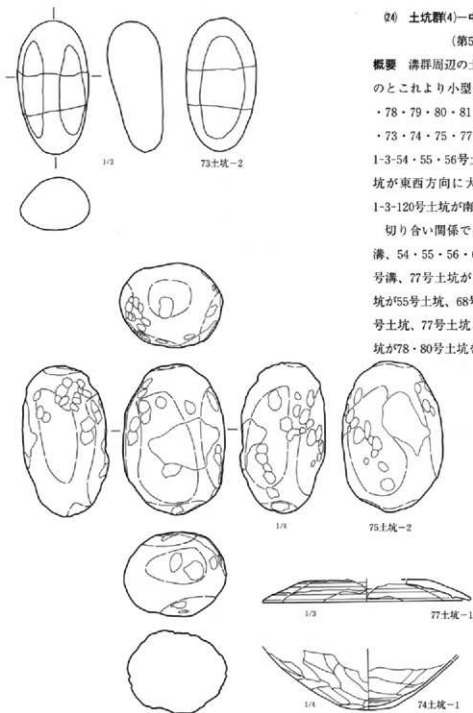
切り合い関係では50・73・78号土坑が1-3-36号溝、54・55・56・69・79・80・92号土坑が1-3-34号溝、77号土坑が1-3-25号溝を切る。また54号土坑が55号土坑、68号土坑が69号土坑、74号土坑が77号土坑、77号土坑と123号土坑が90号土坑、79号土坑が78・80号土坑を切っている。

用途等では形態的に74・90号土坑は風倒木痕の可能性のあるものの、各土坑の掘削意図は特定できなかった。しかし近似する規模の土坑が東西・南北に並んで掘削されることから、何らかの規制に基づく掘削が想定される。

一方、50・68・69・73・74・75・77・79・90・120号土坑からは土師器の坏(73土坑-1、75土坑-1、79土坑-2、90土坑-1)、甕(74土坑-1)や須恵器の坏(79土坑-1)、蓋(77土坑-1)、或いは砥石(68土坑-1)、礮石(75土坑-

2)、こもあみ石(73土坑-2)、礮石(55号土坑-2、79土坑-3)を含む遺物の出土が見られた。

これらの土坑は平安期以前の所産ではあるが、出土遺物等から74・90号土坑は7世紀後半以降、54・55・56・69・75・79・80・92号土坑は8世紀後半以降、50・73・77号土坑は9世紀以降の所産として把握される。



(75号土坑覆土)

- 1: 暗灰色シルト質土: 褐色砂・黄褐色シルト等含む
- 2: 灰色シルト: 弱い粘性有。黄灰色シルトを層状に含むフナ状堆積
- 3: 暗灰色砂質土: 地山黄褐色砂礫・黒色As-C混土塊含む
- 4: 暗灰色砂質土: 3層土に黄灰色シルト含む
- (73号土坑覆土)
- 5: 褐色細砂: 黒色粗砂との互層
- 6: 灰褐色砂: 黄灰色シルト含む
- 7: 暗灰色砂質土: 弱い粘性。黄灰色シルト含む。地山の黄褐色砂礫混入

第60図 1区3面の土坑群(その5) - 出土遺物 -

第3章 発見された遺構と遺物

78・79・80・81・82号土坑



(78号土坑覆土)  
 1：灰褐色シルト：灰白色シルト筋状に入る／1a：夾雑物少ない  
 2：灰褐色シルトと細砂の混土 3：灰黄色微細砂と灰褐色シルトのブロック混土 4：灰褐色土：ローム混入

(79号土坑覆土)  
 5：灰褐色シルト質粘土／5a：滞水によるノロ状堆積／5b：細砂との混土。壁の崩落土／5c：細砂を多く含む。壁の崩落土  
 6：黄褐色細砂：粘質土混入 7：褐色粘質土：シルト・ローム・細砂僅かに混入 8：シルトと細砂の混土

(79・80号土坑覆土)  
 9：灰褐色シルト質粘土／9a：夾雑物少なくノロ状堆積物／9b：9a層土に細砂・ローム含む／9c：9b層に比しローム多い  
 10：灰白色シルト 11：暗褐色土：小砂粒・ローム混入

第61図 1区3面の土坑群(その6) - 中部中程 -

規模 [50号土坑] 径168×130cm 深さ42cm

[51号土坑] 径112×76cm 深さ43cm

[54号土坑] 径104×88cm 深さ34cm

[55号土坑] 径176×150cm 深さ22cm

[56号土坑] 径156×120cm 深さ24cm

[68号土坑] 径164×142cm 深さ17cm

[69号土坑] 径(300×240)以上cm 深さ27cm

[73号土坑] 径364×280cm 深さ40cm

第1節 1区の遺構と遺物

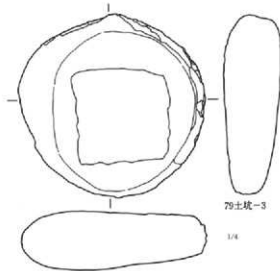
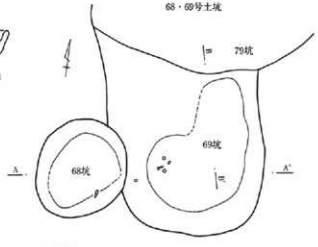
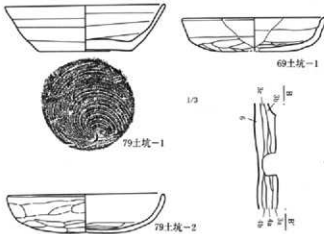
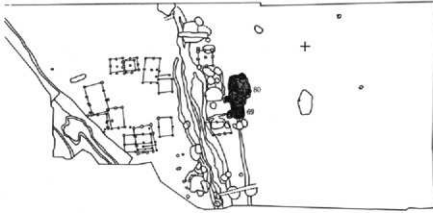
(68号土坑覆土)

1a: 灰褐色シルト質粘土・細砂混じり均質 1b: 1a層土に比しやや砂質  
2a: 灰褐色土・暗褐色土・灰白色シルト混入 2b: 2a層土にローム含み粘性強い

(69号土坑覆土)

3a: 橙色・灰褐色シルトと細砂の混土  
3b: 黄橙色・灰白・灰黄色シルトと細砂の混土 3c: 灰黄色:ローム・灰褐色シルト質粘土の混土 4a: 灰褐色砂質土:シルト互層 4b: 灰褐色砂質土:ロームと細砂の混土 5: ローム・細砂・凝灰土の混土 6: ローム・凝灰土混土: 灰色シルト含む

68・69号土坑

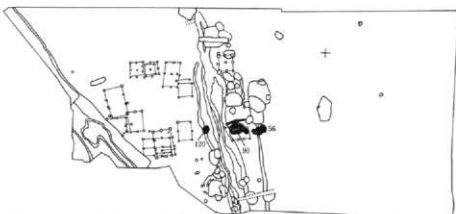


第62図 1区3面の土坑群と出土遺物(その7) -中部中程-

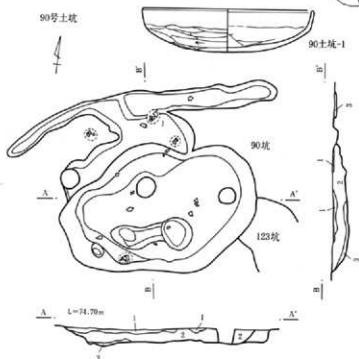
第3章 発見された遺構と遺物

(90号土坑覆土)

- 1: 暗灰色粘質土: 綿まり直。灰色シルトブロック含む
- 2: 暗灰色粘質土: やや砂質。白色軽石粒 (FPか) 少量含む。
- 3: 暗灰色粘質土: やや砂質。地山黄褐色砂礫含む



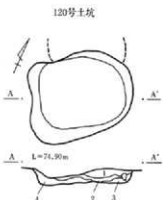
90号土坑



(123号土坑覆土) 各種やや砂質

- 1: 暗褐色土: 軽石粒含み鉄分の凝集見る
- 2: 暗褐色土: As-C 含む。1より黒味強い
- 3: 暗褐色土: 黄褐色砂礫含む
- 4: 褐色土: 黄褐色砂礫ブロック主体

123号土坑



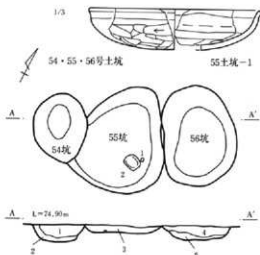
120号土坑



(120号土坑覆土)

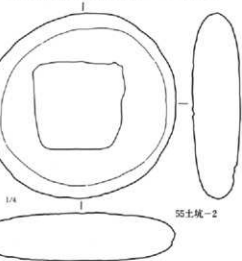
- 1: 黒褐色土: 灰褐色シルト塊含む
- 2: 黒褐色粘質土: 灰色シルト層状に含む。白色軽石粒僅かに混入
- 3: 黒褐色土: 黄褐色土粒含む
- 4: 暗褐色土: 黄褐色土粒含む

1/3



(54号土坑覆土)

- 1: 灰褐色粘質シルト: 黄色砂質シルト層状に含む
- 2: 灰色シルト: 粘性。白色軽石僅かに含む
- 3: 灰褐色粘質シルト: 黒色 As-C 混土僅かに含む
- 4: 灰褐色シルト: 褐色シルトブロック含む
- 5: 灰褐色土: 黒色 As-C 混土・ローム若干含む



第63図 1区3面の土坑群と出土遺物 (その8) -中部中程-



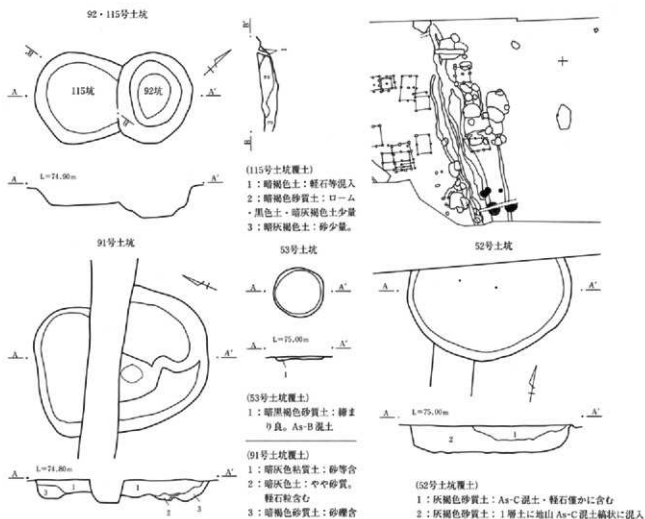
- [74号土坑] 径280×160cm 深さ44cm
- [75号土坑] 径152×128cm 深さ13cm
- [77号土坑] 径176×160cm 深さ29cm
- [78号土坑] 径(134×108)以上cm 深さ43cm
- [79号土坑] 径396×300cm 深さ48cm
- [80号土坑] 径510×452cm 深さ38cm
- [81号土坑] 径116×104cm 深さ55cm
- [82号土坑] 径152×76cm 深さ59cm
- [90号土坑] 径440×292cm 深さ34cm
- [93号土坑] 径156×68cm以上 深さ19cm
- [120号土坑] 径168×132cm 深さ26cm
- [123号土坑] 径164×88cm 深さ33cm

**構造** 土坑集中域中程の土坑は前述のように大型の69・73・74・79・80・90号土坑と、これに対して小型の50・51・54・55・56・68・75・77・78・81・82

・93・120・123号土坑とがある。

プランは大型のものでは74号土坑が楕円形様の不整形なプランを呈するが、79号土坑が楕円形、73・80・69号土坑が隅丸方形を呈し、90号土坑も底面近くのみは遺存であるためはっきりしないが概ね隅丸方形になるものと思慮される。小型のものでは54号土坑が円形、50・55・77・81・120号土坑が楕円形、51・56・75・68・123号土坑が隅丸方形を呈し、全体の形態は不詳だが78・82・93号土坑も恐らく隅丸方形を呈するものと思われる。

掘削形態についてみると、底面は大型の74号土坑はスロープ状で他の土坑は概ね平底を呈し、小型の50・78・82・123号土坑は丸底或いは丸底に近い平底で、他の土坑は概ね平底であった。高、壁面の形状は聞き気味のものが多かった。



第64図 1区3面の土坑群（その9）-中部南側-

25) 土坑群(5)―中部南側の土坑群―

(第64～67図、図版12～14・22・23)

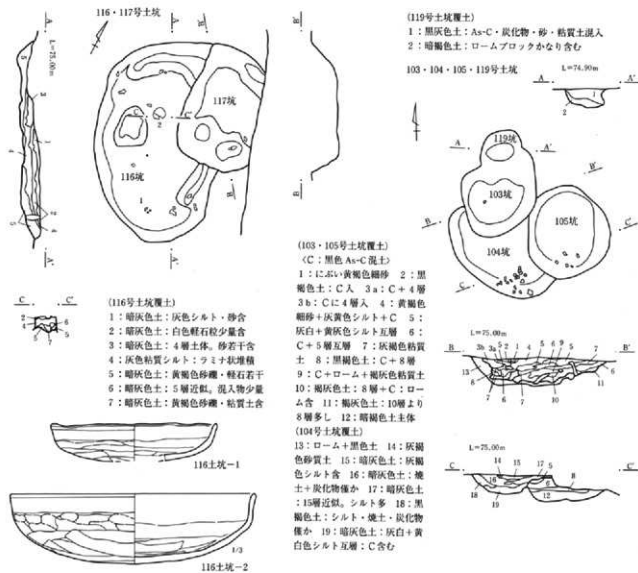
**概要** 中部南側の土坑群は1-3-1号竪穴住居を挟んで北から1-3-117・116・119・103・104・105・128号土坑、そして1-3-126・127・122号土坑が南北に一群となっている。また東部に1-3-52・53・91・92・115号土坑、中南部に1-3-118・124・130号土坑、南西部に1-3-131号土坑が分布している。

このうち122号・52号・116・117・118号土坑がそれぞれ1号竪穴住居、1-3-34・23号溝を切る一方、126号土坑は1号竪穴住居、91・92・115号土坑は1-3-25号溝に切られている。更に103号土坑が104号土坑、104号土坑が105号土坑を切り、128号土坑が

104号土坑に切られるが、73号土坑と25号溝、92・115号土坑、116・117号土坑間の新旧関係を特定することができなかった。

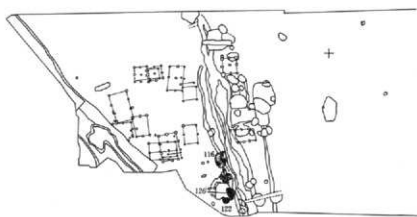
また131号土坑はその形態・覆土から柱穴、多量の灰または焼土を出した126・131号土坑初め104・127号土坑等出土の灰・焼土・炭化物は土坑の使用目的を示唆する可能性を有するものの、本項に述べた土坑群の掘削意図は特定できなかった。

土坑群のうち104・119・128号土坑を除いては土師器坏(116土坑-1、126土坑-1、127土坑-1・2、130土坑-1)、盤(116土坑-2、127土坑-3)、須恵器坏(130土坑-2)初め律令期のものを中心とする土師器・須恵器片出土し、特に103・116・122・126

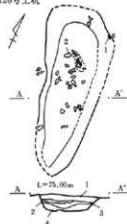


第65図 1区3面の土坑群と出土遺物(その10)―中部南側―

第1節 1区の遺構と遺物



126号土坑



(126号土坑覆土)

◀軽石：As-C及びHr-FPの

1：灰褐色砂質土：焼土多く、軽石・ローム含む

2：暗灰褐色砂質土：焼土、軽石・灰含む

3：暗灰褐色土：ローム粒あり。灰色強し。

4：白色砂質土：灰褐色砂質土・暗灰褐色土ブロック状に含む。焼土含む。

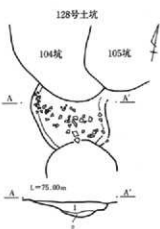


126土坑-1

1/3



126土坑-2



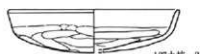
128号土坑

(128号土坑覆土)

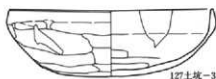
- 1：暗褐色砂質土：焼土・軽石・土器片多く含む。灰白色シルト・灰少量ブロックで含む
- 2：黒褐色土：ローム・As-C主体の軽石含む



127土坑-1



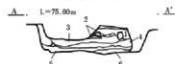
127土坑-2



127土坑-3



127号土坑



(127号土坑覆土)

- 1：白色砂質土
- 2：黒灰色土から3層様土の漸移層
- 3：灰褐色砂質土
- 4：暗灰褐色砂質土
- 5：黒灰色土：焼土と灰層入る
- 6：暗褐色土とロームの混土

・127・130号土坑からの出土が多かった。ている。

こもあみ石 (126土坑-2) も出土した。

本土坑群は平安期以前の所産だが、出土遺物等から127号土坑は8世紀前半、116・126・130号土坑は8世紀後半期の所産、117・118号土坑は8世紀後半以降、122号土坑は9世紀後半以降、91・92・115・126号土坑は9世紀以前の所産と判断される。

第66図 1区3面の土坑群と出土遺物(その11) —中部南側—

第3章 発見された遺構と遺物

規模 [52号土坑] 径260×160以上cm 深さ46cm

[53号土坑] 径80×78cm 深さ6cm

[91号土坑] 径272×224以上cm 深さ43cm

[92号土坑] 径144×120cm 深さ54cm

[103号土坑] 径152×122cm 深さ36cm

[104号土坑] 径192×128以上cm 深さ34cm

[105号土坑] 径140×134cm 深さ47cm

[115号土坑] 径128以上×144cm 深さ27cm

[116号土坑] 径186×120以上cm 深さ43cm

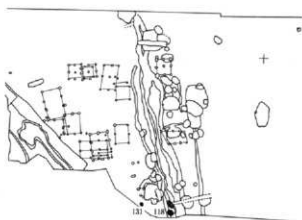
[117号土坑] 径308×192cm 深さ37cm

[118号土坑] 径128×120cm 深さ26cm

[119号土坑] 径(66×46)以上cm 深さ33cm

[122号土坑] 径140以上×120cm 深さ9cm

[124号土坑] 径160以上×66cm 深さ32cm



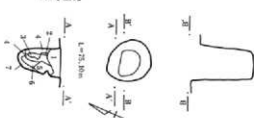
118号土坑

- (118号土坑覆土)
- 1: 黒褐色土: やや砂質。地山ローム等含む
  - 2: 黒灰色粘質土: 細粒・均質。
  - 3: 黒灰色土: 粘性あり。ロームかなり含む

(130号土坑覆土)

- 1: 暗褐色土: ローム粒多く焼土混入
- 2: 灰褐色土: 灰に3層土混入
- 3: 暗褐色土: 焼土・炭化物粒・灰混入
- 4: 暗褐色土: 5層に比し焼土少なく、灰を混入
- 5: 暗灰褐色土: 4層と同程度に灰多く、焼土含む
- 6: 暗褐色土とロームの混土

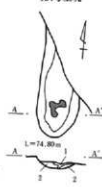
131号土坑



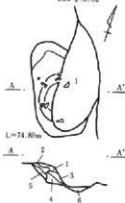
(124号土坑覆土)

- 1: 暗褐色土: 灰褐色シルト含む
- 2: 暗褐色土: 焼土・炭化物・As-C含む

124号土坑



130号土坑



(131号土坑覆土)

- 1: 灰褐色土: 多量の焼土・土器・灰・灰と軽石を含む
- 2: 暗褐色土: 焼土・灰・軽石を含む
- 3: 黒褐色土: 2層に比し少ないが焼土・灰・軽石含む
- 4: 暗灰褐色土: 1層土にローム粒混入
- 5: 暗褐色土: 軽石と若干の焼土含む
- 6: 黒褐色土: 焼土粒・軽石ローム粒を少量含む
- 7: 暗褐色土: もさっとした感じ



130土坑-1



130土坑-2

第67図 1区3面の土坑群と出土遺物(その12) -中部南側-

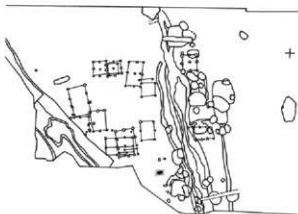
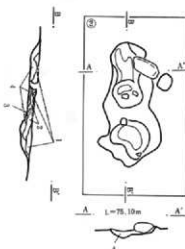
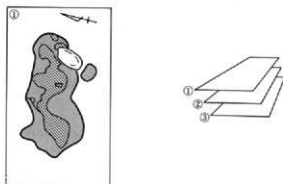
- [126号土坑] 径268以上×108cm 深さ27cm
- [127号土坑] 径200×177cm 深さ23cm
- [128号土坑] 径(128×112)以上cm 深さ24cm
- [130号土坑] 径152×80以上cm 深さ33cm
- [131号土坑] 径72×64cm 深さ99cm

**構造** 土坑集南側の土坑も大型の52・91・116・122土坑と、これに対して小型の53・92・103・104・105・115・117・118・119・124・126・127・128・

130・131・土坑とに分けられる。

プランは大型のものでは52・116号土坑が楕円形、91号土坑が隅丸方形、122号土坑も概ね隅丸方形を呈する。小型のものでは53・105・131号土坑が円形、92・104・115・130号土坑が楕円形、103・117・119・127号土坑（恐らく128号土坑も）隅丸方形、124・126号土坑が溝状の形態を呈する。

また底面形態は大型ものは平底状だが一部凹凸が見られる。小型のものでは53・103・105・115・117・124・126・131号土坑は平底或いは平底気味、92・104・118・119・127・128・130号土坑は九底或いは九底気味の掘削形態を呈している。



②9 1-3-焼土遺構 (第68図)

**概要** 本遺構は1区南西部に単独で立地する。

本遺構からは土師器坏・甕、須恵器甕・蓋の破片の出土が見られ、これらの遺物から概ね9世紀以降の所産として把握される。

本遺構は焼土及び灰の分布が確認されたため、当初竪穴住居を想定された遺構である。本遺構の掘削目的は明瞭ではないが、後述する土坑様の掘削形態と立石が想定されることなどから当初の想定通り、竪穴住居の甕の残欠ではないかと想定される。

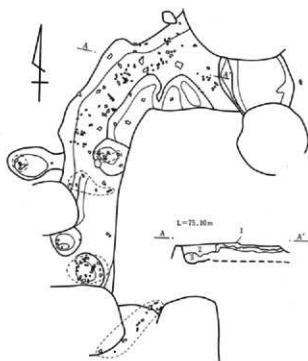
**規模** 径101×54cm 深さ10cm

**構造** 本遺構は楕円形様線の不整形プランを呈し、中程と東寄り(図中上方)に窪みを持つ、凹凸のある掘削形態を有する。南東部敷階の窪みに上位で出土した甕が設置された可能性が想定される。

- (焼土遺構覆土)
- 1: 暗褐色土: 焼土塊・灰・炭化物含む
  - 2: 黒灰色土: 灰・焼土・炭化物含む
  - 3: 2と4の風土
  - 4: 暗褐色土: 焼土・炭化物・灰含む

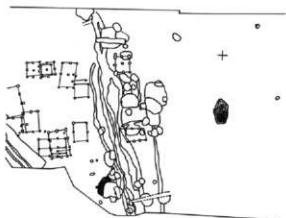


第68図 1-3-焼土遺構



(包含層覆土)

- 1: 灰褐色土: 焼土粒・土器片・炭粒・軽石混入  
 2: 黒褐色土: 焼土粒・土器片・炭粒・軽石・灰混入。  
 3: 黒褐色土: As-C混土。



㉒) 1-3-遺物包含層 (第69図、図版15)

**概要** 1区南西部1-3-1号竪穴住居の西～北壁沿いに、これに切られた遺物包含層が確認されている。

この包含層からは古墳時代後期から平安時代にかけての土師器甕・坏・椀、須恵器甕・蓋の破片357片土器片が出土しており、9世紀前半頃までに埋没したことが示されている。

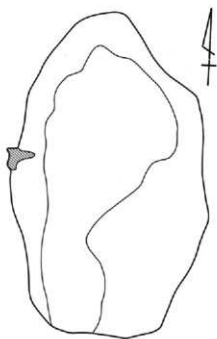
尚、本包含層を構成する黒褐色土除去の底面形態から、本包含層は風倒木痕の可能性も考慮される。

**規模** 520×280cm 深さ13cm

㉓) 1-3-風倒木痕 (第69図、図版15)

**概要** 1区東部中央寄りに風倒木痕が確認されているが、この風倒木痕跡は単独で遺存する。

本風倒木痕の調査は期間等の都合に鑑み表面観察に留め、掘削等は行わなかった。表面観察所見では中央にルーム層土を東・北・西から包み込む黒褐色

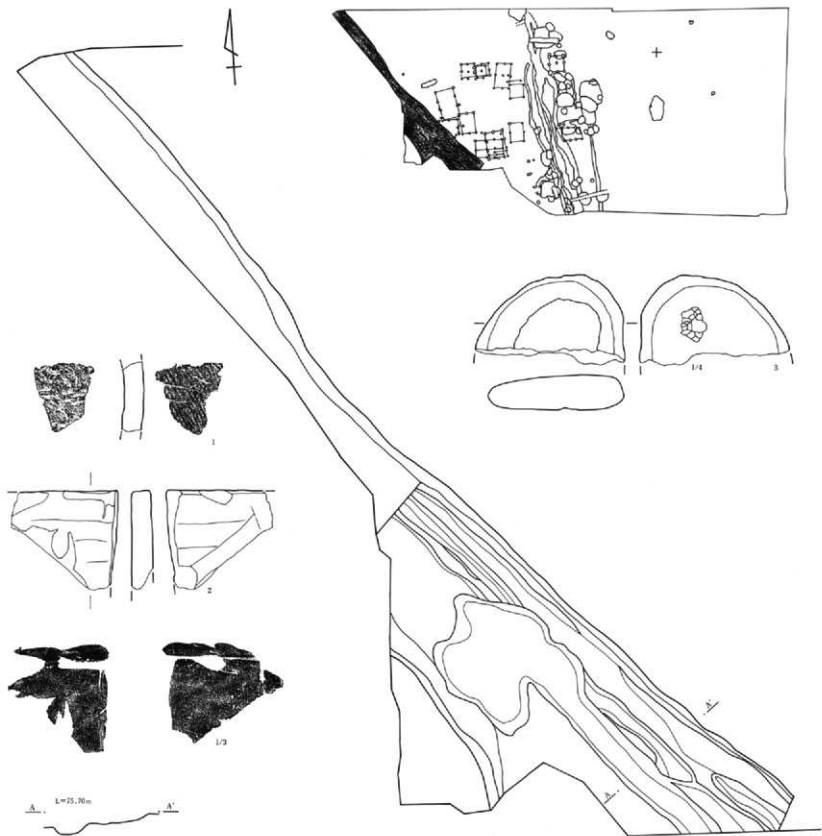


第69図 1-3-遺物包含層と風倒木

土が確認され、西側壁際中央に焼土の分布が見られた。観察所見により本風倒木痕の倒木方向は西側と判断され、転倒後樹木の燃焼が起って焼土が残されたものと想定されている。

**規模** 506×305cm

**構造** 本風倒木痕は南北に主軸を持つ楕円形様の不整形プランを呈している。



第70图 1-3-旧河道及び出土遺物





## ⑩ 1-3-旧河道 (第70図, 図版15)

**概要** 1区3面西端部には南南東方向に流下していた旧河道が確認されている。旧河道は新旧関係は特定できなかったが、1-3-8号掘立柱建物と切り合い関係にある。

この旧河道の埋土中からは須恵器壺片(1)、瓦片(2)、磨石(3)を初め土師器壺・坏・椀、須恵器壺・碗・壺片や石器の剥片等の遺物が量的に多くはないが出土してきている。

旧河道は埋土の状態から4乃至5時期以上の変流のあったことが確認されている。当初の流路は東寄りであったが、次に2 m程西に流路を移し、更に1 m強づつの距離を移動して2回西に変流していること

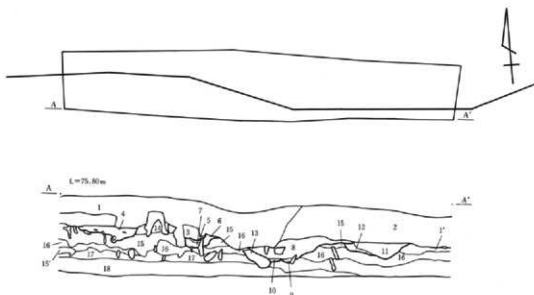
が確認されている。

旧河道はAs-B混土層の下位面に検出された遺構であるが、土層の記録化に失敗したことや出土遺物が少なかったこともあって、個々の流路の時期特定には至らなかった。但し出土遺物から何れかの流路(恐らくは東寄りの流路)が9世紀前半頃までに埋没したことが窺がわれ、最も新しい流路については中世以降まで残されていた可能性が考慮される。

**規模** 長さ44.8m 深さ90cm

**構造** 本河道は直線的プランを呈する。

個々の段階の河道形態についてはつまびらかにできなかったが、全体としては溝遺構の重なり底面が表れていて、その中程に最深部を持つ。



(溝・土坑廃絶後の堆積層)

- 1: 礫混入の攪乱層  
 2: 規磚作土  
 3: 暗褐色土: As-B 含む  
 (132号土坑覆土)  
 4: 暗褐色土: 焼土粒・Hr-FP 混入  
 (23号溝覆土)  
 5: 褐色砂質土  
 6: 灰褐色土: シルト質土・粘質土・砂混入  
 7: 暗褐色砂質土: 粗粒砂混入

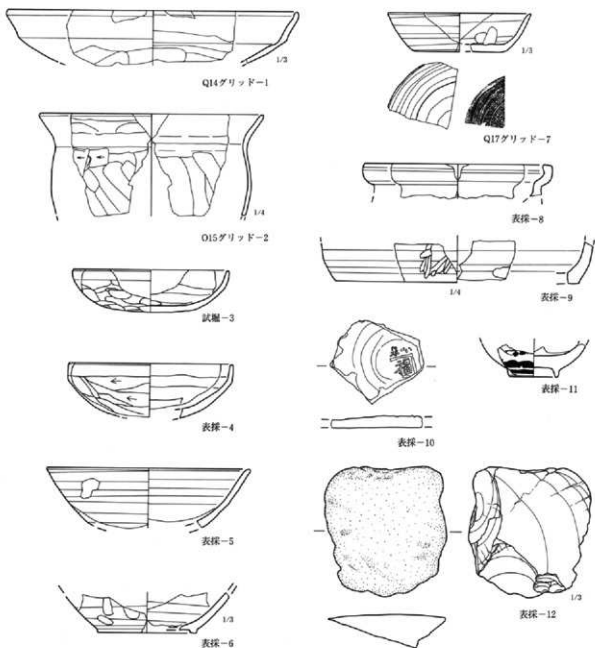
(24号溝覆土 10・11は初期覆土)

- 8: 灰褐色シルト質土・暗灰褐色砂質土のラミナ状堆積層  
 9: 灰褐色土・ロームブロックの混土  
 10: 灰褐色粘質土  
 (133号土坑覆土)  
 11: 灰褐色土: 砂・小石・白色シルト混入。洪水層  
 12: 灰褐色砂質土: 砂主体。15層土ブロック混入

(35号溝覆土)

- 13: 灰褐色土・暗褐色土・ロームのブロック混土  
 (地山層)  
 14: 黒褐色土: 15層に比しAs-C多し  
 15: 黒褐色土: As-Cを少量混入  
 15': 15層土に似るが色調異なる  
 16: 暗褐色土: 17層への漸位層。ローム粒混入  
 17: 黄褐色砂質ローム  
 18: 灰褐色砂質土: 灰物の沈着

第71図 1区南壁土層断面(南壁)



第72図 1区遺構外の出土遺物

### 1-6 1区の遺構に伴わない出土遺物

1区に於いては遺構に伴わない坏(1,2)、高坏(1)、甕(2)などの土師器、坏(7)、碗(5,6)、甕などの須恵器、或いは火鉢(8,9)や碗(10)、肥前の碗(11)と

いった軟質陶器や陶磁器の出土も見られた。またフレック(12)といった縄文時代の石器の出土も見られ

## 第2節 2区の遺構と遺物

## 2-1 2区の調査概要

2区は西半部に1区に続く、東部で3区に続く微高地部があり、調査区のやや東寄りに「Y」字形の

旧河道を起源とする低地部がある。

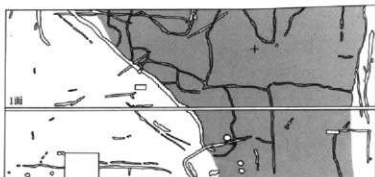
2区では3枚の遺構確認面に於て調査を行った。

1面では概ねAs-B軽石降下以降の時期の遺構を調査した。その境はさして明瞭ではなかったが、概ね低地部に水田址、微高地部分に溝等の遺構が確認された。

1面で調査した遺構はAs-B軽石で被覆された水田14枚以上、溝31条、井戸4基、土坑1基、小ピット3基跡先痕である。

水田址と溝3条は天仁元年(1108)の所産である。2-1-23号溝と2-1-3号井戸は天仁元年に痕跡を留めていたため1面に含めたが、2面の遺構としても良

いものであった。その他の遺構は12~18世紀の所産であるが、覆土にAs-Bを含むものが多いため概ね中世の所産と想定されるものが多い。



2面はHr-FA降下(6世紀初頭)以降からAs-B降下(1108年)以前の時期の面である。1面に比し低地と微高地の境は明瞭であった。調査した遺構は水田面7枚、溝22条、土坑6基であったが溝では掘削位置の近似するものも目立った。

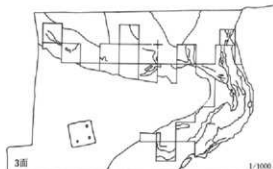
このうち水田はHr-FAに被覆された6世紀初頭の所産である。溝のうち1~2条が奈良時代、10条が平安時代の所産と判断したが、古墳時代前・中期に遡る可能性のあるものも4条あった。



また流水の痕跡のある溝が7条、道路側溝の可能性のある溝も2条あった。この他、古墳時代後期の遺物を包蔵する落ち込み1カ所も調査した。

3面はHr-FA降下以前の時期の面であるが、実質的には4~5世紀の遺構・遺物を取り扱っている。2面までの低地部分には河道が現れて、台地との境は寄り明瞭である。調査した遺構には台地部分に竪穴住居1軒、低地部分に旧河道がある。

このうち竪穴住居は5世紀前半期所産で所謂焼失家屋であった。一方旧河道からは多量の土器、木器、流木が出土している。





## 2-1 2区1面の遺構と遺物

### (1) 2-1-1号溝 (第73図, 図版26)

**概要** 2-1-1号溝は調査区東部の3区に続く微高地上、低地との境付近に位置する。

覆土中からは平安期の土師器坏・甕、須恵器甕の小片が出土したが、覆土がAs-Bの純層に近いため、2-1-1号溝はAs-B降下前後の時期(12世紀初頭頃)の所産と判断される。

また、流水の痕跡は確認されなかったが、形態的に通水の可能性も考慮される。

**規模** 長さ25m 幅110cm、深さ16cm

**構造** およそ走向は北半部は北北東-南南西、南半部は北北東-南南東で若干の揺れが認められる。また中位で西側への分岐が見られ、分岐した溝は北北西に走向を取っている。

掘り方形態はやや凹凸が多く、整っていない。

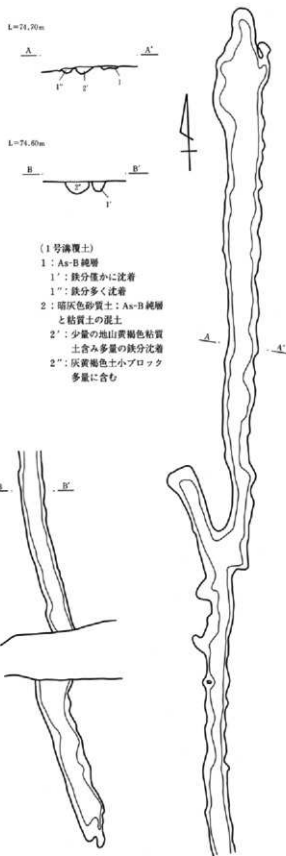
### (2) 2-1-2号溝 (第74図, 図版26)

**概要** 2-1-2号溝は2区東部の微高地部と低地部の境目に位置する。

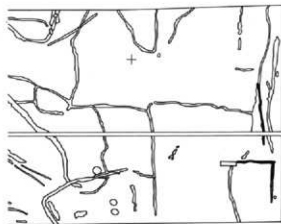
馬南が出土するが、覆土は2-1-1号溝と似ているため、同じくAs-B降下頃の所産と判断される。

部分的に鋤痕が残るが、その性格は特定できなかった。

**規模** 長さ13.4m 幅50cm、深さ9cm



第73図 2-1-1号溝



**構造** 走向は概ね北北西-北北東で、南端は南に向く。北寄りで折れがみられるので、北部と中南部は別遺構である可能性を有する。

中程と北寄りに残る鋤跡から、溝の掘削は北を見ながら南に向かって進められ、鋤の幅2つ分で溝幅を整えるようにしている。

(3) 2-1-3号溝 (第74図、図版26)

**概要** 2-1-3号溝は区東部の微高地部と低地部の境目に在り、北に2-1-1・2号溝が近接する。

本溝は曲尺状のプランを呈し、北東部にコーナーを持って西及び南側に延びる。東西走向部分で6.3m、南北走向部分で8.0mを調査した。

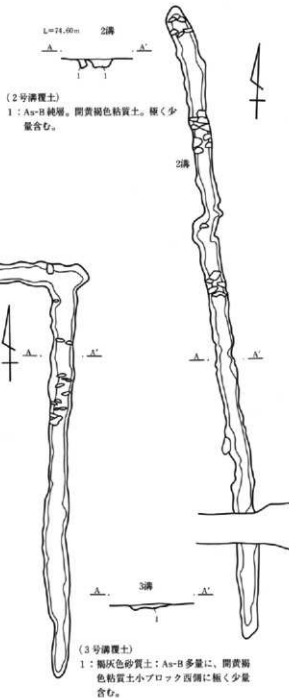
流水痕はなく、処々に鋤痕が残る。そのプランから何らかの区画溝であったものと判断される。

土師器片の破片が出土したが、覆土がAs-Bを多く含むので、As-B降下後、時間的にあまり経過しない段階で掘削されたものと思慮される。

**規模** 長さ14.3m 幅90cm 深さ5cm

**構造** 上述のように2-1-3号溝はそれぞれ直線的なプランを有する東西走向の溝と南北走向の溝が、北東端で直角に接して形作られている。

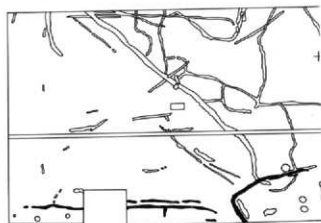
鋤痕の観察から、東西走向は西、南北走向部分は南に向かって後ろ向きで掘削していったことが確認



第74図 2-1-2・3号溝

される。鋤幅2つ分で溝幅を整えられている。

また、東西走向の溝の東端部がコーナーより25cm程突出するので、東西走向の溝を掘削した後、この溝側から南北走向の溝を掘削していったものと判断される。



(4) 2-1-4号溝 (第75図、図版26・46)

**概要** 2-1-4号溝は区中南部に在り、西からの微高地部と低地部にまたがる位置、旧河道埋没谷の右岸沿いに掘削されている。流水の痕跡は認められなかったが東端付近に鋤痕が残る。

また、10・12号溝と切り合い関係にあるがその新旧関係は特定できなかった。

5世紀の土師器高坏(1)の他、平安時代を中心とする土師器片や須恵器片が出土しているが、覆土中にAs-Bが多量に含まれるので、As-B降下後、早い段階の所産と想定される。

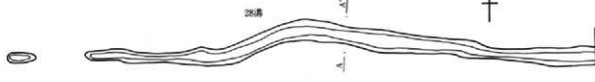
**規模** 長さ23.2m 幅100cm 深さ25cm

**構造** 本溝は湾曲した曲尺状のプランを呈し、西北部にコーナーがあって南東方向は路線外に抜けている。東北東に17.2mが残り、5.4mを調査した。

掘り方は箱堀状であるが、壁・底面には凹凸が見られ、プランが不明瞭な箇所もある。元々の掘削幅は50-60cm程度であったと判断される。



(28号溝覆土)  
1: 暗灰色砂質土: As-B 多量に含み、崩れやすい  
(地山層)  
As-C 多量に含む黒色砂質土



(4号溝覆土)

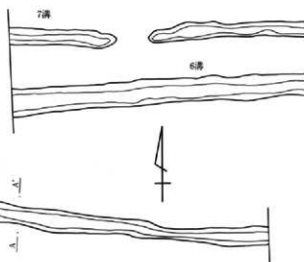
1: 黒褐色砂質土: As-B 多量に、褐色粘質土極く少量含む  
2: 暗灰色砂質土: As-B に黄褐色砂質土を部分的に含む

(5) 2-1-5号溝 (第75図、図版26)

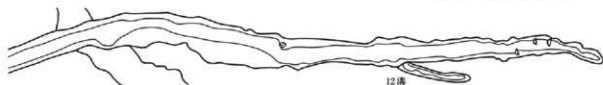
**概要** 2-1-5号溝は短い溝で出土遺物もなく、掘削意図も不明であるが、覆土に多量のAs-Bを含むためAs-B降下後早い段階での所産と判断される。

**規模** 長さ2.3m、幅30cm 深さ6cm

**構造** プランは整っているが、底部付近が残されているに過ぎない。



第75図の(1) 2-1-4-6・7・28号溝及び出土遺物



## (6) 2-1-6・7・28号溝 (第75図, 図版26・29)

概要 2-1-6・7・28号溝は2区中南部に在る。

6・7号溝は中心で120cmの間隔を以て併走する溝で、28号溝は6号溝の延長線上にあり規模も近似するので、同一の溝と判断される。

何れも流水の痕跡は無いが、6・28号溝と7号溝が併走するため道路の側溝の可能性が考えられる。

出土遺物は認められなかったが、As-Bを多く含むためAs-B降下後早い段階の所産と考えられる。

規模 [6溝] 長さ19.2m 幅64cm 深さ10cm

[6・28溝の総延長: 40m]

[7溝] 長さ15.6m 幅40cm 深さ8cm

[8溝] 長さ10.9m 幅50cm 深さ8cm

構造 5・6・28号溝は西から直線的に入り東端付近でやや走行を南に振っている。底部付近が残されているに過ぎないが、底面は平底気味である。

## (7) 2-1-12号溝 (第75図, 図版27)

概要 2-1-12号溝は短い溝である。出土遺物もなく2-1-4号溝と一括して掘削したため覆土の確認もできなかったが、As-B下水田の畦を切っているの、As-B降下後の所産と判断される。

規模 長さ1.6m 幅20cm 深さ6cm

構造 プランは直線的で、やや丸底気味である。

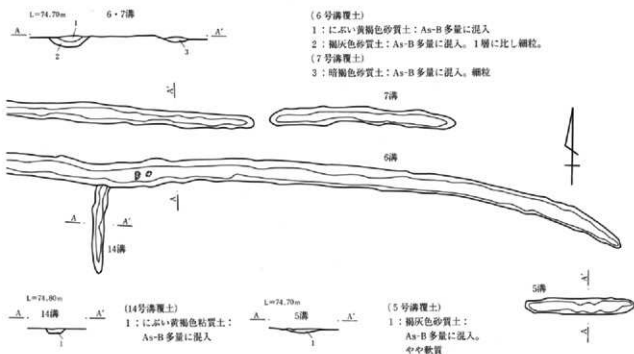
## (8) 2-1-14号溝 (第75図)

概要 2-1-14号溝は南北走行の短い溝で、2-2-6号溝の途中で垂直に接している。出土遺物もなく、6号溝との新旧関係も特定できなかった。

本溝の覆土はAs-Bを多く含むためAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

規模 長さ1.8m 幅30cm 深さ10cm

構造 プランは直線的で、底面は平底気味である。



第75図の(2) 2-1-4-6・7・14・15号溝

第3章 発見された遺構と遺物

(9) 2-1-8・9号溝 (第76図、図版26・27)

**概要** 2-1-8・9号溝は2区中部の微高地上に在り、9号溝は若干東に振れるが何れも走行は北西-南東にある。底部付近が残り、8号溝は2カ所で途切れている。

8号溝の出土遺物はなかったが、9号溝では平安期中心の須恵器・土師器片が見られた。しかし両者とも覆土中に多量のAs-Bを含むので、中世の所産と思われる。

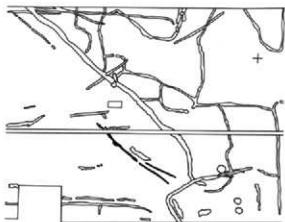


(8号溝覆土)

1: 褐灰色砂質土:  
As-B多量に混入。  
に、赤い黄褐色粘質土  
少量含む。

(9号溝覆土)

2: 3層土とに、赤い黄褐色粘質  
土小ブロックの混入。  
3: 褐灰色粘質土: As-B多量に含む



規模 [8溝] 長さ19.8m、幅30cm 深さ10cm

[9溝] 長さ7.0m 幅20cm 深さ6cm

**構造** 8号溝のプランは直線的であるが、僅かに西に張り出す。一方9号溝のプランは直線的である。

両溝共にその底部付近が遺存しているに過ぎないが、底面形態は船底状を呈している。

(10) 2-1-10号溝 (第77図、図版27)

**概要** 2-1-10号溝は2区中部の微高地部と低地部の境に北西-南東方向で掘削されている。北側は調査区外に出ている。

土師器甕の破片等を出土したが、覆土にAs-Bの純層も見られるため、As-B降下前後の時期の所産と考えられる。

また、所々に鋤痕が残るが、南を向きながら掘削している痕跡を示すものが多い。

2-1-4・15・17・20号溝と切合関係にあり、15・20号よりは古い。4・17号溝との新旧は確認できなかった。

規模 長さ56m 幅128cm以下 深さ23cm以下

**構造** 本溝は若干蛇行しているものの概ね直線的なプランを呈している。しかし南端部は大きく東に湾曲している。

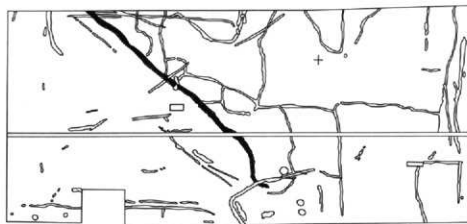
底面は平底、壁は開き気味ではあるが、全体としては整った形態を呈している。

また鋤痕から2-3列で溝の幅を決めながら掘削していった様子が窺われる。



第76図 2-1-8・9号溝



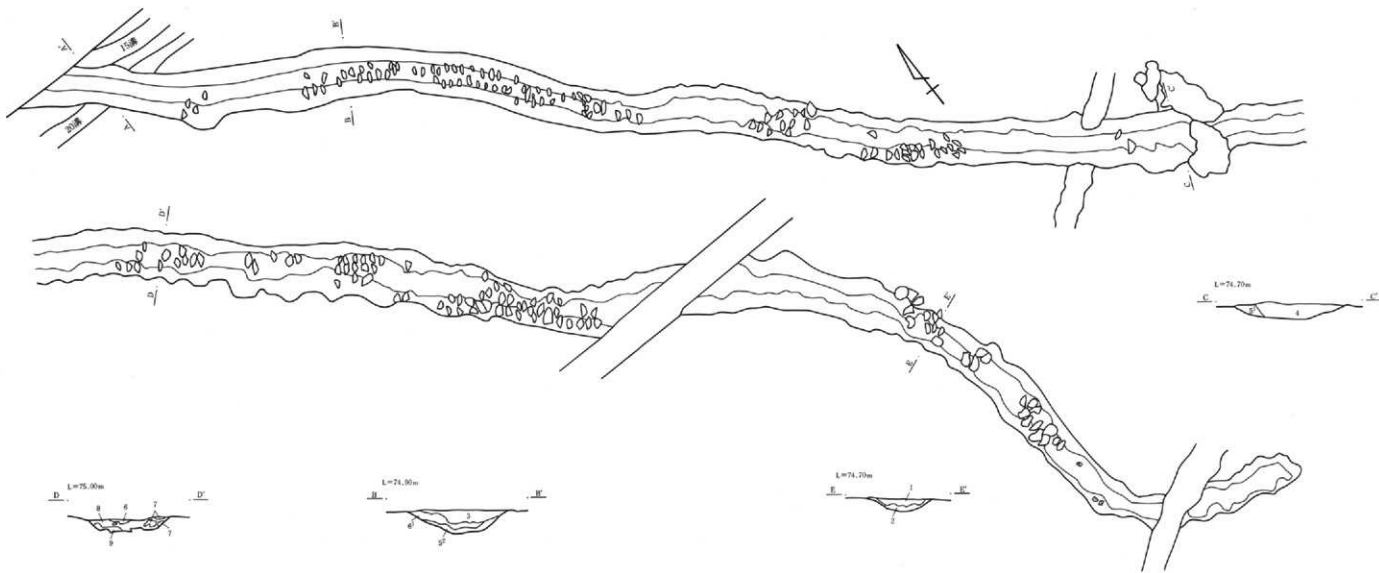


(20号溝掘土)

- 1: 褐色粘質土: As-B 多量に含む。地山層土微量に混入
- (15号溝掘土)
- 2: 灰褐色砂質土: As-B 多量に含む。地山層土微量に混入
- (10号溝掘土)
- 3: 黒灰色砂質土: As-B 多量に含む。地山層土少量混入
- 4: 灰褐色砂質土: As-B 多量に含む
- 5: 黒褐色粘質土: As-B 多量に含む
- 6: 4層に似るがよりAs-Bの純層に近い
- 7: 灰褐色砂質土: As-Bと地山層土小ブロック多量に含む

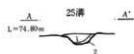
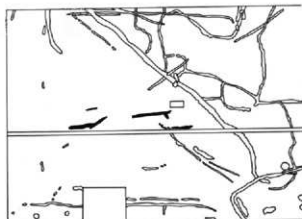
(10号溝掘土)

- 1: 灰オリーブ色砂質土: As-B 多量に混入
- 2: 灰色砂質土: As-B 多量に、にぶい黄褐色粘質土僅かに含む
- 3: 褐色砂質土: As-B 多量に含む。61層土少量含む
- 4: As-B に鉄分層状に混入
- 5: 黒褐色粘質土: As-B 多量に混入。  
5<sup>1</sup>: 酸化鉄少量含む 5<sup>2</sup>: 地山層土少量含む。脆い
- 6: 黒褐色粘質土
- 6<sup>1</sup>: As-B 少量含む。両側褐色係り粘性弱い
- 7: 腐化灰泥層。暗赤色砂質土少量含む
- 8: As-B 層
- 9: 黒褐色粘質土



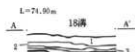
第77図 2-1-10号溝





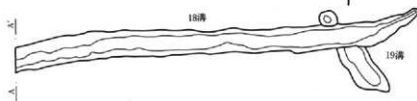
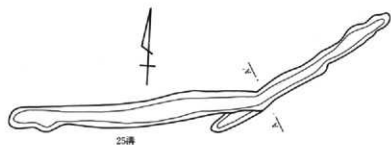
(25号溝覆土)

- 1: 灰褐色砂質土: As-B 多量に含み、地山層土少量混入
- 2: 黒褐色粘質土: 層上位に行くに従い1層土多く混入



(現耕作土)

- 1: 褐灰色粘質土: As-A わずかに含む
- (耕作土)
- 2: 褐灰色砂質土: 酸化鉄混入。As-A わずかに含む (金床)
- 3: As-B に鉄分多く沈着
- (18号溝覆土)
- 4: As-B に黒色粘質土混入。酸化鉄部分的に見られる



(1) 2-1-11号溝 (第78図、図版27)

概要 2-1-11号溝は2区中部の微高地上に在る。底部近くが残るだけで両側は欠失しており、遺存状態は良くない。

出土遺物もなく覆土も確認できなかったため時期は特定できなかった。掘削意図も不明だが同じ走行を持つ2-1-18号溝が近接するので、18号溝と同様の意図或いは規制によって掘削されたものと思慮される。

規模 長さ5.3m 幅30cm 深さ8cm

構造 東西走行の直線的プランを呈するが、2-1-18号溝と同様、東端部では若干北に走行を変える。

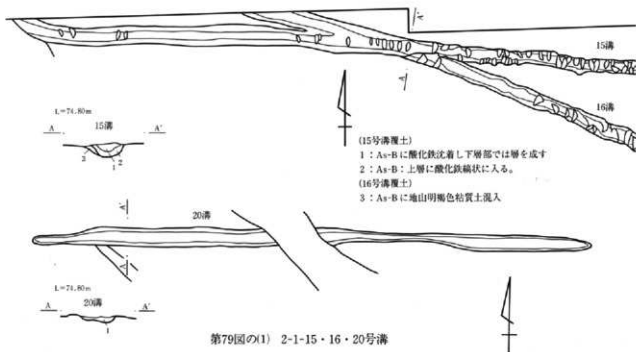
遺存が悪く、全体の状況はつまびらかでないが底面は船底形を呈している。



(31号溝覆土)

- 1: 黒褐色砂質土: As-B 多量に含む。層北上に地山層土微量に混入

第78図 2-1-11・18・25-1・31号溝



第79図の(1) 2-1-15・16・20号溝

(12) 2-1-18・19号溝 (第78図、図版28)

**概要** 2-1-18号溝も2区中部の微高地上に位置し、新旧関係は不明だが2-1-19号溝が直角に分岐する。共に遺存状態はあまり良くない。

出土遺物は無かったが、18号溝はAs-Bを多く含むのでAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

両溝は走行から18号溝は2-1-11・25-1号溝と、19号溝は2-1-8号溝との関連が考えられる。

**規模** [18号溝] 長さ8.5m、幅60cm 深さ10cm

[19号溝] 長さ1.4m、幅58cm 深さ13cm

**構造** 東西走行の直線的プランを呈するが、2-1-11号溝と同様、東端部で若干北に走行を变ずる。

底面は船底形を呈している。

(13) 2-1-25-1号溝 (第78図、図版28)

**概要** 2-1-25号溝は2区中部の微高地上に在る。本溝は東西走行と北東-南西走行の2条の溝からなる。以下前者を25-1号溝、後者を25-2号溝と呼称し、25-2号溝は走行の方向から後述(112頁)する。

さて、25-1号溝からの出土遺物は無い。また25-2号溝では多量のAs-Bを確認したが、25-1号溝の覆

土の所見がないため、時期特定はできなかった。

掘削意図は不明だが、2-1-11・18号溝と同じ走行を持つので、サク状遺構の可能性を考えたい。

**規模** 長さ5.4m、幅56cm 深さ7cm

**構造** 直線的なプランを呈する。東端は25-2溝に接しているが、この部分が端点となる。

比較的整った掘り方で、平底気味である。

(14) 2-1-31号溝 (第78図、図版28)

**概要** 2-1-31号溝は2-1-25-1号溝の北側に併走する、短い幅狭の溝遺構である。

出土遺物は無かったが、覆土中にAs-Bを多量に含むのでAs-B降下後早い段階の所産と思われる。

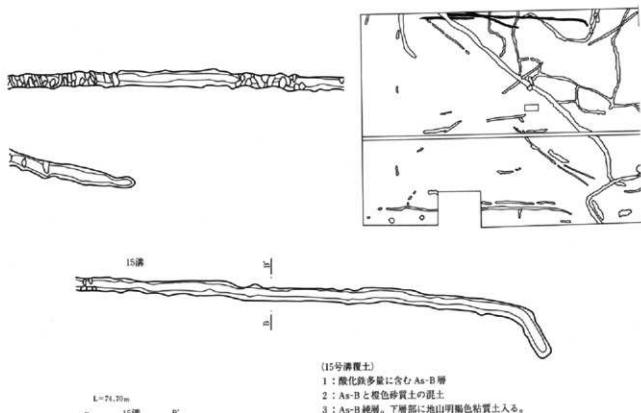
**規模** 長さ2.2m、幅18cm 深さ4cm

**構造** 東西走行だが、2-1-11などの溝より若干走行が北東に寄っている。

プランは直線的で船底形の底面形態を呈す。

(15) 2-1-15号溝 (第79図、図版27・28)

**概要** 2-1-15号溝は2区中部北端の微高地部と低地部を跨ぐ位置に在る。2-1-16・20号溝と切り合い関



第79図の(2) 2-1-15・16号溝

係にあるが、両者に対して本溝の方が新しい。

出土遺物は無い。覆土はAs-Bを主体とするが16号溝を切っているのでAs-B降下直後頃の所産と判断される。

溝の中に鋤痕が残り、東方を向きながら左右1～2回の掘削で掘り進めていった様子が窺われた。また、底面が地形に沿って確認面から10cm前後で上下するので流水を意図したとは考えられない。

規模 長さ31m 幅44cm 深さ12cm

構造 概ね直線的で東西走行を示すが、東端部では南東に走行を転じている。

底部は平底気味であるが、鋤痕等の凹凸もある。

#### (16) 2-1-16号溝 (第79図、図版28)

概要 2-1-16号溝は2区中程、北端の微高地部に位置し、2-1-15号溝と切られている。

出土遺物は無いが、覆土がAs-B主体なので

As-B降下直後頃の所産と判断される。

また溝の中に鋤痕が残り、東方を向きながら掘り進めていった様子が窺われる。

規模 長さ11.5m 幅72cm 深さ5cm以下

構造 東南東から西北西方向に掘削されている。

底面は平底気味である。

#### (17) 2-1-20号溝 (第79図)

概要 2-1-20号溝は2-1-15号溝の南に併走する位置に掘削されている。

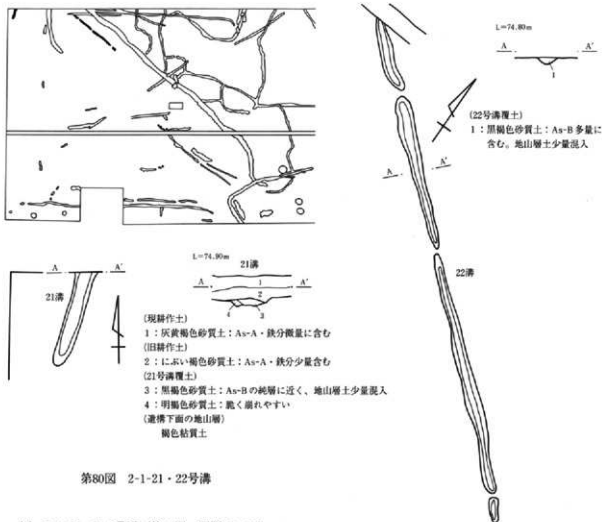
2-1-10・22号溝と切り合い関係にあるが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物は認められなかったが、覆土中にAs-Bを多く含むのでAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

規模 長さ11.8m 幅44cm 深さ3cm以下

構造 東西走行を呈し、やや平底気味である。

第3章 発見された遺構と遺物



第80図 2-1-21・22号溝

(14) 2-1-17・25-2号溝 (第80図, 図版27・28)

**概要** 2-1-17号溝は低地部と西側微高地に跨って位置するが、途中途切れて2条の溝に分かれている。また2-1-25-2号溝はその延長線上に在り規模も近似するので同一の溝と判断している。

17号溝は2-1-10号溝と切り合い関係にあるが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物は無いが、25-2号溝覆土にAs-Bが多く入るのでAs-B降下後早い段階の所産と思われる。

**規模** 長さ50m (17溝東12.6m 17溝西10.7m 25-1溝4.5m) 幅40-59cm 深さ7-15cm

**構造** 北東-南西方向の走行を呈す。

掘り方は比較的しっかりして、底面は船底形を呈す。

(15) 2-1-26号溝 (第81図)

**概要** 2-1-26号溝は幅狭の短い溝である。

17・25-1号溝の延長線上にあるのでこれらと同一の溝である可能性を有する。

出土遺物は無いが、覆土にAs-Bを多量に含むのでAs-B降下後早い段階の所産と思われる。

**規模** 長さ1.5m 幅25cm 深さ6cm

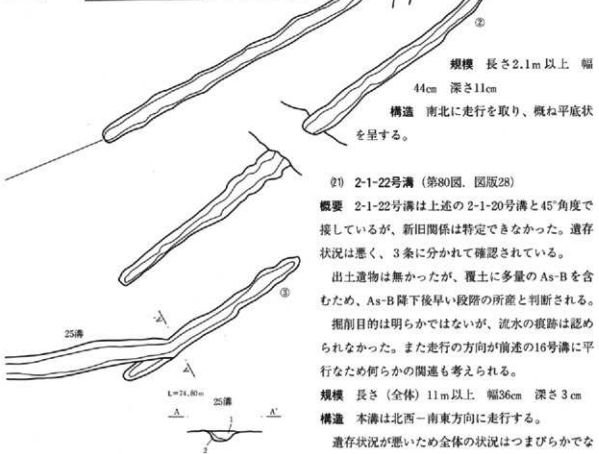
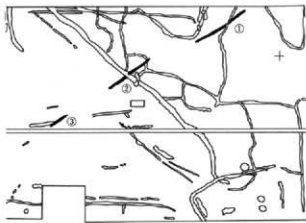
**構造** 北東-南西方向の走行を呈する。

掘り方はやや船底形である。

(16) 2-1-21号溝 (第80図, 図版28)

**概要** 2-1-21号溝は2区西部北端に位置する。2.1mの範囲を調査したが、北側は路線外に延びているため全体の状況は明らかにできなかった。

出土遺物は無かったが、覆土がAs-Bの純層に近いので、As-B降下前後の所産と判断される。



規模 長さ2.1m以上 幅  
44cm 深さ11cm

構造 南北に走行を取り、概ね平底状  
を呈する。

① 2-1-22号溝 (第80図、図版28)

概要 2-1-22号溝は上述の2-1-20号溝と45°角度で  
接しているが、新旧関係は特定できなかった。遺存  
状況は悪く、3条に分かれて確認されている。

出土遺物は無かったが、覆土に多量のAs-Bを含  
むため、As-B降下後早い段階の所産と判断される。

掘削目的は明らかではないが、流水の痕跡は認め  
られなかった。また走行の方向が前述の16号溝に平  
行なため何らかの関連も考えられる。

規模 長さ(全体)11m以上 幅36cm 深さ3cm

構造 本溝は北西-南東方向に走行する。

遺存状況が悪いため全体の状況はつまびらかでな  
いが、船底状の底面形態を呈している。

② 2-1-23号溝 (第82図、図版46)

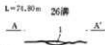
概要 2-1-23号溝は2区西部北端に位置する。

北側が調査区外に出るため全体の状況はつまびら  
かでないが10.2m程を調査した。

蔽石(1)が出土したが、As-B軽石層の下位にあ  
り、As-B下水田の耕作時かそれ以前の所産と判断  
される。

(25号溝覆土)

- 1 : 灰褐色砂質土 : As-B 多量に含み、地山層土少量混入
- 2 : 黒褐色粘質土 : 層上位に行くに従い1層土多く混入



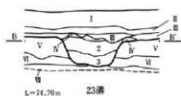
(26号溝覆土)

- 1 : 黒灰色砂質土 : As-B 多量に含み、  
層上位に地山層土少量混入



第81図 2-1-17・25-2・26号溝

第3章 発見された遺構と遺物



(23号溝覆土)

- I : 褐色粘質土；黒色粘質土少量入り上位にAs-B薄く増積(右下)
- II : 黒褐色粘質土；Hr-FP・鉄分微量に入る
- III : 褐色砂質土；砂多量、Hr-FP・酸化鉄微量に混入(表土層)
- IV : 灰黄褐色砂質土；As-A・鉄分微量を含む(As-B混土層)
- V : 褐色砂質土；As-B・鉄分多量を含む。
- VI : 黒褐色砂質土；As-Bの純層に近く、鉄分多量に沈着
- (As-B下水田耕作土)
- VII : 黒褐色粘質土(洪水層土)
- VIII : 褐色粘質土；Hr-FP微量に混入
- IX : 褐色砂質土；砂多量に、Hr-FP微量を含む。鉄分強く沈着
- X : 灰褐色粘質土；砂多量に含み、Hr-FA微量に混入



(24号溝覆土)

- I : 灰黄褐色砂質土；As-B多量に含む。鉄分微量に沈着(地山層)
- II : 黒色粘質土

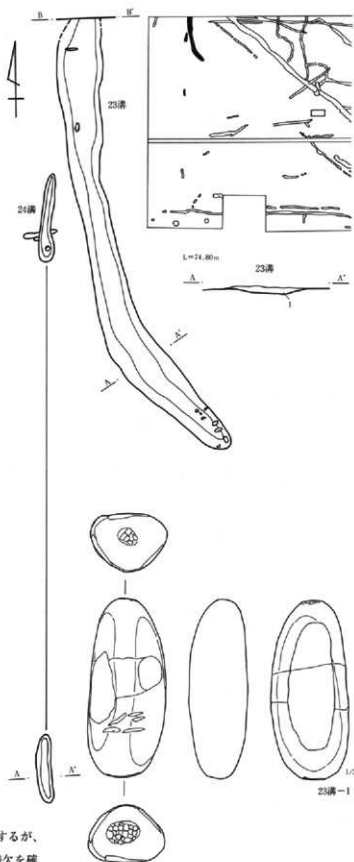
規模 長さ10.2m 幅92cm 深さ8cm

構造 本溝は北から入り、北部は南北、中部は僅かに東に寄る。南部は直線的で北西-南東に走行を変える。

遺存状況は良くないが、底部は平底状を呈する。

(23) 2-1-24号溝 (第82図)

概要 2-1-24号溝は2-1-23号溝の西に位置するが、遺存状況は不良で、10m程隔てた2カ所で残欠を確認できたに過ぎない。



第82図 2-1-23・24号溝及び出土遺物



出土遺物も無かったが、覆土にAs-Bを多量に含むのでAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

規模 長さ(全体) 10.2m以上

(北部)長さ1.8m 幅32cm 深さ5cm

(南部)長さ1.8m 幅32cm 深さ6cm

構造 本溝は南北走行を呈し、底部は概ね平底気味である。

㉒ 2-1-27号溝 (第83図, 図版29)

概要 2-1-27号溝は2区西部に位置する遺存状況の不良な溝遺構で、一部を確認できたに過ぎない。

出土遺物は無く、覆土にAs-Bを多量に含むのでAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

規模 長さ1.76m 幅36cm 深さ5cm

構造 本溝は概ね南北走行で、底部は船底形を呈す。

㉓ 2-1-29号溝 (第83図, 図版29)

概要 2-1-29号溝2-1-28号溝の北に位置する。遺存状況は悪く、その残欠がそれぞれ56cm程度で3条の短い溝として確認できたに過ぎない。

出土遺物は無いが、覆土にAs-Bを僅かに含むのでAs-B降下後時間を置いての所産と思われる。

規模 長さ(全体) 3.7m以上

(北部)長さ0.7m 幅26cm 深さ4cm

(中部)長さ1.0m 幅24cm 深さ4cm

(南部)長さ0.8m 幅24cm 深さ2cm

構造 本溝は南から北東方向へ西に張り出す緩やかなカーブを描きながら走っている。

全体の状況は遺存状況が悪くつまびらかでないが、底面はやや船底状を呈している。

㉔ 2-1-30号溝 (第83図, 図版29)

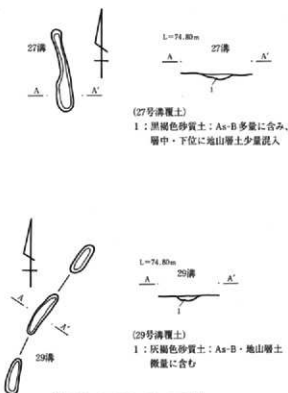
概要 2-1-30号溝は2-1-29号溝の東に位置する。東側は馬入れの下に潜り調査できなかった。

出土遺物は無く、覆土にAs-Bを多量に含むのでAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

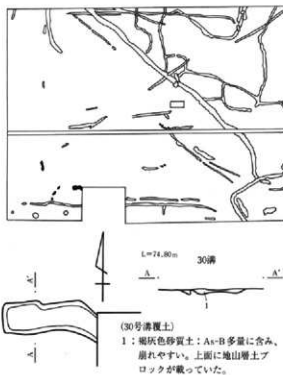
規模 長さ2.0m 幅68cm 深さ3cm

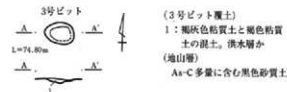
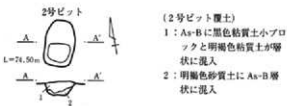
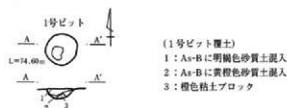
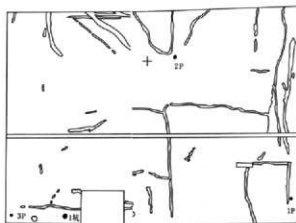
構造 本溝は確認できた範囲では東西走行で東端で南東に変ずる。

全体の状況は不明だが、底面は概ね平底である。



第83図 2-1-27・29・30号溝





第84図 2区1面の土坑及びビット

27 2-1-1号土坑 (第84図、図版29)

**概要** 2-1-1号土坑は2区南西部に位置する小型の土坑であるが、遺構は底部付近が残るだけで遺存状況は良好とは言えない。

出土遺物は認められなかったため時期の特定は難しいが、覆土にAs-Bを多量に含むためAs-B降下後早い段階の所産と判断される。

高、掘削意図等を特定することはできなかった。

**規模** 径100×92cm 深さ15cm

**構造** 本土坑は円形～隅丸の正方形プランを呈する。

本土坑の底面は平底であり、掘り方形態は概ね桶状を呈している。

28 2区1面小ビット (第84図、図版29)

**概要** 2区1面では3基の小型ビットを確認している。掘削位置は2-1-1号ビットが調査区南東、2-1-2号ビットが同中部北、2-1-3号ビットが南西と、それぞれが単独に掘削されており、後述するように掘削形態にも統一性はないため、バラバラに掘削されたものと判断される。

1～3号ビットは全体として遺存状況が悪く、その形態もつまびらかではない。また掘削意図についても特定することができなかった。

これらのビットからの出土遺物は見られなかったが、1・2号ビットはAs-Bを含むので中・近世の所産と判断される。一方2-1-3号ビットは粘質土を覆土としているが、As-B降下前後に可能性が求められ、時期特定には至らなかった。

**規模** [1号ビット] 径50×47cm 深さ17cm

[2号ビット] 径73×48cm 深さ23cm

[3号ビット] 径48×32cm 深さ7cm

**構造** [1号ビット] プランはやや方形に近い円形を呈する。

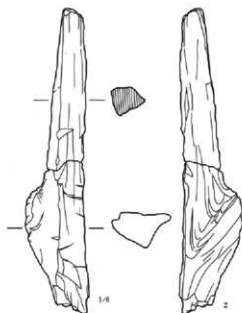
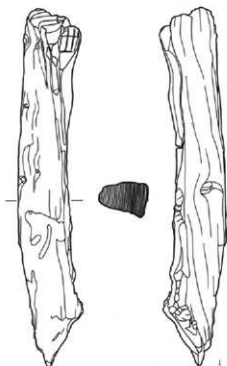
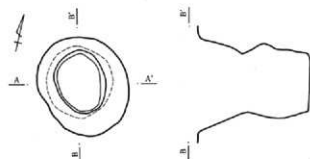
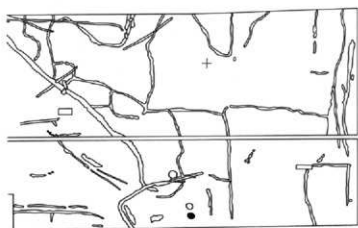
遺存状況が悪く全体の掘削形態はつまびらかでないが、底面形態は丸底状を呈する。

[2号ビット] 上場は北に広がっているが、底面は方形のプランを呈している。

掘削形態は箱状を呈している。

[3号ビット] 楕円形プランを呈する。

遺存状況が悪く掘削形態は把握されなないが、底面形態は丸底状を呈する。



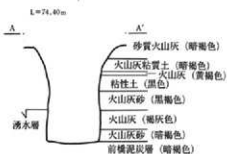
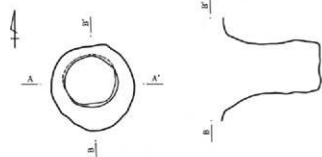
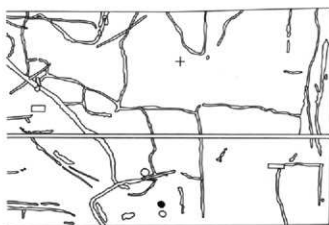
2) 2-1-1号井戸 (第85図, 図版29・46)

概要 2-1-1号井戸は2区中南部、調査区の南限近くに所在する。北側には2-1-2号井戸が隣接し、2-1-3号井戸が近接している。本井戸はAs-B下水田面表出段階に於いて確認、調査した。

出土遺物としては土師器坏や平安期の高台付碗片やミカン割にした角材(1~3)など幾つかが見られたが、現状では時期特定には至っていない。しかしながら本井戸がAs-B層を突き抜けて掘削されていることなどから中世以降、As-A降下前の所産としては把握されるものである。尚、木材の出土が見られるため、時期特定の可能性は残されている。

第85図 2-1-1号井戸及び出土遺物

尚、後述するようにしっかりしたアグリ(水的作用による壁面の抉れ)が形成されていることから、長期間使用した可能性が削井業者から指摘されている。  
規模 径155×140cm 底径92×68cm 深さ180cm

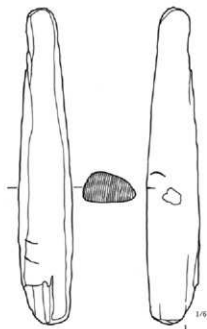


第86図 2-1-2号井戸及び出土遺物

**構造** 本井戸はアグリ直下では円形のプランを呈するが、確認面と中位の狭くなる箇所、アグリの下位から底面にかけての箇所など多くの位置では楕円形のプランを呈している。掘り方形態は地山井筒朝顔型であり、下位に於いてはピア樽状をなし、上位は直線的に若干開いている。

湧水層は確認面より1m以下の洪積層中であると判定されており、確認面下100～170cm程の間に最大25cm幅の広がりをも有するアグリが形成されている。

貯溜水量は凡そ1.2m<sup>3</sup>と算出されている。尚、調査時点での湧水量は毎分15リットルであった。



00 2-1-2号井戸 (第86図, 図版29・46)

**概要** 2-1-2号井戸は2-1-1号井戸の北に位置し、1号井戸と同様にAs-B下水水面に於いて確認、調査された。

本井戸は明らかに人為的に埋め戻しがなされていて、覆土中からは須恵器甕の破片が出土し、竹か篠製の籠のようなものが小片付着した厚めの板材(1)などの木質の遺物の出土も見られた。(これらの木材を使って時期特定を行う可能性は残されているが) これらの遺物の形態観察からは現段階で時期特定には至っていない。しかし本井戸も1号井戸同様As-B層を突き抜けて掘削されているため、中世以降、As-A降下前の所産としては把握されるものである。

一方、本井戸ではアグリが殆ど形成されていないことから、本井戸の使用期間は比較的短時間であったことが想定される。

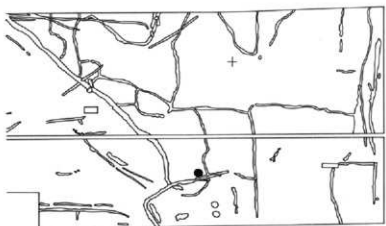
また本井戸が前橋泥流を掘り込んでいないことから、掘削業者の所見として悪水を取らない知恵があったことが想定されるということであった。

**規模** 径135×132cm 底径84×82cm 深さ155cm

**構造** 本井戸のプランは円形を呈する。掘り方形態は地山井筒朝顔型で、上位は朝顔形に開き、中・下位は筒状を呈している。アグリは殆ど形成されていない。

湧水層は確認面より1m以下の洪積層中にあったものと判断される。また、上述のように悪水除けのためか掘削は前橋泥流層の上面で止められている。

本井戸の貯留水量は約0.7m<sup>3</sup>である。尚、調査段階での湧水量は毎分1リットルであった。



① 2-1-3号井戸

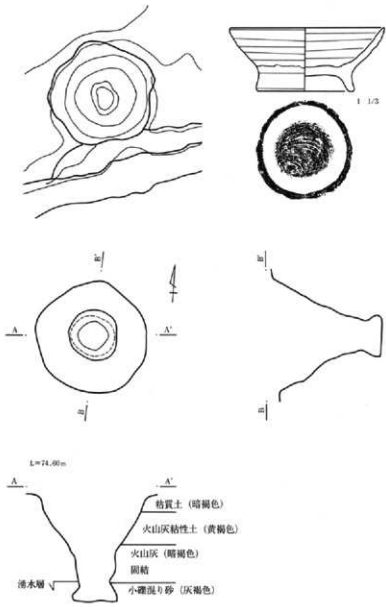
(第87図。図版29・46)

**概要** 2-1-3号井戸は2-1-2号井戸の北に位置している。

覆土上位にAs-B純層が堆積しており、As-B降下時点では既に埋没していたことが確認される。またAs-B層下面は深さ30cm程のクレーター状の窪地になっていた。(第87図左中上) 従って本井戸は2面の遺構として把握されるものであるが、1面に確認された痕跡を残し、後述するようにAs-B下水田の範囲に規制を与えていると判断されたため1面の遺構に含めて記すこととした。

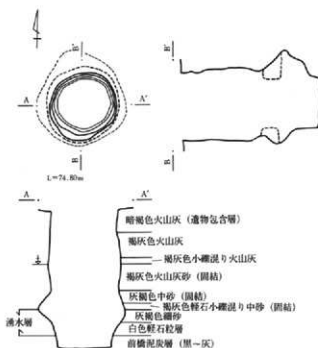
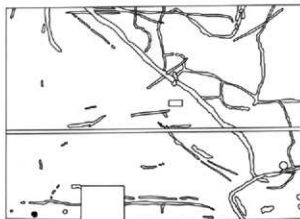
本井戸からは土師器・須恵器片も出土したが、10世紀後半代の須恵器高台付碗(1)の出土が見られたため、本井戸10世紀後半~11世紀の所産と把握されるものである。

**規模** 径176×176cm 底径69×60cm 深さ175cm



第87図 2-1-3号井戸及び出土遺物

### 第3章 発見された遺構と遺物



第88図 2-1-4号井戸

**構造** 本井戸のプランは楕円形を呈する。掘り方は地山井筒朝顔形であるが、上半は大きく開く。

本井戸では底面から20~30cmの位置と、上半部と下半部の境付近が屈曲して狭くなっている。この箇所は前者で48×44cm、後者で64×58cmを測る。前者と後者の間は幾分膨らみ気味であるが、この位置（確認面より140cm下）にある砂礫層が湧水層と判定されている。

アグリは底面付近にあり、底部寄りの屈曲部から

8~12cm程の幅で挟れている。貯溜水量は0.5m<sup>3</sup>程と想定されている。アグリ形状等から長期間使用されていたことが窺われる。

#### Q2 2-1-4号井戸（第88図、図版29）

**概要** 2-1-3号井戸は2区南西部、2-1-1号井戸の西方に位置している。

本井戸は確認面から170cmまでは褐色土小ブロックを多量に含む暗褐色土で人為的に埋め戻されており、それ以下は壁面の崩落による自然埋没土によって埋もれていた。尚、掘削途中段階、確認面下1.3~1.6m付近ではオーバーハングした壁面がブロック状に崩落する「棚落ち」が生じたため、一部壁面の記録化を行うことができなかった。断面図中に破線でしめしたラインが、この時崩落したと想定されるブロックの範囲である。

本井戸からは自然の礫が出土しただけで、遺物等は得られなかったため時期の特定には至らなかったが、確認面から概ね中・近世の所産として把握したい。

**規模** 径107×97cm アグリ径145×136cm

底径82×76cm 深さ215cm

**構造** 本井戸円形に近い楕円形のプランを呈する。掘り方形態は地山井筒型で、元々は下位に向かって狭くなる円柱状形態を呈していたと想定される。

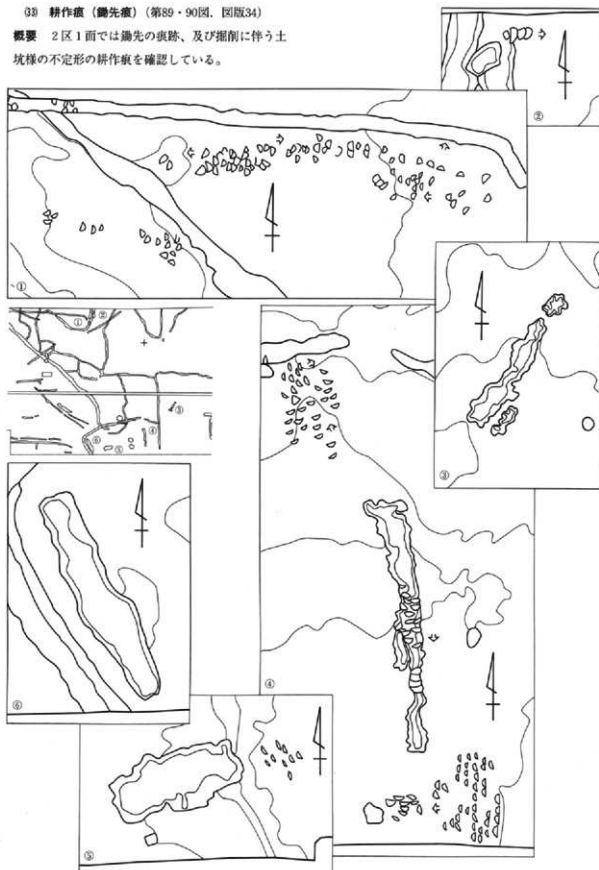
本井戸では確認面下1.7~2.0mで東に17cm、南に16cm、西に23cm、北に43cm程に広がるアグリが形成されている。アグリは厚みは棚落ちのため測定できなかったが、20~40cm以上あったものと推定される。またアグリ上方の状況もつまびらかにできなかったが、少なくとも確認面下30~110cmの間で4~12cm程の弱いアグリ様の挟れが認められた。

湧水層は確認面下1.5~1.7mの間の洪積層中の灰褐色細砂層、1.7~1.9mの間の浅間山起源のAs-YP軽石層に特定され、有効貯溜水量は1.4t程にもなると推定される。

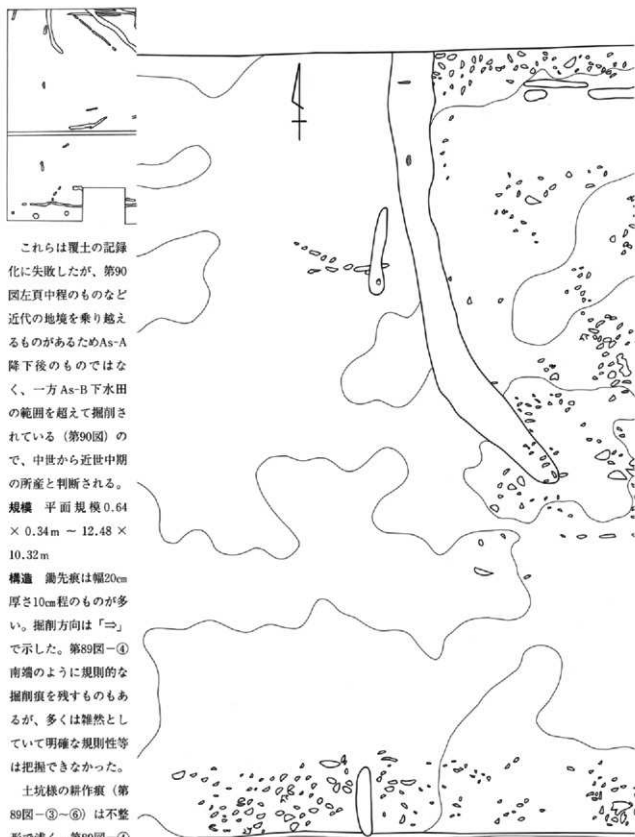
尚、調査時点での湧水量は毎分15リットル程であった。

③ 耕作痕（鋤先痕）（第89・90図、図版34）

概要 2区1面では鋤先の痕跡、及び掘削に伴う土坑様の不定形の耕作痕を確認している。



第89図 2区1面耕作痕跡（その1）



これらは覆土の記録化に失敗したが、第90図左頁中程のものなど近代の地境を乗り越えるものがあるためAs-A降下後のものではなく、一方As-B下水田の範囲を超えて掘削されている（第90図）ので、中世から近世中期の所産と判断される。  
 規模 平面規模0.64 × 0.34m - 12.48 × 10.32m

構造 鋤先痕は幅20cm厚さ10cm程のものが多く、掘削方向は「⇒」で示した。第89図-④南端のように規則的な掘削痕を残すものもあるが、多くは雑然としていて明確な規則性等は把握できなかった。

土坑様の耕作痕（第89図-③-⑥）は不整形で浅く、第89図-④の中程のように鋤先痕を残すものもある。

第90図の(1) 2区1面耕作痕跡（その2）





第90図の(2) 2区1面耕作痕跡(その2)

④ As-B下水田

(第91～93図、図版30～33)

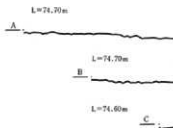
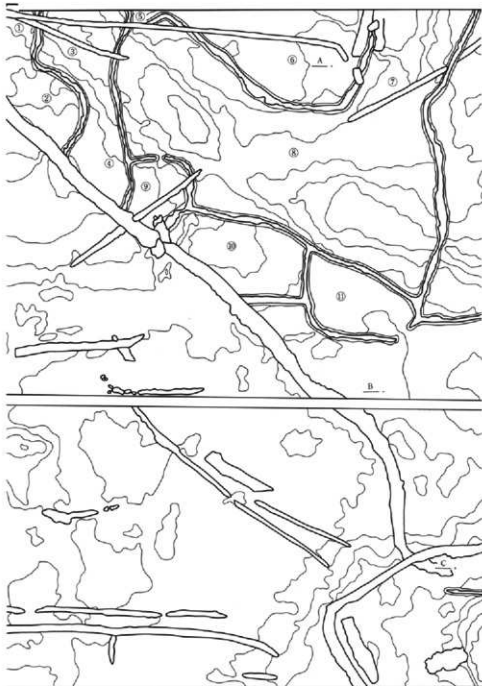
**概要** 東西の微高地に挟まれた2区の低地部には天仁元(1108)年浅間山噴出のAs-B軽石で埋没した水田址が確認された。

水田面は後述するように全体的に特別な区画や人為的な規制による配置がなされるのではなく、当時の地形に沿って造られていた。しかし全体として下位層の圧縮によって面的な歪みも生じ、表出段階では一つの単位の水田面にあっても凹凸が見られた。また畦が途中から確認できなくなるなど、良好とは言い難い遺存状況にあった。従って細部については明確な形状を把握できない箇所も少なかった。

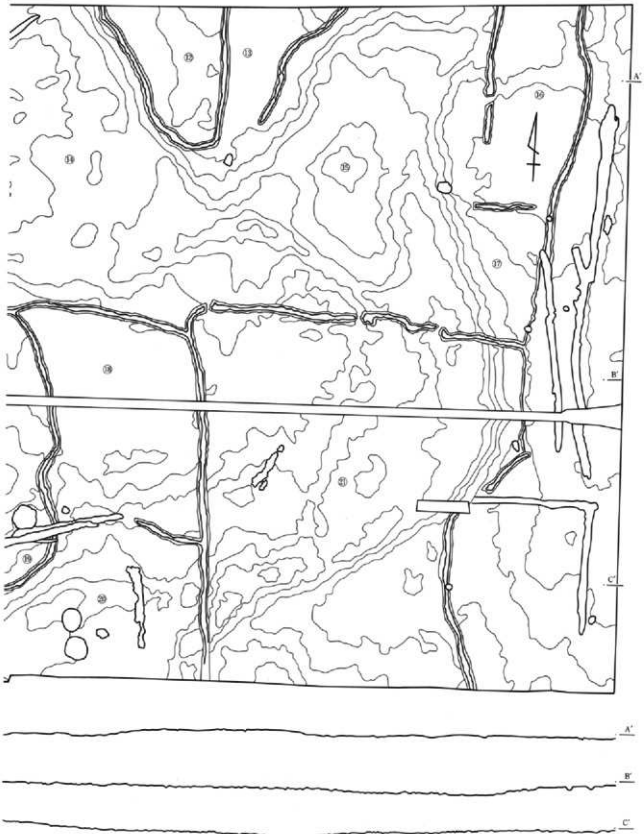
特に微高地との境は明らかではなく、例えば水田区画⑨・⑩付近(第91図-右図左下)では上述のように2-1-3号井戸はAs-B降下時点で、窪地として残っていたと判断される(少なくとも水田の中に井戸を掘削するとは考えにくい)ため、水田区画⑨の西側を画する畦と2-1-3号井戸との間には幅狭の水田面、若しくは水路の存在が想定されるのである。

一方、畦も含め耕作土は黒褐色の粘質シルトであり、当初の厚さは不明であるが、調査時点では後世の加重によって6cm程の厚さに圧縮された状態で確認されている。その下位には灰褐色砂質シルトがあ

り鉄分が多量に沈着しているため、この層が金床を形成する層に該当すると判断されるため、As-B下水田は乾田であったことが想定されるのである。

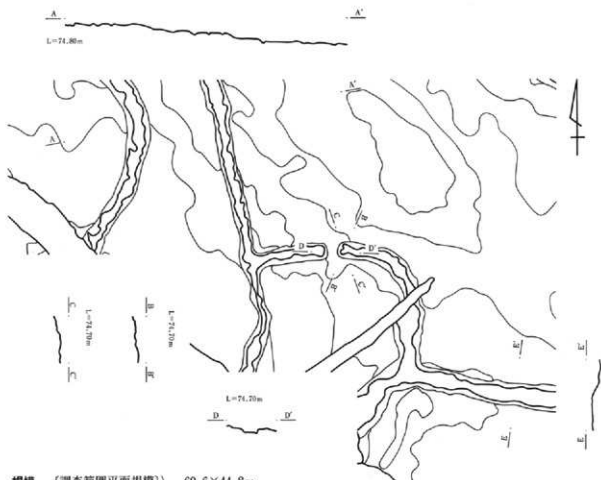


第91図の(1) 2区1面As-B下水田



第91図の(2) 2区1面As-BF水田

### 第3章 発見された遺構と遺物



規模 [調査範囲平面規模] 69.6×44.8m

[各区画平面規模] ① 1.7×4.6m以上

② 6.4×5.6m以上 ③ 6.4×5.8m以上

④ 8.0×4.6m以上 ⑤ 2.4×1.1m以上

⑥ 16.0×7.7m以上 ⑦ 8.0×6.4m以上

⑧ 28.2×14.4m ⑨ 5.8×4.5m

⑩ 11.4×5.8m ⑪ 8.5×6.8m

⑫ 14.7×11.5m以上 ⑬ 9.3×9.3m以上

⑭ 19.2×25.4m以上 ⑮ 25.6×23.8m以上

⑯ 16.6×7.9m以上 ⑰ 10.4×5.9m

⑱ 15.8×14.4m ⑲ 7.7×4.7m

⑳ 19.4×13.0m以上 ㉑ 30.6×27.5m以上

[畦] 幅43~60cm 高さ 5~6cm

[水口] a 幅29cm 高さ 5cm

b 幅56cm 高さ 4cm c 幅14cm 高さ 7cm

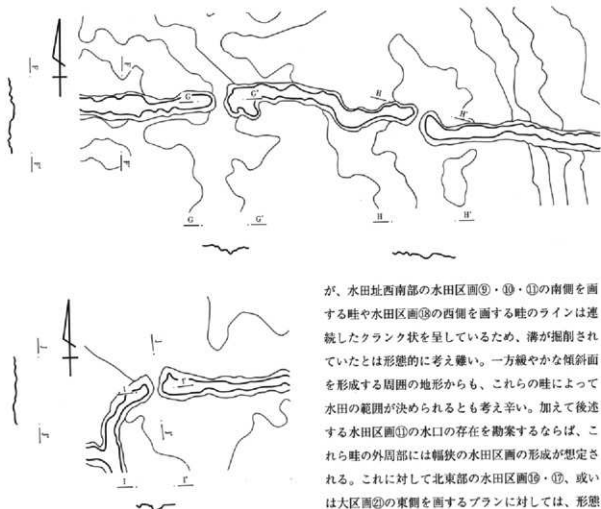
d 幅38cm 高さ 6cm e 幅14cm 高さ 6cm

[比高差] ②-④=7cm ④-⑧=8cm

⑨-⑧=6cm ⑩-⑧=2cm ⑮-⑩=3cm

第92図 2区1面As-B下水田水口(その1)

構造 2区1面に調査したAs-B軽石下水田は、後述する旧河道の痕跡である調査区中北部から東部中央に向かって傾斜する低地部を任意に畦で区切って造られる水田区画③・⑥・⑦・⑧・⑩、同じく東部の北側から中央に向かう低地部を区切る水田区画⑬・⑱、そしてこの両者の合流部から南側に向かう低地部を区切る水田区画⑰・⑲を以て調査した水田址の過半の面積を占めている。更に分岐する前・中者に挟まれた微高地によってそのプランが規制される水田区画⑲・⑳も見られる。こうした低地部と東西両側の微高地部との境の傾斜面に在っては、西側の傾斜面に於いては水田区画①・②・④・⑨・⑪・⑱が中央低地部とは段差を以て、そして東側の傾斜面にあっては⑯・⑰の水田区画が低地部に対して僅かな段差を以て造られている。



第93図 2区1面As-B下水田水口(その2)

微高地に面した斜面部の区画に比べて中央低地部分の区画は概して面積が大きいのであるが、東寄りの大型の水田区画②の北辺に在る東西走行の畦には3カ所の水口があり、後述するように3カ所の水口がそれぞれ水田区画④・⑤・⑥に対応する位置に在ることから、水田区画④は更に細かい区画に分割されていた可能性が考えられるのである。また、その東半の畦の遺存によって区画される水田区画③と②もそうした細分化の一端を示すもの思慮されるのである。従って水田区画③・⑤・⑥と同様に、低地部の大型の水田区画はそれぞれ細かく区分されていた可能性も考慮されるのである。

一方、As-B下水田と微高地に於ける水田外の区域との境界を特定することはできなかったのである

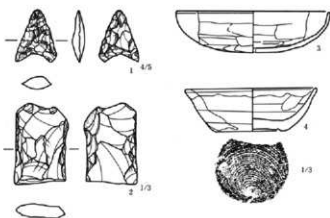
が、水田址西南部の水田区画⑨・⑩・⑪の南側を画する畦や水田区画⑬の西側を画する畦のラインは連続したクランク状を呈しているため、溝が掘削されていたとは形態的に考え難い。一方緩やかな傾斜面を形成する周囲の地形からも、これらの畦によって水田の範囲が決められるとも考え辛い。加えて後述する水田区画⑬の水口の存在を勘案するならば、これら畦の外周部には幅状の水田区画の形成が想定される。これに対して北東部の水田区画⑩・⑪、或いは大区画②の東側を画するプランに対しては、形態的に細長い水田面も想定され、或いは水路の存在も想定されるのである。

繰り返すように2区1面に調査されたAs-B下水田は自然の谷地形を利用した水田城址であり、小規模の水路敷設は想定し得るもののはっきりした給・排水路、畦等の遺存を確認することはできなかった。従って水田に於ける流通水の経路も明らかにはできなかったのであるが、水口の遺存によって谷地形斜面部の区画⑨から中央部の区画⑧へ、斜面部の区画⑩から区画⑬の南東にその存在が想定される区画への流水、低地部の区画⑭・⑮及び⑯から区画②への流水が確認されている。こうした状況から傾斜部の区画から傾斜部の区画へ、傾斜部の区画から低地部の区画へ、低地部の区画から低地部の区画へといたった機能的な排水経路のあったことが窺われる。また東部の微高地際には水路の存在も想定される。

09 2区1面に於ける遺構外の出土遺物

(第94図、図版46)

**概要** 2区1面からは遺構に伴わない遺物として石鏃(1)、石斧の欠損品(2)など縄文時代の遺物も見られたが、その中心は土師器坏(3)、須恵器坏(4)等、平安時代の所産のものを中心とする古墳時代後期以降の土師器や須恵器で、坏・甕・高台付碗・長頸壺などの破片が見られた。この他少量ではあったが、灰軸陶器や陶器の破片も出土してきている。



第94図 2区1面遺構外の出土遺物

## 2-2 2区2面の遺構と遺物

## (1) 2-2-1号溝 (第95図, 図版37)

概要 本溝は調査区東部の微高地上に位置する。

遺存状況はあまり良くなく、北部では断続的である。流水の痕跡は認められなかった。

2-2-2号溝と切り合うが新旧は特定できなかった。また、覆土中からは平安期を中心とする時期の土師器坏の破片が13点出土しAs-B下面の遺構なので、平安期の所産として判断している。

規模 長さ40.9m 幅54~66cm、  
深さ15cm

構造 凡そ南北走行をなすが、全体に緩く蛇行を繰り返している。

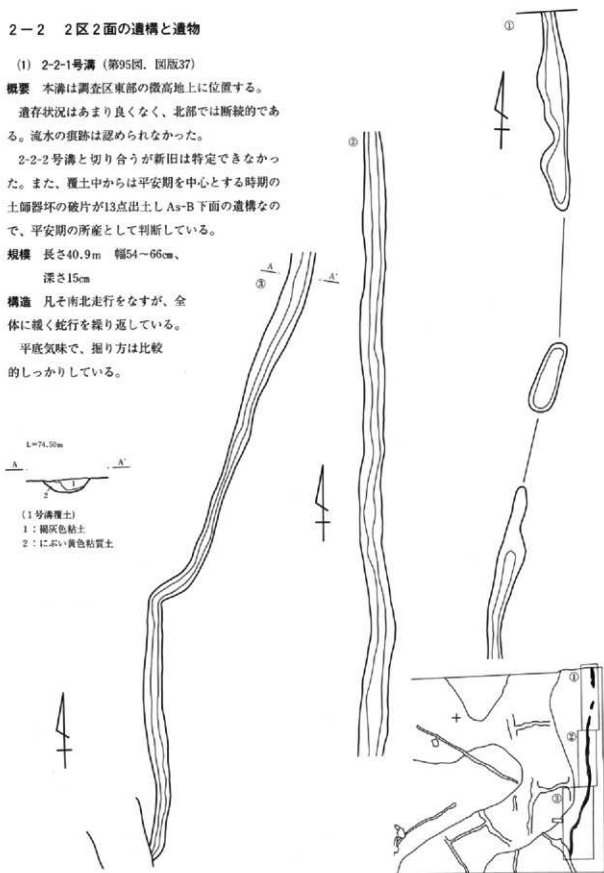
平底気味で、掘り方は比較的しっかりしている。



(1号溝覆土)

1: 褐色粘土

2: にぶい黄色粘質土



第95図 2-2-1号溝

第3章 発見された遺構と遺物

(2) 2-2-2号溝 (第96図、図版37)

**概要** 本溝は東部微高地上に位置する。南側は路線外に出ていて全体の状況はつまびらかではない。

流水の可否は不明だが、湾曲部分は太く、当初段階の1〜3層土による埋土と2層中心の後期の埋土部分とに識別されるので、掘り直しか流路変更があったと確認される。また、湾曲部の当初段階の形態からは湧水井戸であった可能性も想定される。

2-2-1号溝と切り合い関係にあるが、新旧は特定できなかった。また、平安期中心の土師器片を出土しAs-Bを含まないので、平安期の所産として判断される。

**規模** 長さ11.6m 幅56〜220cm 深さ34cm

**構造** 溝北端部が確認されている。北西〜南東走行で確認範囲では東に緩く蛇行している。

平底気味で壁面はやや開く。上述のように掘り直し、或いは流路の変更が想定されるが、溝本体の幅

は56cm程であり、湾曲部分で幅152〜220cmで広がる。湾曲部分の当初形態は細長いおたまじゃくし形を呈している。

(3) 2-2-3号溝 (第96図、図版37)

**概要** 本溝は東部微高地の南東隅部に位置している。北側は谷地形となり南側は路線外に出ているため、確認範囲は溝の中途部分と判断される。

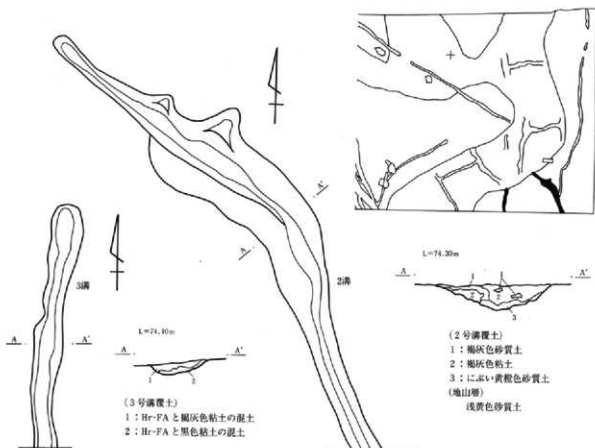
出土遺物は見られなかったが覆土に6世紀初頭の榛名山噴出のHr-FAを含むので古墳時代後期〜平安時代中期の所産と判断される。

高、流水の痕跡等は確認されなかった。

**規模** 長さ5.2m 幅66cm 深さ21cm

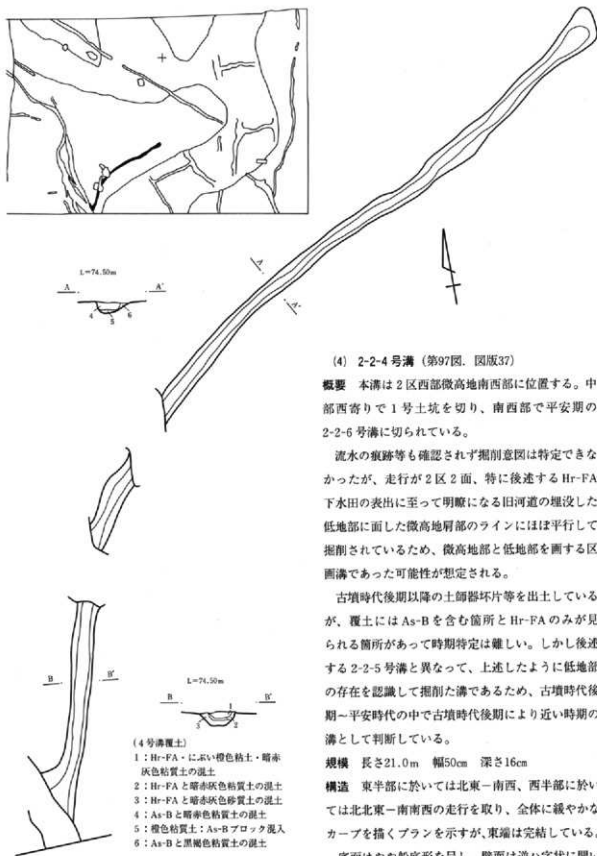
**構造** 南北走行の直線のプランを呈する。

底面は平底気味で、遺存状況はあまり良好でないのははっきりした状況は分からないが、壁面はやや開き気味になるようである。



第96図 2-2-1号溝





(4) 2-2-4号溝 (第97図、図版37)

**概要** 本溝は2区西部微高地南西部に位置する。中部西寄りで1号土坑を切り、南西部で平安期の2-2-6号溝に切られている。

流水の痕跡等も確認されず掘削意図は特定できなかったが、走行が2区2面、特に後述するHr-FA下水田の表出に至って明瞭になる旧河道の埋没した低地部に面した微高地肩部のラインにはほぼ平行して掘削されているため、微高地部と低地部を画する区画溝であった可能性が想定される。

古墳時代後期以降の土師器坏片等を出土しているが、覆土にはAs-Bを含む箇所とHr-FAのみが見られる箇所があって時期特定は難しい。しかし後述する2-2-5号溝と異なって、上述したように低地部の存在を認識して掘削した溝であるため、古墳時代後期～平安時代の中で古墳時代後期により近い時期の溝として判断している。

**規模** 長さ21.0m 幅50cm 深さ16cm

**構造** 東半部に於いては北東-南西、西半部に於いては北北東-南南西の走行を取り、全体に緩やかなカーブを描くプランを示すが、東端は完結している。

底面はやや船底形を呈し、壁面は逆ハ字状に開いており、比較的きれいな掘り方を見ている。

第97図 2-2-4号溝

第3章 発見された遺構と遺物

(5) 2-2-5号溝 (第98図、図版37)

**概要** 本溝は2区中程で北から入ってくる微高地から低地部を挟んで西側の1区から続く微高地の東端部にかけて遺存している。遺構は低地部で一端途切れて東西に分かれている。西半部では途中切れそうになっているが、西端は調査区の北側に出ていて全体の状況は不明である。東半部では低地部手前で切れている。

流水の可能性があるが、掘削意図は不明である。

古式土師器が出土しているが、確認面から古墳時代後期から平安時代の間の所産と考えられる。但しHr-FA下水田を含む低地部を意識せずに掘削されているので時期的には下るものと判断される。

**規模** 全長42.9m (西部15.6m 東部24.7m)

西部幅80cm 東部幅96cm 深さ18cm

**構造** 本溝は東西共に西北西-東南東の走行を取る直線的なプランを呈する。低地部で2.6m程途切れているがこの部分がつながっていたか否かは不明である。東端部は低地部の手前で途切れているが、東に延びていた可能性は残る。

底面は船底気味である。

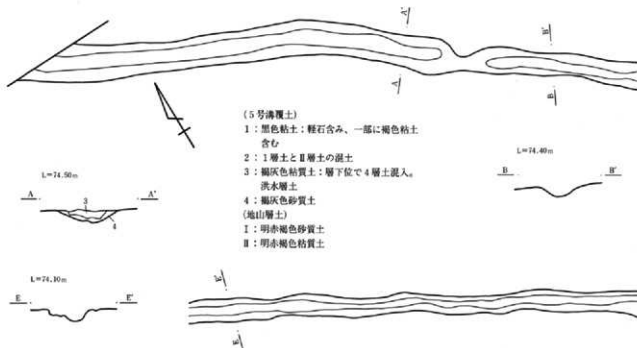
(6) 2-2-6・7・16・17・18号溝

(第99図、図版37-39・47)

**概要** 2-2-7号溝と2-2-17号溝は調査時期の関係から異なる遺構番号を持っているが同一の溝である。また2-2-6・16・18号溝は7・17号溝と絡み合うように遺存しており、規模も近似したものであるので、同一の掘削意図に基づいて掘削されたと判断されるため一括して報告する。尚、6号溝と16号或いは18号溝は、規模と走行から同一の溝である可能性を有している。

一方、6号溝と7号溝、17号溝と16及び18号溝は切り合い関係にあるが、7号溝が6号溝を切り、17号溝は16号溝を切ることが確認された。しかし17号溝と18号溝との新旧関係は特定できなかった。また7号溝は後述する2-2-8・10・22号溝とも切り合い関係にあるが、何れの溝に対しても新旧関係は特定できなかった。

さて4条の溝のうち6・7・16・17号溝は砂を多く混入しているため、流水があったものと想定される。18号溝は砂を16・17号溝のように混入せず流水の可否は確認できなかった。



第98図の(1) 2-2-5号溝

これらの溝からは平安期ものを中心とする土師器・須恵器片が出土してきているが、6号溝からは9世紀前半期の土師器坏(6-1)、17号溝からは9世紀後半期の須恵器高台付碗(17-1)が出土しているため、これらは概ね9世紀の所産として扱いたい。尚、この他土師(7-1)や磨石等の出土も見られた。

**規模** [6号溝] 長さ18m 幅104cm 深さ28cm  
 [7・17号溝] 全長62.2m (7号溝) 幅140cm 深さ33cm (17号溝) 幅88cm 深さ20cm  
 [16号溝] 長さ12.4m 幅88cm 深さ20cm  
 [18号溝] 長さ17.2m 幅96cm 深さ11cm

**構造** 6・7・16・17・18号溝の確認範囲に於ける走行ラインを見て見ると、西端部分で若干屈曲し、7・17号溝の中央やや南寄りの7号溝の範囲で東に大きく鉤行する箇所も認められるなど、やや複雑な走行を示すが、全体的には半径35m程の円周上を1/5程回転するように大きく右にカーブしながら方向を変ずる走行を示している。

6・7・16・17・18号溝は、全体としては何れも掘り方は箱形を呈している。

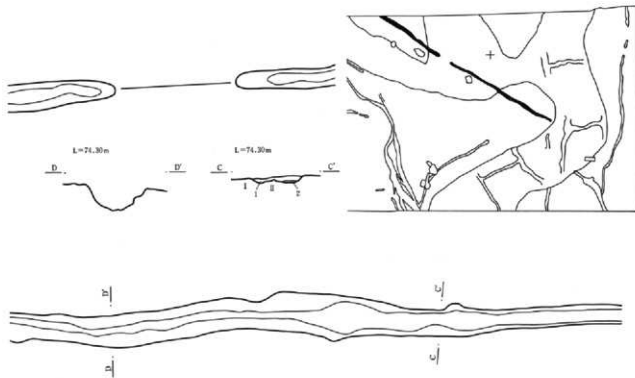
#### (7) 2-2-8・10・22号溝 (第99図, 図版38)

**概要** 2-2-8・10・22号溝は前述の2-2-6・7号溝に近い走行を示しており、一部重なって確認、調査されている。しかしその規模は6・7・17号溝に対し小さいものであった。想定される走行の延長から10号溝若しくは22号溝は8号溝と同一のものである可能性が考えられる。また10号溝は南北に分かれた同一の溝として処理したが、途切れた部分、南側の北端部の走行が若干乱れるので、或いは別遺構である可能性も考えられる。

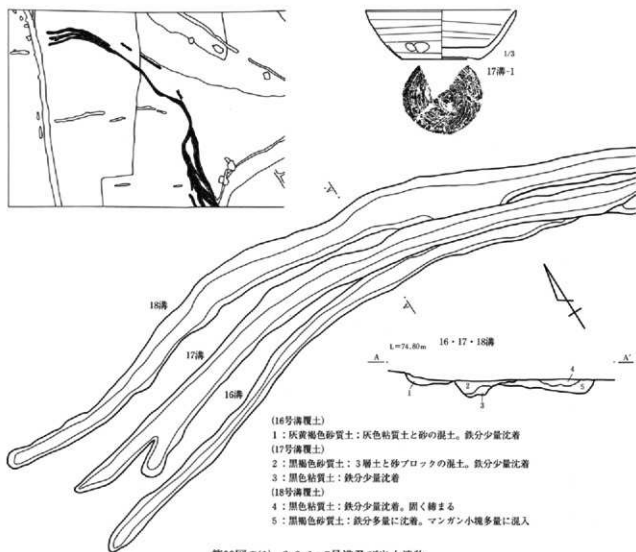
流水の可否は特定されず、これらの溝の掘削意図も特定することはできなかった。尚、10・22号溝は80cmの間隔を開けて併走しているため、道路遺構の可能性が考えられる。

また、これらの溝遺構の遺存状況はあまり良好ではなく、8・10号溝は途切れ途切れの状態で確認されている。新旧関係に於いては8号溝は7号溝に切られているが、同じく切り合い関係にある10・22号溝と7号溝との新旧は特定できなかった。

時期については10号溝からは平安期ものを含



第98図の(2) 2-2-5号溝



第99図の(1) 2-2-6・7号溝及び出土遺物

むしろ器蓋・杯の破片が出土しているため、平安時代以降の所産と判断される。一方、8・22号溝からは出土遺物は得られなかったが、8号溝は7号溝に切られているので9世紀後半期以前の所産、また22号溝が上述のように10号溝と対になるような溝であるならば平安期以降の所産として把握されることになる。

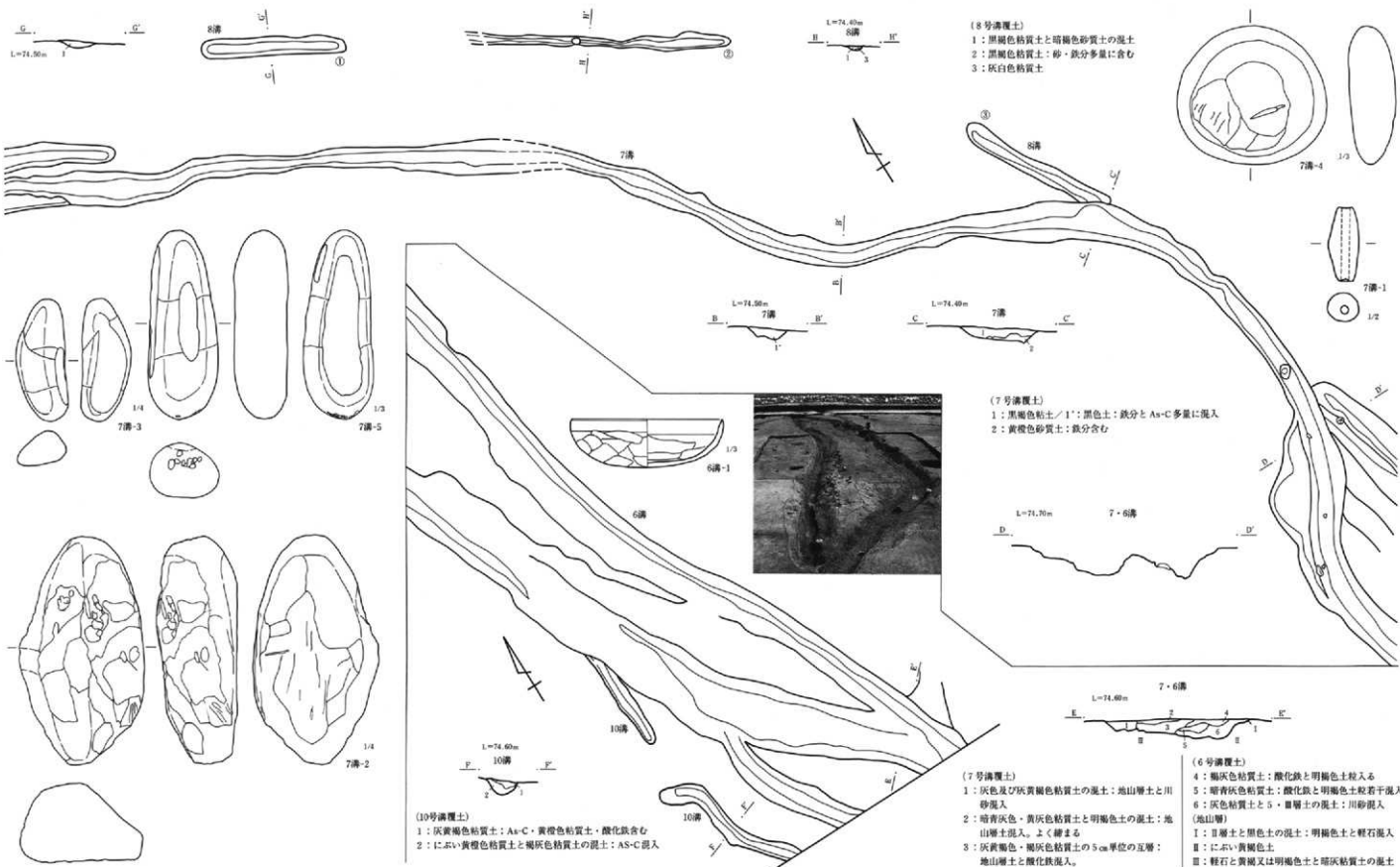
規模 [8号溝] 全長11.6m (① : 3.1m ② : 5.3m ③ : 3.2m) 幅44cm 深さ13cm

[10号溝] 全長6.2m (① : 2.8m ② : 3.6m) 幅40cm 深さ13cm

[22号溝] 長さ3.4m 幅64cm 深さ7cm

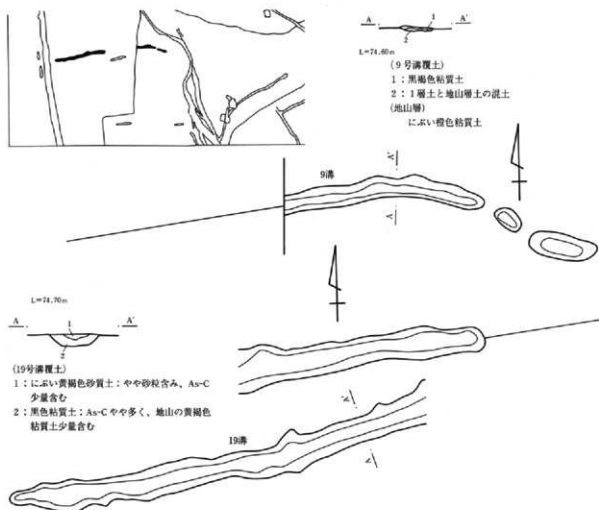
構造 8号溝は中・西部(①・②)に於いては7号溝にはほぼ平行な北西-南東の走行を取り、東部では走行を北北西-南南東に変ずるが、走行の変更は比較的急であったと想定される。一方、10・22号は北半部は8号溝東部と同じ北北西-南南東の走行を取るが、南半部は北西-南東の走行を取り、路線外に出るため全体の様子はつまびらかでない。尚、上述のように10号溝南半部(②)の北端は西に大きく走行を変えている。

掘り方の形態を見ると、8・22号溝は平底気味の底面形態を示す。一方10号溝は底部は船底形を呈し、壁面はやや開き気味である。



第99図の(2) 2-2-6・7・10号溝及び出土遺物





第100図 2-2-9・19号溝

(8) 2-2-9・19号溝 (第100図、図版38・39)

概要 2-2-9・19号溝は別番号を付されているが、規模と走行から同一の溝と判断している。

9号溝は東部で途切れ気味となり、19号溝は2-2-17号溝等と同様2-2-12号溝の東で途切れている。尚、掘削意図は特定できなかった。

出土遺物は無く、時期特定は難しいが、19号溝がAs-Cを多く含むので2区3面に付随する古墳時代前・中期の所産である可能性も残る。

規模 全長25.7m

[9号溝] 長さ6.9m 幅52cm 深さ8cm

[19号溝] 長さ14.2m 幅84cm 深さ14cm

構造 部分的に蛇行するが、19号溝から9号溝西半にかけては北上がりに緩やかなカーブを描きながら

東流し、9号溝東半部では南東に走行を変ずる。

底面は平底で箱船状の掘り方を呈する。

(9) 2-2-11号溝 (第101図-右、図版39)

概要 2-2-11号溝は途中が大きく途切れ、東西2条の短い溝からなっている。遺存状況は良好とは言えず、掘削意図も特定できなかった。

出土遺物もなく時期の特定もできなかったが、As-Cを含みHr-FAを含まないので、古墳時代前・中期の所産である可能性も残る。

規模 全長14.4m (①:3.4m ②:2.1m)

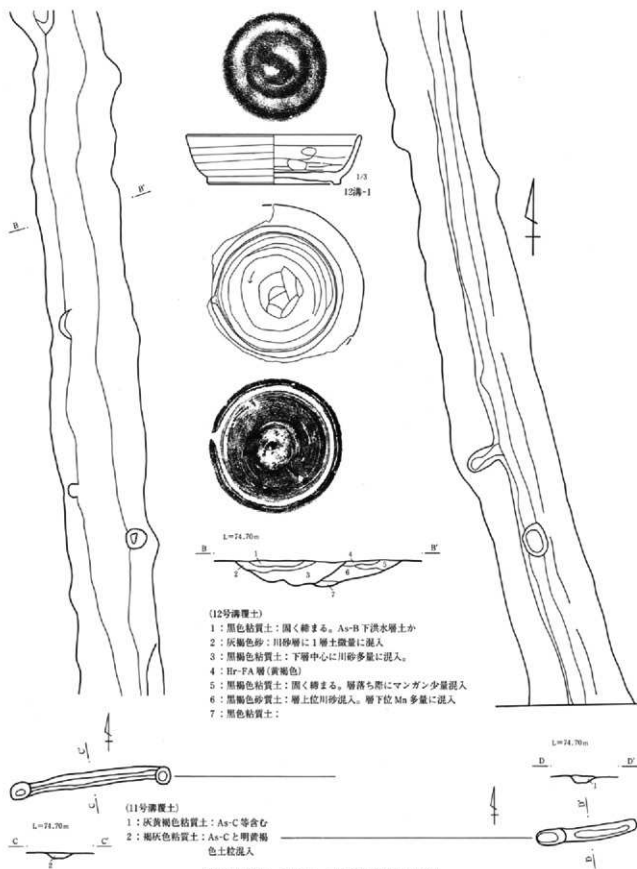
幅32cm 深さ6cm

構造 ほほ直線的な東西走行のプランを呈する。

底面は平底で壁面は開いている。







第101図の(2) 2-2-11・12号溝及び出土遺物

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### (1) 2-2-13号溝 (第101図、図版39)

**概要** 本溝は2-2-12号溝の東に近接し、北側の調査区外から入って南は12号溝に接して、それ以南は確認されなかった。高、12号溝との新旧関係は特定できなかった。

本溝は古墳～平安時代の所産ではあるが、出土遺物も無く、覆土からも時期特定には至らなかった。

**規模** 長さ4.9m 幅56cm 深さ11cm

**構造** 本溝は極く僅かに西に張り出しの見える南北走行のプランを見せる。

掘削形態は概ね船底状を呈する。

#### (2) 2-2-14・21号溝 (第101・102図、図版39)

**概要** 2-2-14号溝は調査区北端、2-2-12号溝の西に136cm隔たって位置し、その一部を調査した。

代の早い段階に遡る可能性も有している。

掘削意図も特定できなかったが、14号溝の覆土に砂が混ざるため通水の可能性が考慮される。

**規模** 全長29.1m

[14号溝] 長さ0.8m 幅52cm 深さ11cm

[21号溝] 全長6.0m (北側) 長さ1.9m 幅64cm 深さ16cm (南側) 長さ2.8m 幅80cm 深さ18cm

**構造** 14号溝は北西-南東、21号溝は北北西-南南東の走行を示している。

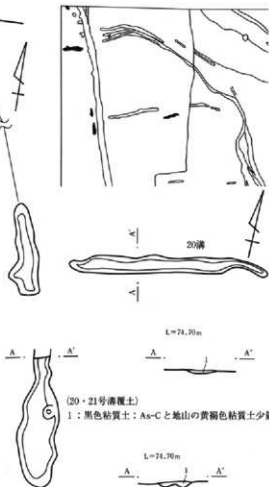
14号溝は確認した範囲では船底形の底部形態であった。一方21号溝は遺存状況が悪いため評述はできないが、やや不整形なプランを呈し、底面形態は北側は船底形、南側は平底気味であるが、何れも壁面は逆ハ字状に開いていた。



一方2-2-21号溝も12号溝の西に在って、68～112cm離れている。遺存状況は不良で、南北に並ぶ短い溝2条として確認、調査した。

14・21号溝は南北に23.3m隔たるが、何れも12号溝の西側に並走するように位置し、規模も近似するため、両溝が同一の溝遺構である可能性が考慮される。

14・21号溝からの出土遺物は見られず、時期特定には至らなかった。しかし21号溝の覆土にAs-C軽石が含まれていたため、或いは古墳時



第102図 2-2-14・15・20・21号溝

## (13) 2-2-15号溝 (第102図, 図版39)

**概要** 本溝は2-2-12号溝の西側130cmに東端が来ている。2-2-17・19号溝同様、12号溝等に規制された土地区画に伴う可能性が思慮される。

本溝からの出土遺物はなく、覆土の記録化もできなかったため、時期特定には至らなかった。

**規模** 長さ5.0m 幅76cm 深さ11cm

**構造** 本溝は東西走行のプランを呈する。

遺存状況があまり良くないため、全体的掘削形態は不明だが、底面は緩やかな船底形を呈している。

## (14) 2-2-20号溝 (第102図, 図版39)

**概要** 本溝は2-2-9・19号溝を結ぶラインの南に併走するが、走行が若干異なり幅員もやや狭い。

出土遺物は無く、時期特定には至らなかったが、覆土にAs-Cを含むため、3面の遺構である可能性も考慮される。

**規模** 長さ4.2m 幅36cm 深さ4cm

**構造** 本溝は西南西-東北東の走行を示すが、東端部では東西走行となる。

遺存状況が良くないので全体の状況は不明だが、底面形態は平底である。

## (15) 2-2-1号土坑 (第103図)

**概要** 本土坑は調査区中南部に位置する。本土坑は2-2-4溝に切られ、後述する1号落ち込みとの新旧関係は特定できなかった。

出土遺物はなかったが、その時期は2面の範囲に含まれる。尚、掘削意図は特定できなかった。

**規模** 径283×190cm 深さ26cm

**構造** 北西-南東に長軸を持つ不整形なプランを呈し、底面は平底である。

## (16) 2-2-2号土坑 (第103図)

**概要** 本土坑は2-2-1号土坑の南南西に位置する。本土坑周辺は自然の落ち込み等が多く、調査段階での遺構プランの確認と掘削に失敗し、一部掘りすぎでしまい、十分な記録化ができなかった。

本土坑は2-2-4溝と切り合うが、新旧関係は特定できなかった。また、出土遺物も無く、時期特定には至らず、掘削意図も特定できなかった。

**規模** 径(115×)105cm 深さ64cm

**構造** 本土坑は北西-南東方向に長軸を持つ隅丸方形プランを呈している。

底面は平底で壁面は開いている。

## (17) 2-2-3号土坑 (第103図)

**概要** 本土坑は2区中北部、谷地形合流部に挟まれた微高地上に在る。遺存状況は良好とは言えない。

出土遺物もなく、覆土の記録も取らなかったため、細かい時期は特定できなかった。また、掘削意図も特定できなかった。

**規模** 径140×94cm 深さ19cm

**構造** 本土坑は楕円形のプランを呈し、主軸は北北東-南南西を向き、底面は丸底状を呈する。

## (18) 2-2-4号土坑 (第103図)

**概要** 本土坑は2-2-3号土坑の東南東、谷地形合流部上の微高地上に位置する。

出土遺物がなく、覆土記録も残せなかったため時期特定はできず、掘削意図も特定できなかった。

**規模** 径244×120cm 深さ32cm

**構造** 本土坑は楕円形様の不整形なプランを呈し、主軸は北北西-東南東を向いている。

底面は丸底状を呈している。

## (19) 2-2-5号土坑 (第103図)

**概要** 本土坑は2-2-3号土坑の南東、谷地形の合間に位置する。遺存状況は良好ではなかった。

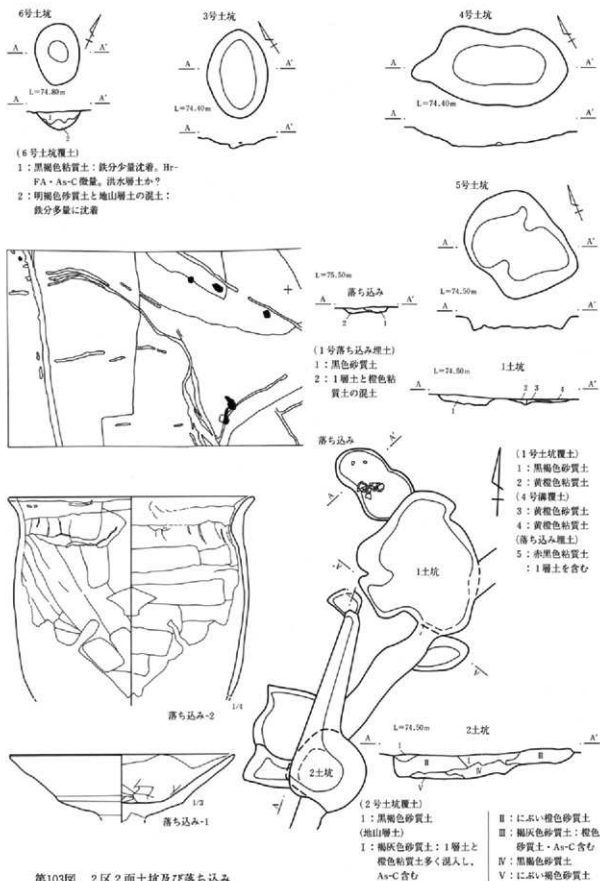
出土遺物もなく、覆土の記録も残せなかったため時期特定はできず、掘削意図は特定できなかった。

**規模** 径170×140cm 深さ19cm

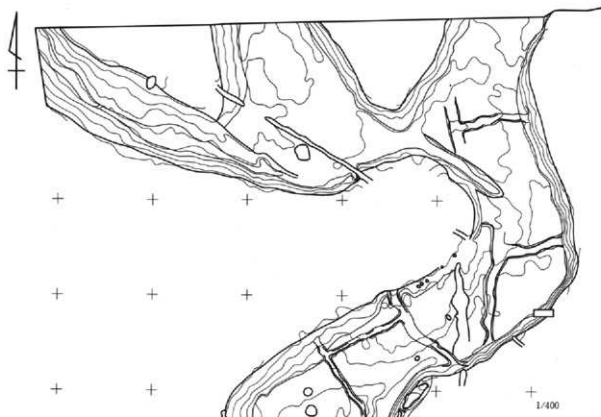
**構造** 本土坑は北北西-南南東に主軸を取る隅丸長方形のプランを呈している。

底面形態はやや不整形だが、概ね平底に近い形態を呈する。

第3章 発見された遺構と遺物



第103図 2区2面土坑及び落ち込み



第104図 2区2面Hr-FA下水田全体図

## 20 2-2-6号土坑 (第103図, 図版41)

**概要** 本土坑は2区北西隅部に位置している。

出土遺物がなく、覆土の観察に於いても細かい時期特定には至らなかった。また、掘削意図は特定できなかった。

**規模** 径93×72cm 深さ29cm

**構造** 本土坑は北西-南東方向に主軸を持つ楕円形プランを呈している。

底面は丸底状の掘削形態を示している。

## 21 2-2-1号落ち込み (第103図, 図版41・47)

**概要** 本落ち込みは2-2-1・2号土坑周辺に見られる自然の落ち込みの一つであるが、出土遺物が見られたことから特に番号を付して報告に加えた。

この落ち込みからは7世紀前半期の土師器高坏坏部(1)と6世紀後半期の土師器甕(2)が出土してきている。

**規模** 平面範囲88×124cm以上 深さ10cm

## 22 Hr-FA下水田 (第104・105図, 図版40)

**概要** Hr-FA下水田も前述のAs-B下水田同様、2区中・東部の低地部に遺されている。但し、As-B降下時点(天仁元年(1108))よりその範囲は狭められている。

本水田はHr-FA純層に被覆されていたため、6世紀初頭の所産と判断されるが、この水田は旧河道の痕跡である低地部に、その地形を利用し、或いは地形に規制されており、当時一般的な小区画水田としては造られていない。また水田面の面としての広がりには確認されたものの、畦畔が確認されなかったところも少ない。

**規模** [調査範囲平面規模] 幅15m 延長93m

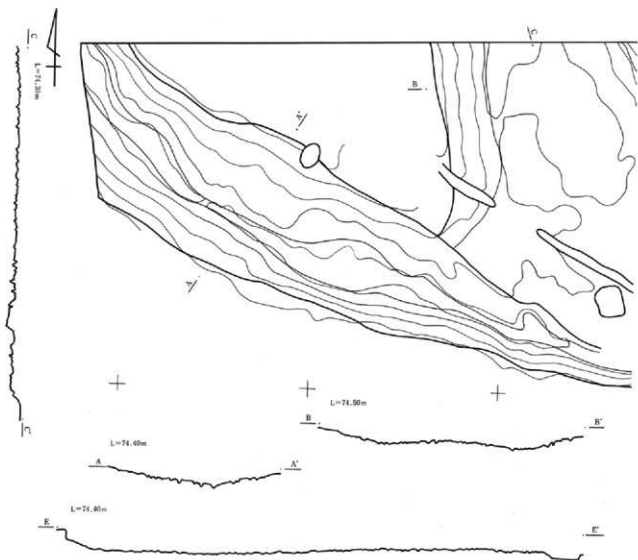
[各区画面平面規模] ① 7.8×10.2m以上

② 13.8×6.4m以上 ③ 8.8×57.2m以上

④ 12.0×9.6m以上 ⑤ 8.9×3.2m

⑥ 10.4×8.4m以上 ⑦ 12.8×10.4m以上

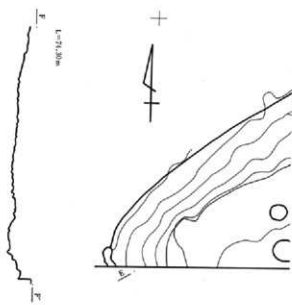
[畦] 幅50~138cm 高さ 8cm以下



**構造** Hr-FA下水田は埋没した川道の痕跡である細長い窪地を横位に畦畔を造って堰き止め、部分的にこの畦畔に直交する畦畔を造って水田面を形成している。

畦畔に囲まれた水田面は8枚以上が数えられるが、これらの区画のプランに共通する規格性は認められず、長方形(区画②)、三角形(区画③・④)、短冊形(区画⑤)、台形(区画⑥)等いろいろな形態のものが見られた。

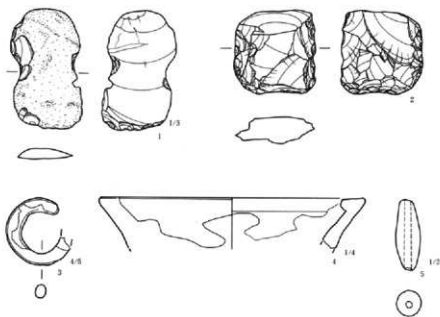
水田面には共通して植物の痕跡と判断される細かい凹凸が多く見られたが、畦畔は上下方向に圧縮されて遺存状況は良くなかった。また、水口等を確認することはできなかった。



第105図の(1) 2区2面Hr-FA下水田拡大図



第105図の(2) 2区2面Hr-FA下水田拡大図



第106図 2区面遺構外の出土遺物及び低地部所在溝様遺構146

2) 2区2面に於ける遺構外の出土遺物

(第106図、図版48)

**概要** 2区2面に於いても遺構に伴わない出土遺物が見られた。

その多くは2区2面に属する、即ち古墳時代後期～平安時代の所産と判断される土師器杯・高坏・甕・瓶、須恵器甕・蓋・高台付き碗などの多数の破片であったが、分銅型の石斧(1)、フレーク(2)など縄文時代に属する遺物の出土も見られた。

その他、古墳時代の所産である耳環(3)や2区2面の範囲に含まれる時期の所産と判断される甕の部品かとも思われる被熱痕の顕著な用途不明の土製品(4)や土鍾(5)などの出土も見られた。

2) 2区2面低地部所在溝様遺構 (第106図)

**概要** 前述した2-2-3号溝の延長線上、低地部Hr-FA下の面にに溝様の窪みが検出された。

上述のようにこの窪みのラインは連続性があり、またその北部の遺構規模は3号溝のそれに一致している。そのため同一の遺構とも考えられるが、3号溝は台地部に在り、本遺構は低地部にあってレベル的に一致しないので別遺構と解釈される。

また遺構としてもやや不明瞭であったため、3号

溝に加えたり、溝遺構としての報告することはしなかった。

**規模** 長さ10.1cm  
幅88cm (北部幅)  
35cm 深さ8cm

**構造** 本遺構の主軸は南北方向を向いている。

概ね浅い溝状の掘削形態を呈する。底面は平底気味であるが、その幅は北部では狭く、中南部で広がる。北部の東西両側のラインは比較的整っているが、中南部のそれは広がり狭まったりして一定しない。





## 2-3 2区3面の遺構と遺物

(1) 2-3-1号住居 (第107~110図, 図版43・48)

**概要** 本住居は調査区中部、旧河道の右岸に単独で所在する竪穴住居である。周囲に異なる時期のものも含めて住居遺構は一切確認されていない。

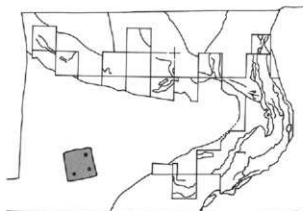
2区2面の調査に伴って処理したが、出土遺物から古墳時代中期の所産と確認されたため、2区3面に属するのが適当と判断した。このため、2区3面の遺構として報告するが、遺物・図面の注記は2区2面の記載を残した。

さて、本住居は床面より10cm程の範囲が残るだけであり、更に2-2-6・7号溝が住居中央を南北に横切り、特に中南部は面的に削り取られているなど、遺存状況はあまり良好ではない。出土遺物としては5世紀前半期の土師器片等があるが、北東部の柱穴底部からは土師器の碗(1・2)と甕(4)の出土が見られ、後述する灰に絡むように土師器甕(3)の出土も見られた。尚、甕(4)の破片が床面から出土してきている。

また本住居は所謂焼失家屋であり、南壁際5カ所に垂木の炭化材が礎位に出土しているが、東部のものではその周囲が焼土化している箇所も確認されている。一方、北壁中央寄りには、その東半には2-2-7号溝の掘削に伴う後世の崩落が生じているものの、壁から南へ210cm、東西60cmの範囲で灰の分布が見られた。灰は一部ブロック化した状態で観察されている。こうした炭化材や灰の遺存状況の観察からから、この住居は風向きが東-南東から吹いている時期に、東側に点火されたのではないかと推定される。

尚、本住居に於いては溝遺構との切り合い部分にあった可能性は残るものも、炉や竈を確認することはできなかった。しかし、北東隅部の床下土坑底部とその周辺に黒褐色粘質土の面的な堆積が認められたため、或いは竈を設置していた可能性が考慮される。

**規模** 長軸6.25m 短軸6.16m、深さ15cm



第107図 2区3面遺構配置図

柱穴 (北東) 径50×46cm、深さ65cm

柱穴 (南東) 径62×53cm、深さ29cm

柱穴 (南西) 径28×22cm、深さ71cm

周溝 幅4~18cm、深さ4cm

床下土坑 径84×80cm、深さ24cm

**構造** 本住居は主軸を北北西-南南東方向に取る、正方形に近い長方形プランを呈する。

掘り方を有し、住居中央にはこの時の動土痕が残る。掘削方向にははっきりしないが、概ね東或いは南に向けて掘削していたと想定される。掘り方形態にも強い規制は見られないが、北東-南東にかけては幅十数cm~60数cm幅で深さ8cm以下の浅い周溝様の掘り込みが見られ、全体に土坑様の浅い掘り込みが散在する。住居南東隅部には明瞭な床下土坑が見られ、その底・壁面と周辺掘り方面に黒色粘質土が貼りついているのが見られた。

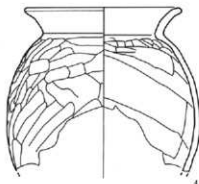
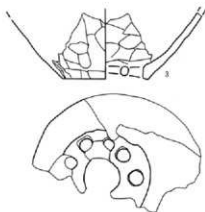
床面はこうした掘り方を黒褐色や灰褐色など種々の砂質土で埋め戻して造り出しているが、特に貼り床等の施工は行われていない。

本住居は4本柱の建物であったと判断されるが、北西の柱穴は7号溝に切られて確認できなかった。柱穴は壁面から130~160cmの位置、即ち住居の一辺のほぼ1/4の位置に掘削されている。覆土の断面観察から北東の柱の柱痕は径14cm、南東の柱は同じく10cmを測った。南西の柱穴は東側の2基に比して径

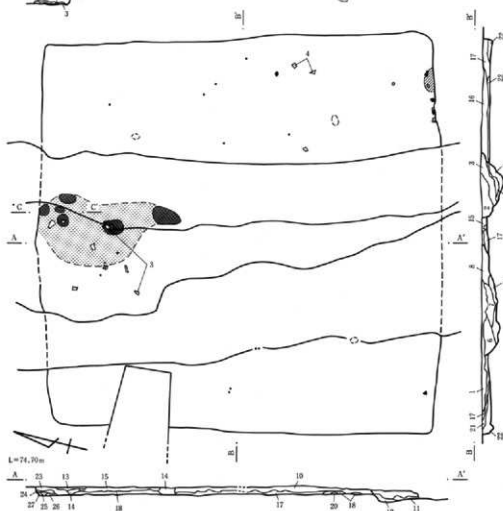
第3章 発見された遺構と遺物

(2-3-1住居北壁障覆土)

- 1: 褐灰色土と褐色粘質土の混土: 焼土・明褐色土含み、水平方向に面的広がる灰のブロック混入。
- 2: 3層土に灰のブロック入る。
- 3: 黒褐色粘質土: 部分的に明褐色土混入。層上面に灰が堆積し、若干層土中にも灰が見られる。



L=74.60m



L=74.70m



(軽石=As-Cか)

- (覆土)
- 1: 褐灰色砂質土: 灰黄色砂質土と軽石少量混入。鉄分沈着
  - (2-2-6号溝覆土)
  - 2: 褐灰色砂質土: 灰黄色砂質土多量に、層上位に軽石混入。
  - 3: 褐灰色砂質土: 軽石少量混入。
  - 4: 黒褐色粘質土: 粘性やや弱い。
  - 5: 灰褐色砂質土: 鉄分沈着。マンガン混入。
  - (2-2-7号溝覆土)
  - 6: 褐灰色粘質土: 軽石極少量混入。
  - 7: 黒褐色粘質土: 軽石極少量混入。
  - 8: 褐灰色砂質土: 灰黄色砂質土多く、軽石少量混入。
  - 9: 灰褐色粘質土: 粘質高い黒褐色砂(・川砂)混入。
  - 10: 褐灰色砂質土: 灰黄色砂質土と少量の軽石混入。鉄分沈着。
  - 11: 褐灰色粘質土
  - 12: 褐灰色砂質土: ほほ砂層。

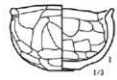
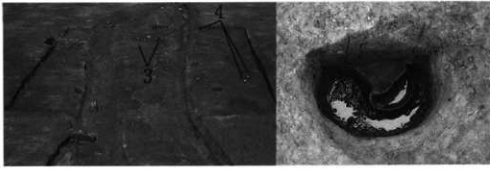
(住居廃棄後の埋没土) (軽石はAs-Cか)

- 13: 5: 灰褐色砂質土: 灰黄色砂質土多量に混入。
- 14: 7: 褐灰色砂質土: 軽石少量混入。
- 15: 10層に同じだが色調やや明るい。
- 16: 5層に同じだが色調やや明るい。
- (住居廃棄時の埋没土—住居内側)
- 17: 褐灰色砂質土
- 18: 15層に同じだが粘質。
- 19: 黒褐色砂質土

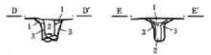
20: 黒褐色砂質土: ほほ砂層。

- (住居廃棄時の埋没土—壁際三角堆積)
- 21: 褐灰色砂質土: にぶい褐色粘質土多く混入。
  - 22: 褐灰色砂質土: 層下位に明褐色粘質土混入
  - 23: 灰褐色砂質土: 明褐色砂質土少量混入。
  - 24: 褐灰色粘質土: 灰褐色粘質土の混土。
  - 25: 黒褐色粘質土
  - 26: 黒褐色粘質土: 褐灰色粘質土ブロック少量混入。
  - 27: 褐灰色粘質土: マンガン小塊混入。

第108図 2-3-1号住居(覆土)及び出土遺物



L=74.50m

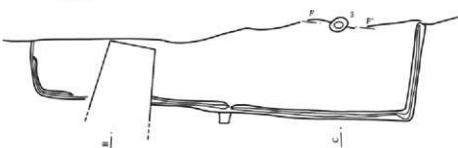
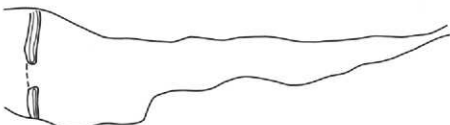
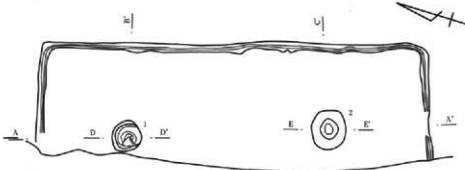
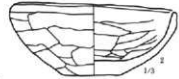


(北東柱穴覆土)

- 1: 黒色砂質土と黒褐色砂質土の混土。
- 2: 黒色砂質土
- 3: 黒褐色砂質土にぶい褐色砂質土極少量混入。

(南東柱穴覆土)

- 1: 灰褐色砂質土：マンガンを少量混入。
- 2: 黒色砂質土：マンガンを少量混入。
- 3: 黒褐色砂質土



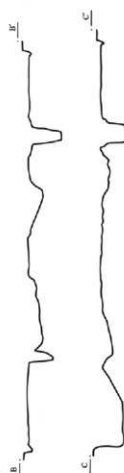
L=74.50m



(南西柱穴覆土)

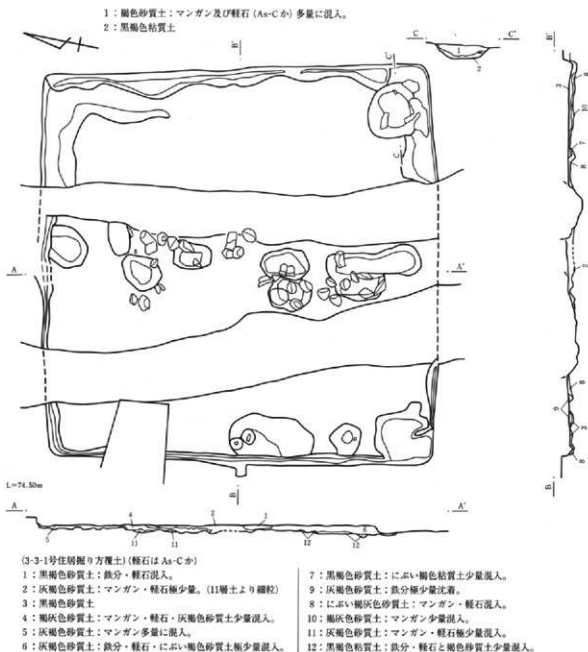
- 1: にぶい褐色粘質土：黒色砂質土ブロック多量に混入。

L=74.60m



第109図 2-3-1号住居(覆土)及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

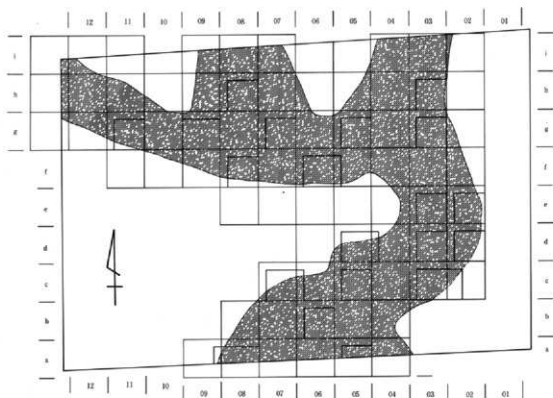


第110図 2-3-1号住居 (掘り方)

が小さく、(床造り出し後柱穴が掘削されなかった) 柱痕と判断される。こうしたことから柱材は径12cm ±数cmのものを使用したと判断されるが、柱材の横断面形特定できなかった。

中北部の灰の分布が比較的連続しているため、棟は東西方向を向いていたものと判断される。また、北東柱穴の底面には前述のように土師器の大きな破片が埋設されていた。出土状況から柱はこの上に設

置されたことが確認され、またその割に土器片の破壊が進行していないため、これらの土師器片は礎石の役割を果たしていたことが分かる。従って柱に掛かる支持力は小さく、本住居の基礎構造が実体としてラーメン構造ではなく、即ち壁際の堅穴住居ではなかったことが分かるのである。更に南壁際に炭化した垂木材が見られることから土置きを施していたことも確認された。



## (2) 2-3-旧河道-1 (試掘) (第111図, 図版44)

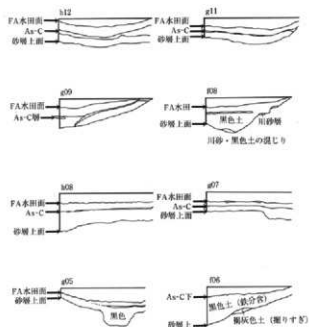
**試掘調査実施の経過** 2区の窪地形成の要因である旧河道では、試掘調査(第1章第1節末尾)で遺物の包含が確認(26-Cトレンチ)されていた。

しかし全面調査とした場合、調査に相当の期間を要すると予想されたため、遺物分布範囲の確認と調査範囲の限定を目的として試掘調査を実施した。

試掘調査はグリッドを設定した20カ所(対象区域の1/4強)に対して実施した。

**グリッドの設定** またこれに伴って、遺物包含層に対する出土遺物の処理を考慮し、旧河道の調査に限定するグリッドを設定した。尚、グリッドはX軸ポイント215、Y軸ポイント220を基点に、北西方向に展開する5mグリッドとした。

**試掘調査結果の概要** この試掘調査の結果、旧河道西部と北東端部及び南端部では遺物が少ないか認められなかったため、試掘グリッドの範囲の調査に留め、遺物の出土状況によって部分的に拡張することとした。



第111図 2-3-旧河道試掘調査

東部については遺物が多く認められたため、25×15mの範囲に対し全面調査とすることとした。

### 第3章 発見された遺構と遺物

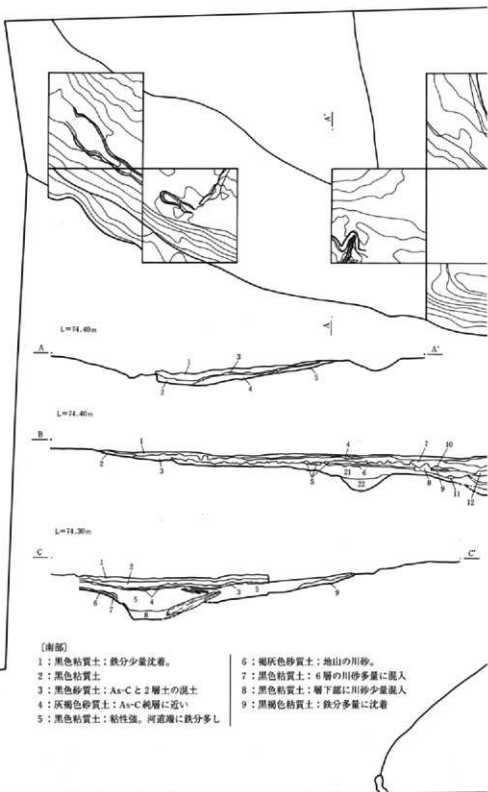
—旧河道堆積層—

[北部]

- 1: 黒色粘質土
- 2: 黒色粘質土: As-C・川砂多量に混入
- 3: As-C純層様の褐色砂質土
- 4: 黒色粘質土: 粘性強
- 5: 黒褐色粘質土主体

[中央部] (軽石はAs-Cか)

- 1: 黒褐色粘質土: 河の擾乱有。As-C混入。Hr-FA下木田土墳
- 2: 褐色砂質土: マンガン・軽石混入。鉄分沈着
- 3: にぶい褐色砂質土: 川砂か
- 4: 暗褐色砂質土
- 5: 21層土に3層土の入る混土
- 6: 黒色砂質土: 軽石層に近い
- 7: 5層に混るが上部に川砂。下部にAs-C多量に混入
- 8: 黒色粘質土: 川砂・As-C多量に混入
- 9: にぶい褐色砂質土: 川砂にAs-C多量に混入
- 10: 6に混るが粘性弱
- 11: にぶい褐色砂質土: 川砂層か。3に比し粒サイズ粗
- 12: にぶい黄褐色砂質土
- 13: 黒色砂質土: (川)砂多量に木片少量含む。鉄分沈着
- 14: 黒褐色粘質土: 川砂少量混入。木片・鉄分多量を含む木器・流木の包含層
- 15: 灰褐色砂質土: 1層土ブロック混入。砂細粒で固く締まる
- 16: 14層土に川砂大ブロックで多量に混入。
- 17: 21層土に川砂・As-C多量(上位では層状)に混入
- 18: 黒褐色粘質土: 川砂・As-C少量混入
- 19: 黒褐色砂質土: 18層土に比し粘質土少量
- 20: 極暗褐色粘質土: 底部黒色粘質土中木器沈着の鉄分層
- 21: 黒色粘質土: 鉄分沈着
- 22: 黒褐色粘質土: 21層土から底部へ徐々に灰色がかる

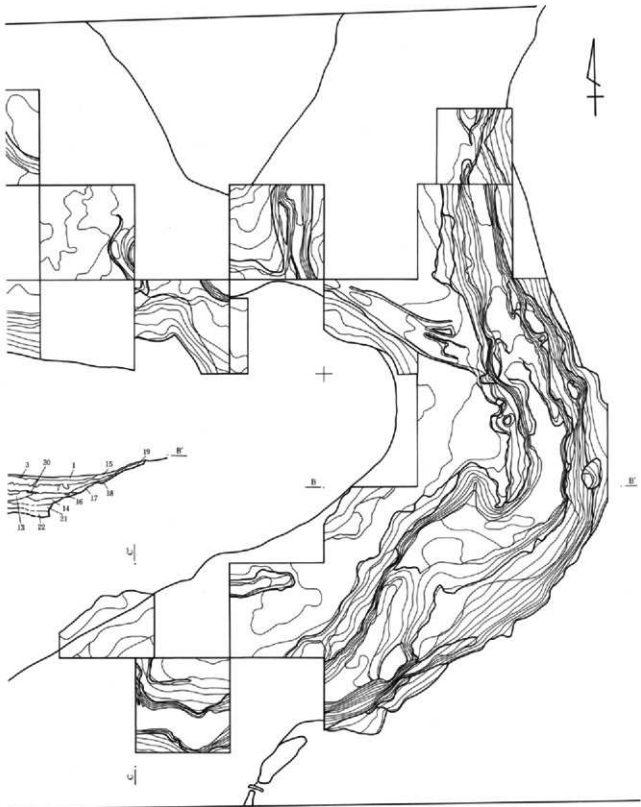


第112図の(1) 2-3-旧河道全体図

#### (3) 2-3-旧河道-2

(第112-124図。図版44・45・48-59)

概要 後世まで窪地を残すことになる旧河道は、2区中・東部に位置する。河道は1区から続く微高地

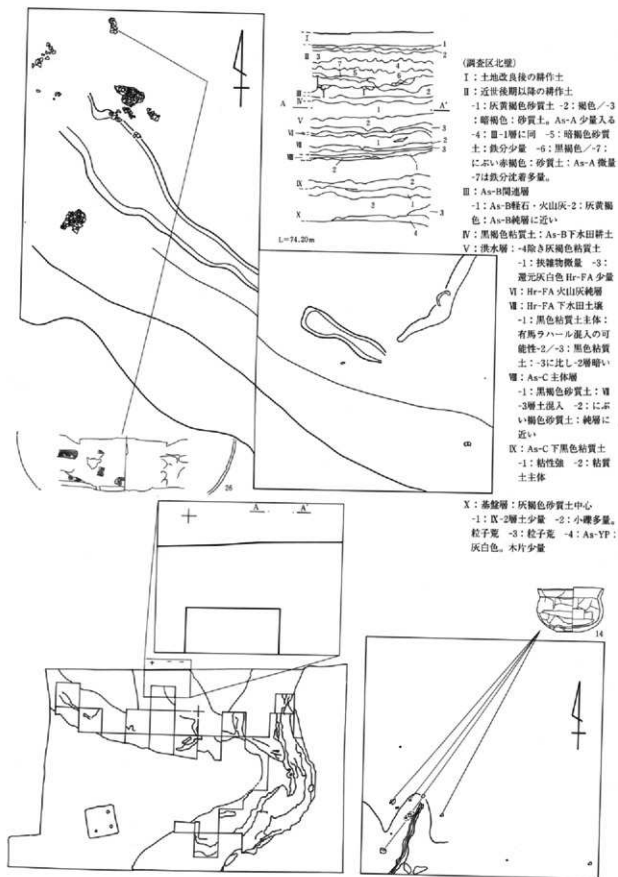


第112図の(2) 2-3-旧河道全体図

と3区から続く微高地を画するもので、前者の東端部を北から東・南へとなぞるように開析している。

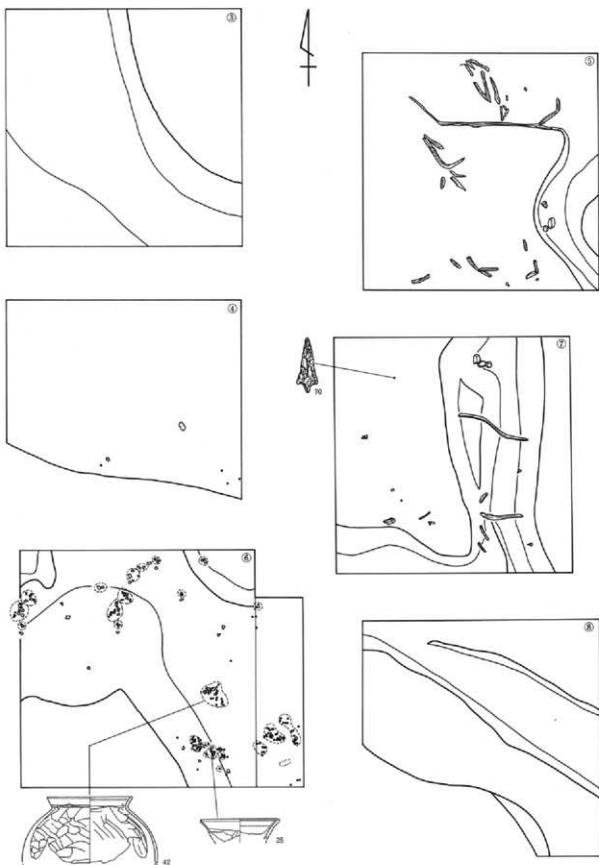
2-3-旧河道は時期によって流水位置の移動はあるものの流路に大きな変動はなく。(162頁に続く)

第3章 発見された遺構と遺物

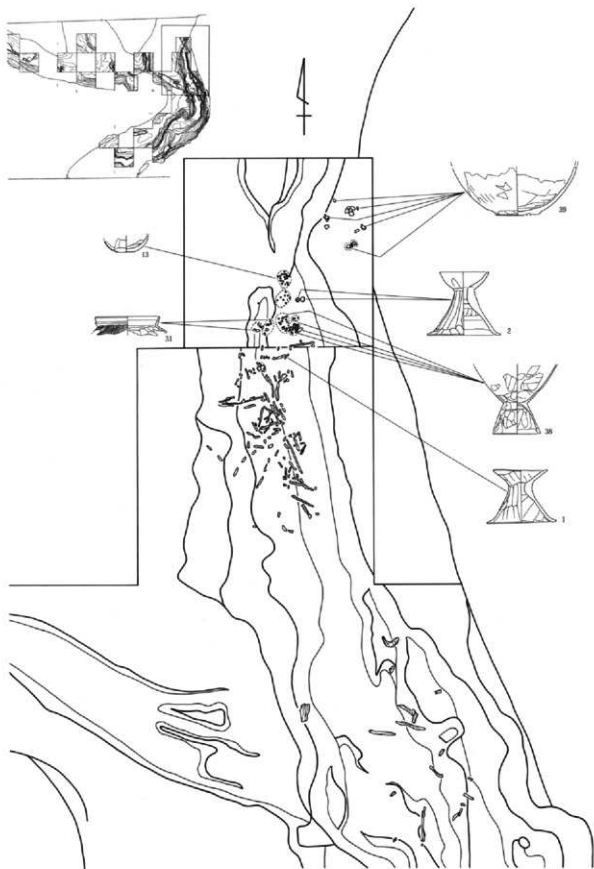


第113図の(1) 2-3-旧河道北西部及び出土遺物

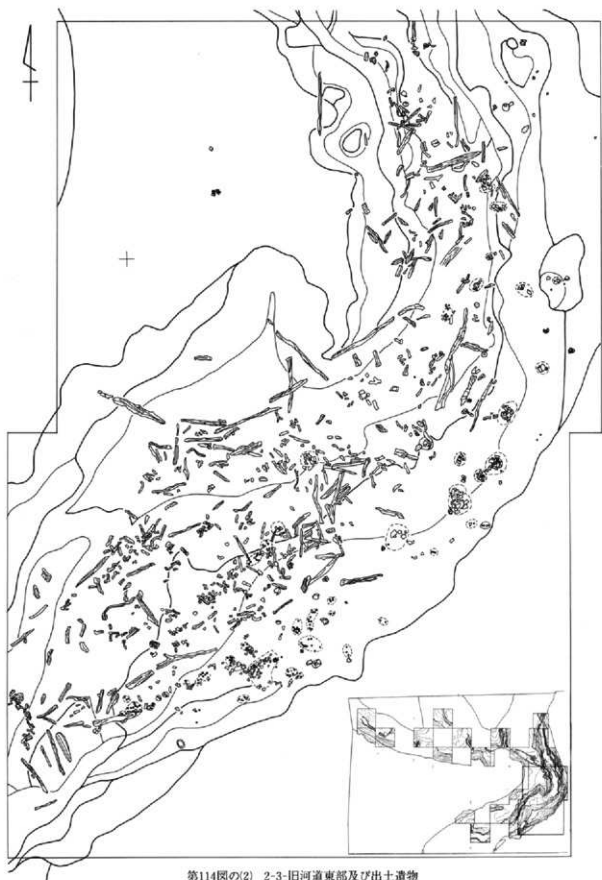




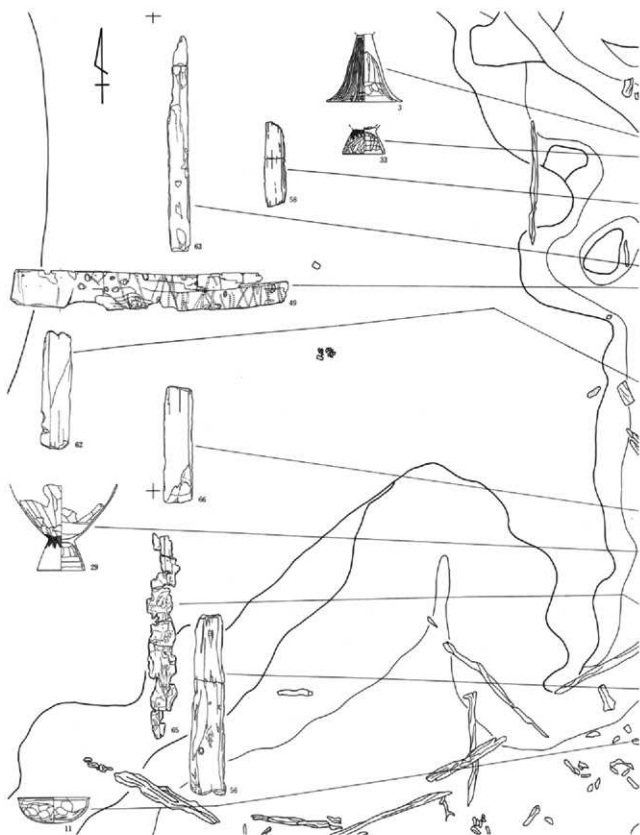
第113図の(2) 2-3-旧河道北西部及び出土遺物



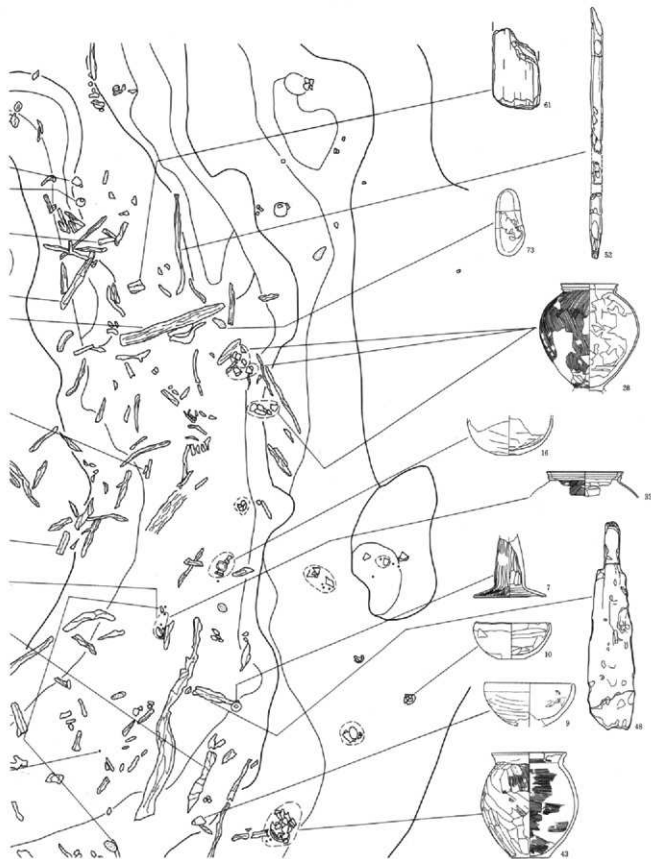
第114図の(1) 2-3-旧河道東部及び出土遺物



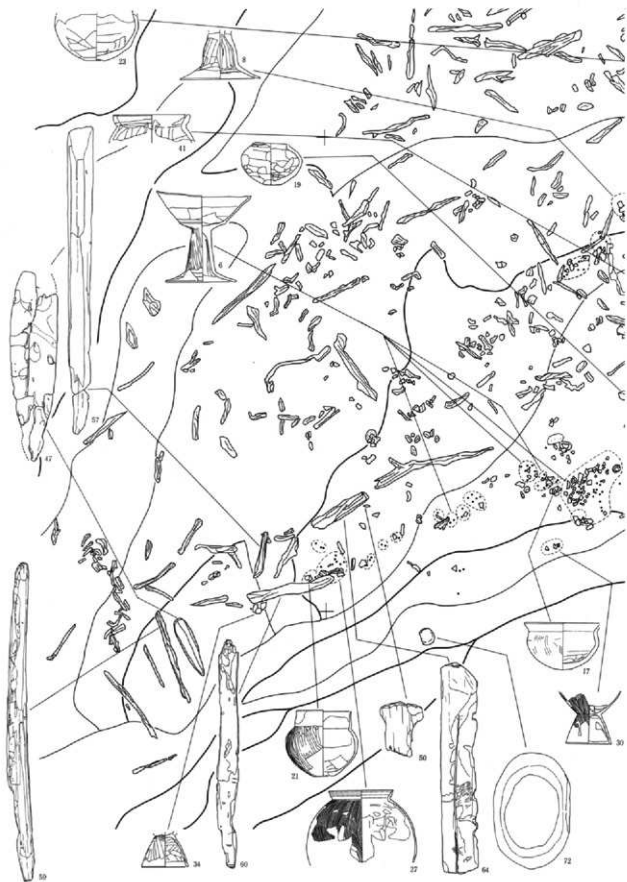
第114図の(2) 2-3-旧河道東部及び出土遺物



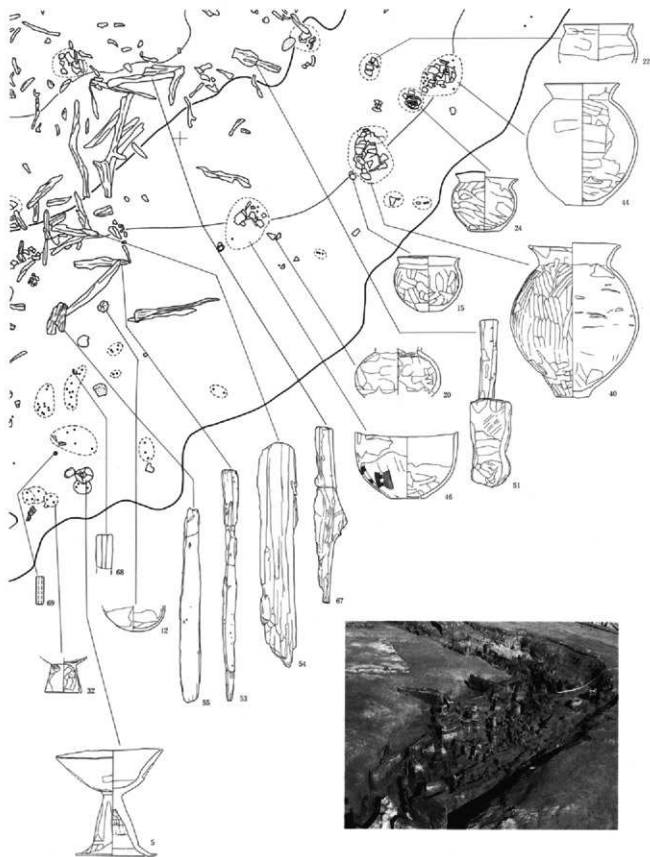
第115図の(1) 2-3-旧河道中東部北寄り付近及び出土遺物



第115図の(2) 2-3-旧河道中東部北寄り付近及び出土遺物



第116図の(1) 2-3-旧河道中東部中央付近及び出土遺物



第116図の(2) 2-3-旧河道中東部中央付近及び出土遺物

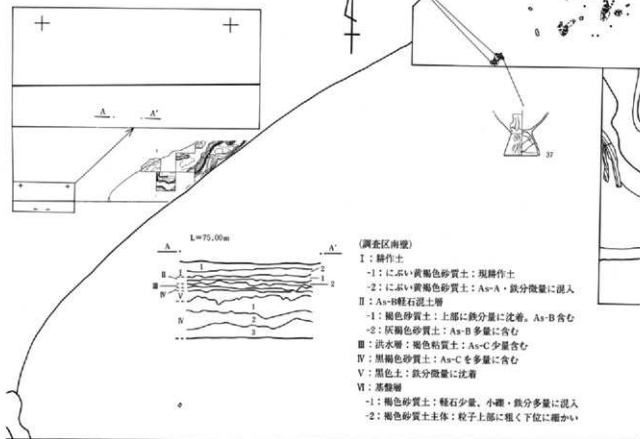
### 第3章 発見された遺構と遺物

(153頁より) 概ね3筋の流れが北寄りで合流し、南流するものであった。北側3筋の何れが本流かは特定できなかったが、便宜上、以下本流を中・南部とこれに底面が連続する北からの分流に充て、西方に分岐するものを支流1、支流1から更に北西に分岐するものを支流2として記載することとする。

前項に記したように旧河道に対する調査は調査期間等に鑑みて全面掘削は本流中央付近に限定し、他は試掘グリッド範囲の掘り下げと部分拡張に留めたが、多数の遺物等が出土した。土器類では本流と支流1の広範囲に分布し、何れも土師器で4世紀後半期の高杯(1-3)、埴(18)、小型甕(21)、台付甕(27-38)、5世紀前半期の高杯(4-8)、椀(9-17)、埴(19-20)、小型甕(22-24)、甕(39-45)、甕(46)の他4百片を超える該期の土師器片の出土を見た。

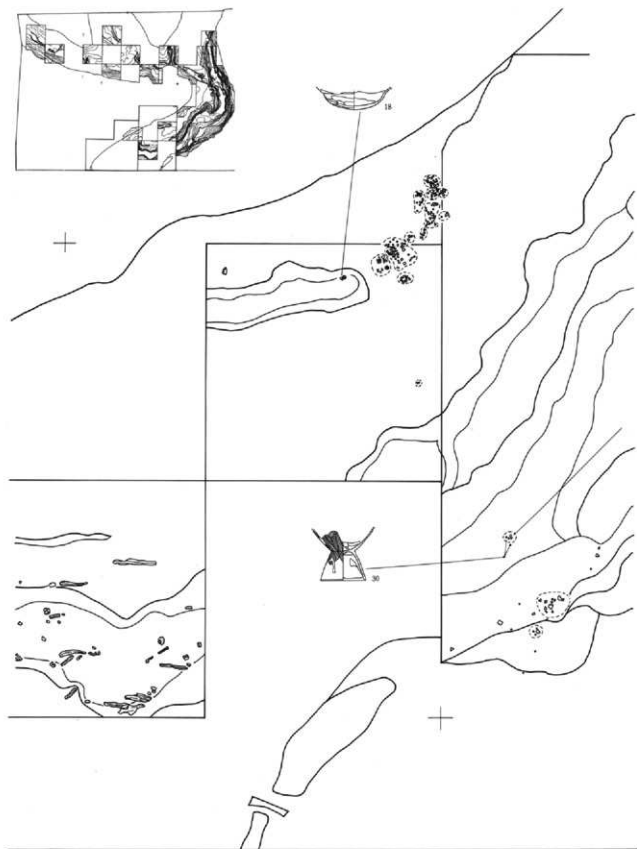
また木質のものは本流の中程に集中し、着柄平楸(47・48)、えぶり(49)、柄(50)、横樋(51)といった

農具や、割材(52-54・57・58)や板材(55・56・59・60)を用いた杵、厚板材(61-63)、側縁にはぞを削ったもの(64)を含む薄板材(65)や割材(66・67)といった木製品や多量の流木も見られたが、これらの木器や流木の多くは出土層位から土器と同時期と判断される。また、これらの土器や木器に混ざって該期の所産と判断されるヒスイ製の管玉(68・69)も出土している。この他、縄文時代の石鏃(70)やフレーク(71)、時期の特定できなかった磨石(72)や鉄分の付着するこも編み石(73)、台石(74)なども確認されている。(169頁に続く)

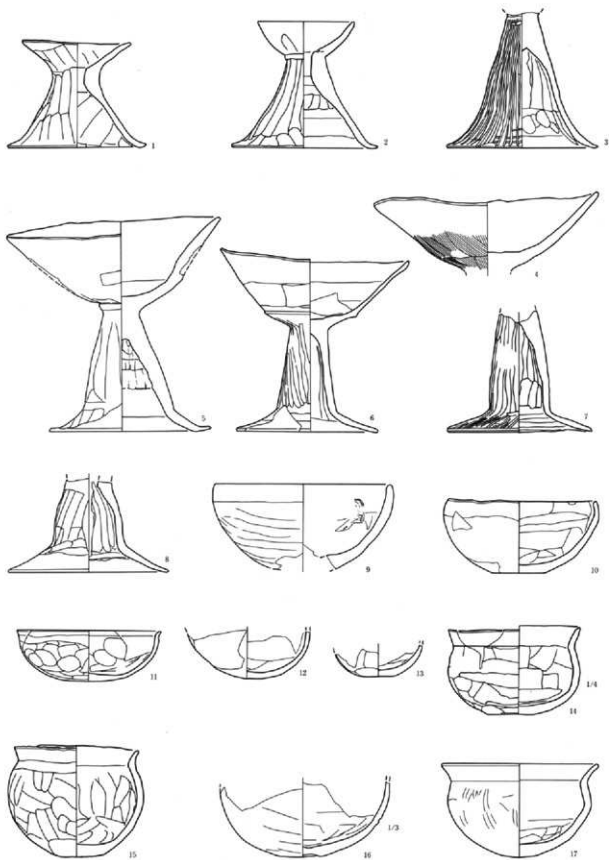


第117図の(1) 2-3-旧河道東南部及び出土遺物

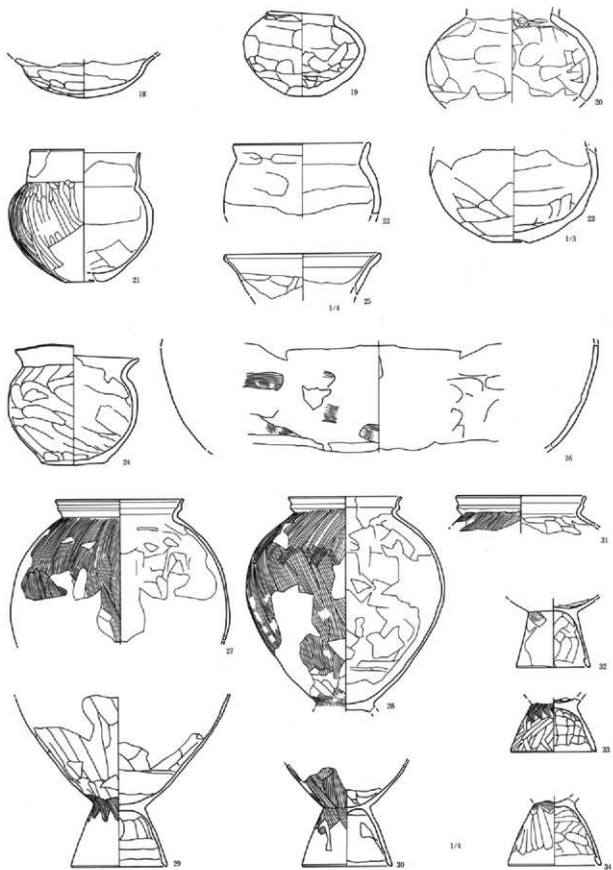




第117図の(2) 2-3-旧河道東南部及び出土遺物

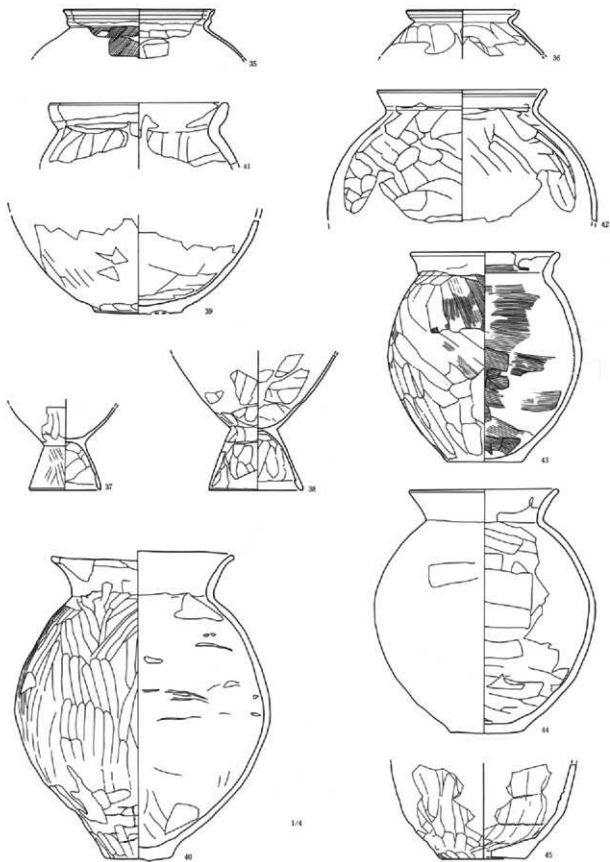


第118図 2-3-旧河道出土遺物 (その1)

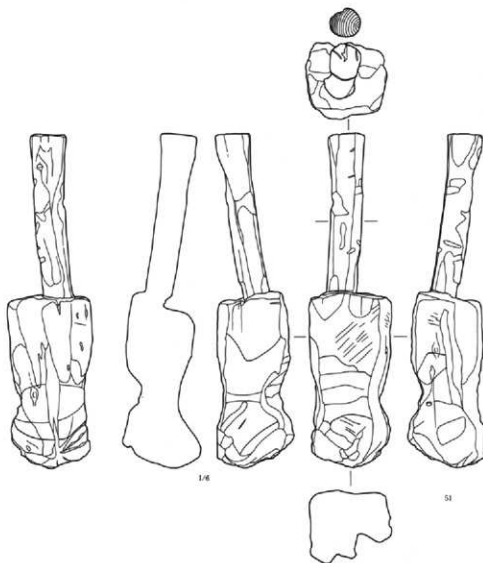
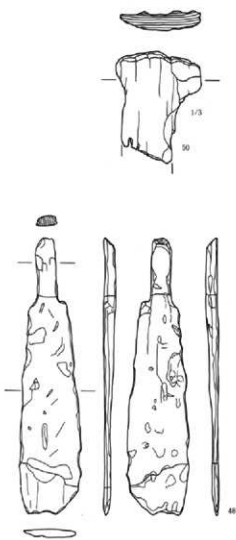
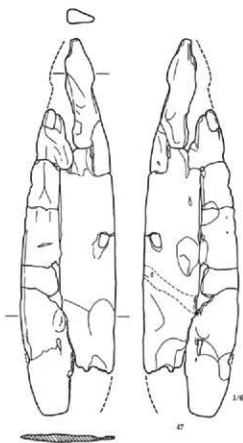
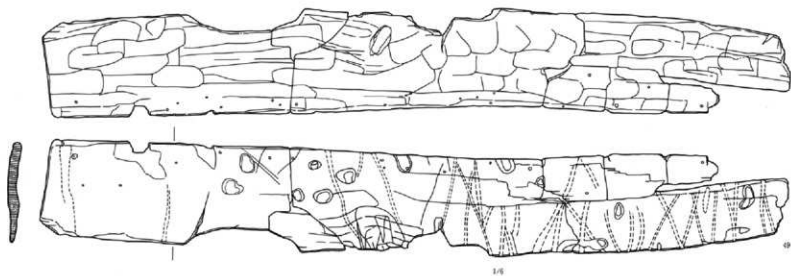


第119図 2-3-旧河道出土遺物(その2)

第3章 発見された遺構と遺物

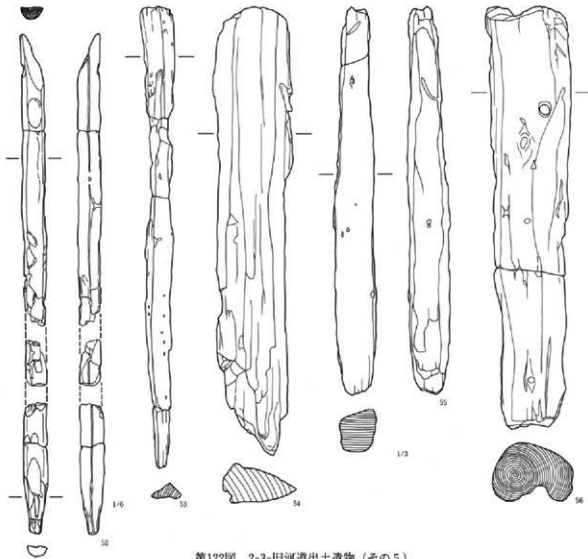


第120図 2-3-旧河道出土遺物 (その3)



第121図 2-3-旧河道出土遺物(その4)





第122図 2-3-旧河道出土遺物（その5）

(162頁より) 2-3-旧河道は出土遺物及び土層の観察所見から、3世紀以前に河道としてのピークがあり、As-C降下時点ではかなり埋没している。そして5世紀前半期頃までは水流があったものの、5世紀後半までには水流が途絶えていったものと判断される。但し支流2は出土遺物及びテフラの遺存状況等から4世紀後半～5世紀前半期に於いて既に殆ど埋没していたものと思慮される。

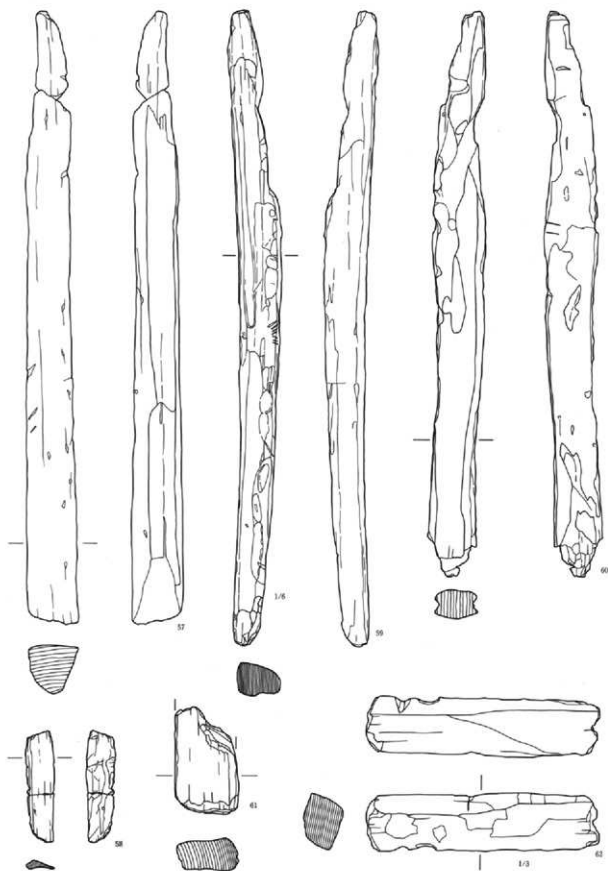
規模 本流 長さ62.0m 幅径11.6m 深110cm

支流1 長さ41.5m 幅径7.3m 深55cm

支流2 長さ10.0m 幅径15.2m 深55cm

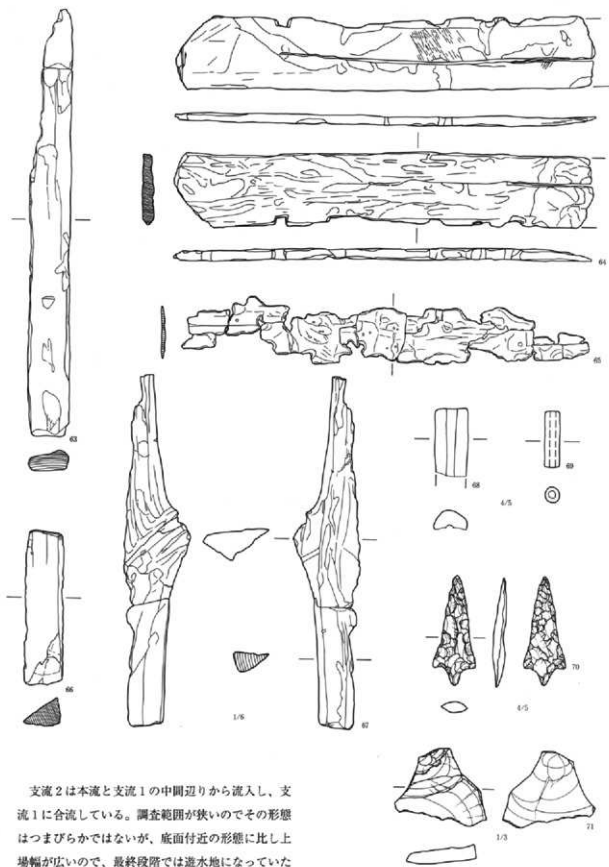
構造 旧河道の本流は北北東方向から調査区東部に入り、15m程下って西からの支流2を合わせたところで南南東に走行を転じ、半径25m程の円周上を時計回りに1/3周程して調査区南端付近で南に走行を変じ、踏線外に流れ出している。この円弧を描く部分がよどみとなっており、出土遺物及び流木の殆どがここから出土している。尚、本流の北部に於いては2筋の流露を確認している。

支流1は2区中部で北西側から入り、6m程下ったところで東南東に、更に12m程下って東北東方向に流れ変じ、支流2を併せて本流に合流している。



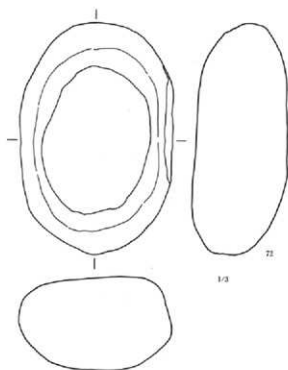
第123図 2-3-旧河道出土遺物 (その6)





支流2は本流と支流1の中間辺りから流入し、支流1に合流している。調査範囲が狭いのでその形態はつまびらかではないが、底面付近の形態に比し上場幅が広いので、最終段階では進水地になっていた可能性も考慮される。

第124図 2-3-旧河道出土遺物 (その7)

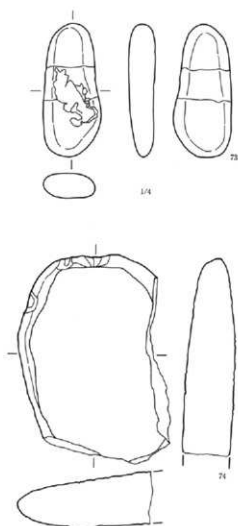


20 2区3面に於ける遺構外の出土遺物

(第125図、図版60)

概要 2区3面に於いては旧河道付近を中心として遺構に伴わない出土遺物が見られたが、その多くは旧河道に関連していた遺物と推定される。

出土遺物は土師器台付甕・壺・壺・埴等、何れも4・5世紀のもので、2,133片を数えた。



第125図 2区3面遺構外の出土遺物

## 第3節 3区の遺構と遺物

### 1-1 3区の調査概要

3区は西半部が2区から続く微高地、東半部が4区に続く谷地形になっている。主に1面調査であり、

後述するように下位面に対しては試掘調査のみ実施している。

1面では概ね中世以降の時期の遺構を確認調査した。

このうち近世に属すると断定された遺構では広瀬用水に属する用水路4条、これに伴う池遺構1基、畠の耕作痕1面及び2箇所、井戸1基があった。このうち溝1条と井戸は18世紀以前のものであった。

中世を中心とする時期の遺構として扱ったものは、区西部で屋敷遺構1箇所、南西部でピット13基、区東部で鋤先痕を残す水田面1面以上であった。

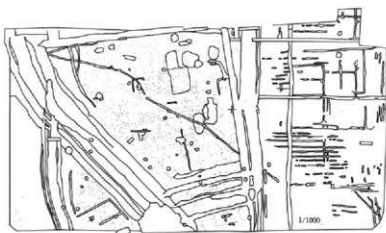
このうち屋敷遺構では堀及び溝併せて35条、堅穴建物5軒、64棟以上の掘立柱建物を構成するピット2,679基、井戸12基、土坑27基を確認、調査している。これらの遺構が全て同時期か否かは特定できなかった。

2面では古墳～平安時代の遺構を対象に、区東半部に於いて試掘調査を実施した。

その結果、北側グリッドで6～11世紀の洪水層で覆われた畠のサクの残欠3条と小ピット幾つかを確認できている。

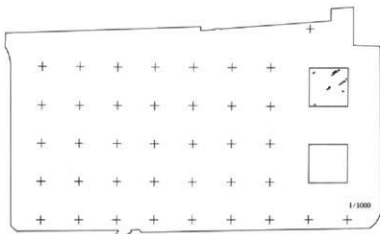
しかし遺構の広がりが期待できる状況ではなく、時間的な制約もあったため、面的調査は行わなかった。

3面では2面の調査に引き続き、洪積層を確認面



だが、出土遺物やピット（柱穴）出土炭化材の年代測定から屋敷遺構は概ね鎌倉時代の所産として把握されるものであることを確認している。尚、出土遺物はさして多くはなかったが、経文を墨書した礎石や簀など珍しい遺物の出土も見られた。

この他、3区北西から中南部にかけて掘削されている平安期所産の溝1条を確認、調査している。



に試掘調査を実施した。しかし風倒木1基を確認し石敷1点を得たに過ぎなかったため、調査は試掘調査に留めた。

1-2 3区1面の遺構と遺物 I (近世以降)

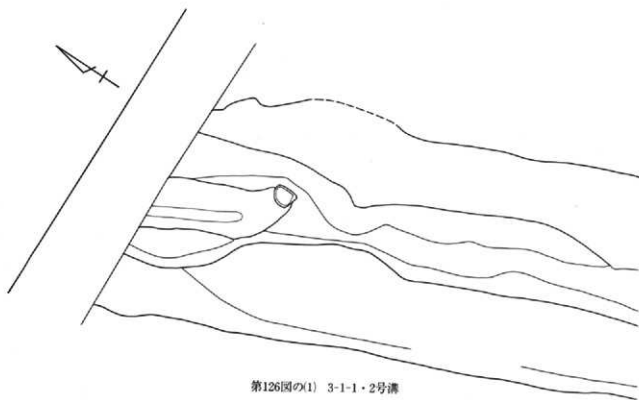
(1) 3-1-1・2号溝・池

(第126～134図、図版63・79～87)

**概要** 3-1-1・2号溝及び池は調査区西部に在り、1・2号溝は後述する館址遺構を斜めに大きく切つて流下し、1号溝南端西側には池遺構が付属する。1号溝は3-1-2・3号溝と、池は3号溝と切り合うが、何れも1号溝と池の方が新しい。

さて1・2号溝と池は共に覆土から近・現代に埋没していることは明瞭だが、1号溝は掘削位置が調査場整備前の土地区画に合致(右頁左上矢印左脇の溝)し、広瀬川十六本堰分水の用水に属する用 (ノ)

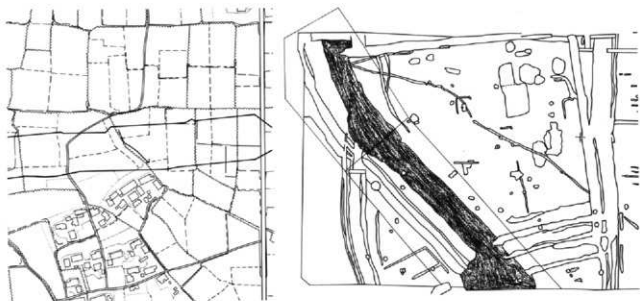
池は地元で「おいけ」と呼ばれていたもので、調査区南側の集落の乗る微高地が用水周辺の低地に落ち込む位置、1号溝の西に造られて、1号溝との間は環状の盛土で仕切られていた。土層の堆積状況から用水との境の盛土は南部で一回以上の造り替えが確認されている。南端部(178頁《折込図》右端)の1号溝側から西側に入る窪みは改修前の状況を示している。この池は1号溝=用水からの入排水があり、その痕跡及び構造物の痕跡が残されている。尚、調査区の直ぐ南にお住まいの中村氏のお話では、戦後も氏と氏の御父上とで水をかい出して魚を捕られていたということである。(1)



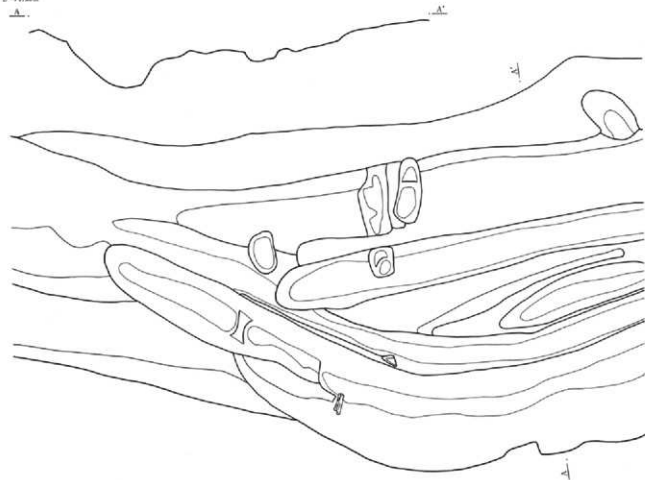
第126図の(1) 3-1-1・2号溝

水路であったことが確認される。出土遺物や覆土もこうした状況を示している。また1号溝は調査区中程に杭を打った導水の痕跡が認められることや土層の堆積状況から、少なくとも3～4回の掘り直しが確認される。尚、溝の幅員は時期によって変化するが、概ね上幅3m前後はあったようである。(ノ)

一方、2号溝は走行の方向及び全体的な規模が1号溝と近似するため、1号溝同様水路であったものと解釈され、1号溝の掘削まで使用されたものと判断される。2号溝も北部の底面に狭い溝の痕跡が見られるので、何回かの掘り直しが行われたものと判断される。



L=74.80m



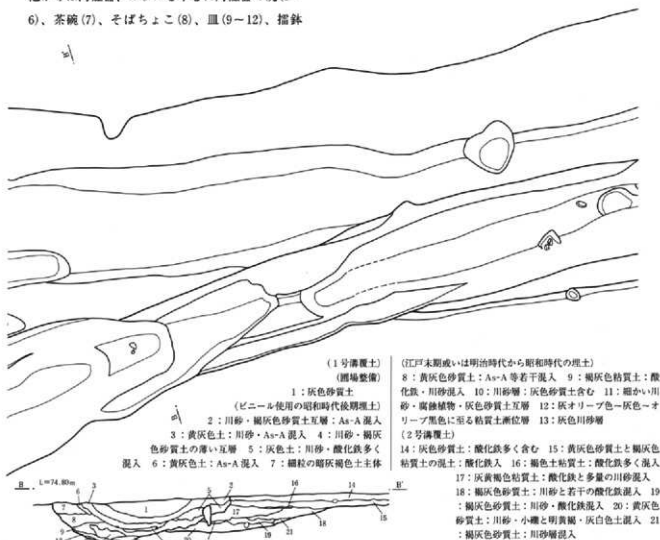
第126図の(2) 3-1-1・2号溝

第3章 発見された遺構と遺物

さて1号溝は圃場整備前まで水路として使われていた(右頁左上図の一脇の水路)もので、碗(1~3)、ひょうそく(4)、狐の芥子面(5)、摺鉢(6)、甕(7~10)、大とっくり(11)、ほうろく鍋(12,13)、釜輪(14,15)などの陶磁器や土製品の出土が見られ、その他「精鑄水」容器(18)等各種のビン(16~22)やいしけり(23)などのガラス類の他、磁石(24~28)、石板(29~31)、七輪(32)といった各種石製品、或いは桶蓋(33)や曲物の底板(34,35)、或いは近世以降に一般的なブナ属の樹板を使用した漆碗(36~42)、枕(43,44)や用途不明の木製品(45)、寛永通宝(46,47)、釘(48)、はたまた農業用ビニールなど江戸時代から現代までの各種遺物の出土が見られた。また池からは陶磁器、ガラスを中心に陶磁器の碗(1~6)、茶碗(7)、そばちょこ(8)、皿(9~12)、摺鉢

(13,14)、鉢(15~18)、甕(19~21)、ほうろく(22)、大とっくり(23)、「みづほ染料」の刻印のあるもの(24,25)などのビン類(24~28)、そしてビー球(30)、おはじき(29)などの玩具、鎌(31)、七輪のすのこかと思われる多孔の鉄製品(32)、完形品(32)を含むきせる(33~35)、鈍角の内刃を持つ鉄器(36)、踏鉄(37)或いはビニールなど、現代のものを中心に中世から現代に至る時期の多くの遺物の出土が見られた。

一方、2号溝からは少数ではあったが知多産の焼締陶器甕片(1~3)が出土し、他方縄文時代に含まれる打製石斧(4)、蔽石(5)、スクレーパー(6)等の出土も見られた。



第126図の(3) 3-1-1・2・3号溝

〔調査整理資料の裡土〕

1：灰青褐色土主体 1'：1層土に灰色・褐色シルト混入

(1号溝層土)

2：褐色土；ピニール・As-A等混入 3：褐色土；木材・As-A等混入 4：褐色土；川砂・ロツク混入 5：川砂と褐色土の互層 6：褐色土主体；ヘドロ質 (2号溝層土)

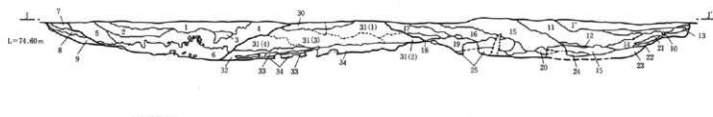
7：褐色土砂質土；酸化鉄多く沈着 8：褐色土粘質土；酸化鉄等混入 9：As-A・川砂・褐色土シルトの1-4cmの互層 (池層土)

10：灰黄色・褐色土；鉄分含 11：褐色土粘質土；部分的に川砂混入 12：褐色土粘質土 13：As-A層 14：黄灰色粘質土；褐色土・淡黄色土等混入 15：褐色土；As-A・黄灰色・淡黄色粘質土・川砂等混入 16：褐色土；As-A・川砂・黄灰色土混入 17：川砂・褐色土粘質土の混入；鉄分多く、淡黄色・灰白色粘質土等混入 18：褐色土粘質土；川砂・灰白色粘質土等混入 19：褐色土・黄灰色粘質土混

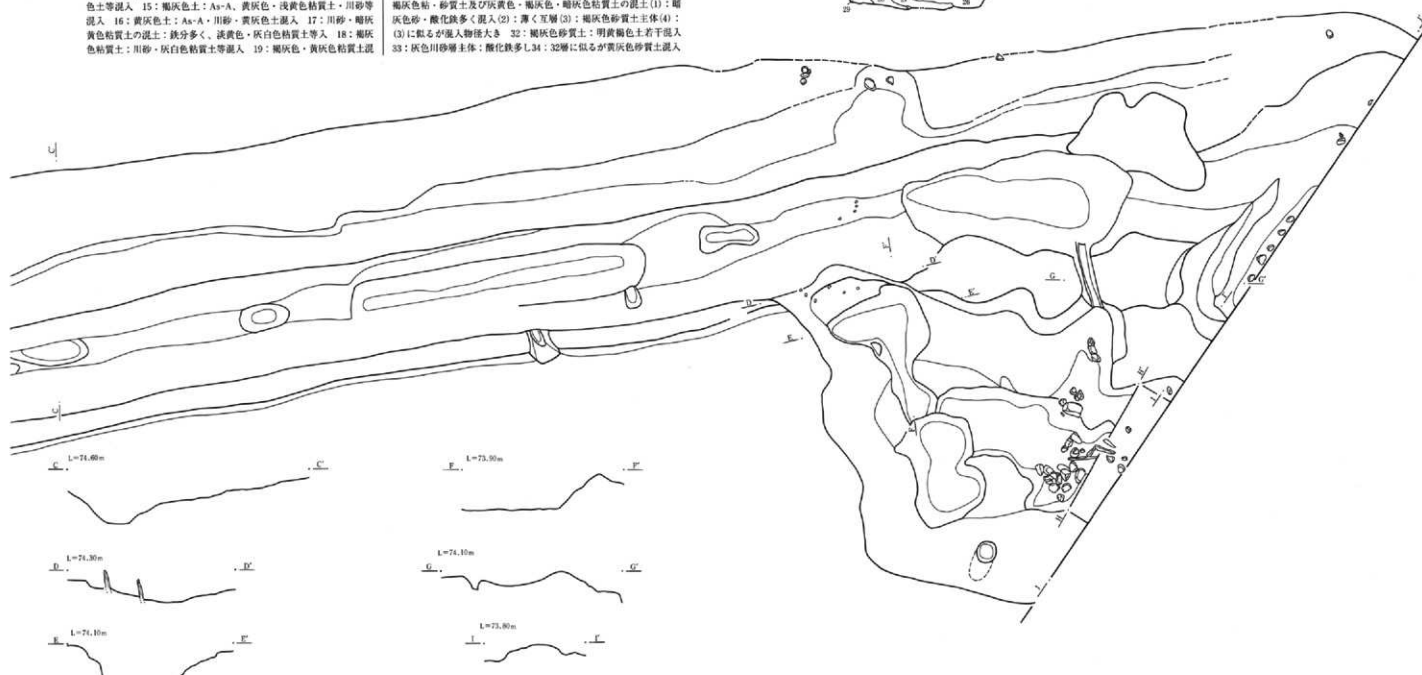
土；川砂等含み酸化鉄沈着 20：褐色土粘質土；川砂・木質等混入 21：灰色土・灰白色粘質土の混入；黄褐色砂質土・酸化鉄等含 22：黄灰色粘質土；川砂混入 23：褐色土粘質土；暗青灰色・明黄褐色土と灰白色粘質土・酸化鉄・木質・酸化鉄・酸化マンガン混入 24：褐色土粘質土；川砂と灰白色粘質土混入 25：灰白色粘質土；酸化鉄沈着。褐色土・灰白色粘質土含む 26：褐色土粘質土；23層土ベースに暗緑灰色粘質土・酸化鉄・酸化マンガン含む 27：暗青灰色・褐色土粘質土混入；川砂と酸化鉄含む 28：暗青灰色・褐色土粘質土の混入；川砂と酸化鉄含む 29：暗青灰色砂質土と青灰色・褐色土粘質土の混入；川砂・酸化鉄混入

(池縁水溜層土)

30：川砂・褐色土の混入；酸化鉄多し 31：褐色土・黄灰色川砂と褐色土粘質土及び灰黄色・褐色土・褐色土粘質土の混入(1)；暗青灰色・酸化鉄多く混入(2)；薄く互層(3)；褐色土粘質土主体(4)；(3)に似るが混入物径大し 32：褐色土粘質土；明黄褐色土若干混入 33：灰色川砂層主体；酸化鉄多し 34：32層に似るが黄灰色砂質土混入



L=73.50m

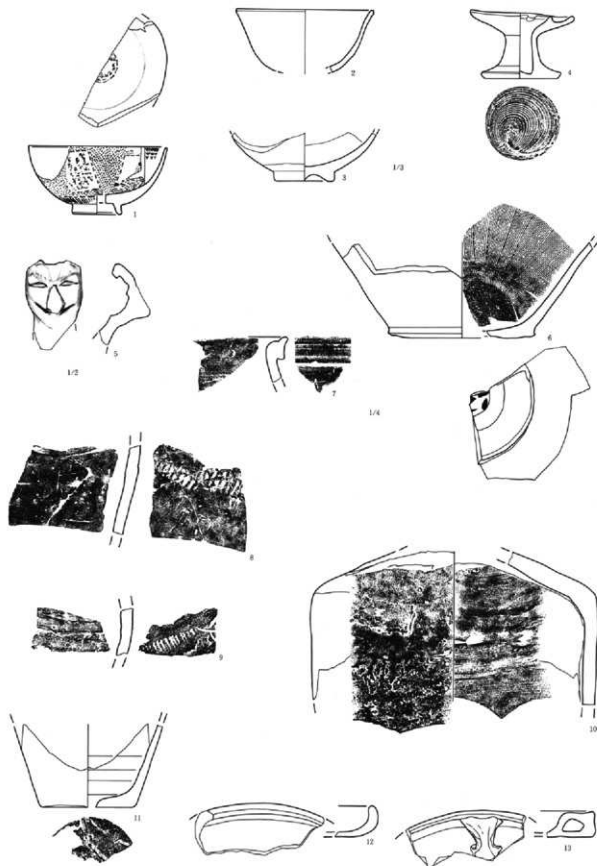


第126図の(4) 3-1-1・2・3号溝、池





第3節 3区の遺構と遺物

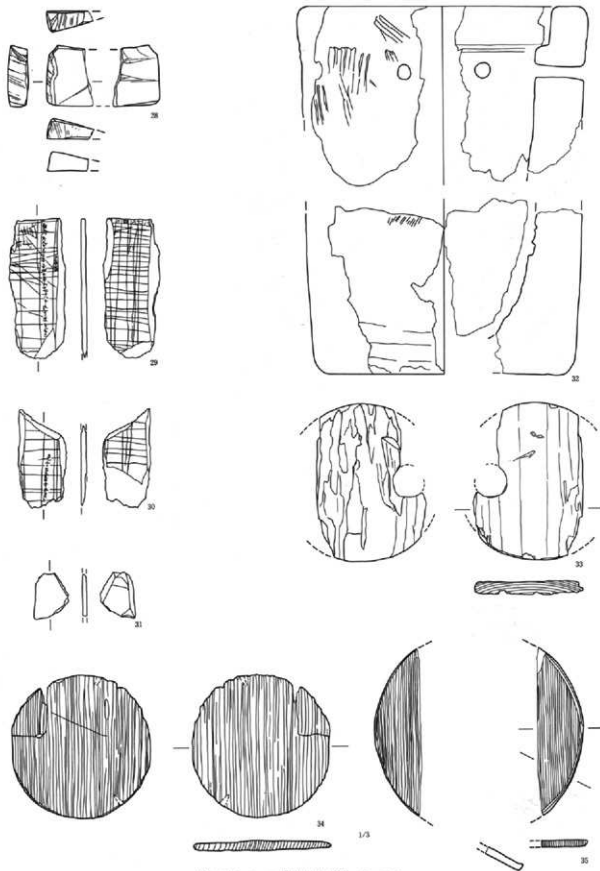


第127図 3-1-1号溝出土遺物 (その1)

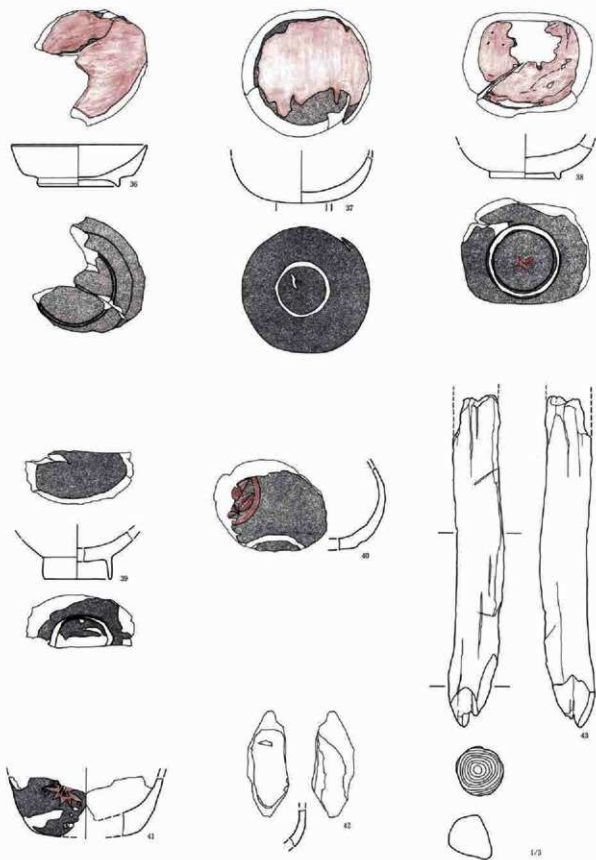
第3章 発見された遺構と遺物



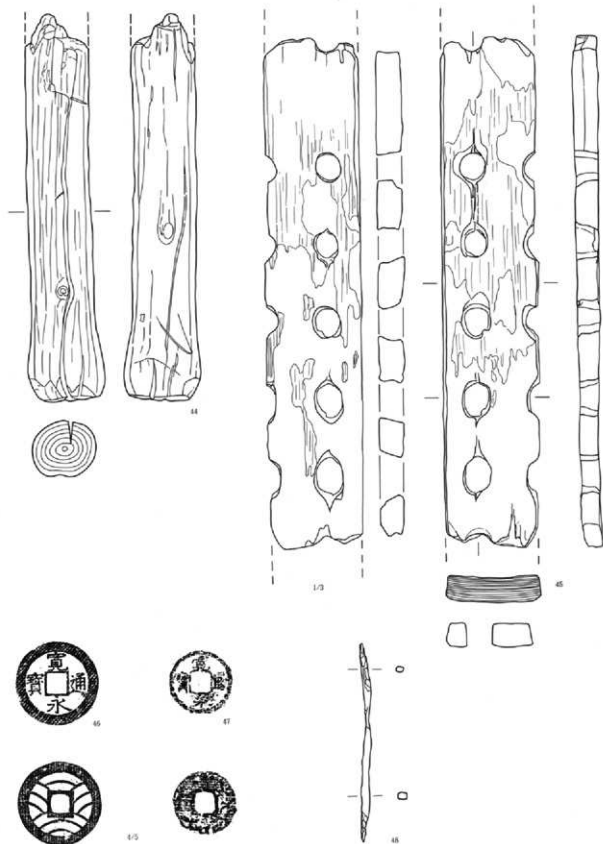
第128図 3-1-1号溝出土遺物 (その2)



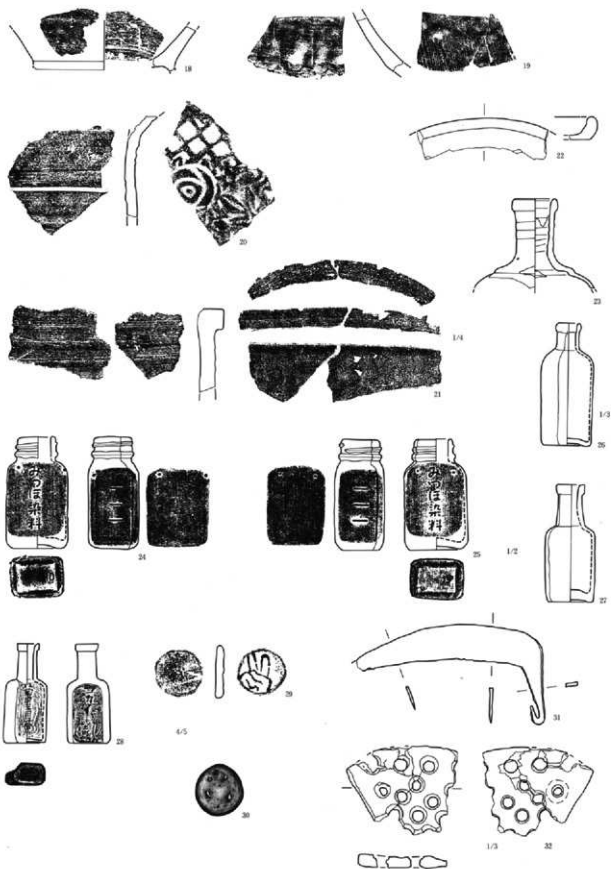
第129図 3-1-1号溝出土遺物 (その3)



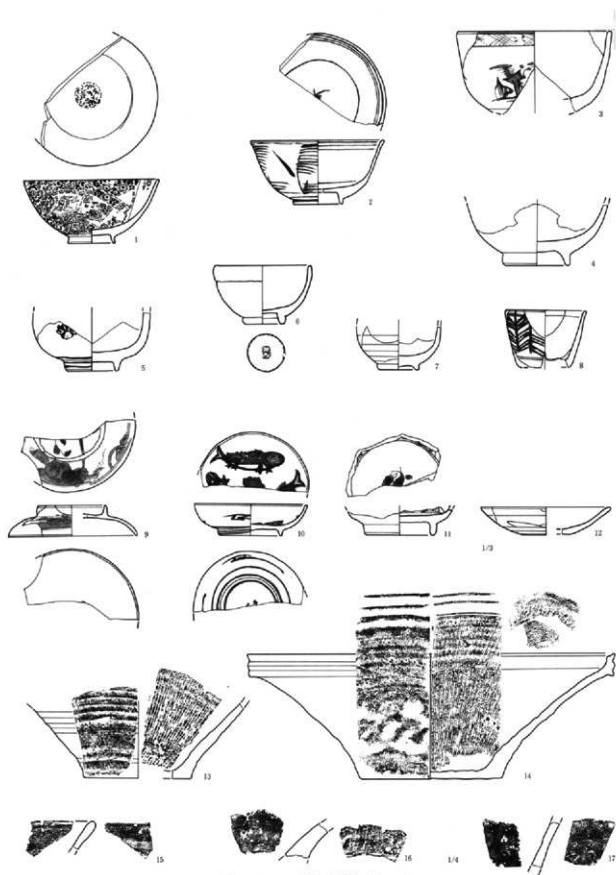
第130図 3-1-1号溝出土遺物（その4）



第131図 3-1-1号溝出土遺物 (その5)

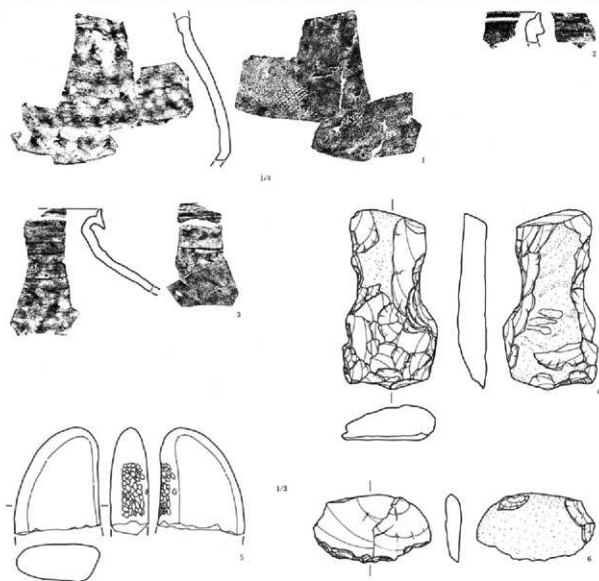
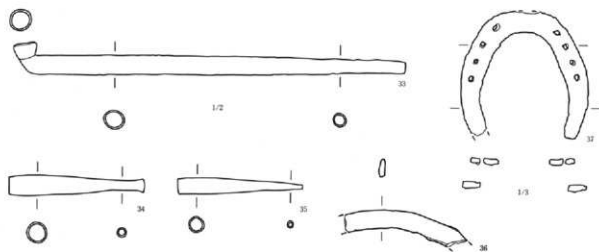


第133図 3-1-池出土遺物 (その2)



第132図 3-1-池出土遺物（その1）

第3章 発見された遺構と遺物



第134図 3-1-池出土遺物(その3)・3-1-2号溝出土遺物



2号溝は覆土からAs-A降下後の掘削と判断されるが、その時期は広瀬桃木両用水土地改良区保管文書によって広瀬川水路に新水路の掘削が確認される寛政5・6年(1793・1794)頃と推定される。また、2号溝から1号溝への掘り直しの時期は特定できなかったが、上述のように1号溝は圃場整備による埋め戻しまでに3~4回の掘り直しが想定され、2号溝も何回か掘り直されていたことに鑑みれば、近代の遅くはない時期ではなかったかと推定される。

規模 [1号溝] 長さ62.15m 幅270cm

深さ113cm

[2号溝] 長さ67.4m 幅355cm以上 深さ96cm

[池] 径13.75×7.9m 深さ162cm

構造 1・2号溝は調査区西端近くから調査区に入り、南南東に走行を取り、更に走行を南東に変じて流下している。そのプランは全体として直線的であるが、1号溝では走行を変ずる部分で蛇行していた時期もある。1・2号溝共にその掘削形態は時期によって多少相異なるが、1号溝が(175頁右寄りの最深部を底とする)杭を用いて導水を行っていた時期が船底形、2号溝が北寄りで箱堀状を呈する以外は全体としては共にやや丸みを持った平底を呈し、壁面は45°前後で立ち上がる箇所が多いが、1号溝に比し2号溝の壁面はやや開き気味である。

池は全体としては隅丸方形プランを呈する箱形のプランを呈する。1号溝との境には幅180~300m、高さ80cm程の堤があり、堤には1号溝側に迫り出して造り直された痕跡がある。堤の北側には入水施設、南側には排水路が設けられているが、入水施設は堤の上に幅2.2m、深さ20cmの浅い溝様の窪みが渡り、その北側と窪みを横断する位置には流入水調整用の構造物の基礎と想定される計6本の杭が打設されている。また入水施設の池側には幅1.4m、奥行き2.7m程の逆三角形様のプランの挟れが伴っている。一方、排水施設は入水施設同様幅140cm以下、奥行き90cm弱の台形様プランの挟れ込みを伴い、その延長線上、堤の上には幅33cm、深さ20cmの浅い溝が堤に直交して設けられている。

### (2) 3-1-3号溝(第135区、図版63・87)

概要 本溝は調査区西部、3-1-1号溝の西側、池遺構の北側に位置する。3区北西隅から入り、1・2号溝同様、屋敷遺構を南東方向に斜めに切って流下する。本溝は1号溝及び池に切られている。

3号溝は一遺構としたが大きくは3条に分けられ、東から3-1・2・3溝と呼称した。このうち3-1・3溝の新旧は不明だが、3-2溝は3-1・3溝双方に切られている。また部分的だが、3-1溝ではその北部で埋土の灰白色土の状況から西側が、中央付近では土層断面から東側がそれぞれ新しい東西2条に区分される。従って3号溝では少なくとも4回以上の掘り直しが窺われる。

3号溝からは大窯の皿(1)、古瀬戸の壺(2)、肥前の鉢(3)、瀬戸美濃の香炉(4)と播鉢(5)、産地不明の碗(6)など中近世の陶磁器類の他、用途不明の鉄製品(7)、或いは土師器片、縄文時代の石鏃(8)などの出土が見られた。

本溝はその走行が1・2号溝に平走すること、及び後述するように3-1溝と3-2溝の北寄りにそれぞれ堀の影響と思われる落ち込みが見られることから、用水として使用されたものと判断される。

当初掘削時期については近世初めの用水開削の記録がないため慶長期以前の可能性が残る一方、本溝が切る屋敷の堀である4号溝からビタ銭(模鑄銭)が出土したため中世後葉以降の掘削と判断される。また、途中4回以上が想定される掘り直しの時期は例えば元禄7年発給の代官の服務規律の文書(「堰川除、郷中二而随分念を入候様ニ」)が示すように用水補修の留意が喚起され新田開発に熱心だった前橋藩主酒井忠孝の時代(1681~1707)が想起される。一方、その終焉については遺構確認の段階で上面にAs-Aの層の堆積が見られたためAs-A降下時点では既に埋没していたことが確認されるが、特定できなかった。本溝の廃絶に伴って1・2号溝の位置に2号溝か3-1~3溝と同規模の溝を掘り直したものと判断される。以上のことから本溝は概ね近世前・中期頃の所産として把握される。

### 第3章 発見された遺構と遺物

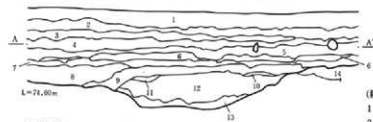
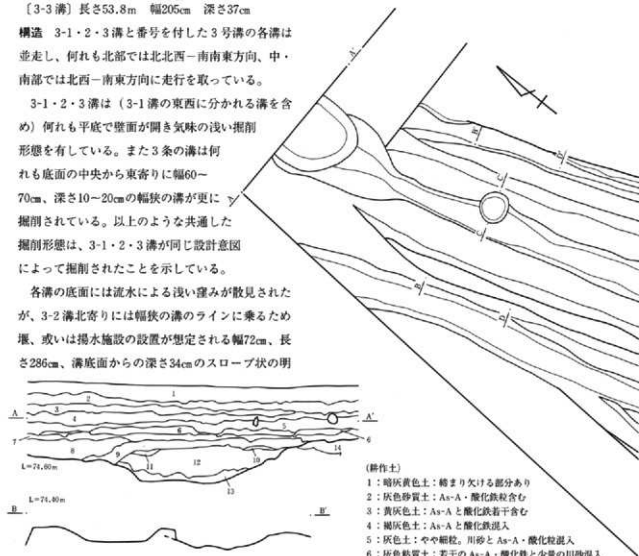
- 規模** [3号溝全体] 長さ61.1m 幅524cm  
 [3-1溝] 長さ59.2m 幅400cm (東西に分離できる幅溝はそれぞれ約2m) 深さ32cm  
 [3-2溝] 長さ61.1m 幅205cm 深さ42cm  
 [3-3溝] 長さ53.8m 幅205cm 深さ37cm

**構造** 3-1・2・3溝と番号を付した3号溝の各溝は並走し、何れも北部では北北西-南南東方向、中・南部では北西-南東方向に走行を取っている。

3-1・2・3溝は(3-1溝の東西に分かれる溝を含め)何れも平底で壁面が開き気味の浅い掘削形態を有している。また3条の溝は何れも底面の中央から東寄りに幅60-70cm、深さ10-20cmの幅狭の溝が更に掘削されている。以上のような共通した掘削形態は、3-1・2・3溝が同じ設計意図によって掘削されたことを示している。

各溝の底面には流水による浅い窪みが散見されたが、3-2溝北寄りには幅狭の溝のラインに乗るため堰、或いは揚水施設の設置が想定される幅72cm、長さ286cm、溝底面からの深さ34cmのスロープ状の明

瞭な落ち込みが確認された。その底面には流水による窪みがられた。



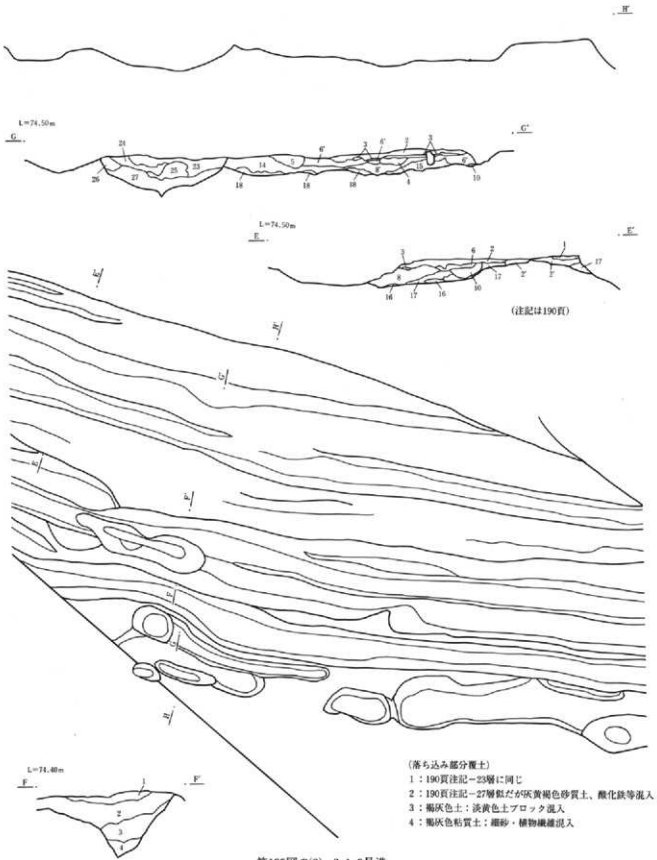
#### (落ち込み部分覆土)

- 1: 赤褐色土: ブロック状の川砂と酸化鉄・酸化マンガン混入
- 2: 褐色土: 酸化鉄と地山白灰色川砂凝縮ブロック混入
- 3: 青灰色砂質土: 川砂や多く混入
- 4: 青灰色土: 若干細砂質。酸化鉄塊か混入。

#### (耕作土)

- 1: 暗灰黄色土: 轉り欠ける部分あり
- 2: 灰色砂質土: As-A・酸化鉄混入
- 3: 黄灰色土: As-Aと酸化鉄若干含む
- 4: 褐色土: As-Aと酸化鉄混入
- 5: 灰色土: やや細粒。川砂とAs-A・酸化鉄混入
- 6: 灰色粘質土: 若干のAs-A・酸化鉄と少量の川砂混入
- 7: 黄褐色粘質土: 6層土に酸化鉄沈着(3-1溝新覆土)
- 8: 褐色・明黄褐色粘質土入る灰白色・灰色粘質土混土主体酸化マンガン混入(3-1旧覆土)
- 9: 褐色粘質土: 明黄褐色・灰色粘質土とAs-B・Mnと混入
- 10: 灰色砂質土に酸化鉄凝縮。全体として明褐色を成す
- 11: 川砂含む黄灰色砂質土: 酸化鉄と少量の淡黄色粘質土混入
- 12: 川砂含む褐色粘質土と淡黄褐色粘質土の混土主体
- 13: 川砂と褐色粘質土ブロックの混土: 洪水層(地山覆土)
- 14: 砂混じりの褐色粘質土・明黄褐色粘質土混土
- 15: 粘土に近い灰白色・灰色粘質土: 明黄褐色粘質土等混入

第135図の(1) 3-1-3号溝



第135図の(2) 3-1-3号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物

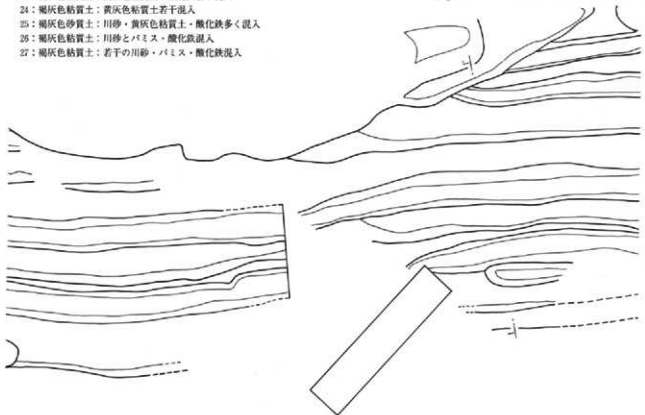
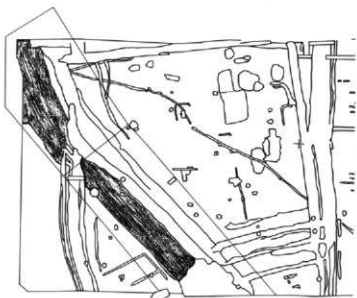
[E・D・H・I・F・J]トプセクション図土層注記

(3-1溝以降及び以下の溝)

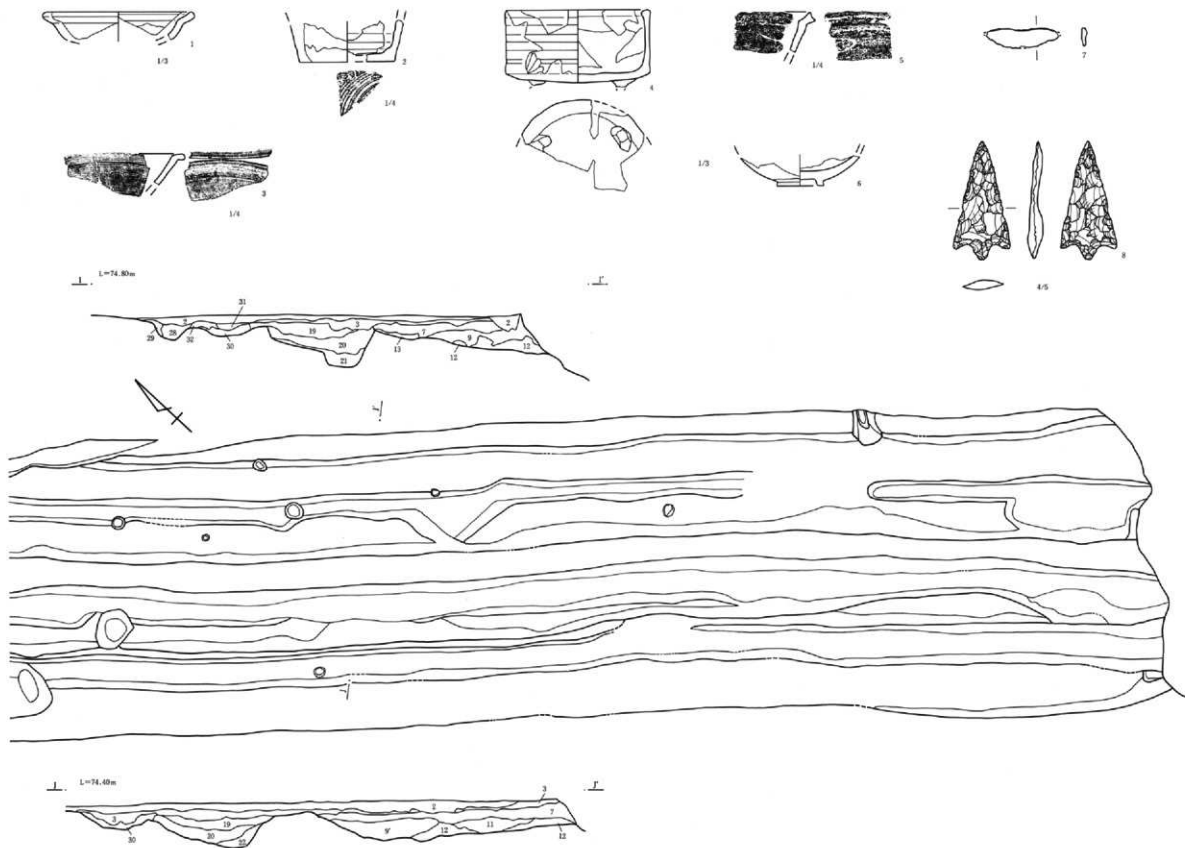
- 1: 暗灰色土。酸化鉄・酸化マンガン混入
- 2: 黄灰色砂質土・As-B・酸化鉄混入 2': 1層土等混入 2'': As-B・酸化鉄多く、黄灰色砂質土混入
- 3: 明褐色土: 灰色系の粒質土に酸化鉄分沈着。As-B混入 (3-1溝覆土)
- 4: 褐灰色粘質土: 軽石・酸化鉄混入
- 5: 6'層と黄灰色粘質土の混土: 酸化鉄・酸化マンガン混入
- 6: 褐灰色シルト: As-B含み酸化鉄多く沈着 6': 鉄分少い
- 7: 褐灰色土土: 酸化鉄・As-B混入
- 8: 褐灰色粘質土: 酸化鉄・As-B混入 8': 酸化鉄多く含む
- 9: 灰色粘質土: 酸化鉄・明黄褐色・灰色粘質土混入 9': 暗灰色粘質土と灰色砂質土混入
- 10: 黄灰色砂質土: As-B・酸化鉄・にぶい黄色土混入
- 11: にぶい黄褐色粘質土: As-B・酸化鉄分多く混入
- 12: 褐灰色土: 酸化鉄多く含む明黄褐色粘質土混入
- 13: 黄灰色粘質土: 酸化鉄と灰色粘質土混入
- 14: 褐灰色砂質土: 明黄褐色土と褐灰色粘質土混入
- 15: 川砂・軽石・8層土・酸化鉄の混土
- 16: 灰色川砂層: 16層土混入
- 17: 暗灰色土に灰白色土と酸化鉄混入る混土層
- 18: 黄灰色シルト: 明黄褐色土若干混入 (3-2溝覆土)
- 19: 褐灰色粘質土: 酸化鉄混む灰白色土とAs-B混入
- 20: 褐灰色粘質土: 酸化鉄とAs-B混入
- 21: 褐灰色土: 酸化鉄混む灰白色細砂土入る
- 22: 黄灰色粘質土: As-B混入
- 23: 褐灰色粘質土: 黄灰色粘質土と酸化鉄若干混入
- 24: 褐灰色粘質土: 黄灰色粘質土若干混入
- 25: 褐灰色砂質土: 川砂・黄灰色粘質土・酸化鉄多く混入
- 26: 褐灰色粘質土: 川砂とパミス・酸化鉄混入
- 27: 褐灰色粘質土: 若干の川砂・パミス・酸化鉄混入

(3-3溝覆土)

- 28: 褐灰色粘質土: にぶい黄褐色土・As-B・酸化鉄混入
- 29: 灰黄褐色粘質土: 酸化鉄混入
- 30: 褐灰色粘質土: As-Bと酸化鉄含黄灰色粘質土若干混入
- 31: 褐灰色土: 酸化鉄分とやや多くのAs-Bの混入
- 32: 灰黄褐色土: 酸化マンガンと明黄褐色土若干混入

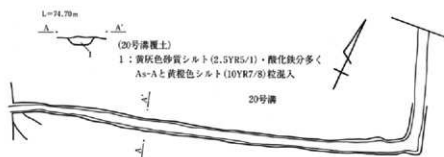


第135図の(3) 3-1-3号溝



第135図の(4) 3-1-3号溝及び出土遺物





## (3) 3-1-10・20号溝 (第136図)

**概要** 3-1-10号溝は3区西南部、3-1-20号溝は3区北西部に位置する。共に形態及び覆土にAs-Aを含むことから近代以前の畝と判断される。

10号溝東辺の溝は3-1-3号溝と50~80cm強の間隔を保つため、3号溝跡地の地形に規制されていたことが窺われる。一方20号溝南辺の溝は3-1-2号溝に直交して切られている。即ち3号溝方向に延びてこれと垂直なライン上にあることから、20号溝も3号溝に規制された可能性が考慮される。

10・20号溝からの出土遺物はなく、細かい時期特定に至らなかったが、10・20号溝が畝地跡と解釈されるのに対し圃場整備前の地目は水田であり、3号溝

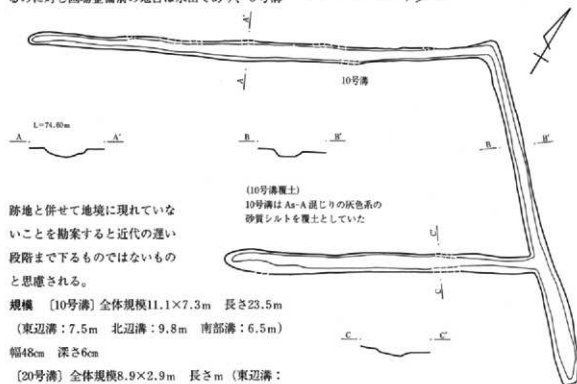


**構造** 10溝は逆F字状のプランを呈するが、縦のラインに当たる東辺の溝と西南西に延びる2条の溝とは75°の角度で接している。

10号溝の底面の横断面面形は丸みを帯びており、壁面の傾斜は強い。高、10号溝の畝は東北東-西南西方向にサクを切っていたものと判断される。

20号溝は逆L字形のプランを呈するが、東側と南側の溝は共にやや膨らみを有する。

20号溝も底面の横断面面形は丸みを帯びており、壁面の傾斜は強い。



跡地と併せて地境に現れていないことを勘案すると近代の埋没段階まで下るものではないものと思慮される。

**規模** [10号溝] 全体規模11.1×7.3m 長さ23.5m  
(東辺溝:7.5m 北辺溝:9.8m 南辺溝:6.5m)  
幅48cm 深さ6cm

[20号溝] 全体規模8.9×2.9m 長さm (東辺溝:  
8.87m 南辺溝:2.64m) 幅35cm 深さ18cm

第136図 3-1-10号溝

第3章 発見された遺構と遺物

(4) 3-1-39号溝 (第137図, 図版67・88)

**概要** 3-1-39号溝は3区東部に位置し、調査区を南北に横断し調査区を東西に区切っている。

本溝からの出土遺物は特に多くはなかったが、陶器の碗(1~4)・菊皿・播鉢・鉢(5)片、軟質陶器の焙烙鍋や鉢の破片、埴輪片の他、石板(6)などが出土してきている。

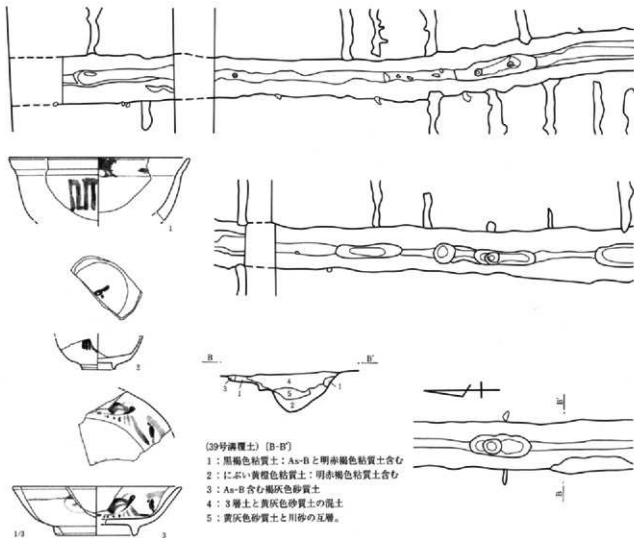
本溝は覆土及び底面の形状から水路としての使用が確認される。しかし昭和23年段階では既にこの水路は埋没して失われている。一方、石板の出土は本溝が近代に入ってから埋没したことを示すものである。一方、本溝は後述する中世の水田面を切って掘削されている。また、溝が余り崩れていないこと

から比較的短期間の使用の可能性も考えられる。こうした点から本溝は江戸時代の終わり近くから、近代の早い段階まで使用されたものと判断される。

**規模** 長さ52.8m 幅124cm 深さ72cm

**構造** 本溝は走行を南北に取る溝であるが、中南部は若干西に走行が傾く。全体としてそのプランは直線的である。

本溝は全体として薬研壘状を呈し、溝の規模も比較的一定していて規格性の高い掘削形態を有している。底面は比較的平らであるが、所々に流水による窪みが散見される。しかしながら壁面には流水による抉れ等は特に確認されなかった。



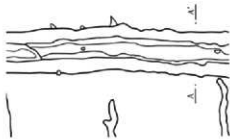
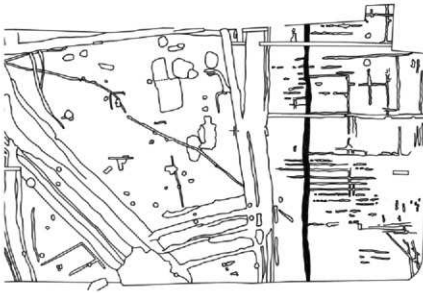
(39号溝覆土) [B-B]

- 1: 黒褐色粘質土: As-Bと明赤褐色粘質土含む
- 2: にぶい黄褐色粘質土: 明赤褐色粘質土含む
- 3: As-B含む褐灰色砂質土
- 4: 3層土と黄灰色砂質土の混土
- 5: 黄灰色砂質土と川砂の互層。

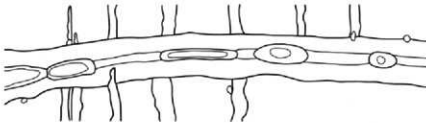
第137図の(1) 3-1-39号溝及び出土遺物



第3節 3区の遺構と遺物

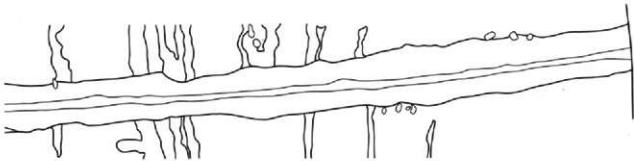


1/3

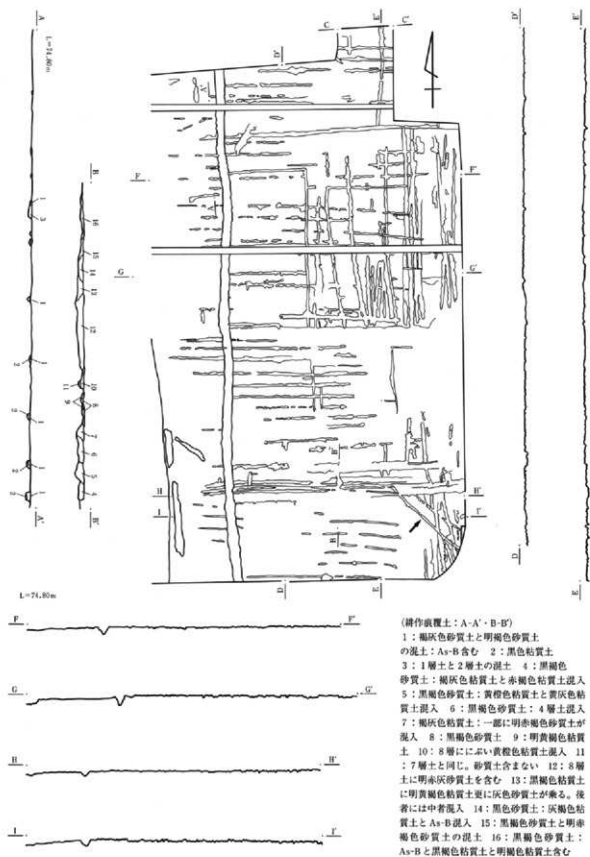


(39号溝覆土) [A-A']

- 1: にぶい黄色砂質土
- 2: 1層土に明赤褐色粘質土含む
- 3: 1層土と川砂及び灰黄褐色粘質土の混土
- 4: 黒褐色粘質土: A-B・明赤褐色粘質土・1層土混入。右上方より崩落
- 5: 川砂の互層。
- 6: 灰黄褐色粘質土: 明赤褐色粘質土多量に混入。左方より崩落



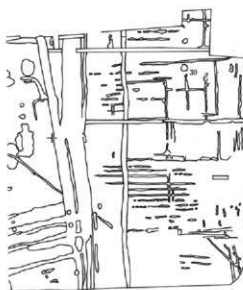
第137図の(2) 3-1-39号溝及び出土遺物



第138図の(1) 3-1-耕作痕



(表土層：As-A 混入土)  
 1・2：にぶい黄褐色砂質土：2層は酸化鉄少量沈着 (As-B 混土層：鉄分多量に沈着)  
 3：にぶい褐色砂質土 4：明褐色砂質土：水田床土 (耕作痕跡・溝痕：As-B 多量に含む鉄分少量沈着)  
 5：黒色砂質土：6：黒褐色砂質土：5層土部分的に含む  
 7：黒褐色砂質土：鉄分微量 8：6層土と7層土の混土 (As-B 下水田耕作土)  
 9：黒褐色砂質土：硬く締まり粘質に近い。  
 (Hr-FP 混土層以下の堆積層)  
 10：灰褐色粘質土：Hr-FP 微量に混入。洪水層 11：黒色粘質土：As-C 含む 12：黒色粘質土 13：黒褐色(西)から明るい褐色(東)への漸移層：粘質土。鉄分多量に沈着



(5) 3-1-耕作痕 (第138図、図版77)

**概要** サク状の耕作痕は3区東部に広く分布する。

耕作痕の覆土から江戸時代後期以降の所産と判断される3時期以上の掘削のある畝作痕である。しかし昭和23年時点で既にここは水田となっているため近代でも早い時期の所産と判断される。

また南東部の北西-南東走行の溝状遺構(矢印)は2条だけで平行なため道路遺構の可能性を有するが、この場合は地割に現れないため近世まで遡るものと思慮される。

**規模** (調査範囲) 東西30m 南北56m

**構造** 耕作痕のサクは掘り込みが浅く、全体の状況はつまづかでないが、中・西側に多い東西走行のものと東側に多い南北走行のものがある。

このうち東西走行のものは幅20-30cm程度、深さ10cm以下で、凡そ120cmの間隔で平行に並ぶ。東端の位置の違いから南北に分けられる。

一方、南北走行のものは幅20-40cm、深さ7cm程度で、走行は南-北のものと南北から南南東方向に走向のズレるものがあり、重複するものも多い。

南東部の道路遺構の可能性を有する溝は溝幅20cm、深さ8cm程度で溝の間隔120-140cmで、長さ5mを調査した。

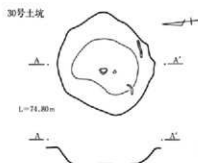
(6) 3-1-30号土坑 (第139図、図版71)

**概要** 本土坑は3区北東部に位置する。

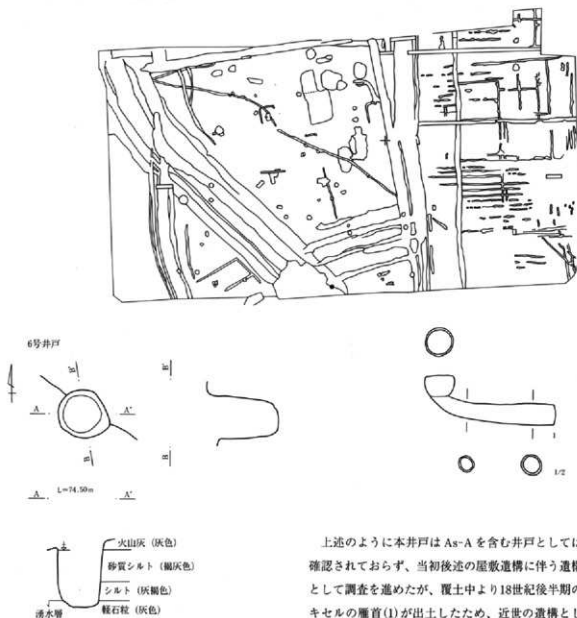
本土坑からは焼夷弾の破片が出土しており、伊勢崎空襲(297頁、4-1-1号土坑参照)時の爆撃坑であることが確認される。

**規模** 径148×140cm 深さ44cm

**構造** 隅丸方形様のプランを呈し、バケツ状の掘削形態を呈する。



第139図 3-1-30号土坑及び出土遺物



第140図 3-1-6号井戸及び出土遺物

(7) 3-1-6号井戸 (第140図、図版72・88)

**概要** 3-1-6号井戸は3区中南部に位置している。3-1-2号溝底面の表出に伴って確認され、調査した遺構である。

本井戸は2号溝と重複するが、その新旧関係を特定することはできなかった。但し覆土にAs-Aを含まないため、2号溝より古くなるのではないかと想定され、2号溝開削時には既に上位が失われたものと推定している。

上述のように本井戸はAs-Aを含む井戸としては確認されておらず、当初後述の屋敷遺構に伴う遺構として調査を進めたが、覆土中より18世紀後半期のキセルの雁首(1)が出土したため、近世の遺構として把握したものである。

**規模** 径85×74cm 深さ114cm

**構造** 本井戸は上述のように上位が失われていたため全体の状況はつまびらかでないが、残存部で見限りそのプランは円形を呈している。

本井戸は筒状の掘削形態を見せ、底面は若干の丸みを持つ。その規模は近世に素堀井戸の理想とされた籠笠の径を持つものであり、プランと併せて優れた技能者によって掘削されたことが窺われる。

また、透水層についてはアグリ等は確認されず、最下層の灰色軽石層(As-YPか)が該当すると判断された。

## 1-3 3区1面の遺構と遺物Ⅱ（中世を中心とする時期）

## 0. 3区の屋敷遺構

概要 前述の3区の概要に述べたように、3区西半部には屋敷遺構を確認、調査した。

この屋敷遺構は溝の配置によって南北に連なる3つの郭から成ることが確認されている。このうち中央の郭は西寄り近世の水路に壊されているもののその全体を調査できたが、南北の郭はその一部を調査できたに過ぎなかった。このため以下、単に「郭」と表記した場合は中央の郭を指すものとする。

三つの郭は東西・南北走行の溝群によって画されている。溝群は一方所2条以上が重複或いは並行に掘削されていて複雑である。この中には上幅が1mに満たない溝がある一方、堀と呼べる規模の溝もあ

る。しかし、規模の大小はあるもののこれらは同質の掘削意図・機能を有する溝であると判断している。

郭内に於いては2700基を超える柱穴を始め土坑・井戸・区画溝など多数の遺構が在った。このうち柱穴から想定された掘立柱建物は後述するように極めて複雑に重なり合い、屋敷遺構の存続期間が1世紀以上の長きに亘っていた可能性を示している。また掘立柱建物や土坑はその軸方向が屋敷遺構の周堀・溝に近似したものと近世の溝の走行と近似したものとがあるが、下位に旧河道の痕跡が見られないことから、洪水等に伴う新たな流路或いは窪地が郭内に出現し、屋敷遺構がそれに対応していった可能性が窺われる。



第141図 3区屋敷遺構全体図

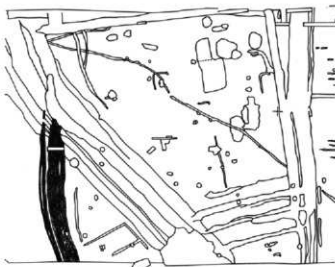
### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 1. 屋敷遺構の西側を面する溝

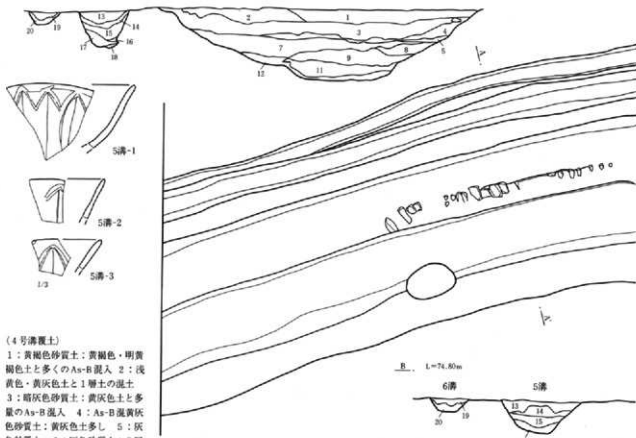
(1) 3-1-4・5・6号溝 (第142図, 図版63・64・88)

**概要** 3-1-4・5・6号溝は3区西部に在って、屋敷遺構の西側を面する溝群である。4号溝と5・6号溝は規模が異なっているが、並走して掘削されているため、同じ掘削意図による溝遺構として認識される。

本溝群は共に北側が3-1-1~3号溝に切られ、南側も調査区外に出て全容は把握できなかった。また5号溝は6号溝を切るが、4号溝と5・6号溝との新旧関係は特定できなかった。尚、4号溝は底面近くで流水の痕跡が認められた。



A L=74.70m 4・5・6溝



#### (4号溝覆土)

1: 黄褐色砂質土; 黄褐色・明黄褐色土と多くのAs-B混入 2: 浅黄色・黄灰色土と1層土の混土 3: 暗灰色砂質土; 黄灰色土と多量のAs-B混入 4: As-B混黄灰色砂質土; 黄灰色土多し 5: 灰色粘質土 6: 灰色砂質土; 5層土混入 7: 暗灰色砂質土; 5層土と多量のAs-B混入 8: 黄灰色粘質土; 川砂塊で混入 9: 川砂と黄灰色砂質土の混土; 2~3cmの互層 10: 酸化鉄凝縮層 11: 灰色粘質土; 暗灰色川砂とFe<sup>2+</sup>多く混入 12: 灰色粘質土; Fe<sup>2+</sup>混入

#### (5号溝覆土)

13: 14層に灰色粘質土 14: 黄褐色砂質土; As-B多量 15: 暗黄褐色粘質土; 黄灰色粘質土 14層 16: 灰黄色粘質土に17層・灰白色粘質土混入 17: As-B混暗灰色砂質土 18: 黄灰色砂質土

#### (6号溝覆土)

19: 灰黄褐色砂質土; に多い黄褐色土と多くのAs-B含む 20: 暗灰色砂質土とに多い黄褐色土; 黒褐色土の混土; As-B混入

第142図の(1) 3-1-4・5・6号溝及び出土遺物

4号溝からは龍泉窯系青磁片(1)、瀝美系堯片(2・3)、在地系軟質陶器襷鉢片(4・5)の他、坏(6)などの土師器片、包丁の破片(7)、ビタ銭(8)が出土した。また5号溝からは龍泉窯系の青磁片(1-3)が出土したが、6号溝の出土遺物はなかった。4-6号溝の細かい時期は特定できなかったが、覆土と出土遺物から中世の所産として把握される。尚4号溝はビタ銭の出土から中世の遅い時期に至っても尚埋没の完了していなかったことが窺われる。

規模 [4号溝] 長さ30.4m 幅350cm

深さ53cm

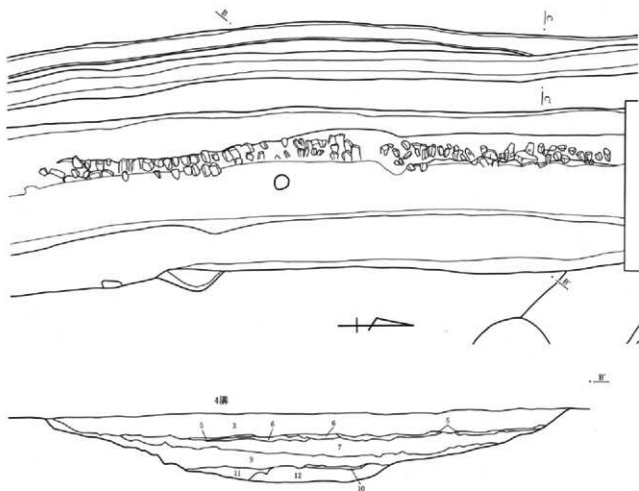
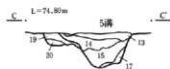
[5号溝] 長さ32.3m 幅65cm 深さ53cm

[6号溝] 長さ27.1m 幅50cm 深さ16cm

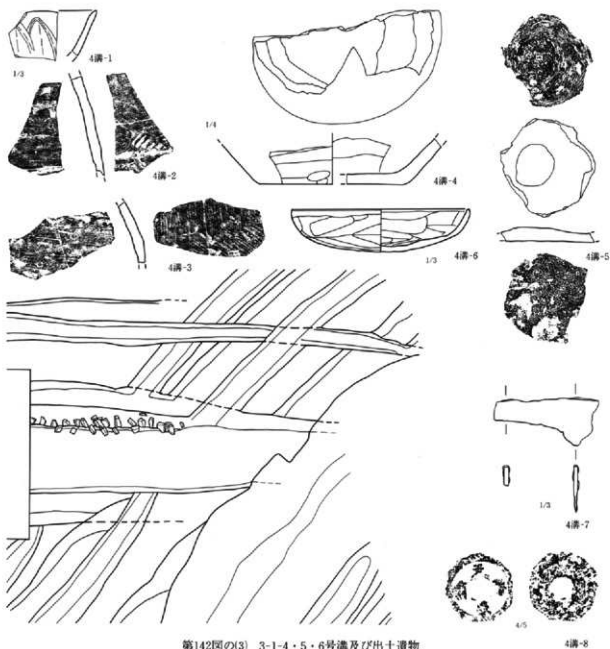
構造 本溝群はやや西側に張り出すものの概ね南北走行を呈する。その北側は不明だが、1-3号溝を渡った対岸に伸びないことなどから1号溝との交点付近で走行を北北西に変じるものと想定される。

4号溝は箱堀状で、その規模も比較的大きい。壁面の傾斜は底面近くで強く、西壁下位に残る段上には主に南向で掘削した2列の跡先痕が多数残る。

一方5・6号溝も箱堀状を呈するが、底面は丸みを持つ。4号溝に比べ小規模だがしっかりした掘り方を有する。



第142図の(2) 3-1-4・5・6号溝



(2) 3-1-11号溝 (第143図、図版64・88)

**概要** 3-1-11号溝は調査区北西部に在り、屋敷遺構の主郭北側を画する3-1-7号溝を南限として北側に延びて調査区外に出ている。

本溝は7号溝と接するが、覆土の観察から同時の掘設が確認された。しかし本溝の方が堀底が30cm程深く、掘削形態も若干異なることから当初の掘削時期に差のあることが想定される。この場合本溝が7号溝を意識して掘削したと想定されるのに対し、7

号溝は本溝を考慮したプランニングとはなっていないため、本溝の方が新しいものと判断される。

本溝は龍泉窯系の青磁碗片(1)や渚美の焼輪陶器薬片(2,3)といった出土遺物や覆土から中世の所産として把握されるが、細かい時期は特定には至らなかった。

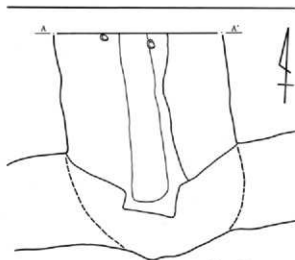
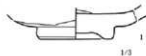
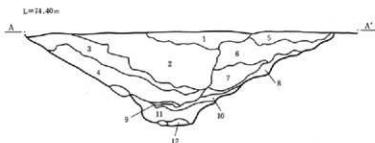
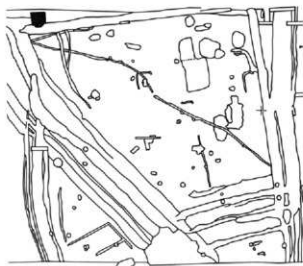
尚、本溝の存在は7号溝北側にもう一つの郭の設置を示している。また覆土断面の観察から2回の掘り直しのあったことも確認されている。



(11号溝覆土)

(3次埋土)

- 1: 灰白色・褐灰色粘質土、暗灰黄色土とAs-B混褐灰色砂質土の混土；酸化鉄・酸化マンガン混入。
- 2: As-B混褐灰色砂質土と酸化鉄・酸化マンガン多く含む黄灰色粘質土の混土；灰白色粘質土混入
- 3: 組成2層に似るがブロックの径小さく厚さ3cm程の互層
- 4: As-B・褐灰色・淡黄色粘質土の混土；酸化鉄と橙土混入
- (2次埋土)
- 5: 1層に似るかAs-B混じりの褐灰色砂質土主体
- 6: 組成2層に準ずるが前者の下に中・後者と互層をなす
- 7: 黄灰色粘質土；酸化鉄やや多く、上位中心に灰白色粘質土多く入り、若干のAs-B混褐灰色砂質土混入
- (1次埋土)
- 8: 褐灰色砂質土；下位中心の川砂と若干の淡黄色土等混入
- 9: 褐灰色土ベースの酸化鉄凝縮層；酸化マンガン混入
- 10: 黄灰色粘質土；植物と若干の川砂・オリーブ黄色土混入
- 11: 黄灰色粘質土；川砂・酸化鉄と若干のオリーブ黄色土混入
- 12: 川砂層；11層土僅かに混入。やや黄色系



1/4



第143図 3-1-11号溝及び出土遺物

規模 長さ3.8m 幅350cm 深さ114cm

構造 本溝はその一部しか調査されなかったためその全容は不明だが、確認された範囲では走行は南北に取られている。

掘削形態は時期によって異なるが当初はしっかりした掘り方の業研堀、1回目の掘り直しの段階では

20cm程掘底の高くなった崩れた業研堀様、最終段階では若干これより掘底の低い東壁の傾斜がきつい片業研状の形態を取っている。南端部は当初段階の掘削で7号溝底部の中程まで喰い込ませて掘削し、上場で7号溝のプランに合わせていたものと想定される。

第3章 発見された遺構と遺物

2. 屋敷遺構の主郭北側を画する溝

(1) 3-1-7号溝 (第144図、図版64・89)

**概要** 本溝は3区西半部の北端近くに在り、屋敷遺構主郭の北を画している。

本溝は3-1-2・11・17～20号溝と重複し、このうち2・20号溝に切れ、19・20号溝を切っていた。本溝の東部は調査区外に出、西部は2号溝のため全容は把握できなかったが、11号溝との関係は前項の通りである。尚、11号溝との接合箇所の東側、南壁下位には鋤先痕が残されていた。

本溝の細かい時期特定はできなかったが、焼締陶器壺片(1,2)の出土から概ね中世の所産と把握される。またビタ銭(3)の出土から中世の遅い時期まで

埋没しきらなかったことが窺われる。

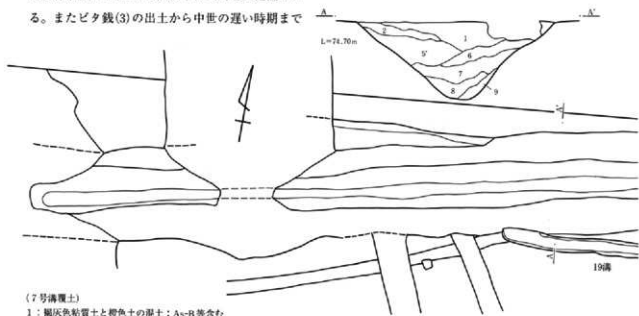
**規模** 長さ43.6m 幅215cm 深さ102cm

**構造** 本溝は東-12°-北の傾きを持つ東西走行の概ね整ったプランの直線的な溝である。

**掘削形態**は薬研壙状で、壁面下位の屈曲部を境に上方は壁面がやや広がる。底面は丸みを持つ。

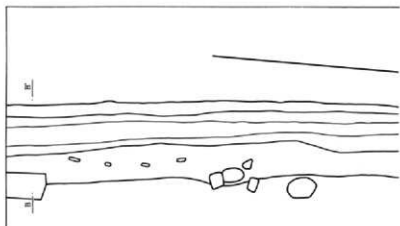
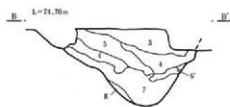
(2) 3-1-19号溝 (第144図)

**概要** 3区北西部に位置する。3-1-7号溝と近世以降の20号溝と切り合い関係にあり、両溝に切られる。



(7号溝覆土)

- 1: 褐灰色粘質土と橙色土の混土: As-B等含む
- 2: 褐色粘質土: As-B・橙土等混入
- 3: 2層土に黒褐色土と灰白色土混入
- 4: 暗灰色砂質土: As-B多量に含む
- 5: 3層土と4層土の混土
- 5': 5層に黄灰色砂質土と灰黄褐色土混入
- 6: As-Bと褐色土の混土: 酸化鉄等混入
- 6': 6層に似るが4層土と灰色砂質土混入
- 7: 褐灰色粘質土: 酸化鉄とAs-Bやや多く混入
- 8: 褐色粘質土: 酸化鉄・浅黄色土等混入
- 9: 7層土と8層土の混土: 酸化鉄多く沈着



第144図の(1) 3-1-7・19号溝

第3節 3区の遺構と遺物

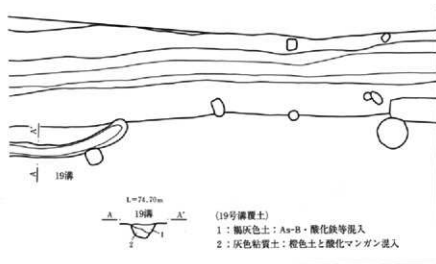
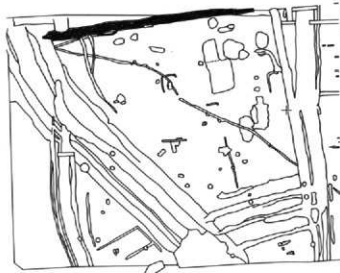
出土遺物もなく、時期は特定できなかったが、7号溝との切り合い関係と覆土から中世の所産として把握される。

高、本溝は位置的には7号溝同様郭北側を画するものであるが、プランも丸みを持ち掘削意図は特定できなかった。

規模 長さ5.4m 幅35cm 深さ18cm

構造 本溝は概ね東西方向を向き、南に湾曲するプランを呈する。

掘削形態は箱型状を呈している。



7溝-3



4/5



第144図の(2) 3-1-7・19号溝及び出土遺物

3. 屋敷遺構の東側を画する溝

(1) 3-1-26・27・37号溝

(第145・146～150図 図版66・67・89～92)

概要 3-1-26・27・37・38号溝は屋敷遺構東を画する溝群の一部である。このうち27号溝は3-1-33号溝に続き、26・27号溝は後述する3-1-12・28・29号溝との関係が考慮され、38号溝は単独で在る。

26・27・37号溝は後者ほど新しく、26→北半27・南半26→27号溝という変遷も窺がわれる。一方東西走行の3-1-13・14号溝に対して26・27号溝は、27号溝が14号溝を切る以外は切られている。

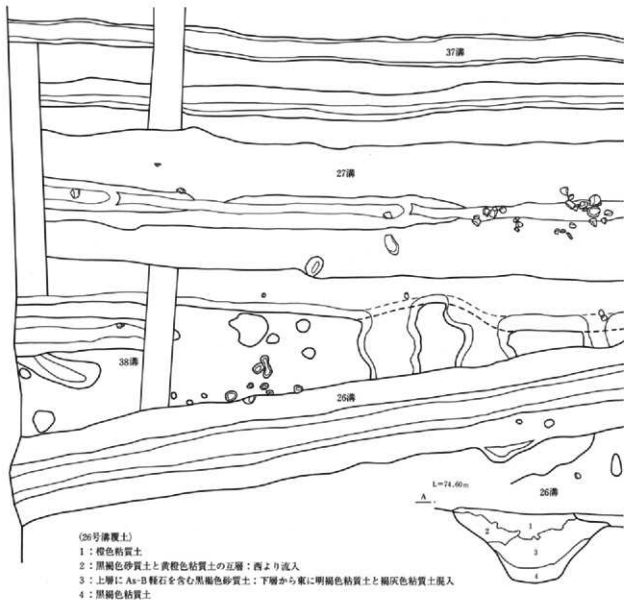
出土遺物には龍泉窯系の青磁碗(26溝-1,2)や渥美・知多産を主とする焼締陶器の甕(26溝-3～10、27溝-1～12、37溝-1)・摺鉢(26溝-11～13)片があり14世紀辺りの時期を示す。この他砥石(26溝-14、27溝-13)や願文が墨書されたもの(26溝-16)を含む礎石(26溝-15、27溝-15～23)、或いは打製石斧(27溝-14)や凹石(27溝-24)、台石(27溝-25)等も見られた。

規模 [26号溝] 長さ43.7m 幅230cm 深さ98cm

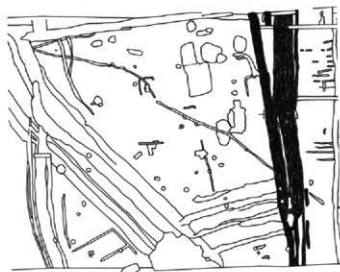
[27号溝] 長さ64.5m 幅386cm 深さ107cm

[37号溝] 長さ61.2m 幅80cm 深さ13cm

[38号溝] 長さ2.7m 幅80cm 深さ46cm



第145図の(1) 3-1-26・27・37号溝



構造 4条の溝は概ね南北北行の直線的なプランを呈するが、38号溝は北部に留まり、南部で26号溝は西折し、27号溝は立ち上がって止まる。尚、調査区中央北寄り)で27号溝が分岐して26号溝に合流する箇所がある。

掘削形態は26・27号溝は葉研堀状を呈して大きく、37・38号溝は小型で箱堀状を呈している。

(2) 3-1-28・29・32・36号溝

(第145・150図、図版67・92・93)

概要 3-1-28・29・32・36号溝は屋敷道構東を画する溝群のうち南部に位置するもので、前述の3-1-37号溝と3-1-12号溝と併せて調査された。



(27号溝埋土)

- 5 : As-B 混黒色砂質土と黒褐色砂質土の混土 : 6層土混入。右方にAs-B 軽石が多量に混入
- 6 : 明赤褐色粘質土とAs-B 混黒褐色粘質土の混土

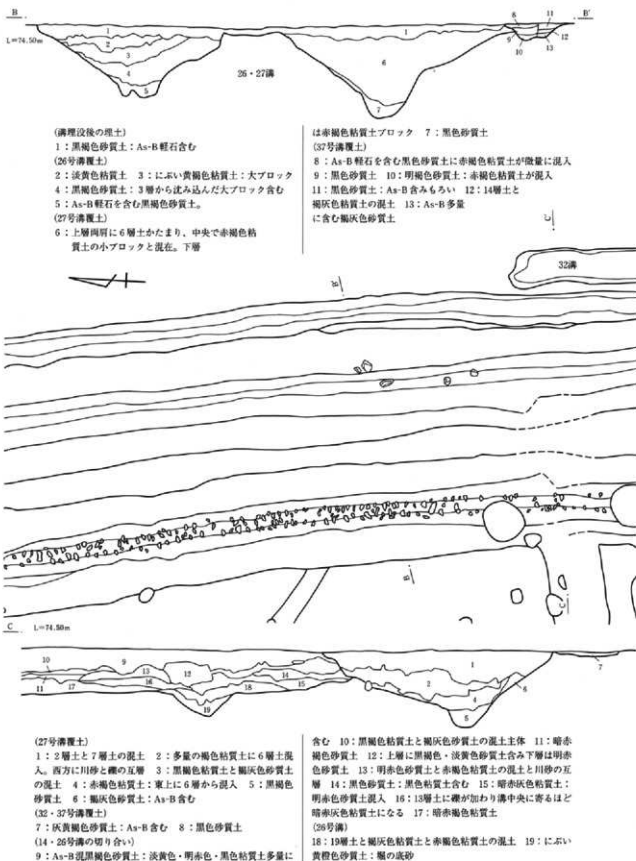
- 7 : 黒色砂質土 : As-Bと右上から底部にかけて3層土含む
- 8 : 黒色粘質土
- 9 : 明赤褐色粘質土とAs-B 混黒褐色粘質土の混土
- 10 : 黒灰色粘質土
- 11 : 黒灰色砂質土

(37号溝)  
12 : 11層土に同じ

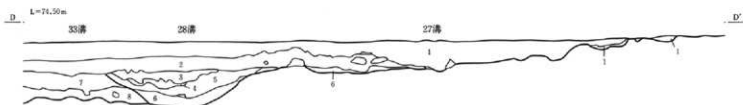
第145図の(2) 3-1-26・27・37号溝

このうち28・36号溝は3-1-27号溝、29号溝は3-1-26号溝のライン上になって、重複成いは接続の関係にあるが、新旧関係等は特定できなかった。

第3章 発見された遺構と遺物



第145図の(3) 3-1-26・27・37号溝



(13・32号溝覆土)

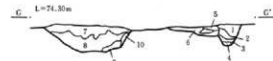
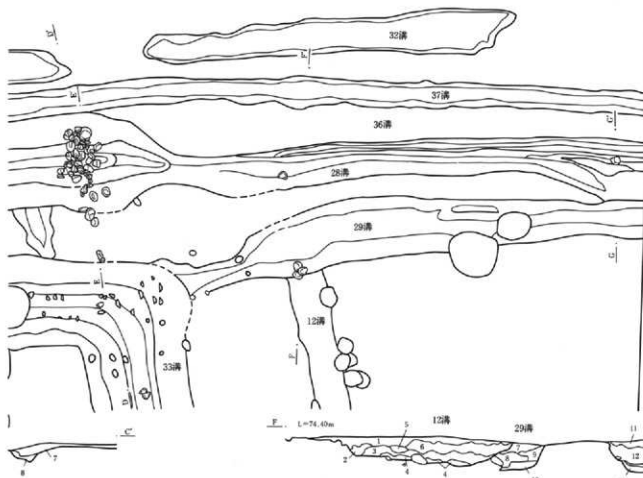
1 : A+B混黒褐色砂質土 : 東に行くほど下層部に明褐色粘質土の大ブロックを多数含む。硬質 2 : 砂礫と酸化鉄の互層

(26号溝覆土)

3 : にごい褐色粘質土 4 : にごい赤褐色粘質土 5 : 黒褐色砂質土に4のブロック含む 6 : 黒褐色粘質土

(30号溝覆土)

7 : 8層土と同色の砂質土との混土 8 : 赤褐色粘質土



(28号溝覆土)

1 : A+B混褐色砂質土 : 褐色粘質土含む 2 : 黒褐色砂質土 3 : 褐色粘質土 4 : 黄褐色砂質土 5 : 黒色粘質土 : 粒子細かく流れやすい 6 : 5層土と黒色粘質土との混土

(29号溝覆土)

7 : A+B混黒褐色砂質土 : 褐色粘質土含む 8 : 褐色粘質土と褐色粘質土の混土 9 : 黒色砂質土 10 : にごい褐色砂質土



(12号溝覆土)

1 : 黒褐色砂質土 : 地山 (にごい褐色粘質土) 等混入 2 : 地山に灰褐色砂質土少量混入 3 : 灰褐色砂質土 4 : 黒褐色砂質土 : 地山少量混入 5 : 黒褐色砂質土 : 鉄分沈着 6 : 3層土に地山等混入

(29号溝覆土)

7 : 3層土にマンガン等極少量混入 8 : 3層土に明褐色粘質土少量混入 9 : 黒褐色砂質土主体 10 : 3層土に褐色粘質土・マンガン混入

(28号溝覆土)

11 : 褐色砂質土 : 褐色粘質土多量に混入 12 : 11層で混入物少量混入 13 : にごい褐色粘質土 14 : 褐色砂質土 : 粘土混入 15 : 褐色粘質土・褐色粘質土混土に鉄分少量沈着 16 : 15層で鉄分なし

(36号溝覆土)

17 : 褐色砂質土 : 明褐色粘質土等少量混入 18 : 褐色砂質土 : 13層土等少量混入

(37号溝覆土)

19 : 灰褐色砂質土 : 混入物18層に似る





また37・36・28号溝は前・中・後者の順に新しく、更に28号溝は東が新しい東西2条の溝に分割される。尚28・36・37号溝と29・32号溝との新旧は特定できなかった。

出土遺物は少なく29号溝から磨石(1)、32号溝から龍泉窯系の青磁碗(1)、知多産の焼締陶器指鉢(2,3)片が出土しているに過ぎないが、覆土の観察と26・27号溝との関係から本項に示す溝群は14世紀前後の時期の所産と想定される。

規模〔28号溝〕長さ9.5m 幅130cm 深さ40cm

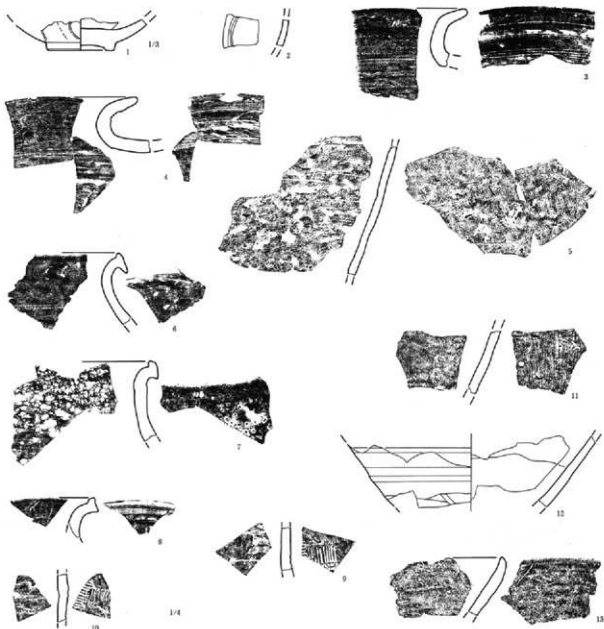
〔29号溝〕長さ9.9m 幅130cm 深さ49cm

〔32号溝〕長さ12.0m 幅95cm 深さ12cm

〔36号溝〕長さ11.8m 幅121cm 深さ28cm

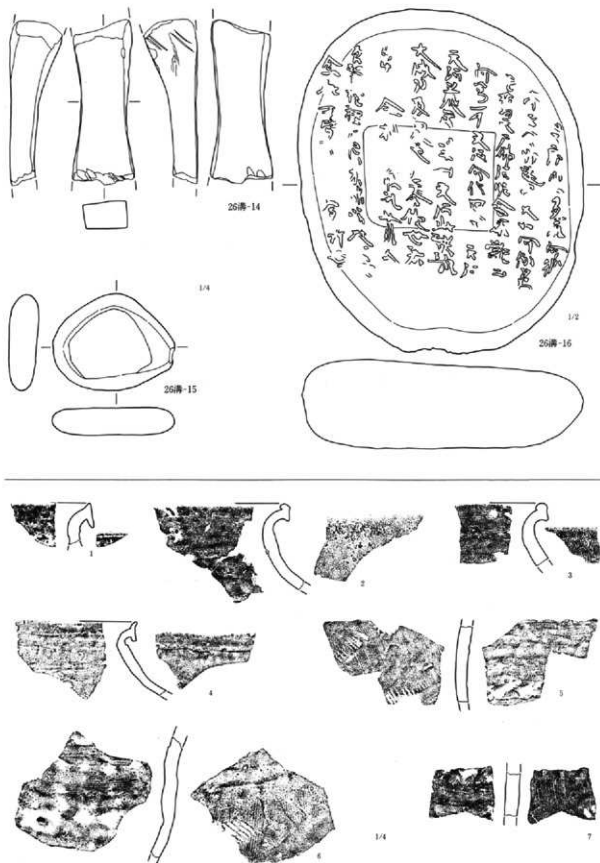
構造 本溝は概ね南北走行の直線的なプランを呈するが、28号溝は27号溝との接点付近から弧を描いて西折する可能性を有する。

掘削形態は28号溝東側の溝が薬研堀状を呈する以外は箱堀状を呈するが、規模は大きくない。

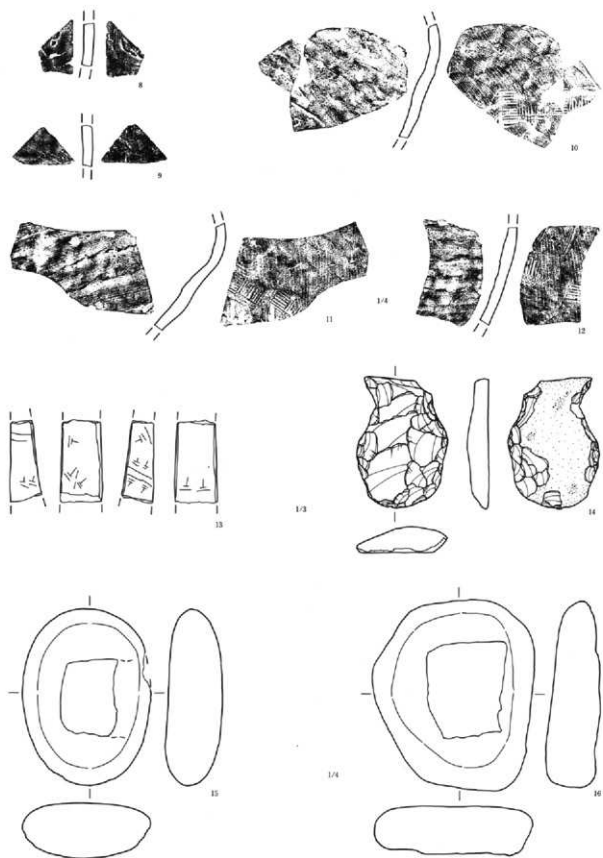


第146図 3-1-26号溝出土遺物(その1)

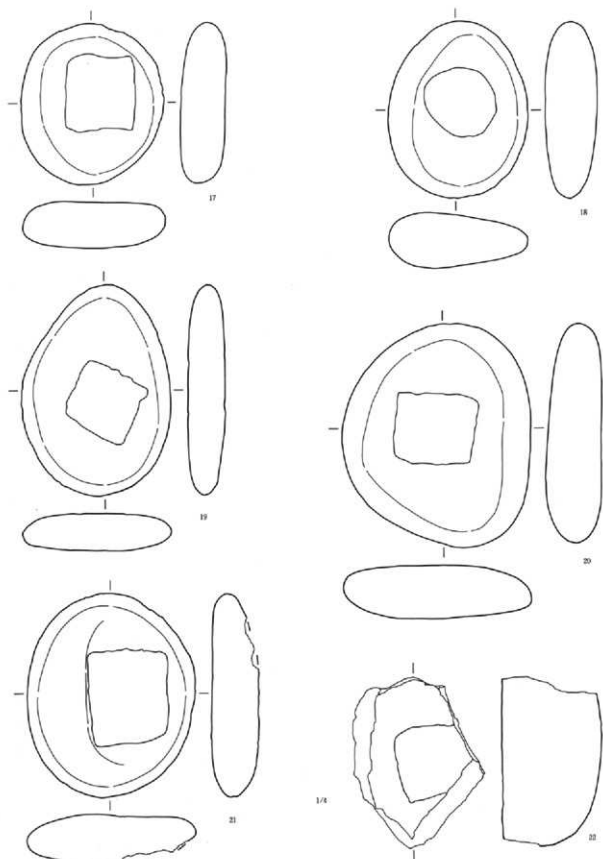
第3章 発見された遺構と遺物



第147図 3-1-26号溝出土遺物（その2）及び27号溝出土遺物（その1）

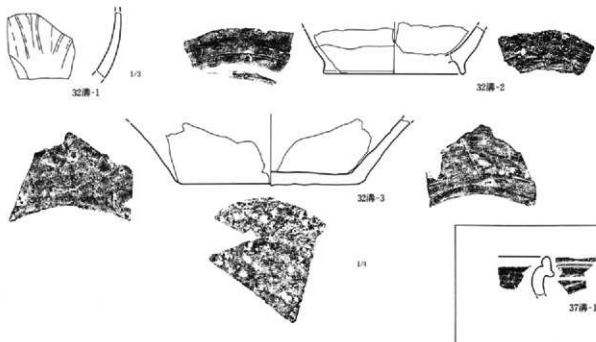
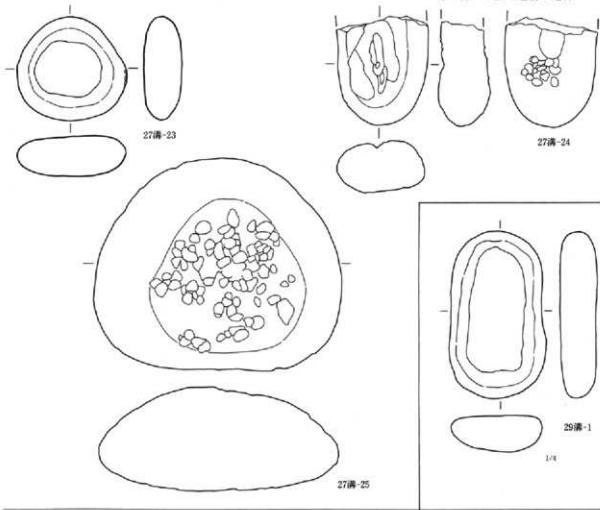


第148図 3-1-27号溝出土遺物(その2)



第149図 3-1-27号溝出土遺物

第3節 3区の遺構と遺物



第150図 3-1-27号溝出土遺物（その2）及び29・32・37号溝出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

4. 屋敷遺構の南側を面する溝

(1) 3-1-12・13・14・15・34・35号溝

(第151・152図, 図版64・65・67・92)

概要 3-1-12・13・14・15・34・35号溝は平行する溝群であるが、その規模から畝とは考えられず、屋敷遺構南側を面する溝遺構と判断される。

(14号溝覆土)

1: As-B多量に含む黄灰色砂質土と酸化鉄等含む灰白色・灰色・黒色粘質土の混土 2: As-B混濁灰色砂質土と灰色・橙色粘質土の混土 3: 細砂質の褐灰色粘質土 4: 川砂と3層土の混土: 酸化鉄含む 5: 細砂入る灰色粘質土: 酸化鉄混入(地山覆土: 酸化鉄分混入) 6: 黄灰色粘質土 7: 褐灰色粘質土: 6層土に8層土に入る。酸化鉄目立つ 8: 灰白色粘質土 9: 褐灰色中心の砂質土 10: 灰白色粘質土

B. L=74.40m

(12号溝埋没後層土)

1: 灰色砂質土: As-A等混入。現耕土 2: 黄灰色砂質土: As-Bと酸化鉄多く含む 3: 4層に似る。酸化鉄比着層 4: 褐灰色砂質土: As-Bと酸化鉄多く含む 5: 褐灰色粘質土: 混入物4層に同じ 6: 黄灰色砂質土 7: 橙色土と6層土の混土

C. L=74.90m

(11号溝覆土)

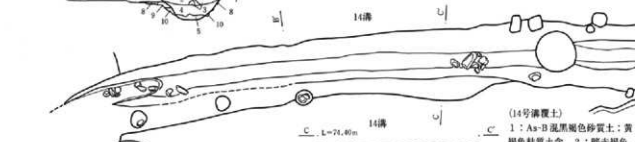
8: 褐灰色粘質土: 酸化鉄・酸化マンガン・9層土を含む 9: 黄灰色・灰白色・橙色・褐灰色粘質土の混土 10: 川砂とよい黄褐色粘質土の混土: 橙色土混入

(耕作土)

1: 現耕土: 褐灰色砂質土。As-A・酸化鉄入る 2: 3層土と灰黄色土の混土: 酸化鉄多く入る 3: 褐灰色砂質土: As-A・褐灰色土・酸化鉄・酸化マンガン混入 4: 褐灰色土: As-A・酸化鉄混入 5: 褐灰色砂質土: 細砂・酸化鉄混入

(15号溝覆土)

6: 黒褐色土: As-B・酸化鉄・酸化マンガン・橙色土混入



(14号溝覆土)

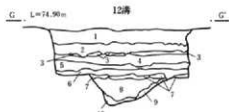
1: As-B混黒褐色砂質土: 黄褐色粘質土含む 2: 暗赤褐色砂質土と褐灰色粘質土の混土 3: 褐灰色・橙色粘質土混土

C. L=74.40m

(13号溝覆土)

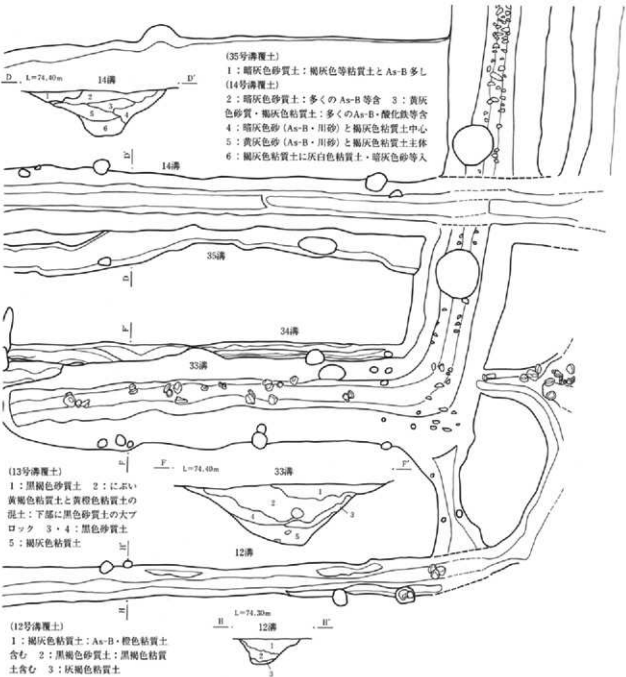
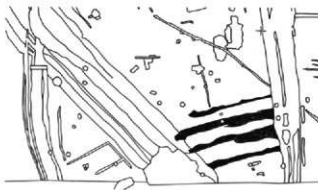
1: 黄灰色砂質土: As-B多量に含む灰色・黒褐色・明黄褐色粘質土等混入 2: 灰黄褐色・黒色粘質土: 明黄褐色粘質土多く含む若干のAs-A混入 3: 川砂と酸化鉄・黒褐色土の混土主体 4: 2層土と灰白色・褐灰色粘質土の混土

E. L=74.40m



第151図の(1) 3-1-12・13・14・15・33・34・35号溝

このうち35号溝は14号溝を切り、15号溝は南北2列以上に分かれている。また12・13・14号溝は屋敷東の3-1-27・28号溝の所まで延び、12号溝が3-1-29号溝、13号溝が3-1-26・27号溝、14号溝が26号溝を切り、14号溝が27号溝に切られる一方、西側で近世の3-1-1~3号溝・池遺構に切られるがこれを突き抜けてはいない。尚、12号溝と27・28号溝、



第151図の(2) 3-1-12・13・14・15・33・34・35号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物

13号溝と34号溝、15・34号溝と26号溝の新旧は確認できなかった。

本溝群のうち14号溝から龍泉窯系の青磁碗片3片(14溝-1~3)と知多産の埴輪陶器甕片(4)、15号溝から土師器片各1片が出土しただけで細かい時期の特定には至らなかった。また13号溝の27号溝交点付近では礎が多量に投棄されていた。尚、13号溝の覆土中からは一部As-Aも確認されたが、全体的な覆土の状況から13号溝も含め、本溝群の溝は中世の所産と判断している。

**規模** [12号溝] 長さ16.5m 幅130cm 深さ38cm

[13号溝] 長さ8.4m 幅90cm 深さ25cm

[14号溝] 長さ21.1m 幅140cm 深さ52cm

[15号溝] 長さ18.9m 幅80cm 深さ7cm

[34号溝] 長さ8.8m 幅47cm 深さ15cm

[35号溝] 長さ9.9m 幅79cm 深さ7cm

**構造** 本溝群各溝のプランは若干の湾曲・蛇行が見られるものの、走行は概ね東西を向く。但し12号溝は26号溝との交点付近から逆時計回り方向に弧を描くように走行を北に転じている。

溝群全体としては、南から12号溝、13・34号溝、14・35号溝、15号溝の4列に分かれ、それぞれの列が2.6m~4.6mの間隔で並列し、12号溝の南には後述する3-1-30・31号溝が並列している。

各溝の規模はさして大きくなく、掘り込みも深くない。掘削形態は35号溝が箱型である以外は薬研堀状を呈している。尚、各溝の東西両端の形状は重複のため確認できなかった。

(2) 3-1-33号溝 (第152・153図、図版67・92・93)

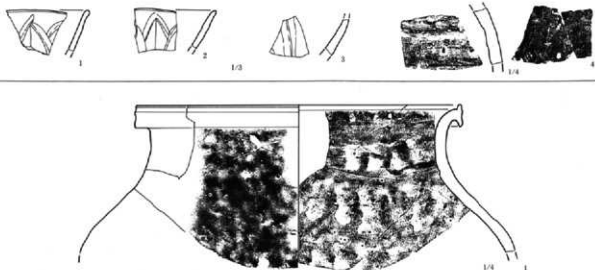
**概要** 本溝は屋敷南側を面する溝の一つで、3-1-26号溝の続きの溝である。上位を3-1-13・34号溝に切れ、東端で接する3-1-29号溝との新旧関係は確認できなかったが、本溝埋没後26号溝が29号溝に接続した可能性があることから本溝の方が古いと解釈している。また西端部は止まっているが、対応する堀・溝或いは構造物は確認されなかった。

本溝からは知多産の施軸陶器甕片(1)や鉢等在地の軟質陶器片(2,3)、磁石(4)が出土したが時期特定には至らず、中世の所産として把握されるに過ぎなかった。尚、本溝からはこの他磨石(5,6,8)、こもあみ石(7)、蔽石(9)の出土も見られた。

**規模** 長さ8.8m 幅222cm 深さ74cm

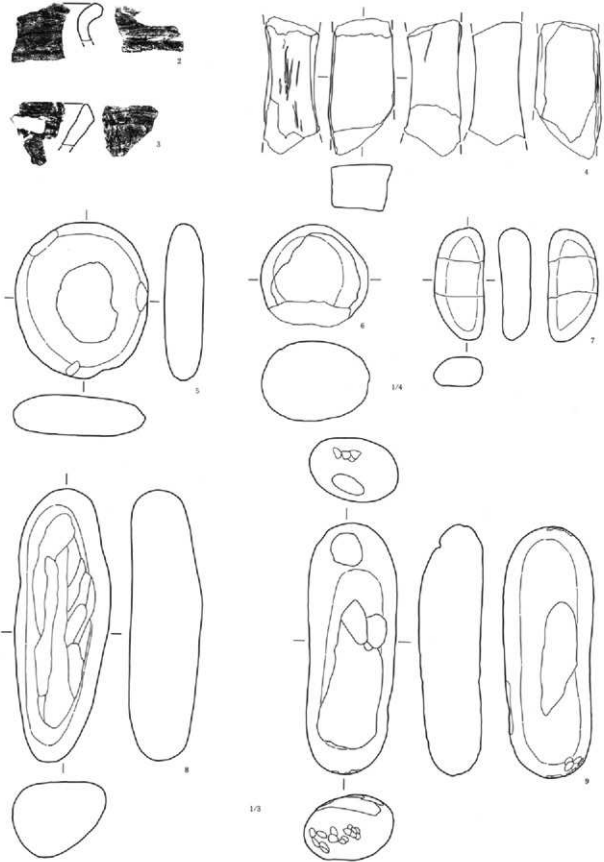
**構造** 本溝は東西に走行し、東端部で走行を北に転じて26号溝となっている。

本溝は堀と分類できるような大型の溝で、掘削形態は薬研堀状を呈している。尚、西端部はきつい傾斜で立ち上がっている。

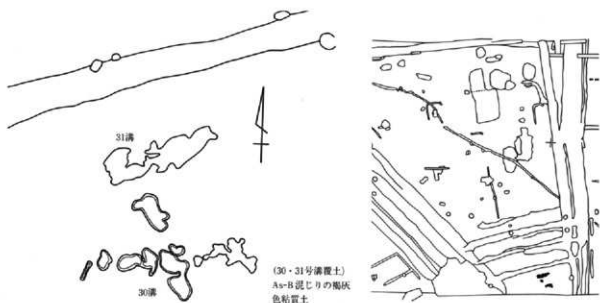


第152図 3-1-14号溝出土遺物及び33号溝出土遺物





第153図 3-1-33号溝出土遺物



第154図 3-1-30・31号溝

(3) 3-1-30・31号溝 (第154図、図版67)

**概要** 3-1-30・31溝は3区東南部に位置する。溝の残欠であるが、前述の3-1-12号溝の南に3-1-12～14溝等に並ぶように位置する。30・31号溝もその規模から畚のサクとは考えられないため、屋敷の南側を画する溝として把握される。

尚、30・31号溝の西寄りには31号溝に直交する溝の残欠が認められる。この溝の残欠は屋敷遺構の東を画する溝か郭内の区画溝と認識される。尚、これ以外の遺構との切り合いは認められなかった。

本溝からの出土遺物は認められなかったが、12号溝等に並列して同様の性格を持つと想定されること、及び覆土にAs-Bを含むことから概ね中世の所産として把握している。

**規模** (30号溝) 長さ3.7m 幅64cm 深さ5cm

(31号溝) 長さ2.5m 幅61cm 深さ8cm

**構造** 30号溝は概ね東西方向に走行を取り、31号溝は12号溝の南に平行に在って東北東-西南西方向に走行を取る。尚、30号溝と31号溝は1.8～2.5m、31号溝と12号溝は1.8m程の隔たりを持つ

30・31号溝は上述のように溝の残欠であるので掘削形態はつまづらかでない。

(4) 3-1-8号溝 (第155図、図版93)

**概要** 本溝は屋敷南側の溝と把握しているが、一部が調査できただけで過半は南側調査区外に在る。他遺構との切り合いも特になかった。

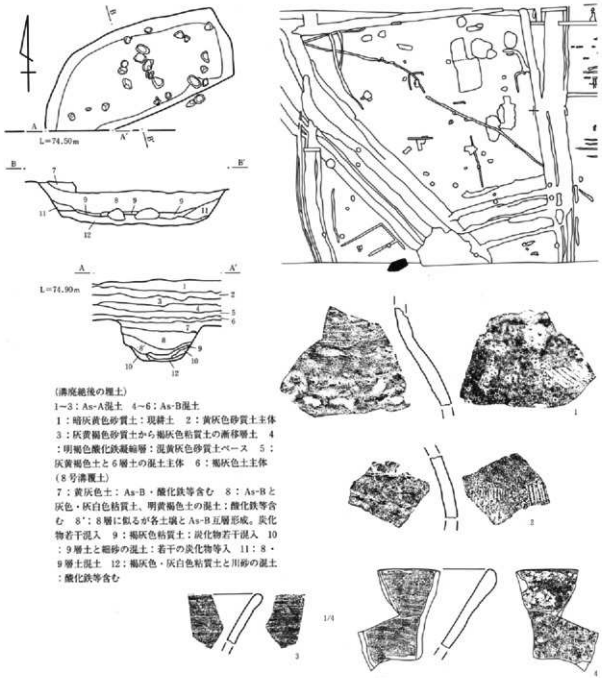
本溝の東端は止まっているため虎口関連遺構の存在が想定されたが、確認されなかった。また、位置的に3-1-12・13号溝が対応する可能性は有するものの、直ぐ東側に3-1池が掘削されていることもあって対応する堀・溝等は特定できなかった。

本溝からは知多産の焼締陶器甕(1.2)・搦鉢(3)や在地の軟質陶器搦鉢(4)、土師器甕の破片が出土している。細かい時期特定には至らなかったが、本溝は出土遺物と覆土の観察所見とを併せて概ね中世の所産として把握されるものである。

**規模** 長さ3.9m 幅190cm 深さ45cm

**構造** 本溝は池遺構の西側を端部として東北東-西南西に走行を取る。そして本溝の西端、調査区南端に接する付近から走行を南側に転じている。

本溝は比較的浅い掘り方を有しているが、やや大きな箱堀状の掘削形態を見せている。しかし、走行を南に変じた箇所からは3-1-12～15号溝に似た規模の葉研堀状となる。



(溝底絶後の層土)

1-3: As-A混土 4-6: As-B混土

1: 暗灰色砂質土; 現耕土 2: 黄灰色砂質土主体

3: 灰黄褐色砂質土から褐灰色粘質土の漸移層土 4:

明褐色酸化鉄凝縮層; 混黄灰色砂質土ベース 5:

灰黄褐色土と6層土の混土主体 6: 褐灰色土主体

(8号溝覆土)

7: 黄灰色土; As-B・酸化鉄等含む 8: As-Bと

灰色・灰白色粘質土。明黄褐色土の混土; 酸化鉄等含む

8\*; 8層に似るが各土塊とAs-B互層形成。炭化物若干混入

9: 褐灰色粘質土; 炭化物若干混入 10:

9層土と細砂の混土; 若干の炭化物等入 11: 8・

9層土混土 12: 褐灰色・灰白色粘質土と川砂の混土;

酸化鉄等含む

第155図 3-1-8号溝及び出土遺物

## 5. 屋敷遺構内部の遺構

### (1) 3-1-9号溝 (第156図)

**概要** 本溝は3区西部、前述の屋敷遺構西側を画する3-1-4号溝の東辺から1m程隔たった位置に4号溝とはほぼ平行に掘削されている。本溝はその掘削位置から屋敷遺構西側を画する溝の可能性もあるが、3-1-4-6号溝に比べて全体的な掘り込みが浅く形

態が崩れていること、部分的に確認できたに過ぎないことなどから土塁の内側を画した溝ではないかと想定している。

また、本溝は3-1-81・82・167・168・228号ピットと切り合う。このうち本溝は81号ピットを切るが、他のピットとの新旧は特定できなかった。

本溝からの出土遺物はなく時期の特定にも至らな

第3章 発見された遺構と遺物

かったが、覆土の状況と、4号溝に平行して掘削されていることから、中世の所産と判断している。

**規模** 長さ11.8m 幅75cm 深さ23cm

**構造** 本溝は全体としては南北に走行を取っているが、4号溝と同様西側に張り出す緩やかな弧を描いている。プランを見ると幅員は中・北部に比べ南部は1/2と減じていて一定していない。

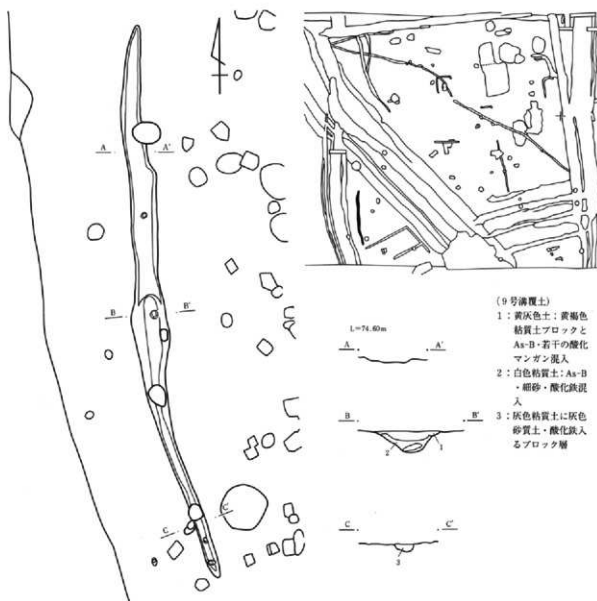
掘削形態は北部は箱堀状で、中・南部は裏研堀状を呈している。また、中程で底面に段差を持ち、南側に落ちている。

(2) 3-1-17・18号溝 (第157図、図版65)

**概要** 3-1-17・18溝は調査区北西部に在る。

17・18号溝は中程から南はらせん状に絡まるように重複するが17号溝の方が新しい。両溝は近世以降の3-1-20号溝に切られ、古代の3-1-21号溝を切るが、重複する3-1-7号溝や3-1-1281号ピット等の柱穴との新旧は特定できなかった。

17・18号溝からの出土遺物は無く、時期特定には至らなかったが、後述の状況と覆土から中世の所産と想定している。



第156図 3-1-9号溝

17・18号溝は南半は地形沿って掘削されたものと想定される。一方18号溝の底面は土地の傾斜に反し

て非常に緩やかではあるが北側に傾斜し、17号溝も北側で盛り上がり中・南部より高くなるものの中・南部と北部それぞれの底面はやはり北側に傾斜する。従って17・18号溝は郭内の排水を目的に掘削されたと想定される。また両溝を境にその西側に柱穴が分布しないため、両溝は屋敷内の何らかの区画溝も兼ねていたのではないと想定される。

規模 〔17号溝〕長さ18.3m 幅66cm 深さ13cm

〔18号溝〕長さ9.5m 幅65cm 深さ36cm

構造 17号溝は北西から入って東に張る、18号溝との合流点からは西に張り出す弧を描いて南東方向に抜ける。18号溝は北北西から入って西に張る緩やかな弧を描きながら、19溝と絡まって走行する。

掘削形態は17・18号溝共に箱型状を呈する。

(3) 3-1-23号溝 (第158図、図版66・93)

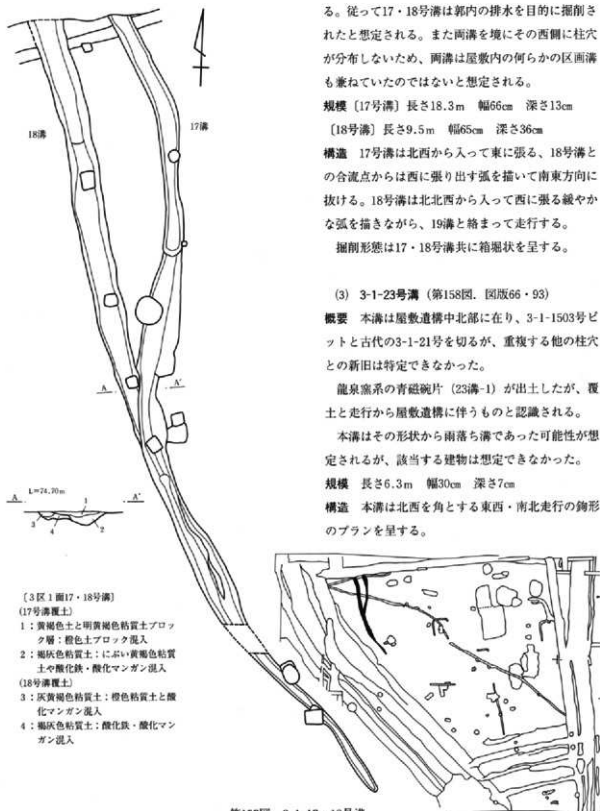
概要 本溝は屋敷遺構中北部に在り、3-1-1503号ピットと古代の3-1-21号を切るが、重複する他の柱穴との新旧は特定できなかった。

龍泉窯系の青磁碗片(23溝-1)が出土したが、覆土と走行から屋敷遺構に伴うものと認識される。

本溝はその形状から雨落ち溝であった可能性が想定されるが、該当する建物は想定できなかった。

規模 長さ6.3m 幅30cm 深さ7cm

構造 本溝は北西を角とする東西・南北走行の鉤形のプランを呈する。



〔3区1 圖17・18号溝〕

(17号溝覆土)

1: 黄褐色土と明黄褐色粘質土ブロック層・橙色土ブロック混入

2: 褐灰色粘質土にぶい黄褐色粘質土や酸化鉄・酸化マンガン混入

(18号溝覆土)

3: 灰黄褐色粘質土・橙色粘質土と酸化マンガン混入

4: 褐灰色粘質土・酸化鉄・酸化マンガン混入

第157図 3-1-17・18号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物

掘りこみは浅く、掘削形態は箱状を呈するが、底面はやや丸みを帯びている。

#### (4) 3-1-22号溝 (第158図)

**概要** 本溝は屋敷遺構中程に位置する。

出土遺物無かったが、覆土とその走行から屋敷遺構に伴うものと判断される。

本溝は2×6間の大型の建物の中央に在るためその関連も考慮されるが、両側の3-1-1246・1248号ピットと一体として堀の設置伴う可能性も有する。

**規模** 長さ1.6m 幅23cm 深さ14cm

**構造** 本溝は東西走行のプランを呈する。

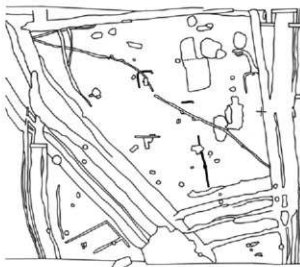
掘削形態は底面がやや丸みを持つ箱状を呈する。

#### (5) 3-1-16号溝 (第158図)

**概要** 本溝は屋敷遺構中南部に位置する。

本溝からの出土遺物無かったが、覆土と走行から屋敷以降に伴うものと判断される。

本溝は3-1-15号溝の北に在ってこれに直交し、屋敷遺構東を画する溝と平行である。またその規模

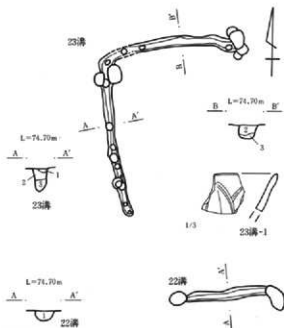


も勘案して本溝は屋敷内の区画溝と判断される。

**規模** 長さ11.1m

幅30cm 深さ7cm

**構造** 本溝は南北走行のプランを呈し、掘削形態は箱状を呈する。

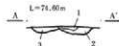


(22号溝覆土)

1: As-B 多く含む灰色土と明灰褐色粘質土のブロック層

(23号溝覆土)

- 1: 明灰褐色粘質土と明灰色土のブロック層
- 2: 明灰色土にぶい黄褐色粘質土入る小ブロック層: 酸化鉄と軽石 (As-Cか) 僅かに含む。
- 3: 黄灰色粘質土: 地山土壌混入か。軽石 (As-Cか) と酸化鉄僅かに含む。



(16号溝覆土)

- 1: 2層土と褐色粘質土小ブロック層
- 2: As-B 含む黄灰色砂質土 (ピット覆土)
- 3: As-B 入る灰色粘質土とぶい黄褐色粘質土ブロック層

第158図 3-1-16・22・23号溝及び出土遺物

## (6) 3-1-24・25号溝 (第159図, 図版93)

**概要** 3-1-24・25号溝は屋敷北東部に在る。24・25号溝は重複するが、切り合い関係にある3-1-26・27号溝とのそれも含め新旧は特定できなかった。

24号溝からの出土遺物は無かったが、25号溝からは軟質陶器片 (25溝-1) が出土している。

24・25号溝は25号溝が27号溝に直交し、その対岸に現れないことから郭内から27号溝への排水を行う溝と想定され、特に25号溝はその位置から3-1-10

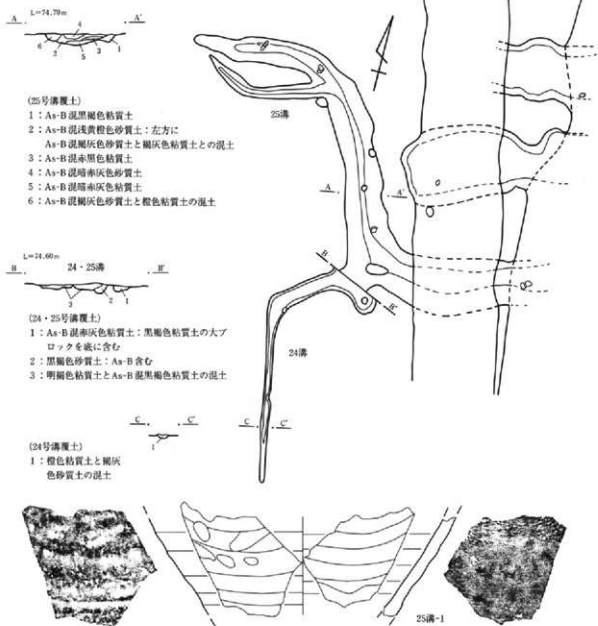
号溝に伴うものと思慮される。尚、25号溝東端部の北側に並走する溝2条が認められる。

**規模** [24号溝] 長さ5.3m 幅36cm 深さ13cm

[25号溝] 長さ9.9m 幅90cm 深さ15cm

**構造** 24号溝は南北走行を呈し、北部で北東に走行を転じて25号溝に合流する。また25号溝西から入り南、24号溝との合流後に東へと走行を転じて27号溝に合流する。

**掘削形態**は両溝とも箱扇状を呈する。



第159図 3-1-24・25号溝及び出土遺物

(7) 3-1-1号竪穴建物 (第160図, 図版73・93)

**概要** 本建物は屋敷遺構東部中程に位置する。

後述の3-1-5号竪穴建物と切り合が新旧は特定できなかった。また古代の溝である3-1-21号溝や屋敷遺構に伴う柱穴3-1-738・807・1057号ピットを切るが他の柱穴との新旧関係は特定できなかった。

本建物からは双脚留金具状の菊花をモチーフとした銅製飾金具(1)が出土している。時期の特定には至らなかったが、本遺構は屋敷遺構に伴う遺構と判断される。尚、上記銅製品の出土から本建物は倉庫として使用された可能性が推定される。

**規模** 長軸500cm程度 短軸210cm以上

掘り方深さ8cm

**構造** 本建物は遺存状況が悪く、その構造は明瞭にできなかったが、プランは概ね南北に長軸を持つ長方形を呈するものと判断される。

掘り方を有し、各種の粘質土

(遺構廃絶後の埋土)

- 1: 現耕作土 2: 灰オリブ砂質土主体
- 3: 4層の鉄分沈着多い部分 4: 黄灰色砂質土; As-A等混入 5: 褐灰色砂質土; As-A等混入 6: 鉄分沈着のAs-B混入; 濃い黄褐色砂質土主体 6': 褐色土多く混入

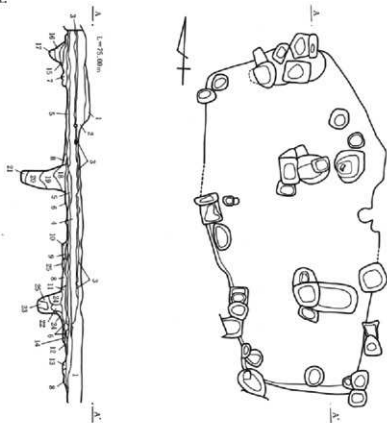
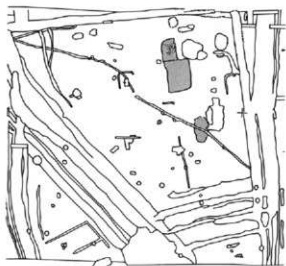
(1号竪穴建物掘り方覆土)

- 7: As-B混灰色土と褐色土・酸化鉄の混入
- 8: As-B混暗灰色砂質土に褐色土と酸化鉄混黄灰色粘質土混入
- 9: 褐色土に褐灰色粘質土; 若干の暗灰色砂質土混入
- 10: 暗灰色砂質土と濃い黄褐色・濃い黄褐色粘質土; As-B等混入
- 11: As-B混暗灰色砂質土; 褐色土・灰黄褐色粘質土混入
- 12: 灰色粘質土; As-B混灰色粘質土混入。鉄分沈着
- 13: 黄灰色粘質土; 褐色土・黒色粘質土入
- 14: As-B混灰色砂質土; 灰黄褐色土塵み入

- (1057号ピット覆土) 15: 灰黄褐色粘質土とAs-B混灰色・褐色砂質土 16: As-B混灰色砂質土; 灰黄褐色粘質土等混入 17: 黒色土・灰黄色粘質土・灰黄色中心の粘質土
- (807号ピット覆土) 18: 褐灰色土; 明黄褐色粘質土等混入 19: 灰黄褐色土・灰白色土とAs-B混

- 灰色砂質土 20: 褐灰色粘質土; As-B混黄灰色砂質土混入 21: 灰黄褐色粘質土と暗灰色砂質土の混入 (738号ピット覆土)

- 22: As-B混灰色砂質土; 23層土混入 23: 22・24層土と黄灰色砂質土の混入 24: 褐灰色粘質土と25層の混入 25: 黄灰色土; 炭化物混入



第160図 3-1-1号竪穴建物





・砂質土で埋め戻して床を作り出している。

床面も殆ど失われ、柱穴の重複も多いので本建物の柱穴等を含め、上部構造については明らかにする

ことはできなかった。尚、北西の3-1-1050号ピットと南西の3-1-713号ピット、南東の3-1-713号ピットが壁柱穴の可能性を有している。

(2号壁穴建物覆土)

- 1: As-B混黄灰色砂質土と灰黄褐色粘質土・橙土等入る
  - 2: As-B・橙土入る灰色砂質土:若干の灰化物入る
  - 3: 灰黄褐色土と橙色の混土
  - 4: As-B入る黄灰色砂質土:酸化鉄・橙土入る
  - 5: As-B入る黄灰色砂質土:褐灰色土・酸化鉄混入
  - 6: As-B入る暗灰色砂質土:5層土にぶい黄褐色土入る
- (3号壁穴状遺構覆土)
- 7: As-B混褐灰色砂質土:橙土・灰黄色・灰黄褐色土入る
  - 7': 褐灰色砂質土主体
  - 8: As-B・橙土入る褐灰色土
  - 9: As-B混黄灰色土:褐灰色土・酸化鉄等混入
  - 10: As-C混褐灰色土:橙土・褐灰色土と灰色粘質土等混入
  - 11: As-B混褐灰色土と灰黄褐色・にぶい黄褐色粘質土主体
- (1474号ピット覆土)
- 12: As-B多く含む褐灰色粘質土
  - 13: 暗灰色粘質土ににぶい黄褐色粘質土入る

(2206号ピット覆土)

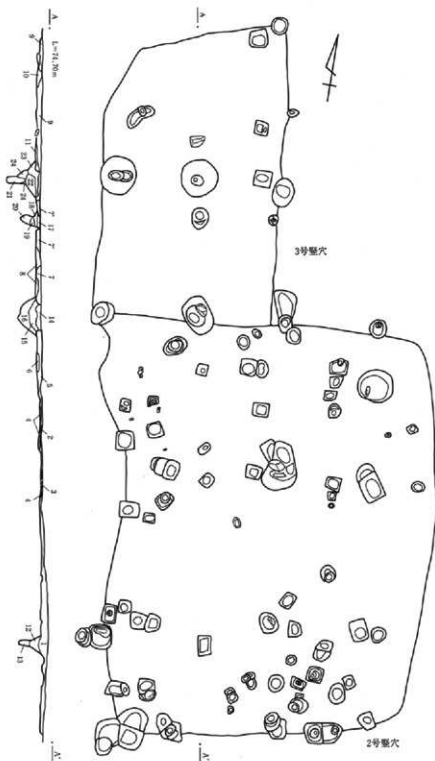
- 14: As-B混褐灰色土:橙土等混入
- 15: As-B混褐灰色砂質土:灰黄褐色粘質土・橙土等入る
- 16: 褐灰色・にぶい黄褐色・明黄褐色粘質土主体:締り著く欠

(2381号ピット覆土)

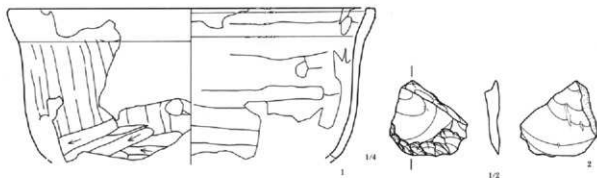
- 17: As-B混黒褐色土主体
- 18: 褐灰色粘質土とAs-B混黄灰色土
- 19: As-Bと褐灰色土主体
- 20: 19層土と明黄褐色粘質土

(2380号ピット覆土)

- 21: 褐灰色粘質土:締り著く欠け橙土入る
- 22: 褐灰色砂質土:灰白色粘質土・酸化鉄等入る
- 23: As-B混灰色砂質土と灰白色粘質土:橙土・黒褐色土等混入
- 24: 褐灰色・黄灰色粘質土中心



第161図 3-1-2・3号壁穴建物



第162図 3-1-2号堅穴建物出土遺物

(8) 3-1-2号堅穴建物

(第161・162図、図版73・93)

**概要** 本建物は屋敷遺構北東部に位置する。

北側で後述する3-1-3号堅穴建物と切り合うが、断面観察を行った位置に3-1-2206号ピットが在って2号・3号双方の堅穴建物を切っていたためその新旧を特定することはできなかった。また本建物には多数の柱穴が重複して位置しているが、上述の2206号ピットが本建物を切ることが確認された他は、南部の3-1-1074号ピット等他の柱穴との新旧を特定することはできなかった。

本建物からは14世紀の所産と思われる内耳鍋(1)が出土している。従って本建物は屋敷遺構に伴う遺構として把握される。この他、本建物からは縄文時代のスクレーパー(2)の出土も見られた。

**規模** 長軸650cm程 短軸520cm以上 深さ8cm

**構造** 本建物は遺存状況が悪く、特に西部は削られて尖われており明瞭ではないが、プランは概ね南北に長軸を持つ若干角の丸い長方形若しくは正方形を呈するものと判断される。

掘り方を有したかどうかは特定できなかったが、底面の状況から地床の建物と想定され、表出面を以って床面と解釈している。

本建物も柱穴の重複が多かったため、何れが本建物に関連する柱穴なのか、或いは柱穴を有していたかを特定することはできなかった。従って本建物の上層構造については明らかにできなかった。但し、本建物の堅穴の掘り込みは浅く幾分かでも壁を立てていたのではないかと推定される。

(9) 3-1-3号堅穴建物 (第161図、図版73)

**概要** 本建物は屋敷遺構北東部、前述の3-1-2号堅穴建物の北側に接するように位置する。尚、前述のように2号建物との新旧を特定することはできなかった。

本建物とは少なくとも15基の柱穴が重複しているが、南壁の3-1-2206号ピットと中程の3-1-2381号ピットが本建物を切り、本建物が3-1-2380号ピットを切ることが確認された以外は、切り合い関係にある他の柱穴と本建物との新旧を特定することはできなかった。

本建物からの出土遺物は無かったが、覆土の状況と本建物が堅穴建物であることから屋敷遺構に伴うものであると想定される。

**規模** 長軸470cm程度 短軸280cm以上  
深さ8cm

**構造** 本建物は遺存状況が悪く、特に東部は削られている可能性があつて明瞭ではないが、南北方向に長軸を持つ角丸長方形若しくは長方形のプランを呈するものと判断される。

表出面は比較的平らであつたが、断面観察では凹凸も認められ、表出面が掘り方で在った可能性を有する。底面はAs-B混土で覆われている。

本建物は何基もの柱穴と重複しているが、本建物に関連する柱穴が有るのか否かを特定することはできなかった。従って本建物の上層構造を想定することはできなかったが、本建物も堅穴の掘り込みが浅く、半地下式というよりは平地式の建物に近い構造が想起されるのである。

## 0Q 3-1-4号竪穴建物 (第163図、図版73・74)

**概要** 本建物は屋敷遺構北東部、やや柱穴の分布が薄くなった地点に位置する。南西部が前述の3-1-2号竪穴建物の北東隅部に接しているが、2号建物との新旧を明瞭にすることはできなかった。

また、本建物は3-1-9号井戸、及び少なくとも12基の柱穴との重複が確認されているが、何れの遺構に対しても新旧関係を特定することはできず、またその有無も含めて本建物に伴う柱穴も特定することができなかった。

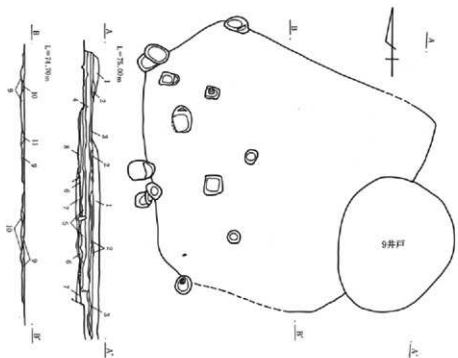
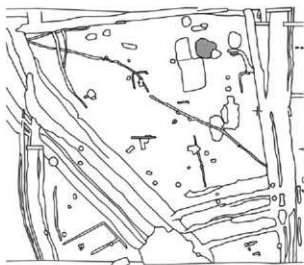
本建物からの出土遺物は無く、時期の特定には至らなかったが、覆土の状況と本建物が竪穴建物であることから屋敷遺構に伴うものであると想定される。

**規模** 長軸430cm程度  
短軸430cm程度  
掘り方深さ5cm

**構造** 本建物は削平されていて遺存状況が悪かったため、全体の状況はつまびらかでないが、概ね西北西-東南東を主軸とする隅丸方形様のプランを呈するものと想定される。

掘削底面は比較的平らではあるものの凹凸が認められるため、表出面は掘り方面と判断される。床面はこれをAs-Bを含む各種の土壌で掘め戻して造っているものと想定される。

上屋構造については、上述のように柱穴は確認できなかったため確認できなかったが、3-1-1~3-1-5号竪穴建物同様掘り込みが浅いので壁立の建物であったものと考慮される。



## (遺構掘削後の埋土)

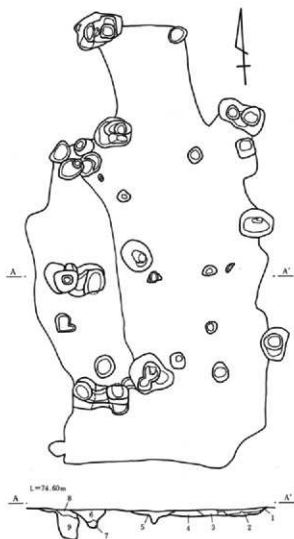
- 1: 現耕土
- 2: 灰オリーブの砂質土主体
- 3: 4層土の鉄分沈着多い部分
- 4: 黄灰色砂質土: As-A等混入
- 5: 褐灰色砂質土: As-A・6層土等混入
- 6: 明黄褐色土: 7か8層土混入(9号井戸覆土)
- 7: As-B混黄灰色砂質土とにぶい黄褐色土主体(4号竪穴建物覆土)
- 8: 黄灰色粘質土: にぶい黄褐色粘質土等混入
- 9: As-B混灰黄褐色土・明黄褐色・藍色土、灰色粘質土混入
- 10: As-B混灰黄褐色・明黄褐色土と灰色粘質土の混土
- 11: 酸化鉄・酸化マンガン多く入る灰色粘質土と褐色土の混土

第163図 3-1-4号竪穴建物

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### (1) 3-1-5号竪穴建物 (第164図)

**概要** 本建物は屋敷遺構東部中程、柱穴の分布域の東端に近い辺りに位置する。本建物はその西部で前述の3-1-1号竪穴建物に接しているが、先に述べたように1号竪穴建物との間に新旧を特定することはできなかった。



〔3区1面5号竪穴状遺構〕

(5号竪穴状遺構覆土)

1：黄褐色粘質土と2層の混土 2：黒灰色砂質土 3：1層土と黒褐色砂質土の混土 4：2層土に灰色粘質土と黄褐色粘質土混入の混土 5：2層土と暗赤灰色粘質土と褐色粘質土の混土

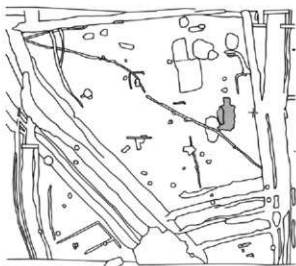
(3179号ピット覆土)

6：7層に明赤褐色粘質土多く混入 7：黒色砂質土

(3180・3181号ピット覆土)

8：ぶい褐色粘質土 9：7層土に明赤褐色粘質土多く混入

第164図 3-1-5号竪穴建物



また、本建物は32基以上の柱穴との重複があり、本建物全体が想定される大型建物にすっぽり入り込んでいる。これらの柱穴のうち本建物は3-1-3178号ピットに切られているが、これ以外の柱穴と本建物との新旧関係を特定することはできなかった。

本建物からの出土遺物は見られず、時期特定には至らなかった。高、覆土と建物の種別から本建物ば屋敷遺構に伴うものと想定される。

**規模** 長軸430cm程度 短軸430cm程度 掘り方深さ5cm

**構造** 本建物も上位が後世の耕作等によって大きく削平されていたため全体の状況はつまびらかにできなかったが、そのプランは南北に主軸を取り概ね隅丸方形様を呈していたものと想定される。

掘削底面は概ね平らな状態を呈しているが、表出した面が地床か掘り方かの区分は難しい。尚、建物の西寄りの中程に縦に描かれたラインを境として、その以東は床面、以西は掘り方である可能性が考慮される。

上屋構造については、本建物に伴う柱穴が特定できなかったこともあり想定できなかったが、3-1-1~4号竪穴建物と同様に掘り込みが浅かったため、壁立の建物であったのではないかと考えられる。

(12) 郭周縁部の土坑群

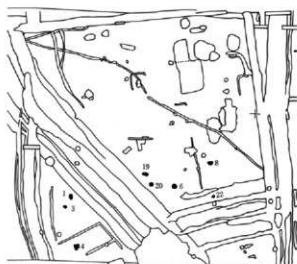
(第165～167図、図版67～71・93)

概要 屋敷遺構内では28基の土坑を確認、調査したが、本項ではこのうちの周堀沿いの3-1-1・3・4・6・8・12・13・14・15・16・19・20・22・27・28・29号の16基について述べることにする。

郭周縁部の土坑は28・29号土坑が東側、6・8・19・20・22号土坑が南側、1・3・4号土坑が西側、12・13・14・15・16・27号土坑が北側の溝沿いに在り、その分布は南東部で薄い。

このうち9基は1～12基の柱穴との重複が見られたが、8号土坑が3-1-486号ピットに切られることが確認された以外、その新旧関係は特定できなかった。

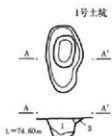
また土坑の規模は北側の土坑は大型のものが多く、東・南・西側の土坑は小型のものが多く、その規模の違いははっきりとしていて、長軸方向の長さ



(6号土坑覆土)

- 1: 灰黄褐色・黒褐色・にぶい黄褐色粘質土とAs-B混灰色砂質土の混土; 明褐色砂質土等混入
- 2: As-B多い黄灰色土; 黒褐色粘質土と酸化鉄混褐色粘質土等混入

6号土坑-1



(1号土坑覆土)

- 1: 暗灰色砂質土: 多くのAs-B等入る灰色土や灰白色土・明黄褐色粘質土・炭化物も見る
- 2: 黄灰色砂質土: 灰色・明黄褐色粘質土混入
- 3: にぶい黄褐色砂質土: 1層土と鏡土混入

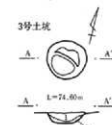


(19号土坑)



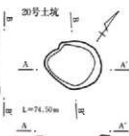
(8号土坑覆土)

- 1: As-B多い暗灰色砂質土に灰色・褐色・橙色粘質土混入 (486号ピット覆土)
- 2: 暗灰色砂質土: As-B・明褐色・褐色・にぶい黄褐色粘質土と酸化鉄混入
- 3: にぶい黄褐色粘質土: 暗灰色砂質土混入



(3号土坑覆土)

- 1: 灰色土と灰白色粘質土の混土主体
- 2: 黄灰色粘質土: 灰白色粘質土等混入



(20号土坑)

(4号土坑覆土)

- 1: 暗灰色土: 酸化鉄・酸化マンガン・灰白色粘質土混入。酸化鉄多し
- (23号ピット覆土)
- 2: 黄灰色土: 酸化鉄・酸化マンガン・細砂含む灰白色土混入
- 3: 暗灰色砂質土: 酸化鉄・酸化マンガン絡みの灰白色土含む
- 4: 酸化鉄分多い灰白色粘質土と暗灰色粘質土の混土: 黒褐色粘質土混入。隣接する地山層に似る

(地山層覆土)

- ①: 暗灰色粘質土 ②: 灰白色粘質土 ③: 灰白色粘質土
- ④: 暗褐色粘質土 ⑤: 灰白色粘質土 ⑥: 灰白色粘質土



(22号土坑)

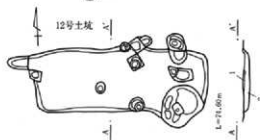
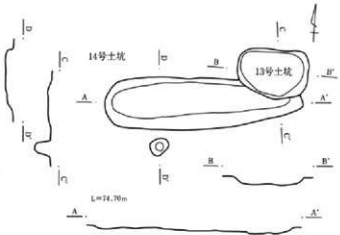
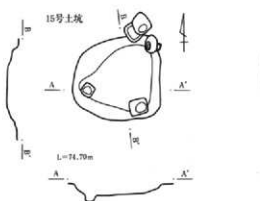
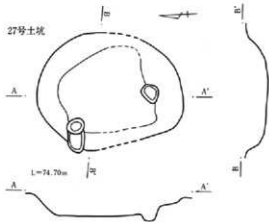
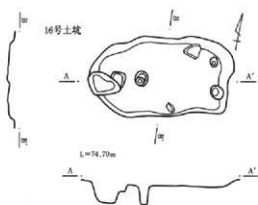
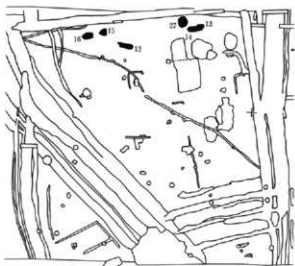
第165図 3区1面屋敷遺構南部の土坑群

### 第3章 発見された遺構と遺物

では東・南・西側の土坑1に対し北側の土坑が2.86、短軸では1対1.9という値を示している。

6号土坑からは湿気系の播鉢片(1)が出土しているが、これ以外の土坑からの出土物は無く、時期特定には至らなかった。また、14・15・16・19・20・27号土坑は覆土の観察所見も残せなかったが、他の土坑はAs-Bを含んでおり、その軸方向から概ね屋敷遺構に伴うものが多いものと判断している。

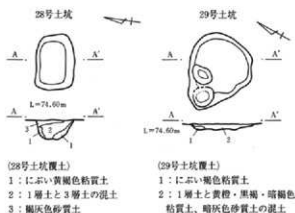
また、これらの土坑の掘削意図も特定できなかった。高、楕円形縁と長方形プランのものがあった。



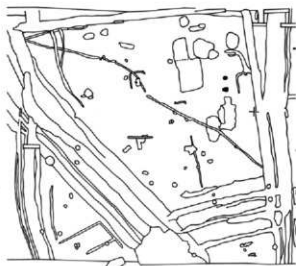
#### (12号土坑覆土)

- 1: 2層土に似るが酸化鉄分多く沈着
- 2: 褐色砂質土: As-B、暗褐・にぶい黄褐・浅黄色粘質土と橙色土・酸化鉄・酸化マンガン多く混入

第166図 3区1面屋敷遺構北部の土坑群



第167図 3区1面屋敷遺構東部の土坑群



規模 [1号土坑] 径105×58cm 深さ30cm

[3号土坑] 径63×60cm 深さ18cm

[4号土坑] 径105×90cm 深さ34cm

[6号土坑] 径90×86cm 深さ44cm

[8号土坑] 径107×52cm 深さ12cm

[12号土坑] 径630×195cm 深さ13cm

[13号土坑] 径110×77cm 深さ13cm

[14号土坑] 径311×82cm 深さ10cm

[15号土坑] 径138×130cm 深さ16cm

[16号土坑] 径220×125cm 深さ16cm

[19号土坑] 径127×62cm 深さ11cm

[20号土坑] 径91×74cm 深さ10cm

[22号土坑] 径55×50cm 深さ11cm

[27号土坑] 径228×184cm 深さ34cm

[28号土坑] 径86×61cm 深さ32cm

[29号土坑] 径124×104cm 深さ11cm

構造 本土坑群の土坑のプランは楕円形や隅丸方形、或いは円形に近いものと、短冊形を含む長方形或いは隅丸長方形を呈するものに大別される。

掘削底面は平底気味で、残存範囲に於いては壁面は比較的しっかりと立っている。

土坑の規模は上述のように北側の溝沿いの土坑が大形であるのに対し、東・南・西側の溝沿いの土坑は小型であり、土坑の長軸は東・南・西側のものは

55～127cm、北側のものは110～630cmを測る。両者の長軸・短軸双方の長さの平均を比較すると東・南・西側の土坑が82.5cm、北側の土坑の平均は202.5cmであり、2.45倍の差がある。尚、深さは前者1.25倍と余り差が無く、前者の方が寧ろ深い。

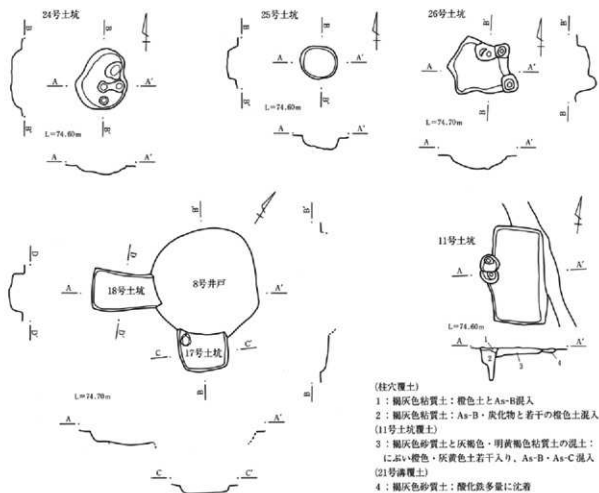
### (3) 郭内側の土坑群 (第168・169図、図版68～70)

概要 本項では郭の内側、中央寄りに分布している3-1・5・7・9・10・11・17・18・21・23・24・25・26号土坑の12基の土坑について述べることにする。これらの土坑は郭内東部を除く区域に分布し、その掘削位置などに規則性は認められなかった。

これらの土坑群のうち13・14号土坑は切り合いが、その新旧は特定できなかった。また17・18号土坑が3-1・8号井戸と、11・12・15・16・26・27号土坑がそれぞれ1～12基の柱穴と切り合い関係にあるが、11号土坑が3-1-1517号ピットに切られる以外、新旧を特定することはできなかった。

本土坑群では10号土坑で土師器片の破片が出土しただけで、時期の特定には至らなかった。また本土坑群でも17・18・21・23・24・25・26号土坑で覆土の観察所見が残せなかったが、他の土坑の覆土と23・25号土坑を除く土坑の軸方向から、多くは屋敷遺構に伴うものであろうと判断している。

第3章 発見された遺構と遺物



- (柱穴覆土)
- 1: 黒灰色粘質土: 橙土とAs-B混入
  - 2: 黒灰色粘質土: As-B・炭化物と若干の橙土混入 (11号土坑覆土)
  - 3: 黒灰色砂質土と灰褐色・明黄褐色粘質土の混土: におい・橙土・灰黄色土若干入り, As-B・As-C混入 (21号溝覆土)
  - 4: 黒灰色砂質土: 酸化鉄多量に着色

第168図 3区1面層敷遺構中北部の土坑群

規模 【5号土坑】 径257×100cm 深さ19cm

【7号土坑】 径192×94cm 深さ17cm

【9号土坑】 径95×47cm 深さ49cm

【10号土坑】 径245×203cm 深さ8cm

【11号土坑】 径155×90cm 深さ16cm

【17号土坑】 径78×60cm 深さ9cm

【18号土坑】 径110×65cm 深さ17cm

【21号土坑】 径53×76cm 深さ56cm

【23号土坑】 径48×54cm 深さ18cm

【24号土坑】 径95×81cm 深さ12cm

【25号土坑】 径58×50cm 深さ16cm

【26号土坑】 径95×86cm 深さ22cm

構造 本土坑群の土坑のプランには円形、不整楕円形、方形、長方形などがある。従って土坑群として

は規格性は認められなかったが、長方形を呈する土坑が半数を占めている。

掘削形態についてみると長方形のものは箱型を呈し、壁面も比較的しっかりと立っている。しかし長方形以外のプランを呈する土坑は、平底のものであっても若干膨らみを持ち、26号土坑のように丸底の底面形態を呈するものもある。また24号土坑のように膨らみを持つ平底で、底面に若干の凹凸の見られるものもあった。また、壁面も長方形プランの土坑と比較すると若干開き気味である。

土坑の規模が大きなものではなく、また突出した規模の土坑も見られなかった。こうした中で長方形プランの土坑は北南部のもの比べて南南部の方が若干規模が大きい傾向を見ている。